

---

# 神様の椅子

\*amin\*

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神様の椅子

### 【Nコード】

N4894P

### 【作者名】

\*amin\*

### 【あらすじ】

600年前、世界を巻き込んだ大戦が起こり、勝利に導いた英雄が使ったと言われた禁断の魔術書は誰にも知られる事なく、この世界のどこかに封印された。そして大戦から5つの国が誕生し、互いに牽制、小競り合いを繰り返しながら時代は移り変わっていった。しかしその魔術書を手に入れようとした事から、世界は再び戦争の時代に向かって行く。祖国を奪われ、家族を奪われ、たった1人だけ逃げ延びた10歳にも満たない末の王子は祖国奪還を心に誓い、禁断の魔術書を探し始める。

そしてそんな王子を支えたのは彼に命を捧げたお世話係だった。

＊シリ阿斯中心の異世界ファンタジーです。

## 1 初めての勤め

拝啓、田舎で農作業している母さん父さんへ。

貴方方が頑張って稼いだお金のお陰で、俺は士官学校を落第ギリギリですが無事卒業する事が出来ました。

就職先もなんと城に決まり、俺の将来は順風に行くと思われていました。

少なくとも3時間前までは。

### 1 初めての勤め

「貴方が今日から働くダフネ様ですね。お待ちしておりました」

「あ、いえ……王子、姫様の御世話係兼教育係を任命されて歓喜の極みであります」

深々と頭を下げれば、俺の目の前にいる金髪の髪の子も礼儀正しく頭を下げた。

無機質で表情を崩さないで淡々と仕事内容を語る女を見ると、やはり城と言う所は緊張感が漂う場所なんだと思ってしまう。

女の子のような名前だけど、俺は今日から城で働く事になった。この国の王子2人と姫1人の御世話係としてだ。

給料もちろんいいし、なんたって世間的には最高じゃないか。今日がその初勤めの言う訳だ。

目の前の女は自分の事をセラと名乗り、王子と姫に会う前に城内を案内すると提案してきた。

「失礼ですが王子と姫を待たせてよろしいのですか？」

「あの御三方はただいまティーブレイク中です。邪魔をすることはできません」

「あ、そうですか。失礼しました。ではお願いします」

「かしこまりました」

セラが歩いて行った後を着いて行こうと追いかけてようとした時ドアが開いた。

ドアの中から出てきたのは3人の子どもだった。

子ども達はキラキラと目を輝かせて、俺の周りをグルグルと回りだす。

「あれが今度の駒使い？」

「いっぱい遊んでくれるかなあ」

「馬鹿そうな顔だな。僕のレベルを下げる様なことはしないだろうな」

何だか癪に障る事を言われた気がするが、目の前にいる身なりのいい子ども3人がもしかしたらそうなのか？

ピンク色の髪にこれまた白とピンクで統一された可愛いドレスを着た勝ち気そうな少女と白で統一された清楚な服に身を包んでいる幼い少年とメガネをかけた厭味ったらしく笑う子どもが。ってかこのメガネ見た事ある。第1王子にそっくりだ。

何が何だか分からずに目を点にさせている俺にセラが頭を下げ俺に言う。

「ダフネ様、この御三方がこの国の王子と姫です。名前はご存知ですよね？」

「あ、ああ。姫がミッシェルで第1王子がクラウシエル、第2王子がルーシエルだよな」

「呼び捨てにすんじゃないわよ駒使いの癖に！」

なんだと!?

ミッシェルは目をつりあがらせて俺に罵声を浴びせる。その横にいるメガネをかけている奴が多分第1王子だろう、クラウシエルもやれやれと言い、第2王子のルーシエルはワタワタ慌ててるだけだった。

まあ確かに世話係の俺が呼び捨てなんて悪かったと思う。でも駒使だって何だ!? 余りにも失礼じゃないか! そういうのは心の中でしまっておくものじゃないのか!?

ミッシェルはあくまでも俺に文句を言ってくる。

それを聞き流そうとしてるけど、その口調は余りにもひどい。姫がこんな言葉遣いをしていいのか疑いたくなるほどだ。

その時、俺の服の袖をルーシエルが掴んで俺を見上げてきた。

「ねえねえパパに挨拶した?」

「え、国王に? 世話係の俺が呼ばれてもしない限り挨拶はできませんよ」

「じゃあしに行こう! こっちだよ!」

ルーシエルに引っ張られて走り出した俺をセラは止めずにただ見ている。

助けてくれと視線を送ったが、無表情な彼女は特に気に止めた様子もなく冷たく言い放った。

「王子の言葉は絶対です。ダフネ様、反抗はしないように」  
「ガキか俺は!!」

どうやらセラは止めてくれる気はないらしい。どうしよう、国王に会うとか緊張して小便ちびりそうだよ!

「ルーシエルあいつ気に入ったのかな」

「さあな、あいつはいつだってあんなんだろう。それよりお茶の続きだ。セラ、ケーキを追加してくれ。ミッシェルに全部食われてしまった」

「はい、かしこまりました」

「パパー！新しい御世話係さんが来た！」

なんと国王のいる部屋にノックもしないで、ルーシエルは勢いよく扉を開けた。

その先には誰もが知る、この国の国王が座っていた。

威厳溢れる姿に引き気味になったけど、ルーシエルのせいで逃げる事も出来ない。

台座に座る国王の周りには3人の男が立っていた。

1人は年老いた男、この方を知ってる。国王の腹心の軍師、ダイナス様だ。有名な人だから多分国内の人間ならだれもが知ってる奴だ。その横にいるオールバックの厳格そうな御方が、この国の軍団長であるノーヴァ様、向かい側にいる金髪の柔和な笑みを浮かべている御方が最高評議委員のフレイ様。

まずい、とんでもない人達に囲まれたぞ。

ノーヴァ様がいかつい顔を更にいかつくさせて、俺の腕を掴んできた物だから悲鳴をあげそうになった。

「貴様、関係の無い者が立ちいる事は出来ん！早く出ろ！」

「は、はい！すみません！」

「待ってよノーヴァ！ダフネは俺が連れてきたんだよ！」

ルーシエルがノーヴァ様の腕をポカスカ叩いて俺を放す様に言っている。ハッキリ言って全く痛くなさそうなパンチだけど。

ノーヴァ様はルーシエルの話を聞いて、掴んでいた俺の服から手を

放した。

「ルーシエル様もお分かりになりました。ここはたやすく入る事は許されていません」

「パパに会いに来たんだもん。ねえパパ！ダフネって言うんだ！新しい世話係！」

ああもう早く出たいのに！国王に声をかけられたら何て答えればいいんだよ！？

でも聞こえてきたのは荒い呼吸だけ。

「る、ルーシエルマジ天使……」

「は？」

「国王！この場は他の者もおります！素を出している場合ではございませんぬ！」

ノーヴァ様に諭されて、鼻血を出していた国王の顔が急にキリツとした俺の見知ってる顔になった。

今のは何だったんだ？幻覚？

国王は咳払いをして、威厳のある声で俺とルーシエルを咎めた。

「ルーシエル、我は執務中だ。関係の無い話を持ち込む出ない。ダフネと言ったな、お前も世話係ならば止めるのが道理だろう」

「は、はい！すみません！」

「なんかパパ違うよ。気持ち悪い」

「ルーシエルに嫌われたっ！」

「国王！今はそのような事を言ってる場合ではありませんぬ！」

「そ、そうじゃ。おぬしら早く部屋から出るのだ」

国王に諭されて、ルーシエルは渋々俺の手を握って部屋を出た。



あー怖かった。心臓止まるかと思ったし。  
そのまま2人で歩いていると、声がかかり振り返った先にはフレイ様がいた。

「あ、あの俺何か忘れものでも……?」

「違うよ。国王の面白かったでしょ?でも他の人には言っちゃ駄目だよ」

「なんで?パパいっつもあんな感じだよ」

ルーシエルが首をかしげたのを見て、フレイ様は微笑ましそうに笑っている。

「ダフネ君の知ってる国王は言ってみれば外行きの顔だ。素の性格は子どもを溺愛してるパパなんだよ」

「え」

「でもそんなの公にしてたら国民から引かれそうだろ?だから普段はああやってキリッとしてる訳。心の中は常に子どもの事しか考えてないからね」

「はあ……いいんですか?俺にそんなこと言って」

「君、かなり気になってそうだったからね。でも他言は駄目だ。こっちも面白い物を見せてもらったよ」

フレイ様はノーヴァ様と違って温和な人みたいだ。

手を振って去って行ったフレイ様に頭を下げる俺にルーシエルは兄弟達の所に戻りたいと言った。

俺これからこんな風に振り回されていくのかな……

「遅いわね、あんたの分のケーキとかもう無いわよ。あたしが全部食べちゃった」

「え!?!?なんでのけといってくれないのミッシェル!」

「馬鹿だな。食い意地の張ったミツシエルに何を言っても無駄だろう、諦めろルーシエル」

「う、うあああああああ！！」

「誰かセラを呼んで来てくれ！ケーキを持ってこさせろー！」

もうやだ。なにここ……

## 2 城と愉快な仲間達

「ねえ駒使い、おなか減った！お菓子持って来なさいよ！」

「駒使い、この公式の意味を教えてください。公式だからという理由は無しだ。なぜこの公式になるのかを教えるんだ」

「ダフネー遊んでー」

「少しは静かにしろよお前らっ！」

## 2 城と愉快的仲間達

「ダフネ様、今はお時間ありますでしょうか？」

「あ、はい。大丈夫です」

生意気な王子クラウシエルの勉強を見て、やっと解放されたと思ったら今度は食い意地張ったお姫様ミッシェルの為にお菓子を調達して、それが終わったら今度はルーシエルの遊び相手。

正直クタクタだ。ハッキリ言って既に辞表を出したいくらい。

今から姫と王子は3人で部屋にこもってお昼寝タイムだ。やっと俺もあの悪魔たちから解放される！そう思ったけど、同じお世話係のセラに話しかけられて、俺は足を止めた。

でもセラが話しかけてきたんだから断る訳にもいかず、頷いた俺にセラは相変わらずの無表情で俺に城内の地図を渡してきた。

「あの、これは？」

「これから関わる事も出てくるでしょうから城の者たちを紹介しておこうと思いました」

城の者……そう言えば勤めてから一週間、そう言うのは全く出会わなかったな。

使用人の人と会話するだけだったし、料理人に食事の事を聞くのかと思えば、食事についてはセラがやってくれてるみたいだから俺がする事ないし。

勉強する家庭教師の人達は派遣の人だから城の人間じゃないし。そう考えれば、まだ城にすみついてる使用人以外の人達とは会った事ないな。

「俺なんかがいいんですか？俺はただの世話係ですよ」

「軍の者や宰相達への挨拶は許可されていません。なので今回は一部の者となりますが……」

「そうですか、分かりました。でも軍団長と評議委員長にはあった事ありますよ」

「なぜですか？謁見が許可されていましたか？」

「いやルーシエルが……」

「それで分かりました。さあ回りましょう。少々癖の強い者たちですが、根はいい者達です。それだけを先に申しておきます」

……あの3人と国王よりもアクが強い奴がいるって言うのか。  
なんだか会うのが怖くなってきた……

最初に連れていかれた場所は食堂だった。今がちょうど15時のせいなのか、お茶をしてる者たちが結構いる。

セラはその人達に頭を下げて厨房の方に入って行ってしまった。

慌ててついて行けば、中では数人のコックたちが料理を作っている。

「すみません。コラッドはいますか？」

「ああ、ファイアーマンかい？ちょっと待っててくれ。おいバイ菌マン！客だぞ！」

ファイアーマンなのかバイ菌マンなのかどっちなんだ。  
思わず突っ込みを入れそうになったのをグッとこらえて、俺はその  
ファイアーマンとやらが来るのを待った。

暫くすると置くからはげ頭のガタイのいいおっさんがやって来た。  
ああ確かにファイアーマンぽい。  
おっさんは俺達を見て豪快に笑った。

「よおセラ嬢ちゃん！相変わらずお人形だな！今日はどう言った御  
用でい！？」

「今日は新しく世話係に就任されたダフネ様を案内させていただ  
いております」

「ん？おお！あの奴隷よりも辛いと言われる王子と姫のお相手かい  
！？大変だねえ！」

……やっぱ城内でもあの3人は悪い意味で有名なようだ。  
でもおっさんは愛想がいい様で、ニコニコしながら俺に手を差し出  
した。

「まあよろしくな！俺はコラッド！王子や国王の飯を作ってる者だ  
！」

「あ、はい。よろしくお願い……」

そう言って手を出そうとした俺をセラが阻止した。

「え、セラ？」

「貴方、今日はちゃんと手は洗っているのでしょうか？」

は？手を洗ってる？

コック達にドツと笑い声が広がり、凄く恥ずかしくなってくる。

なに当たり前の事を聞いてんだよ。コックが手を洗うなんて当然じやねえか！めっちゃ感じ悪いと思われたらどうすんだよ！  
その時、そばかすのある黒髪のおかっぱ頭の女が何かのスプレーをおっさんの全身に吹きかけた。

「まあトイレの後に手を洗わなかったわね！貴様今度という今度は許さん！これで浄化してやるわ！！」

「はっはっは！いい香りだなあ！ラベンダーかい！？」

な、何だこの会話は……

呆気にとられている俺の横でセラが真顔で解説を入れていく。

「コラッドは炎を自在に操る様な華麗な調理姿からファイアーマン、しかしトイレの後に手を洗わない、風呂に入らない等の行動をする事からバイ菌マンとも言われています」

「コックなのに手を洗わないのか！？」

「おいおい勘違いしないでくれ！手を洗わない方がダシが……」  
「黙れ！！」

完全な喧嘩になってきた所でセラは俺を連れて避難。厨房を出た。  
ああ頭が痛い。この城にはこんな奴しかいないのか？

そんな事をうんぬん考えていると、セラが今度連れて行った場所は庭だった。綺麗な庭には沢山の花が咲いている。

そんな中に草を切っている青年と老人の姿。

「じゃからそこは逆の角度から切るんじゃ！繊維にそるんじゃ！」

「……」

「なぜわからん！じゃからそこは……」  
「だあ——！うるせえうるせえうるせえ！！好きに切らせろ隠居しろ！そのままくたばれ——！！！！」

青年と老人の喧嘩がそのまま始まってしまった。  
あの2人は？と聞けば、相変わらずの無表情でセラは庭師だと答えた。

「老人の方がヤコブリーナス、その孫のジェイクリーナス。正式な城の庭師はヤコブリーナスなのですが、見た通り老齢です。彼は一刻も早く孫のジェイクリーナスに庭師としてのスキルを積んでもらいたいみたいです。ジェイクリーナスからしてみれば、もう少し自分の好きに切らせてほしいと思っているみたいで、良くあの様に衝突しています」

まあお互いの言い分も分からなくもないけど……爺さんの方はメチャクチャ細かく切り方を指摘してる。

確かにあんなガミガミ言われたら、キレたくなるのも分かる。  
セラが挨拶しに行こうって言ったから、俺はセラの後について行った。

「精が出てますね。ヤコブリーナス、ジェイクリーナス」

「おおセラ嬢ちゃんかい。こいつは才能がない。草木の気持ちをちつとも分かつちよらん」

「だーかーらー1回でいいから好きに切らせろって！ジジイは俺を馬鹿にしすぎだろ！」

「お前なんぞに任せちよったら庭が滅茶苦茶になるわい！」

「んだとー！？」

再び喧嘩を始め出した2人をセラがまた止める。

「止めなさい、今日は彼を紹介しに来ました。彼はダフネ、王子たちと姫の新たな御世話係です」

「ど、どうも……」

「なんじゃまたか」

「あんたは何日で辞めんだろうな。最高記録2カ月だったけ？」

「3か月じゃ」

……もしかしてそれって今までの御世話係の事か？

俺の前の奴らはそんなすぐに辞めていくって言うのか。確かに料理人のおっさんも奴隷より辛いとか言ってたし。

俺もうぶっちゃけ1週間働いただけなのに辞めたいって思うし……

「……どう言う事だよ」

「なんだよ、あんた何も知らずに就職したのか？馬鹿だねえ。王子と姫の御世話係なんて給料は確かにいいけど、それ以上に割に合わない重労働だから誰もしたがないんだよ。あんたも求人情報見て決めたんだろ？」

確かに……城で働く奴らははっきり言ってエリートだ。俺みたいな田舎の士官学校を落第ギリギリで卒業した奴が入れるはずがない。給料がいいのと、城って言うのにつられて決まった時には奇跡だと思ってた。

まさかただ単に俺以外に就職希望者がいなかっただけ……？

「ははは！姫は我俣し放題だし、グルメだから変なの出したら顔に食いのめり込んでくるし、第1王子は頭がいいから勉強教えるのも大変だしな。性格も理屈っぽくて嫌みだし、第2王子は甘えたがりだから仕事できないくらいに張り付いて来るし泣いたら泣きやまないって話だ。そんな小悪魔3人に24時間囲まれる生活耐えられる訳ないだろ。ほとんどがノイローゼ起こして辞めて行ったよ。まあ今回は3カ月越してくれよ。他の奴らと賭けてんだよ」



賭け事にするな！

でもそれにしてもヤバイ。そんな事全く知らずに就職してしまった。このままノイローゼで辞めて実家に帰るなんて恥ずかしいし、したくない。親父やお袋だって俺が城に就職した事喜んでるんだ。

そんなみつともない真似だけはできない。

悩んでいる俺を放っておいて、セラは2人と何か話をしている。

「マリアとミリアは今門の所にいるのでしょうか？」

「さあのお。あいつらの適当さは城の者も呆れちやるわい。そこら辺の男を引っ掛けちやるかもしれんなあ」

「ぜってーそうだろ。あの2人は怖いし関わりたくねえや」

「ありがとうございます。行きますよダフネ、次はこの国の門番のマリアとミリアに会いに行きます」

門番、ねえ……つか俺門番会った事あるし。マリアとミリアって言うんだな。

可愛い子が門番してるなあって城の就職面接会の時に思ったもんだ。でもヤコブリーナスとジェイクリーナスの話を聞いていると、やっぱりろくでもないって事が分かった。

セラの後を歩いて巨大な城の門の前を歩いていると、ピンクの髪の少女と緑系の髪の少女がキャーキャー2人で騒いでる。

間違いない、俺は就職面接会の時に見た子達だ。

「マリア、ミリア」

セラが名前を呼ぶと2人が振り返る。こうやって見ると、双子みたいだけど聞いた話によると全く血の繋がってない赤の他人って言うから驚きだ。

2人はセラに手を振った後、俺に視線を寄こしてヒソヒソ話し始める。

え、俺何かした？

「ねえあれじゃない？今回の御世話係」

「うっそー！まあじ？やゝん格好いい！あたしも御世話してもらいたあい！」

「あんたジュリアンはどうなったのよ」

「えー？昨日の彼の事なんて忘れたゝ今はこっち！」

あの、聞こえてるんですけど。

マリアとミリアは俺を囲んでマジマジと見つめて来る。完全に仕事ほっぽり出してるし……いいのかこれ。

セラは止めることなく2人が落ち着くの待ってるし。

キヤーキヤーステレオで声が響いて耳が痛かったけど、俺もセラと同じ落ち着くのを待った。

5分ぐらい待ったら2人は落ち着いたのか、自らの自己紹介を始めた。

ピンク色の髪の方がミリアで緑色の髪がマリアらしい。名前までそっくりだよな。

「マジ御世話頑張ってね。疲れたらいつでも言って。あたしが介抱してあげる」

「ずるいマリア！あたしもいつでも頼ってきていいわよ。門番よりも楽しそう」

「その前に仕事しろよ」

「やゝん怒られた！だって門番なんてしてたって誰も来ないし、ぶっちゃけ仕事ないよねー」

「ねー！マリア、この後街に行こうよ。門番はジュリアンとロットに任せればいくない？」

「それいいー！いいこいこ！」

……給料泥棒だ。

完全に盛り上がった2人は俺をほっばいて会話に花を咲かせている。これはもう帰った方がいいのか？

「行きましようダフネ」

「そ、そうだな」

2人は俺達が歩いて行くのすら気付かないらしく、挨拶も聞こえて来なかった。

それにしてもここはまともな人間がいないように感じる。あ、セラはまだまともか？

でもコラッドは料理人の癖に手を洗わないし、ヤコブリーナスとジエイクリーナスも人前であんな喧嘩始めるし、マリアとミリアは既に論外だ。

「なあマリアとミリアってあれでいいのか？見張り変えた方がいいんじゃない？」

「マリアとミリアは代々城の門番として仕える家系です。御家柄もありますし……あの2人はああ見えますが、戦えばそこら辺の剣士よりずっと強いですしね」

ああ、確かにスピアと剣持ってたな。強いって言うんなら今度手合わせ願おうかな。

セラの後について行きながらぼんやり考えていると、どこかの部屋に辿り着いた。

中からは野太い声が聞こえて来る。

「ここは？」

「宮廷画家と宮廷音楽家の部屋です。あそこで絵を描いているのが宮廷画家のイワコフです」

奥の方の隅っこに画材に埋もれてる小汚いおっさんがいる。絵を描いている時は話しかけても答えないってセラに言われたから、俺は話しかけることなく後ろに回り込んで絵を覗き見た。

うっ！これは、これで個性的なっ！

良く言えば独創的、悪く言えば下手糞な絵を描いている。

これに芸術的センスを見いだせる奴はマジでプロだな。うん。

「やあセラさん、相変わらず麗しい。僕の歌声を聴きに来たのですか？」

「いいえ、今日は新たな御世話係を連れてきただけです」

イワコフの絵を覗いている間にセラの前に青色の長髪の男が立っていた。

大胆に胸元を開けてセクシーアピールをしてるそいつは気持ち悪い。鳥肌が立ってしまった。

セラは相変わらずの無表情だが、迷惑そうなオーラが漂っている。

そのままセラに紹介されれば、そいつは嫌そうな顔をした。

「男か。この城に私以外の男はいらないよ」

「なんだお前いきなり」

「なんだじゃない！美しい男は1人でいいと言う事さ！それなのに……おお！」

やっぱ変な奴だ。本当にこの城にまともな奴はいない。

しかもこいつかなりナルシード。

「その様な事を仰って自惚れているから、マリアとミリアに貢がされるのですよ」

「何を言ってるんだい。美しい女性の頼みは断れない。勿論セラ、

君もね」

「お気持ちだけ頂戴しときます」

「つれないなあ……おいお前、私のセラに何かしたら許さないぞ！」

「おめーと一緒にすんな！」

なんなんだこいつマジきもい上にうざいぞ！

男は自分をミカエリスと名乗り、この城1番の音楽家だと自負した。本当かどうか知らないが、早く会話を終わらせたかったから適当に頷いて、セラと逃げるようにその場を去った。

「マジでまともな奴いないな」

「直に慣れます」

「あ、でもあんたはまともだよ。あんたがいてくれて良かったよ」

そう言えばセラが少し驚いた表情をした。

ここに勤めて1週間、毎日セラを顔を合わせるが、セラの表情の変化を初めて見た。

その後セラは少しだけ笑みを浮かべた。

「お気持ちだけ頂戴しときます」

「なあ笑った方が可愛いよ。もっと笑えよ」

「笑いたい時に笑います」

「つれないねえ」

まあいいや、一瞬だけだし、小さな変化だったけど笑った顔を見れたから。

そしてそれを可愛いと思った自分が確かにいたから。

### 3 クラウシエルとお勉強

「さあ駒使い！今日も勉強の時間だ！」

「……お前さあ」

クラウシエルのこの人に物を頼む態度は何かならんのか。  
でも俺も仕事だし、言い返しはしないから何も言わないけど。

### 3 クラウシエルとお勉強

「むっ！王子の僕にお前だと！？駒使いのくせに生意気な！」

「物を教えてやってんだから今は俺の方が立場上だろ。先生って言えよ先生って」

「貴様言わせておけば！大体貴様駒使いのくせに生意気だぞ！生意気なのは顔だけにしろ！」

「待てっどんな顔が生意気なんだよ！そんな事一度も言われた事ないぞ！」

「それはお前の友が気を遣っていただけだ！お前の眉の形、口角、目つき、全てが物語っている！そういう角度や顔つきの奴は大抵生意気なんだ！」

「データ出せよデータ！それにお前は人の事言えるのか！？」

「だから王子の僕にお前と言うな無礼者！僕が寛大でなければ不敬罪で首が飛んでいたぞ！」

どこが寛大なんだ！この糞ガキが！

クラウシエルがヘロパンチをかましてくるけど、やっぱ勉強ばっかしてるせいかが全くない。これは今度体力トレーニングをやらせ

た方がいいな。

最初は自分も戸惑ってたけど、1回敬語を使うのを止めたら意外と向こうは平気だった。今では相手の事を王子、姫とは呼ばない。名前で呼んでいる。

向こうも特別に呼ばせてやる。とか高飛車な事言ってたけど、これは少しは信頼されてるって思っているんだよな。

クラウシエルが舌打ちをしてテキストを机の上に広げていく。

まあ俺も一応士官学校を卒業できたんだから、年下のクラウシエルの勉強を今の所は何とか教える事が出来る。

でも知リたがりのクラウシエルに勉強教えるのは正直言ってかなり大変だ。あれはこれは質問してくるからな。

今回広げてきたテキストはどうやら地理の様だ。大陸が描かれてる世界地図をクラウシエルは持ってきた。

「僕は最近世界情勢が気になってるんだ。もうすぐ隣国のバルディナとは友好条約の終結が近付いてるからな」

「詳しいな」

「もちろんだ。父上は聞けば何でも教えてくれるからな」

……それいいのか国王。これは完全な情報漏洩じゃ……現に俺にも広まってるんだし。

「父様が友好条約を新たに結ぼうとしてるみたいだけど、正直僕はバルディナとの友好関係は危険だと思ってる。向かいのファライアンの方がいいと思ってるんだが、あそこはピアノを介してしか交流がないからな」

この王子は幼い癖して優秀だ。国王になったらいい手腕を発揮するだろう。

王子の言う通り、この世界は5つの国家が占めている。

1つはこの国アルトランド、もう1つが同じ大陸内で地図で言うところの国の上に位置するバルディナ、アルトランドと海を隔てて向かい側にあるフライアン、そしてフライアンから見て東、アルトランドから見て西に位置する国が東天、最後に北に存在する雪国がパルチナ。

その5つの国が世界を動かしているが、その国の領土内に独立国家がどれぞれ1〜2個程度存在する。

独自すぎる掟やらなんやらを持ってるせいで、国が吸収できなかったって言うのが正しい。

その1つがビアナ、商人達が形成してる貿易国家。中立の立場をとる事で、世界の貿易を担っている国だ。

他にもフライアンならエデン魔術国家と言う魔術専門の民族が独立国家をつくってるし、東天も国内に忍びと言われる集団が形成している独立した集落があると聞く。

パルチナとフライアンの間の海にはヴァシユタンと言う海賊が島を占拠して独立国家を形成してる。そしてパルチナ領内にある独立国家である謎に包まれた国、マクラウド。

またアルトランドの南側に小さな島がいくつも形成された南国の島国オーシャンも独立国家だ。

バルディナには銃火器を専門に扱う独立国家、ザイナスと言う国がある。アルトランド領土内には独立国家は無いけど。

でもたしかに今は世界情勢が不安定と言ってもいい。

この国アルトランドとバルディナは同じ大陸に面している事から小競り合いも多い。

元々アルトランドは軍事力で大きくなった訳ではなく、肥沃な土地があった為、貿易や農業で大きくなった国だ。

他国からの侵略は友好条約を結んでいるバルディナに頼っていた節がある。



しかしその友好条約の期限がもうすぐ切れるのだ。そして今は小競り合いも続いている事からバルディナから新しい条約は持ちかけられてこない。

国王たちの頭を悩ましてるのがこれだ。

クラウシエルは賢い奴だから独自に情報を探って、ここまで辿り着いたんだろう。

「それにバルディナは最近国宝石の研究をし出したと聞いた」

「国宝石？」

「ああ、お前は知らないのか。僕も父様が会議で話しているのを盗み聞きして聞いたんだ。城の奴らは知ってる者も多いが、一般市民の中には知らない奴も多いだろう」

「クラウシエルは知ってるのか？」

「ああ、国宝石と言うのは名ばかりの言ってみれば宝の地図だ」

「宝の？」

「遙か昔、この世界は2つの国が世界を動かしていたらしい。そして世界を手に入れる為に戦争になったんだ。その時に英雄が使ったと言われる禁断の魔術を記した著書“ゲーティア”。奴らはそれを探してる。国宝石と言うのはそのゲーティアを隠したとされる場所を示すヒントが書かれてると聞いた。勿論ゲーティアが悪用されたらとんでもない事になる。だからその戦争で勝利に大きく貢献した5人の英雄がそれぞれの領土を手に入れる時に、その宝石を5つに分けて国宝とする事でゲーティアが見つからないようにしたんだ」

「それが今の国になるってことだな？」

「ああ、ゲーティアは持ち主を選ぶ禁断の魔術書。勿論国宝石に記された文字も一般の人間には読めない構造になってるらしい。それを読む事が出来るのが、その英雄の力を受け継ぎし者って訳だ。まあここはお伽話みたいだけだな」

クラウシエルの説明で俺が納得してしまった。今はクラウシエルが先生だ。

でもそれを研究するなんてバルディナはかなりヤバイ状況なんじゃないのか？放っておいていいのか？

「国王はバルディナに何も言わないのか？」

「言っても聞かないんだよ。バルディナはここ十数年作物の干ばつが続いてる。元々雨の少ない地域だしな。バルディナからしたら魔術研究の一環で水を使う魔術研究だと言ってるけど、僕的にはアルトランドの武力行使を狙ってるんじゃないのかって思ってる」

「おいおい、それは考え過ぎなんじゃ……」

「この間、密使だが使いが届いた。お前は知らないだろうな。国宝石を盗みに来たバルディナの密使をアルトランドが処刑した」

「はっ!？」

「バルディナは濡れ衣だと反発してきたが、条約に関する議論を持ちかけてきたバルディナの使いが国宝石の部屋に侵入したんだ。そんな言い訳は聞き入れられない。国の法律で決まってる。国のやり方で片をつけたのにバルディナが因縁吹っかけてきたんだ。謝罪と死刑を議決した議員を1人よこせ。同じ痛みを償わせて公開処刑にするってね。勿論国王からしてもそれは聞き入れられない。それを断ったからバルディナは友好条約の継続を拒否してきた。わかるかダフネ、僕の予想ではバルディナは近いうちにこの事を国民に発表して世論の支持を受けてアルトランドに戦争を吹きかける気だと思う」

クラウシエルの言ってることは確かに正しいようにも思えるが、どうにも深読みし過ぎなする。

そんな国宝石を狙って戦争を起こした国を他の国が放っておく訳がない。国宝石を奪われたら不味いんだから。バルディナは世界を敵にしたともいえる物だ。

そんな事が本当にあり得るのか？

でも考えても仕方がない。しがたない御世話係の俺がどうしたって状況が変わる事は無い。俺に出来るのはこの王子様を立派に育て上げて、未来を託すしかないんだからな。

未だに渋い顔をしているクラウシエルに勉強の続きを俺は促した。勉強しながらクラウシエルはポツリと呟く。

「ダフネ、僕は怖いんだ」

「クラウシエル？」

「もし僕が思っていた通りの事が起こったら、僕はミッシェルやルーシエルを守るのか？と聞かれたら自信を持って答えられない」  
「……」

「僕は第1王子、いずれはこの国の国王になるんだ。でも僕には自信がない」

「お前はまだ13歳だ。そんな自信、今つけなくていいんだよ」

「だけど……皆樂觀視し過ぎているんだ！世界は刻一刻と変わる。絶対の友好関係なんて国同士には存在しないんだ！自国の利があるから友好関係を偽るだけで、それが無い国とヨロシクなんてしないだろう！だから自国は自分で守らなきゃいけない！なのにこの国は軍事には無関心でバルディアに頼りきりだ！バルディアの友好条約が切れたらどうするつもりなんだ！」

こんな幼いのに、そんなとこまで考えなきゃいけないのか王子様ってのは……自分が13歳の時は何も考えずに馬鹿やったのになあ。クラウシエルは賢い、それは認める。でもこんな幼い子供に国を背負わせるのは余りに重い。

それは国王もクラウシエル自身も分かっている。

でもクラウドシエルはそれじゃ満足できないんだ。自分がしつかりしなきゃと思ってる。

そんなクラウドシエルに俺がしてやれることはきつと少ないはずだ。

「クラウドシエル、そんなに言うなら俺と打ち合いしてみるか」

「打ち合い？」

「剣だよ剣。俺こう見えても士官学校で実技の成績は良かったんだよ。ミツシエルとルーシエルを守りたいなら、まずは自分が強くなつてからだ」

「……そうか、いいだろう」

テキストを閉じてクラウドシエルが立ち上がる。

初めて剣を使うと言うクラウドシエルに少しだけ先が遠くなったが、俺だって始めてからここまでなったんだ。

まだ13歳のクラウドシエルが今から始めたら、俺の年には俺より強くなってるだろう。

2人で部屋を出た先にはセラの姿があった。

「クラウドシエル様、お茶の時間ですが」

「すまない後にしてくれ。僕はこれからダフネに稽古をつけてもらう」

「クラウドシエル様が？」

「そうだ、僕は強くなきゃいけないからな」

「……そうですか。気をつけてくださいませ。終わり次第持っていかせてもらいます」

「ああ」

クラウドシエルが歩いて行くのを見て、俺はセラに声をかけた。

「剣ってどこで借りれる？俺は自分のがあるけどクラウドシエルは初

めてだし、最初は新米兵が使う木剣でいいんだけど」

「稽古場の隣に武器倉庫があります。そこで借りれるはずです。でもクラウドシエル様が自ら稽古なさるとは意外でした」

「あいつは賢い奴だよ。いい国王になりそうだ」

「それもそうですが、私には貴方もすごく感じられます」

「ん？」

「いえ、お気をつけて」

「サンキュー」

この後、クラウドシエルの余りの運動音痴に俺は早くも教えるのが嫌になったのである。

「お前はまずは基礎トレからだな。腕立て50回だ」

「お、王子の僕がか!？」

「誰だって通る道だ。ほら早くしろ」

「くっ……絶対お前より強くなってやる!」

#### 4 ミッシェルとかくれんぼ

「ミッシェルあいつ嫌い！ルーシエルもそう思うでしょ？」

「俺は遊んでくれるからダフネ好きだよぉ」

「僕も嫌いではないな。好きでもないが」

最近クラウシエルの御世話係いじめがピタッと止まった。

ルーシエルは素でうるさいから今でもダフネを困らせてるみたいだけど、クラウシエルは今まで意図的に相手をいじめてきた。

使用人のほとんどがクラウシエルの嫌味に耐えれなくて止めるのだ。でもそのクラウシエルが今回の御世話係は気に入ってる。なんで！？

#### 4 ミッシェルとかくれんぼ

「クラウシエルまでどうしたの？あいつが他の御世話係より優秀なの！？」

「少なくとも今までの世話係は剣を使えなかった。そこだけ見れば優秀だ。僕をお前と言ったり敬語を使わないのは気に食わないが」

「ダフネ肩車して走ってくれるんだよ！すぐく高いんだよ」

「うるせえルーシエル！黙ってる！」

「うああああああん！ミッシェル怖いよぉ　くくく！！」

「ルーシエルに当たるなよ」

クラウシエルに注意されて舌打ちした。

なんな訳？御世話係とかいらないし。御世話係のせいで時間は拘束されるし、あいつは口うるさいし礼儀もなってないし、クラウシエルもルーシエルもあいつの何がいいのかさっぱり分からない。

こうなったら試してやろうじゃない。

あいつが私の御世話係に相應しいのかどうかを！

「ダフネ、これは命令よ。今日は私の買い物に付き合いなさい」

仁王立ちして上から言ってやれば、ダフネは嫌そうな顔をする。

御世話係の癖に何よその顔は！？元から格好良くないんだから更に不細工な顔するんじゃないわよ！

「勝手に外行って大丈夫なのか？1国の姫様が」

「そんなの私には関係がないわ！周りが気になるのならあんたが周囲に許可をとりなさい！」

「ぐっ！こいつ……」

誰がこいつよ！あんたにこいつ呼ばわりされたくないわ！

粗を探して解雇に持ち込んでやらなきゃ……御世話係なんていらない。私は好きにやる！

ダフネは困ったように辺りを見渡していると、私達の近くに城のコックが通りかかった。

おかっぱ頭のこの女は何回か私達に夕飯を持ってきたから、顔は覚えてる。

名前は知る必要がないから覚えてないんだけどね。

「あ、サヤカ！なんか俺ミッシェルの買い物付き合わなくちゃなんなくてさ、セラに言っといてくんないかな」

「ええ？それはいいけど大丈夫なの？1国の姫様を軽々城の外に出しちゃいけないでしょ」

これだから嫌なんだ。

私だって城の外を好きに歩き回ったって罰は当たらない。姫様だからって何で自分の国を歩いたらいけないの？

城なんてもう遊びつくして今更おもしろい物なんて存在しないのに！でもダフネは分かってくれない。やっぱりその程度の御世話係なんだ。

「あーやっぱそうか。ミッシェル、今日は無理だな。今日セラに聞いて交渉してくるよ」

「……んの役立たず！！」

ダフネの足を思いっきり蹴れば、ダフネの痛がる声が聞こえて、それを背中に受け止めながら走って逃げた。

ダフネの怒声が聞こえたけど、そんなの無視。役に立たないあんたが悪い。

「くっそ！あのじゃじゃ馬め！」

「あんた姫様によくそんな口きけるねえ。あたしだったら無理だわ」

「いや、あのコラッドに消臭剤ぶっかけてるあんたの方が強いと思うよ」

「……」

――  
実は知ってる。この城には穴があるって。

王族が逃げる様の通路から外に出られるんだよね。パパに教えてもらった誰も知らない通路、抜け道の鍵も鍵職人にこっそり作ってもらってるから持ってるし。

実際ここから何度か外に出た事があった。

ダフネに連れて行かせるつもりだったから、外行きの格好をしてた



し今の私は完全に街の人間なんだ。

まあこの高貴なオーラは隠せないけど、まさか姫が1人で城下町に行くと思われないから怪しまれない。

もう沢山だ！私は私の好きにする！！

―ダフネside―――

「ミッシェルがいない？」

「はい、ダフネはご存じないですか？夕食の時間になられても戻ってこれないので……」

「国王と后は知ってるのか？」

「いえ、お二人とも会議中なので夕食は王子と姫だけで取られる予定です。城の中ならば国王に言う必要ありませんし……ミッシェル様がいなくなるのは良くあることです」

ミッシェルの奴どこ行っただ？

とりあえず探してみるか。城の中なら色んな奴に聞けばいいしな。

セラも一緒に行くと言ったので、俺とセラは二手に分かれて城内の者に聞いて回る事にした。

「え？姫、見てないな」

「見てないのか」

食堂には来てないみたいだ。コラッドもサヤカも知らないって言うてる。

イワコフも見えないって言ってたし、ミカエリスも知らないって言うってた。そして相変わらず喧嘩売ってくるミカエリスを沈めてきた。他にも使用人にも聞いて回ったけど見てないって言うし、兵舎の方にはいくらミッシェルでも入ったら駄目だから行ってないだろうし、一体どこにいるんだ？

「ダフネ！」

「あ、セラ！ヤコブリーナスにジェイクリーナスも！」

城の半分を回ったのか、セラがヤコブリーナスとジェイクリーナスを連れて食堂に走ってきた。

ヤコブリーナスはかなり息切れしてるけど大丈夫か……？

「見つかりましたか？」

「いや、聞いて回ったけど誰も見てないって」

「こちらにも目撃情報がありませんでした」

どこにいるんだよミツシエルの奴は！

焦っている俺にサヤカが顔を真っ青にさせてポツリと呟いた。

「ねえダフネ、まさか姫様外出たんじゃ……」

「え」

「だって今日外出たと言ってたじゃん。わざわざドレスから普通の服に着替えてさ、行けないってダフネが言ったらキレてたし……まさか」

そのまさかであってほしくない。

コラッドも流石の事態に顔を青くさせているし、セラも眉を動かしている。ジェイクリーナスも口を開けてあんぐりしてるし、ヤコブリーナスなんかポツクリ逝きそうなくらいヤバそうな顔してる。

でももしかしたらそうかもしれない。

まずい！探さなきゃ！

「俺、マリアとミリアに聞いてみる！」

「私も行きます！」

「お、俺も行くぞ！姫様がいなくなっただってなったら打ち首覚悟だ

くく！

「縁起でもない事を言うな馬鹿もんが！」

「コラッド、あたしらどうするんだい？」

「まあ世話係に任せよう。まだ決まった訳じゃねえ、俺達が首突っ込む訳にもいかねえよ。とりあえず食いに來てる奴らの飯を作ってからだ」

「あいよ。まずあんたは手を洗えよ」

4人でバタバタ廊下を走り回ってる俺達を皆が驚いて視線を送ってる。

でもそんな事を気にしてる余裕はない。今この状況はすごくヤバイ。もしミッシェルが外に出てて、本当に何かあったら、俺はジェイクリーナスが言った通り、打ち首は確定だ。

そんな事どうでもいい。いつもの我俣と思ってた。

でも連れて行ってやれば良かった！ミッシェルはまだ幼いんだ。城に閉じ込められて外に出られないなんて不満なのは当たり前だ。もっと真面目に話を聞いてやればよかった！

後悔しても仕方ない。今はミッシェルを探さないといけない。

「そう言えばヤコブリーナス達はいいのか？俺達に付き合って」

「むしろ庭師は夜になったら仕事は無いからの！それよりも早く探さんと！」

「そうだな！おいマリア！ミリアー！」

見えてきた2人の少女門番にありったけの声で叫ぶと、聞こえたのか振り返った2人は全速力で走ってくる俺達に悲鳴を上げた。

逃げようとした2人を捕まえて、話を聞こうとしたけど、流石に息切れして上手く話せない。

「あの、さ！姫見なかった、か！？」

「姫？ミッシェル様？マリア見た？」

「いやー見てない」

見てない？でも城の中はくまなく探したんだ。

色んな奴に聞いて目撃情報すらない。外に出たとしか考えられない。矛盾だらけの状態に全員の焦りが更に加速していく。

「ダフネ、どうすんのさ」

「……俺は外に探しに行ってみる。お前らはもう1回城探してくれ！」

そのまま走って城の外に出た俺に、マリアとミリアが状況を良く分かってないのか、のん気な言葉を投げかけて来る。

「門は21時には閉めるわよー」

「野宿になる前に帰りなさいよー」

――ミッシェル side――

今日もよく遊んだな。そろそろ夕飯の時間だから家に帰ろう。

そう思ってポッケに入れたはずのカギを探したけど、鍵がない事に気付いた。

「あれ？あれあれ！？」

どこに入れたっけ！？カバンの中も探したけどない。ポッケもひっくり返したけどない。

顔の熱が引いて行く。このまま真っ直ぐ門から帰ったら抜け出した事がばれる。そしたらパパにすごく怒られるし、もっと見張りが厳しくなる。

どうしよう探さなきゃ！でもどこに落としたのかも分からない。  
あれは城の内部に繋がってる鍵なのに！誰かに拾われたらどうしよう！

「う、うう……」

目に涙が溜まっていく。

誰も助けてくれない。1人で来たから。我侘な事したから天罰が下ったんだ。どうしよう、どう帰ろう。

助けてくれる人を思い出そうとしても浮かんでくるのは生意気な御世話係だけ。

1人で暗い中、鍵を探すのも怖いし、このまま真っ直ぐ帰るのも怖い。

「うああああん！ダフネ——！！！」

思い切り御世話係の名前を呼んで泣いた。

周りの人が「どうしたの？」って声をかけてくれたけど、それすらも無視して泣いた。

だって私はお姫様だからバレたら駄目だもん。他の人に助けを求められるはずないよ。

次第に泣いてる私の周りに人が集まり、いつのまにか人だかりが出来ていた。

—ダフネ side ————

どこにいらんだミッシェルは……

城下町の人通りが多い市場の方に足を運ぶ。市場は夜市をやっており、夜なのに人は結構多い。

人混みをかき分けて周りを見ながら進んでいくと、人垣が出来ていた。

その中央からは泣いている女の子の声が聞こえる。しかも時々自分の名前が聞こえる気がする。

耳をすまして聴くと、間違いない。この声はミッシェルの物だ。やっぱり外に出てたんだな！

怒りよりも見つかった方の安心の方が大きくて、俺は人垣の中に飛び込んだ。

「見つけたぞ！我俥娘が」

頭上から言ってやれば、ミッシェルが真っ赤になった目で俺を見上げてきた。

何で泣いてたのかは知らないけど、俺を見て安心したのか、更に泣き出して俺にしがみついていた。

「遅い！もっと早く来てよ！」

「無茶言うなよ。抜け出したくせに」

泣き続けるミッシェルを抱き上げて城に向かって歩いて行く。

城下町の人ははぐれた迷子の子だと思ってたらしく、俺がミッシェルを抱き上げた瞬間、安心して、人垣は徐々になくなって行った。そのまま2人で城に向かって歩いてる間、ミッシェルとの会話は無い。

でもポツリと小さい声でミッシェルが呟いた。

「……パパに言う？」

「ん？」

「この事。勝手に抜け出した事」

「言わないよ。大事になる前に見つかったんだから」

俺も甘いのかな。でもミッシェルの気持ち分かるから言うのは可

哀そうになった。

こんなに泣くんだ。反省はしてるんだろう。

「俺こそごめんな。お前中々外出れないんだな。気づいてやれなくてごめん」

「ダフネ？」

「今度はちゃんと許可とって、クラウドシエルとルーシエル連れて皆で遊び行こうな」

「……ん」

でもミッシェルの話を聞いて、結局もんから戻る事を余儀なくされた俺は仕方なく門から戻ることにした。

その後、門から戻った俺をマリアとミリアが驚いて焦ってたけど、ミッシェルが抜け道のカギを持ってるって発言が波乱を呼んだ。

結局国王にばれてミッシェルは大目玉をくらった。てか国王がミッシェルを抱きしめて放さなかったらしい。

ミッシェルが全て悪かったからという理由で俺への御咎めは無し。

助かった……

1時間後、顔に髭の後をくつきりつけたミッシェルをクラウドシエルが爆笑して殴られていた。

しかも失くした鍵は財布の中に入ってたと言うオチだ。でもまあミッシェルも反省してたし、俺が怒る事は無いけどね。

ホッと胸を撫で下ろしたセラ達にミッシェルは頭を上げて、ご飯を食べに向かった。

「ダフネ」

「ん？」

「合格にしてあげる。私の御世話係として」

「なんじゃそりゃ」

「ふふふ」

ミッシェルが俺の手をとって軽く走り出したからこけそうになったけど、慌てて後について行った。  
良く分からないけど、ミッシェルが幸せそうだからいいか。



## 5 ルーシエルと宝探し

「ダフネ、遊ぼう！」

今日もクラウシエルの勉強と稽古を手伝って、ミッシェルのお菓子を用意して一息ついた所に空気を読まず飛び込んでくる子供が1人。この国の第2王子のルーシエルだ。

### 5 ルーシエルと宝探し

本当は少し休憩したいんだけど、ルーシエルは断つたらずぐに駄々をこねて泣き出すから、ある意味ミッシェルとクラウシエルよりも厄介だ。

特に国王は末っ子と言うこともあってルーシエルをドロッドロに甘やかすからなあ。

仕方なくベッドから起き上がり、屈んでルーシエルと視線を合わせる。

「何して遊ぶんだ」

「んーとねー、かくれんぼ！」

ルーシエルは俺が初めて勤め出した時もなついてくれたし、困らせる事も多いけど末っ子特有の可愛らしさがあるから一番可愛く感じる。

泣きだしたら止まらないのがたまに傷だけど。

「かくれんぼ？この城内でか？」

「そうだよ！時間はー15分ね！15分で見つけてね！隠れる時間は10分だよー」

俺が鬼か。しかも俺に不利な条件すぎないか？

城とか滅茶苦茶広いの1人で15分内で探し出せって言うのか。まあ使用人とかに聞いて回るから15分内は無理かもだけど、ミッシェルみたいな事件にはならないはずだ。

ルーシエルが走り出したのを見て、10分間はお茶でも飲むかと俺は自室に戻った。

10分後、そろそろ探しに行かなければと思い、立ち上がって部屋を出る。

まずはミッシェルとクラウシエルのところに行ってみるか。

「見てないぞ」

「見てないわ」

声をそろえて言われた。まあ流石に3人が揃うこの部屋には来ないよな。

2人に嘘をついてる形跡もない。ルーシエルは一体どこに行ったんだ？

「あいつは行動範囲が狭いから食堂か、後は自室だな。たまに食糧庫や倉庫とかにも隠れてる」

「サンキュー」

クラウシエルに礼を言って、言われた通り食堂に向かう。

食堂は今の時間、人がいないせいかな探しやすかったけど、ここにルーシエルはいなかった。

「あんたっていつも王子と姫を探してるね」

食堂を出る時にサヤカに言われた言葉にいい返しようがなく、俺は力なく笑っただけだった。

自室は俺が勝手に入るのは駄目だから自室の掃除を任されている使用人にルーシエルがいるかどうかを聞いたら、部屋には戻ってきてないと言った。

基本使用人は俺の味方だ。王子と姫の世話がどれだけ大変か分かってくれてるから。

ルーシエルを匿って嘘をつく事は無いだろう。

うーん……他にはクラウシエルは食糧庫や倉庫にも時々いるって言ってたな。もう15分になりかけてるからルーシエルも出て来る頃だろう。

とりあえず探す為に俺は食糧事倉庫に向かった。

「いないな」

荷物の後ろや小さなスペースもくまなく探したけど、ルーシエルは見つからなかった。

全くどこ行っただ。

時間はもう探してから30分過ぎている。

1回ミッシェルとクラウシエルの所に戻るか。戻って来てるかもしれないしな。

「え、まだ戻ってきてないけど」

「はあ!？」

クラウシエルの返答にでかい声が出た。ミッシェルが耳を塞いでう

るさい！と怒ったけど、そんな事を聞いてる場合じゃない。

ミッシェルに続いてルーシエルまでも行方不明だ。全くどこに行っ  
たって言うんだ！

少しイラつきながらも使用人達にルーシエルを聞いて回る。

すると1人の使用人が何かを思い出したようだ。

「あ、確かフレイ様と一緒にいたわよ」

「フレイ様と？」

フレイ様って最高評議委員だよな。そんな方と一緒にいたって言わ  
れても俺が会える訳じゃないし。

と思っっていたらなんて運がいい。フレイ様がちょうど廊下を歩いて  
いた。

手に書類を持ってるから仕事の途中なんだろうけど、俺は勇気を出  
して声をかける事にした。

「あのフレイ様……ルーシエル見ませんでしたか？」

「おや？私に聞くと言う事は誰かにルーシエル様と話している所を  
見られてたんだね」

人のいい穏やかな笑みを浮かべているフレイ様に愛想笑いを返した  
ら、フレイ様は来た方向を指さした。

「ダフネ君に見つからない場所は無いかな？と言われたから北の塔  
付近の庭なら多分見つからないよって言ってたんだ。ルーシエル様  
はそれを聞いて走って行ったよ」

「ありがとうございます！」

「あ、待って。ルーシエル様は多分道を間違えてる。北の塔付近の  
庭はこの廊下を真っ直ぐ進んで突きあたりを右なんだけど、彼は通  
り過ぎていってしまった。伝えなければと思ったんだけど、急いで

たからね。もしかしたらこの廊下を走って行き止まりの突き当たりを曲がったのかもしれないな」

フレイ様は本当に親切だ。

俺は頭を下げてルーシエルを探すべく、廊下を走りだした。

「やれやれ、本当に微笑ましいね」

「なんかここって俺が入っていいのか？」

廊下の突き当たりを曲がった先には物々しい扉があった。

確かにこの廊下を行き止まりまで歩いた事がなかったから知らなかったけど、フレイ様が言った通り、人は全く歩いてない。

これだったらルーシエルは隠れ家にするだろう。

扉のカギは開いており、俺は息を飲んだ。入っていいのかな？でもいるとしたらここだろうしなあ……

思い切ってドアを開けた先には、物があまり置かれていない広い部屋だった。そしてその中央にルーシエルの姿があった。

「ルーシエル！」

「あ、ダフネ！」

振り返ったルーシエルは俺に飛びついて来た。

それを受け止めて戻ってこなかった事を少し説教した。

「駄目だろ、15分って言ったじゃん」

「ごめんね。でもこれを見つけて読んでたんだ。不思議な文字だよ」

ルーシエルが見せてきたのは緑色の宝石だった。宝石はかなり大きく、小さなルーシエルの手の平から少しはみ出ている。

何か分からなくて差し出してくるルーシエルから受け取り、宝石を眺めると、宝石の中に何かが彫られていた。

見た事の無い文字、なんだこれは。

ルーシエルはこれを読めるって言うのか？

「それね！ママが教えてくれた字に似てるんだ！」

「ママ？后か？」

「違うよ！俺達のママだよ！」

ああそう言う事か。

国王の今の后は確か2番目の妃だ。1番目の妃は病気で死んでしまったと聞いた。

王子を産んで5年目の事だったらしい。

でもこんな見た事ない字を……

辺りを見渡した時、ルーシエルに隠れて見えなかったけど、ルーシエルの後ろ、部屋の後ろ中央には豪華な台座と宝箱が置かれていた。良く見ると宝箱が開いてる。ルーシエルがこれを開けたんだ！

「ルーシエル、これ多分すっげえ大事な物だぞ！早く返すぞ！」

「戻しちゃうの？」

「当然前だ！」

怒った俺にルーシエルが渋々宝石を宝箱に戻す。

「鍵はかかってなかったのか？」

「開いてたよ。扉の鍵も宝箱も」

こんだけ堅固な扉や宝箱にしても鍵がかかってなかったら意味無い

のに、訳が分からない。

まあいい、関わらない方がいいだろう。

俺はルーシエルを連れて部屋を出る事にした。

ルーシエルはもったいなさそうに宝石をチラチラ見てたけど頭を固定させてまっすぐ歩かせた。

そのままミッシェルとクラウシエルの所に戻ると、クラウシエルが妙に慌ててた。

「どうしたクラウシエル」

「ダフネ！大変だ、バルディナの使者が来週来るらしい。父様は条約を結ぶチャンスだと言ってるけど、正直僕は嫌な予感がするよ」

「考えすぎじゃないクラウシエル。もっとまともな事に頭使いなさいよ」

突っ込みを入れたミッシェルにクラウシエルは渋い顔をしている。

「今度は一体何を言ってくるのか……もしかして国宝石の使者について脅しをかけられるかもしれない」

国宝石……ああこないだ言ってたやつね。あれ？ルーシエルがさっき持ってた宝石にもクラウシエルが言ってた読めない文字が書かれてたな。

でもルーシエルがそれを読めてたし、ルーシエルも母親から教わってたって言ってたから、多分家族内で使う暗号かなんだな。うん、そうだろ。

国宝石に鍵かけないとかマジあり得ないしな。

でもそうか、遂に来るのかバルディナも……

「そう言えば明後日の正午だよな、友好条約切れるの」

「それを見越して来るんだ。どうなるか怖いよ」

「そんな事よりケーキ持ってきなさいよダフネ」

こんな時までミッシェルの奴は……でも確かにそろそろお茶の時間だ。

俺はルーシエル達を椅子に座らせて、セラにお菓子を頼む為部屋の外に出た。

「国王、来週バルディナの国王自らがこちらに出向くと聞きました  
が」

「奴らは今回で処刑した死者の謝罪と責任を要求してくるはず！追  
い返した方が策ですぞ国王！」

「落ちつけノーヴァ。実際フレイが行った会議では多数決で友好条  
約を継続させる話をする為にも、こちらに来てもらった方がいいと  
言う事になったのだ」

「そ、その様な……ダイナス様はどう思われるのです！？」

「私も賛成だ。軍事力でファイアンやパルチナ、東天の牽制にな  
る為、バルディナとの条約は必須である」

「何と言う事だ……」

「案ずるな、何も起こりませんよ。何も」



## 6 平和条約終結

「国王は本当にあの国と友好関係を作るつもりかい？」

「不安じゃ。元から小競り合いがあったが、あの使者を処刑したお陰でバルディナとの仲は冷え切っちやるけんのお」

昼飯を食堂でセラと食っていた所にトレーに飯を乗せたジェイクリーナスとヤコブリーナスが話しかけてきた。

2人は俺達の座っている席の隣に腰かけ、それぞれが心配そうな顔をしていた。

## 6 平和条約終結

「さあな。でも流石に今回は話し合いなだけだろ」

「だといいですけど……」

セラがパンを食べるのを止めた横で、ジェイクリーナスが肉にフォークを突き刺してほうばるのを見ながら、俺もサラダに手をつけた。ヤコブリーナスも心配そうな顔をしている辺り、どうやらかなり話題になっってるようだ。

でも俺も正直詳しい事は知らない。

知りたがりのクラウシェルが色々自分で調べて、それを俺に相談してくるだけで、それ以外の情報なんて知らないからなあ。

「でもまあこの国、他の4つの国と違って軍事力も小さいしね」

「貿易と農業で大きくなった国だものね」

「マリア、ミリア」

同じく昼飯の時間なのだろう、マリアとミリアも俺が座っている席に相席してくる。

流石に今の状況にマリアとミリアも複雑そうだ。

「軍事でバルディナに頼り切りって少し痛いわよねえ」

「今回新しい条約を持ちかけても不平等な物だったらどうしよう」

「やあだ〜」

確かにそれはあり得そうだ。バルディナにとっては別に友好条約は結んでも結ばなくても大したメリットは無い。

軍事で守ってやるんだから見返りを寄こせ。は当り前の言い分だ。その見返りがどんなものかは分からないけど。

「見返りに国宝石よこせって言われたら流石に国王も反対するよなあ」

「そりゃそうでしょ。国宝石は5つの国が分けあってる物よ。他国に渡したら、それこそファイアンにパルチナ、東天から批判されて四面楚歌よ」

やっぱり国宝石はそんなに大事な物なんだ。

「ならば戦争になるかもしれないと言う事かい？」

「うお！ミカエリスにイワコフ……いつの間に」

いつの間にか相席をして飯を食っていたミカエリスとイワコフに俺だけじゃない、他の奴らも驚いた。

ミカエリスは珍しく真面目な顔をして優雅にパスタを口に運んでいる。

口の端にトマトソースついてるけどな。

「戦争、ねえ……あり得ない話じゃないかもな」

「嫌な事を言うねジェイクリーナス君」

「だってさあ、あいつらは国宝石狙って侵入した国だぜ。見返りに国宝石って絶対言ってきそうじゃねえか」

「仮に言ってきたとしても、その様な事を言ったと世界が知ったらそれこそ他国から袋叩きだよ」

「余所の国が動いてくれんのかねえ」

確かにミカエリスとジェイクリーナスの言う通りかもしれない。

戦争も1つの手だ。そして国宝石を見返りに要求したら他の国からの非難は必至だけど、兵を送ってバルディナを止めてくれる国があるかと聞かれたら謎だ。

「バルディナにはザイナスもあるからのお……銃の製造法はまだ広く知れ渡っちよらん。あの鉛玉は脅威じゃよ」

「……恐ろしい、な」

全く喋らないイワコフまでも言葉に出すほどだ。今城の中の緊張感  
は半端じゃないはずだ。

国宝石を狙って使者が来たことは国民は知らない。俺だって知らなかったんだから。

国民達は新たに条約を継続させるんだと思ってるみたいけど、城の中の意見は様々だ。

「なあ国宝石ってさ、聞いた話だけどゲーティアの隠し場所を指してるんだよな」

「何だね君、今頃知ったのかい」

「まだ城に勤め出して1カ月だ。しょうがねえだろ。簡単には読めないって話だけど、手に入れた所で解読できないんじゃないか？」

「今の所はそうだろうが、バルディナは研究家を集めていると言う話だ。少しは解読できるのかもしれない。だが実際の所、私達も国宝石を見た事がないのだよ。だから君の言う通り、読めないと言う話だが、それが本当かも確認できない。だがこの城のどこにある。それは確かだ」

やっぱり噂だけが先行してしまってる部分はあるんだな。

もしかしたらゲーティア自体存在しないかもしれないのにな。そう考えたら、そんな物の為にバルディナは使者を派遣させたとか馬鹿じゃないんだろうか。

「でも……クラウシエル様は酷く慌ててましたね。バルディナと条約なんて有り得ないと」

「そうなのセラちゃん、クラウシエル王子頭いいもんねえマリア」

「でも議会が決定したんだから意味ないけどねえミリア」

そうだ、議会が決定したんだ。クラウシエルが何を言っても無駄だろう。

「バルディナは軍事国家だからなあ……確かにバルディナが守ってくれるとしたら心強いけど、まず第1にアルトランドが侵略されんのかな？」

「ジェイクリーナス？」

「だってさあフライアンはビアナの商人に聞く限り、戦争より国民の生活の質の向上に力入れてるみたいだし、東天は鎖国中だから貿易船以外の船は通さないって話だし、他国に侵略はしねえだろ。同じ軍事国家のパルチナはアルトランドつーよりはバルディナに近いから、戦争つつたらバルディナとパルチナじゃん。俺ら関係なくね？」

「ジェイクリーナスは単純ねえ。パルチナだって本気で戦争する時

はまず食料を備蓄させて長期戦に持ち込む為にアルトランド狙ってくるわよ。バルディナが背後にいるから牽制になってるの。だから軍事を他国に頼りきりって怖いのよ」

マリアも少し苛立ってるようだ。最近確かに皆が慌ただしくなっている。

時計の針が12時57分を指そうとしてる。

「もうすぐだな。友好条約が切れるの」

「はい、100年前の12時58分に友好条約を締結し、100年後の12時58分に友好条約は終結する」

いつの間にか、食堂にいる奴ら皆が時計を眺めていた。

それはコラッドやサヤカ達、料理人も同じだ。

針は1秒1秒進み、そして12時58分の場所に針が動いた。

「終わった……バルディナとの友好条約が」

何ともあつけない終わりだが、でも間違いなく友好条約は終結した。来週、バルディナが何を引っ提げて来るか分からないまま、俺達は皆複雑な心境を抱えなければならなかった。

## 7 バルディナ使者来訪

「大変だダフネ！バルディナが来た！」

クラウシエルが慌てて窓を見るように促す。

いかつい馬車に揺られて、馬車の周りは兵士が護衛をしている。

その姿を見て、本当にバルディナの使者がやってきたんだな、と思うには十分だった。

## 7 バルディナ使者来訪

3人がお茶をする部屋からは城門と町並みが良く見え、門番のマリアとミリアの姿も確認できる。2人の表情までは見えないが、動きが少しぎこちないから、かなり緊張してるみたいだ。

流石に怖くなったのかミッシェルもセラにしがみつき、ルーシエルも俺にしがみついた。

「大丈夫ですよ、きっとまた条約を結ぶだけです」

セラはそう言ってなだめてるけど、表情は複雑そうだ。

そんなセラに俺も声をかける事が出来ない。正直言って俺はあいつらが何を言ってくるのかが心配だ。

国宝石を見返りとして要求されたら、国王はどうするつもりだろう。それ以外にも貿易の制限や関税撤廃、もしかしたら法を変える事を要求する可能性だってある。

確実にバルディナはただで条約を継続させる気はないだろう。

「それにしても……兵が多くないか？正式な使者が来るんだから護衛は確かに必要だけど、こんなに多くする必要があるのか？」

「ダフネは分かるのですか？」

「まあ士官学校で戦のノウハウは学ぶからな」

本当に可笑しい。この数なら斥候として使えそうなくらい多い。

アルトラントに軍事力があまりないのはバルディナも知っているはずだ。現にアルトラントには兵は2〜3万しかないし、ノーヴァ様以外に凄腕の騎士がいると言う話も余り聞いた事がない。

それなのに向こうは士官学校の教科書に載ってたような凄腕の騎士が数人護衛してやがる。これはやりすぎじゃないのか？

軍事パレードの様に派手に登場して城の庭についた馬車から人が降りて来る。

でもそれは意外な人物だった。

「あれ？」

「ダフネ、どうしたんだ？」

「あの使者が身につけてるマントに王家の刺繍が入ってる。ってことは王族か？でも皇帝のイマニユエル・ネイサンは確か70を超えろご老体って聞いたけど……」

馬車から下りてきた男は屈強な男だった。一般の使者はバルディナの国旗がデザインされたものを身につけてるけど、あいつが身につけてるマントに刺繍されてるのは王家の家紋だ。詳しく見えないけど、色が国旗と違うからそうだろう。

見た感じ30後半くらいだけど……あいつは誰なんだ？王族って事は間違いないんだけどな。

セラも呼んで、窓から誰だと聞くとセラは知っているようで顔を顰めた。

「彼はイマニユエル・ネイサンの息子の第2王子、ジュダス・ネイサン。バルディナでもタカ派の筆頭格であり、10年前のバルディナとザイナスの紛争を打ち勝った英雄です」

10年前にバルディナ領土内の独立国家であるザイナスとバルディナは戦争をしていた。

ザイナスは銃火器を専門に扱う唯一の国で数百年前にバルディナから独立を果たした。

でもバルディナはザイナスの独立を認めておらず、またザイナスの技術が欲しいから侵略を繰り返し、ザイナスもそれに応戦してた。その時にザイナスに奇襲をかけられて窮地に立たされた所を逆転したと言う武勇伝を持つるのがジュダス・ネイサンだ。

結局紛争は痛み分けに終わり、条約によって今は休戦状態になるみたいだけど。

「ジュダス、ねえ……」

「なんであいつが来るんだ……ウィリアム・ネイサンはどうしたんだ？今まで交渉の度にそいつが出てきていたじゃないか！」

クラウシエルの言う通りだ。バルディナのイマニユエル・ネイサンは子どもが4人いるって聞いた。

1人は第1王子で長男のウィリアム・ネイサン、交渉術に長けてるけど、情に厚い御方だと聞いた。第2王子が今来ているジュダス・ネイサン、セラの言った通りタカ派の筆頭格でバルディナの軍事力増大の中心人物だ。第3王子がクリスティアン・ネイサン。かなり歳が離れててまだ10代らしいけど病弱で表には出ないらしい。そして第1皇女がマライア・ネイサン、剣技に長けた女傑だ。そしてジュダスが来たって事は……いよいよこれはヤバいか。

「向こうでも色々議論があったんだろうけど、タカ派が今回は議論



で勝ったんだろうな」

「そんな……」

「ねえなんなのタカ派って。分かるように言いなさい！」

「俺もわかんない！」

こんな時でもミッシェルとルーシエルは能天気だ。

まあ教えるのはまた今度でいいだろう。まだ12歳のミッシェルと9歳のルーシエルには難しいはずだ。クラウシエルが賢すぎるだけで。

でもこれは本当にどうなってしまうんだろうか。

その時、部屋の扉がノックされた。セラが扉を開けると、そこにはフレイ様が立っていた。

「やあ、ダフネ君はいるかな？」

「ダフネですか？ いますけど……」

セラは首をかしげて、俺にフレイ様が来たと言った。フレイ様が俺に何の用なんだろうか。でもフレイ様が呼んでるんだから行かなきゃ不味い。

なんとなくクラウシエル達を残すのは気が引けたがセラもいるし、そんな長い話って訳でもないだろうし、すぐに終わるよな。そう思い、フレイ様の元に向かった。

「ダフネ君、君はどう思うかい？」

「どうって……」

扉を閉めて、周りに誰もいないからか、ここで話を切り出してきたフレイ様に首をかしげた。

フレイ様は眉を動かし、不安そうな顔をしている。

「バルディナは今回正式な使者に第2王子を送ってきた。第2王子が交渉に出てきた事は正式な記録書には残っていない。」

「やっぱりフレイ様も感じましたか。タカ派の第2王子が来るって事は、もしかしたらと思ったんです。条約を継続させるなら交渉に長けた第1王子を送り出すはずですし……」

「やはり君の洞察力は素晴らしいね。私も彼らが国宝石を狙ってるんじゃないかと思ってね、不安に感じていたんだよ」

「国宝石を!？」

「まだ分らない。しかし王子たちは3人とも国王たちの寝室に避難させた方がいいだろう。何が起こるか分からないしね」

「そうですね……そうさせます」

それだけを伝えに来たらしい、フレイ様は相変わらず愛想のいい笑みを浮かべて去って行った。

さてと、俺は王子たちを自室に映さないとな……

「此度は我が国アルトラントに来ていただき歓迎する。猛き国バルディナよ」

「我が同盟国よ。私も会えて嬉しいよ」

ジュダスが頭を下げたのを見て、国王も頭を下げる。

物々しい空気に囲まれて、それぞれがお互いに話を切り出すのを待っている。そして先に斬りだしたのはジュダスの方だった。

「今は我ら条約が終結し、同盟国ではなくなったのだが、我らバルディナは新たな条約を締結する準備は出来ている」

「それは有難い、早速書を作らせよう」

「いや、その前に我らの条件を飲んでいただきたい」

やはりそう来たか。国王やダイナス、ノーヴァがそれぞれ同じ事を思った。

ただで守る等あり得ない、見返りを寄せ。言われると予想はしていたが実際言われると、心臓が跳ねる。

平静を崩さず、国王が例を挙げてほしいと言えば、ジュダスは笑みを浮かべた。

「簡単な事。国宝石を我らに引き渡す、それ以外の交渉条件は無い」

「な、何を馬鹿な事を！国宝石は5つの国で分けあう事で均一を保つと言う話は私達の数百年も前から決まっていた事ではないか！」

「私達には私達の望みがある。そしてそれを果たす為にゲーティアが必要なのだ。国宝石を解読し、私達がゲーティアを手に入れる」

「ふざけた事を言うな！それは受け入れられん！」

「よろしいのですか？我が国と条約を結ばなくても。過去にパルチナの南下を阻止できたのは我らの功績が大きい。私達が見限れば、貴方の国などパルチナやフライアンにすぐに切り売りされるだろうな」

「いずれにせよ、この事は書簡で3カ国に伝える。侵略をされる前に3カ国から非難する声明が貴殿に届くであろう」

国王の凜とした声が室内に響いた。

しかしジュダスは笑みを崩さなかった。

「それは困りますなあ。だが我らはそれを見越している。国王、我らは今日この国を買い取りに来た」

「な、に……？」

「国宝石の話しあいに応じなかった場合、我らは今日この国を潰す気で来たのだ！行け貴様ら！国王を捕えるのだ！」

ジユダスを護衛する兵数人が国王めがけて剣を向ける。  
しかしそれを間一髪の所でノーヴァと国王の護衛の兵士たちが止めた。

「国王！ここは我らに任せてお逃げください！奴ら最初からこのつもりだったのです！」

「ノーヴァッ！」

「ははは！平和ボケした国王に仕えるのも大変ですなあノーヴァ殿。我らを忌み嫌っていた貴方なら、この事態を予想していたはずがなあ」

「黙れ！今ここで貴様を討てば問題ない！」

「いつまでその意地が続くか、見物させてもらいましょう」

国王が奥の部屋へ逃げたのを確認し、ノーヴァが兵士の剣を弾き喉元に剣を突き刺す。

そして再び剣を構えなおした。

「グレイ、軍の者全てに伝えろ！これは侵略行為であり、全勢力使って排除すると！残りの者は私に続け！侵略者を根絶やしにするのだ！」

「アシユラ、全軍進撃の指示を出せ。鼠狩りだ、国宝石は必ず頂く」

―ダフネ side ―――

クラウシエル達を自室に避難させ、自分の部屋で愛用の剣を磨いていると、外が騒がしい。

なんだ？そう思ってドアを開けると、使用人達が兵に誘導されて逃げていた。兵の1人に声をかければ、兵士は慌てて状況を説明してくれた。

「な、なんだこれ？どう言う事だ！？」

「バルディナが侵略をしてきた。奴ら、城内だけじゃなく城下町までも兵をよこしてやがる！戦えない女子供は隠し部屋に避難させるのだ。君は剣を持っているから戦えるな？一般男性や剣士はバルディナの兵を頼む！門に向かってくれ！」

忙しいのか、そいつもさっさと行っちゃって残された俺はどうしていいか分からず、呆けていた。

すると視界に今度はサヤカに支えられたヤコブリーナスが息を切らしながら走ってきた。

ヤコブリーナスは俺を見つけて縋りついてきた。

「ヤコブリーナス、どうしたんだ！？」

「た、助けてくれダフネ……お前さんは士官学校を卒業したんじゃない？ジェイクリーナスを助けてくれ！若い男どもは皆前線に向かわされた。ジェイクリーナスは剣なぞ持った事もない！殺されてしまふ！」

「コラッドや他の料理人達も連れて行かれたよ……戦いの素人にバルディナの相手をさせるんだよ！」

ヤコブリーナスは泣き崩れ、サヤカの悔しそうな声を聞いて頭が真っ白になっていく。

クラウシエルの言った事が現実になってしまった。本当にバルディナはアルトラントを潰すために襲撃してきたんだっ！

今のアルトラントの警備は手薄だ。兵だって城に集中させている訳じゃなく、国境線の砦にも、それぞれの村にも派遣してるから、実際1万5000もないだろう。

だから城の男達を狩りだして戦わせるんだ。でもそんなの無謀すぎる！相手は俺と同じ士官学校を卒業して、なお且つ城で訓練を受けてる騎士や兵たちだ。一般人が敵う訳ないじゃないか！このままじゃ皆殺されてしまう！

「……俺も前線に行く。門だな？」

「そ、そうじゃ！頼むダフネ……頼む！大切な孫なのじゃっ！！」

「ダフネ、あんたはどうするんだい？あんたは王子と姫の世話係だろ！？門に行ってる場合じゃないはずだ！」

「門からの侵攻を防げば安全だ！俺は行くぞ！」

パニックを起こしているヤコブリーナスを隠し部屋に向かっている奴らに合流させて俺は門に向かう為に急いだ。

## 8 塞がれていく退路

「うわああああ！あいつらが攻めてきた！俺剣なんて持った事ない！嫌だ、死にたくない！」

目の前で起こっている体験した事のない現実にはジェイクリーナスはパニックを起こして泣き叫ぶ。

それを半泣き状態で切れ返していたのはミカエリスだ。

「そんなの私とて同じだジェイクリーナス君！君はまだ剣があるからいいじゃないか！私なぞ武器が足りないから鉄パイプだぞ！どう考えても死ぬのは私だろう！」

「ミカエリスはいいじゃんか！30過ぎたし十分生きただろお！？俺まだ19よ！？」

「そんな理屈通用しない！私とてこんな所で死にたくない！」  
「死にたくない……」

普段喋らないイワコフも一言呟いて顔を俯かせた。

「イワコフ君もそうだよね！？」

「てやんでい！俺なんか料理人だからフライパンで戦いと来た！一生フライパンに顔向けできねえ！」

「コラッドさん、気持ちは分かるよ。門を突破したら最後だ……あの兵士たちが突破されたら……」

自分達の数メートル先には自分達を守るために戦っている兵の姿。あの兵が突破されたらバルディナの剣はついに自分たちに届くのだ。ミカエリスはその光景を呆然と見ながら、絶望したような声でポツリと呟いた。

「マリア君とミリア君は大丈夫なんだろうか……」

城を守る少女門番の2人。2人とも女だが、自分たちとは違い前線で戦っている。

もう彼女達は息絶えているかもしれない。その恐怖で動く事も出来なかった。

## 8 塞がれていく退路

揉みくちゃになった状態で混戦になり、どこから剣が向かってくるかわからない。

所々に傷を負ったミリアが膝をついているマリアを支えて立たせた。

「マリア、大丈夫？」

「平気、まだ行けるわ」

「それにしてもしつこいわね。あいつら本気で潰す気にいるわ。まさかいきなり来るなんて思わなかったから、こっちはなんの準備もしてないのに！」

「……ミリア、死ぬ時は一緒よ」

「わかってるわ。国の為に2人で死ぬのも悪くないわね」

—ダフネ side———

「セラッ！」

逃げまどう使用人達をかくぐり、門に向かって走っている途中でセラを見つけて俺は大声を出した。

セラはこっちに気づいて走って向かってくる。その表情は硬い。



「ダフネ、なぜここに？王子たちはどうしたのです？」

「多分部屋にいるだろ。俺は門に向かってるんだ」

「多分って……何を言ってるの貴方は！御世話係がこの非常事態に離れてどうするの！？」

初めてのセラの怒声に少し驚いてしまったが、俺にも言い分がある。納得させられると思ってたのに、セラの表情は変わらない。

「だから門からの侵攻を防ぐんだ！あそこを防ぎきったら」

「本気で言ってるの？」

セラの射ぬく視線に何も言い返せない。

「あれは多分斥候部隊、直に本隊が襲撃してきて門は恐らく破られる。私でも分かるのに、士官学校を出た貴方が分からないはずはないわ。貴方は兵の数を見てないのでしょう？」

そんなに数が多いのか……

絶望感が身体に襲いかかる。どうなるんだ、ヤコブリーナスにジェイクリーナスを頼まれた。

ジェイクリーナスだけじゃない、コラッドも連れて行かれたってサヤカが言ってた。

多分イワコフもミカエリスも連れて行かれたはずだ。

マリアとミリアは女の子だけど門番だから前線で戦ってるはずだ。あいつらはどうなるんだよ！？

「貴方は王子たちの所に向かいなさい」

「俺は、皆を助けて……！」

「いいえ、助けられない。王子と姫と逃げるんです。さっき窓から

爆弾と銃を持っている兵を見ました。恐らくザイナスも今回協力しているのでしょう。直に城門に穴が開けられて兵たちがそこから入ってくる。国王と王子たちを守るんです」

ザイナスがバルディナに協力してる？だって10年前までバルディナと戦争してたんだぞ！？その国がなんで今回協力してるんだ！何かを言いたかったけど、口を開いた瞬間、大きな爆発音が聞こえた。

やられてしまった……恐らく開いた穴から奴らが乗り込んでくる。

「行きなさいダフネ！王子たちを守って！」

「お前も行くんだよセラ！」

「……私の父は騎士でした。私も少しですが手ほどきは受けています、私こそ門に向かいます。ジェイクリーナス達にも伝えますよ。きっと貴方の言葉を聞いて、彼らは生き残る為に戦うでしょう。貴方の役目を果たして下さい」

俺の役目って何だ？御世話係だからって城の皆を見捨てなきゃいけないのか？

俺は戦える、何のために士官学校を卒業したんだよ！肝心な時に剣も持った事の無い奴らに任せるなんて……！

兵たちの声と使用人達の悲鳴が聞こえる。ここは3階、すぐにクラウシエル達の部屋にもたどり着く……俺が行かなくちゃ！

俺はまっすぐクラウシエル達の部屋に走って向かう。その時、前方から子どもが走ってきた。

「ルーシエル！」

「あ……ダフネ！」

俺めがけて走ってきた傷だらけのルーシエルを抱きしめてやっと少

し安堵した。

泣き虫のルーシエルにこの場はきつただろう、涙をぼろぼろ流して俺にしがみついている。

それを力いっぱい抱き返して、ルーシエルに酷だろうが状況を尋ねた。

「ルーシエル、ミッシェルとクラウシエルは？一緒にじゃなかったのか？」

「……わからない、わからないよお！俺、これを持ってダフネと逃げろってパパに言われたんだ。ミッシェルとクラウシエルを置いてって！俺、それを断って必死に2人を探したのに、探したのに！」

国王の言葉に耳を疑った。あの国王がミッシェルとクラウシエルを見捨てるといふ言葉を使うなんて！なんで国王はそんな事を思ったんだ！

ルーシエルの手には緑色の宝石、これは確かルーシエルとかくれんぼした時に見た……まさかこれが国宝石なのか！？

でも正直もう時間がない。直に相手の本隊が乗り込んでくるだろう。今この城にいるのはあくまでも斥候、特攻部隊だ。それだけでこんな壊滅的な被害になるんだ。本隊が乗り込んできた時なんて考えたくもない。

国王にはきつと策がある！国王がミッシェルとクラウシエルを見捨てる訳がない！なら俺がやるべき事は1つ。

ルーシエルを連れて国外へ逃亡する事。ルーシエルが国王から渡された物を守る事。

ごめんなミッシェル、クラウシエル……俺は駄目な世話係だよ。でももう探す暇なんてない。ルーシエルだけでも助けなければ！

前にミッシェルが言っていた。抜け道を使って城を出たと。その力

ギをルーシエルはポッケに持っていた。

国王に渡されたいらしい。国王は一体何がしたいんだ？自らが逃げる気はないのか！？

ルーシエルを抱き上げて城の出口方面に向かった俺にルーシエルは慌てた。

「ダフネ、何してるの？そっちは違う、違うよ！」

「違う。ルーシエル、俺と逃げるんだ」

「なんで？なんでダフネはそんな事言うの！？ミッシェルとクラウドシエルがどうなってもいいの！？ダフネは俺達の御世話係でしょ！？」

「……確かにそうだ。でも国王の命令は絶対だ」

「止めて！降ろして！！ミッシェル……クラウドシエル！」

泣き叫ぶルーシエルの口を押さえて無理やり黙らせて足を動かした。両手が塞がってるこの状況で兵と会うのは自殺行為だ。何としても避けなければ！そして国外に逃げなきゃいけない。

それまではかなりの苦勞を味わうだろうけど仕方がない。仕方がないんだ……！

## 9 裏切り者

「くそっ！この外道どもが！」

刃を交えながらも憎しみがこもった視線でノーヴァが睨みつけてもジユダスはびくともしない。

国王は無事逃げ切れたのだろうか。この部屋は隠し通路で国宝石がある部屋と国王と后と御子息たちの寝室と繋がっている。

そして国王の部屋には隠し通路で部屋から出る事も出来たはずだ。

## 9 裏切り者

ミッシェルが言っていた話では、この鍵は確か3階の物置からの隠し通路だったよな……まだ兵は門の前にいる分と、謁見の間にいる数人だけのはず。

今ならまだ逃げ切れる！

「ダフネ君！」

「フレイ様！」

慌てて走ってきたのはフレイ様だ。良かったご無事だったのか！でもルーシエルが俺の首にしがみついて、大声を出した。

「ダフネ、そいつは悪い奴だよ！そいつは俺達を裏切ったんだ！」

ルーシエルの大声でフレイ様がピタッと歩みを止めた。

ルーシエルがパニックを起こしてるだけなのか、それとも事実なの

か……俺には全く分からない。

でもルーシエルは尋常じゃないほど怯えてる。それだけは事実だ。俺は刺激させない為にも、早くフレイ様から離れようと決めた。

「フレイ様、俺達ミッシェルとクラウシエルを探すのでこれで……」  
「そうなのかい？彼らならもう捕まったよ。後は君だけだルーシエル君」

「は？」

フレイ様は何を言ってるのか分からない。捕まった？ミッシェルとクラウシエルが？  
全身の血が引いて行く。

ルーシエルの悲鳴が聞こえたにもかかわらず、フレイ様は涼しそうな顔をしている。

「ルーシエル君、君は読み手だ。国宝石の文字を読む事が出来る。  
我がバルディナには君が必要だ」

フレイ様は裏切り物だった……バルディナのスパイだった。

そしてルーシエルが読み手、あの国宝石の。ルーシエルは母親に教えてもらったって言ってた。

ミッシェルとクラウシエルは違うのか？でもこいつがルーシエルを欲しがってるんだ。読み手はルーシエルだけなんだろう。

だから国王は国宝石をルーシエルに渡して俺と一緒に逃げろって言ったんだ。

ルーシエルが奴らの手に渡ったら最後だから……守らなきゃいけない。俺がルーシエルを守らなきゃいけない！

こいつを斬り殺したい！裏切ったこいつを！  
でも今は時間がない。こいつとやり合ってるうちに応援が来るだろ

う。でもミツシエルとクラウドシエルが！

ジリジリ近寄って来たフレイに逃げる体制をとる。ルーシエルを抱えてる状態じゃ、剣も振り回せない。

その時、フレイが何かに反応し、身体をずらした。

そしてそこには捕まったとフレイが言っていたクラウドシエルが剣を持って構えていた。

「クラウドシエル！」

「ダフネ！こいつの言ってる事は張ったりだ！僕達はまだ捕まってない！」

クラウドシエルは剣をフレイに向ける。それを見てフレイが苛立った表情を浮かべた。

「話は父様から聞いた。早くルーシエルを連れて逃げるんだ！ここは僕が何とかする！」

「お前も一緒にっ！」

「一緒に逃げようクラウドシエル！ミツシエルもパパもママも！」

伸ばしたルーシエルの手をクラウドシエルは悲しそうに見つめ、そして首を横に振った。

クラウドシエルは逃げる気が無いのだ。このアルトラントに残る気なんだ。

どうして！？そう泣き叫ぶルーシエルにクラウドシエルは涙をこらえながらも、凜とした声で返事をした。その姿は王族の誇りと威厳があった。

「それはできないんだルーシエル、僕は第1王子、直国王だからね。国民は見捨てられない。それとダフネ」

「え？」

「今なら自信を持って言えるよ。僕はルーシエルを守れると！」

クラウシエルが剣を向けてフレイに走っていく。

過去に言っていた。こんな事態になった時に自分はミッシェルとルーシエルを守れるのか、と。クラウシエルが文句を言いながらもサボらずに剣の稽古を続けたのはミッシェルとルーシエルを守る為だ。こいつは今、あの時の決意を実行しようとしてるんだ……

クラウシエルは命に変えても俺とルーシエルを逃がす気なんだ。そんなクラウシエルを助けなきゃいけないのに、クラウシエルの最後の言葉が胸に突き刺さった。

こいつはあの時、俺と話した事を実行しようとしてる！

俺が命に変えてもルーシエルを守る。ルーシエルは希望だ、国宝石とルーシエルがいれば、いつか国は取り戻せる。俺は絶対に諦めない。

ルーシエルを抱えなおして、再び走り出した俺にルーシエルは慌てた。

「クラウシエル、クラウシエル！」

「死ぬんじやねえぞクラウシエル！俺達は絶対に国を取り戻す！絶対にだ！」

「分かってるよ。僕だって国王になる為に勉強してきたんだ。無駄にする気はないさ」

最後まで生意気な態度を崩さなかったクラウシエル、でもその後ろ姿は震えて見える。怖いのは当たり前だ、殺されるかもしれない極限状態の中で、あいつは自らの命よりも弟の命を守る事を優先させた。

ミッシェルとルーシエルの事を口では文句を言いながらも誰よりも心配していた。クラウシエルの意思を俺は守らなきゃいけない。あいつが時間を稼いでる内に逃げるんだ！



物置の扉を開けて内側からカギをかけた後に抜け道の入り口を探す。クラウシエルを助けようと俺から逃げようとするルーシエルを止めながら、怒りにまかせて物を乱雑にどかしていると、小さな扉があった。

扉に鍵がかかってる……その鍵がこれか！

鍵を差し込むとかガチャリと音を立てて扉を開けられる様になった。やっぱりここがミツシエルの言ってた抜け道か！

ルーシエルを担いでその中に入り、また内側から鍵をかける。これでこいつらは入ってこれない。ひとまずは安心とはいかないが、城からは出られる。ミツシエルが言ってた時、城下町の路地裏でそこから市場や城の城下町から外であるルプス門に出れるって言った。でもそこには十中八九見張りがいるだろう。城下町の中にも兵はいるはずだ……どうするっ

アルトラントの領土内は独立国家が存在しない。つまりこの大陸の外に出なければ、アルトラント内に逃げ道は次第に無くなってくる。そう考えたら国外逃亡しかないだろう。

国外と言っても行く場所がない。ルーシエルの身分を隠して国外逃亡をはかるしかない。

バルディナの力が行かない内に港町のシースクエアから船に乗って貿易国家ビアナを目指す。ビアナまで行ければ安心だ。それから先はそこについてから考えればいい。

シースクエアは南下した先だ。馬が欲しいが今は手に入らないだろうな。でも歩いて行ったら数週間にかかる。途中でどこか被害が行ってない村に行って馬を調達するか……いや、シースクエアの道中に俺の産まれた村のサラデイスがある。そこで馬を譲ってもらおう。村の奴らもきつと匿ってくれるはずだ。

まずはそこからだ！

ルーシエルは俺の服の袖を掴んでぼつりと呟いた。

「なんでダフネは皆を置いて行ったの？俺は皆と一緒にいたかったよ」

「……ルーシエル、お前は最後の希望なんだ。お前だけは生き残らなきゃいけない」

「どうして？」

「お前が母親に教えてもらったって字があっただろ。あれは国宝石に書かれた文字なんだ。国宝石はゲーティアって言う魔術書が隠された場所を記すヒントになってる。バルディナはそれを狙って襲撃してきた。でもバルディナは国宝石の文字を読めないんだ。だから文字が読めるお前をバルディナは捕まえたかった。俺も教えてくれルーシエル」

「何を？」

「お前が持つてるその宝石、かくれんぼした時のだよな？国宝石が鍵の掛かってない部屋と宝箱の中に置かれてるはずがない。どうやってあの部屋に入ったんだ？」

ルーシエルは涙ではらした目をこすりながらポツポツと呟いた。

「見つからない場所探してる時にね、フレイに会ったんだ。そしてらフレイがね、あの部屋の鍵を開けたんだ。ここなら見つからないって。そして宝石を渡してきたんだ。文字が読めるかって聞いてきて……」

「やっぱあいつか」

どうりでタイミング良くあの場に居合わせた訳だ。

最初からあいつはルーシエルに国宝石を読ませる気だったんだ。評議長のフレイなら国宝石を隠してる部屋の鍵を手に入れる手段があるだろう。

最初からあいつはスパイだった。俺にルーシエルを部屋に行かせろ

って言ってきたのも、邪魔な俺をルーシエルから引き離したかったからか！

でも国王が国宝石をルーシエルに持たせて逃げさせたお陰で、あいつの計画はパーになったんだろうけどな。

走り続けた先には梯子がかかっている。そして天井にはマンホールの様な物も。この先が出口だ。

ルーシエルを降ろして、先に自分が登ってバルディナの兵がいなか確認する。

ミッシェルが言ってた通り、路地裏だ。ここならバルディナの兵はまだいないだろう。ルーシエルを抱えて外に出た。

城下町でもバルディナの兵と市民が戦っているようだ。抗争が繰り広げられている。

問題はここからどうやってルプス門に行って外に出るかだ。

その時、1人の女性が俺達に気づいて駆け寄ってきた。

「あんた若い男なら手伝っておくれ！バルディナの奴らを追い返すんだ！」

それは俺もしたい所だけど、できない。

首を横に振って断った俺に女性は苛立って拳を握りしめた。

「女子供も戦ってるのに、何情けない事言ってるんだい!？」

「違います、話を聞いてください！俺は城の人間です。この子は第2王子ルーシエル様、俺達は城から逃げてきたんです！」

「何を馬鹿な事を！」

やっぱりあまり公に顔を出さないルーシエルは顔が割れてないせいで、国民には知名度が低いようだ。顔を見ただけでは分かってもらえない。

俺も就職するまでクラウシエルの顔しか知らなかったからな。でも信じてもらうしかない。そして信じてもらう証拠が……

「これを見てください」

ルーシエルの指にはめられている指輪、この指輪は王族だけが持つ指輪だ。

それを見た女性は本当に王子だと理解したらしく、膝をついた。

「ご無事で……本当に良かった!」

「俺達は国王の命令で城から逃げろと仰せ使いました。御協力願えますか?」

「逃げるって……王族があたしら国民を見捨てて逃げるのかい!」

「今はそうなります。でも逃げるのはルーシエル様だけです」

「どうして……」

「ルーシエル様はバルディナに狙われています。そして国の最後の希望、俺達は必ずバルディナを打ち滅ぼしに国に戻ってくるつもりです」

「……あんた」

女性は理解してくれたのか立ち上がって、少し待っててくれと言って家に入って行った。

そして数分後にフードがついた布切れを持ってきた。

それを俺とルーシエルに渡してくる。

「主人と息子のだ。サイズが合うかは分からないけど、今から街の奴らに伝えてルプス門の前で暴動を起こす。あいつらがあたし達を鎮静化させてるどさくさに紛れて門を出るんだ」

「あ、有難うございます!」

「門の外も恐らくバルディナの兵がうようよいるだろうさ。だから

グプトの森から行くといい。流石に森の中まで来ないさ。でもこのコンパスがあったら森を抜かれる」

「何から何まですみません」

「いいんだよ、ルーシエル様をいつらに渡させはしないさ。あんた達はこれからどうするんだい？」

「とりあえずシースクエアからビアナに向かうつもりです。その後は追っ手を逃れてから考えます」

「そうだね、まずは逃げる方が先さ。待ってな、暴動が始まったら呼びに来る」

女性はそう言って走って路地裏を出て行った。

そして十数分後に一際大きい声が響き、近くで抗争が起こったのを理解した。

女性が走ってくるのを見て、俺はルーシエルにフードを被せた。

「今だよ！今ならきつと行ける！」

「有難うございます！恩に来ます」

「ありがとう」

ルーシエルの言葉に女性は泣きそうな顔で気を付けて、とだけ呟いた。

ルプス門の前は一般市民と兵が激しい抗争を繰り広げてた。一般市民は棒や包丁などを持って、剣を振りかざす兵士と戦っている。

こいつらは兵の癖に一般人も殺すつもりなのか！どこまで腐ってるんだ！

走ってる途中で既に息絶えてる市民を発見し、ルーシエルに見せない為にルーシエルの目を手で覆った。

でも目論見通り、鎮静化に努めている兵は俺達に気づかない。

俺達はまんまとルプス門から城の城下町の外に出た。

城の外に出て走り続ける。

後ろからは悲鳴と物が壊れる音が聞こえて、振り返るのも怖い。

バルディナの兵たちに見つからないように走り、俺とルーシエルはグプトの森に駆け込んだ。

---

アルトラント王国、平和条約100周年終結4日後……バルディナ帝国の襲撃により王国滅亡。

捕えられた姫と体中を傷だらけにして自室に投げ捨てられた第1王子、そして国王と后。

国王を最後まで守り通した軍団長ノーヴァは戦死。一般市民にも被害が出た。

しかし彼らは第2王子ルーシエルを逃がした事に気づき、兵を直ちに集結させたのち、アルトラントの各地に派遣すると決め、早急に兵を集めた。

そして国民に1年以内に国王と后の処刑を発表した。

## 10 故郷サラデイス

「ルーシエル、腹が減っただろ。飯食わなきゃな」

狩ってきた獣の肉をさばいて起こした火で焼いて行く。  
ルーシエルは慣れてない今の状況がかなり辛いみたいだ。

### 10 故郷サラデイス

焼けた肉をルーシエルが小さな口でかじりついて行く。喉が渴いた時は取ってきた木の実の汁を使って喉をうるおす。

まさか士官学校で習った知識がこんなところで役に立つなんてな。  
味付けのしていない肉は思った以上に味がなくて油分ばかりで美味しくなかったが、何も食わないよりマシだ。

ずっと歩き続けて、飯を食ったら休憩せずにまた歩く。

ルーシエルはもう疲れ果ててるだろう。でも文句1つ言わないのは、それ以外に方法がないと幼いながら分かってるからだ。  
肉を食べながらルーシエルが呟いた。

「これから俺達どうなっちゃうの？」

「まずは俺の故郷のサラデイスに行って馬を借りる。その後はシースクエアまで一気に飛ばして、そこから船でビアナに逃げるつもりだ。ビアナは独立国家だ、あそこにはバルディナも簡単には手を出せない。直接攻撃したらそれこそ世界の貿易が止まってフアライアンや東天、パルチナも出て来るからな」

「どうしてビアナなの？」

「あそこは他の国と違って入国審査が緩いんだ。他の国だと領土内

に入るのにどこから来たとか、何日いるとか、国からの証明書とか色々いるんだよ。でもビアナはそう言う規制が緩いから、俺たちが許可証も無しに突然入国しても許可してくれるんだ」

「そっか……俺ね、考えてたんだ。クラウシエルが逃がしてくれた意味を」

「……」

「俺、皆を助けたい。国宝石をあいつらなんかには渡さない。バルデイナを絶対に追い払ってやる」

力強い言葉にルーシエルも我慢の限界なんだと悟った。そうだよな、家族が人質に取られたも同然だ。気が気な訳がない。

国が今どんな状況なのか、俺達を知るはずもない。もしかしたら国王と后、下手したらクラウシエルとミツシエルも殺されてしまったのかもしれない。そんなことは考えたくないけれど。

セラやジェイクリーナス達は生き残れたのかな、怪我してないのかな。ヤコブリーナスの頼みを果たせなかった。もしこれでジェイクリーナスが命を落とすなんて事になったら、ヤコブリーナスは俺を許さないだろうな。

その時、多分言い返す事なんて何も出来ないと思う。軽はずみにヤコブリーナスの頼みを領いた自分がいけなかった。状況判断もせず

に。

飯を食い終わって、ルーシエルの手を引いてひたすら歩く。コンパスの方向は今の所は思った通りだ。間違った道を歩いてなければ、もう少ししたら俺の見慣れた景色が見えて来るだろう。

アルトランドでの悲鳴や怒声が嘘のように森の中は静まり返っている。ここら辺にはまだ兵も行き届いてないんだろうな、穏やかな光景が広がっている。

兵はいないと読み、思い切って一度森から出て道に出れば視界がクリアになり、丘を越えた先に小さな村が見えた。



良かった……まだあいつらはここまでは辿り着いてないみたいだ。  
俺は視界にとらえた小さな村を指差した。

「ルーシエル、あれが俺の故郷サラデイスだ」

「ダフネのお家？」

「そう、農業と酪農で生計立ててる小さな村だよ。でも飯は美味しいよ。今日は美味しいものを食べて温かくして寝ような」

ルーシエルが少しだけ嬉しそうな顔をした。

丘を越えて村に入るのは後5時間程度歩いたらつくだろう。

バルディナは1度兵を全て集結させて、城下町の鎮静化を図った後に兵を俺達に向けるはずだ。最低でも3日はかかる。

その間にサラデイスで馬を譲り受けて飛ばせば追いつかれる事はないだろう。俺達は逃げ切れる。向こうも俺達が馬を持つてないのを知ってるはずだから、逃げ切れるなんて思っていないはずだ。

悪いね、ここにコネがあるのさ。

村は見えたけどまだまだ遠い。でも確認できたことでルーシエルは少し早歩きになっている。これならもう少し早くつきそうだ。

疲れたら抱っこしてやればいい。正直俺も腕がパンパンだけどルーシエルはもったときついハズだから。

ルーシエルも頑張ってくれたおかげで5時間かなと思っていた所を4時間で行けた。クタクタになったルーシエルを最後は俺が抱っこして村に入る。

まだ情報が伝わっていないのか、村は相変わらず何もなくて、のどかで広場を家畜の豚が走りまわっていた。

ルーシエルは初めて見る豚に興奮してるようだ。

「ダフネこれ何!？」

「これは豚だよ。お前ハムとか好きだろ?これの肉」

「えっ！？こんな可愛いのを食べるの！？」

「こいつはまだ子供だから食えないよ。それより家に行こう」

家に向かっていいる途中、久々に戻ってきた俺を見つけた村人が歓迎してくれた。小さな村だから村人皆家族のようなものだ。俺が城で働いてるのを皆知ってるらしい、さすが小さい村は情報が回るのも早いな。

久々に帰ってきた俺に今日はごちそうを作ってくれと言われてたからルーシエルもこれで英気を養えるだろう。

村人に頭を下げて、自分の実家である小さい家の扉を開けた。まだ朝の9時だったせいか、お袋も親父も飯を食ってて、突然帰ってきた俺に目を丸くした。

「ど、どうしたんだダフネ！まさか首か！？」

「違うわ！わりい親父、ベッド貸してくんねえかな。後風呂も借りていいか？」

とりあえずルーシエルを休ませなければ。昨日からずっと歩き続けて大した休みもとらせないでいた。勿論睡眠時間0分だ。幼いルーシエルは体力の限界だ。それでも我俣1つ言わなかった。

お袋は良く分からないながらも、すぐにベッドを用意してくれた。そこにルーシエルを横にすると、不安そうな顔をされた。

「起きた時、いなくなってたらやだよ」

「大丈夫だよ。起きたら一緒に風呂に入ろうな、そんで今日は御馳走作ってくれるらしいから、一杯食ってゆっくり寝て明日たとう」

「ん……」

安心したのかルーシエルはすぐに眠ってしまった。

俺は説明をしなければならなかったので、不安そうにしている母さ

んに話すついでに村の人達にも説明しようと思った。

お袋が皆に知らせるために家を出ていく。親父との会話は一切なかった。

2時間後に村を代表する14人が集会所に集まった。何も知らない村人は御馳走を作るだの、祭りを開こうだの陽気に会話をしている。その気持ちはすごくうれしいんだけど、今はそんな場合じゃない。唯一複雑そうな親父が睨むように俺の目を見て低い声で問いかけた。

「どう言う事だダフネ、あの子は何者だ」

「ルーシエル、国の第2王子だよ」

親父が結論を急かすように聞いてきたから、答えだけを最初に教えた。

その答えに一瞬で集会所がどよめき出した。中には信じられないという声も聞こえるけど、事実なんだからしょうがない。それにこれからもっと信じられない話を聞くんだし。

「落ちついて聞いてくれ。まだ情報が届いてないみたいだけど、アルトラントはバルディナに侵略されて落ちた」

「なんですって!?!」

お袋の悲鳴じみた声を皮切りに、一斉に皆の質問が飛ぶ。

「そんな馬鹿な!なぜ急に!」

「だが友好条約はこの間切れた。まさか切れたのを狙ってきたのか!?!」

「あいつらはルーシエルを狙ってる。ルーシエルの世話係の俺は国王にルーシエルを連れて逃げろって言われたんだ。俺はルーシエルを守らなきゃいけない」

「ダフネ……おめえが」

「俺は絶対にルーシエルと祖国奪還をする。でもまずは国外に出る事を最優先に考えている」

「シースクエアからビアナに逃げるのかい？」

貿易関係に詳しいシン爺ちゃんが俺の考えている事を的中させた。頷いた俺にシン爺ちゃんがゆっくりと立ち上がった。

「じいちゃん？」

「シースクエアに知り合いがいる。そいつは船も持ってる、シースクエアに行っても船を出してくれる奴がいなきゃ意味ないだろう。わしが書状を書いてやる」

「有難うじいちゃん！後は馬を1頭貸してほしい。あいつらも俺とルーシエルが国外逃亡すると睨んでる。馬がなきゃ逃げ切れない」  
「それなら俺の馬を使え！一番いいのを用意してやる！」

村の酪農をしてるギャバが馬を貸してくれると言ってくれた。良かった、やっぱりここに來たのは正解だった。

皆俺の言った事を信じてくれた。それぞれが肩を落としていたけど、でも日持ちする食い物を持たせるとか、水を持って行けと色々提案してくれた。

確かにここから城は近いけど、ここからシースクエアは遠い。馬を使っても1週間はかかる。途中で村によるとしても、日持ちする食料と水は絶対に必要だ。

とりあえず今日はここに泊ると言った俺に、皆が飯を一杯食って行けと言ってくれた。

それぞれが準備をする為、出ていってしまい、俺も親父とお袋と一緒に家に戻った。親父は帰ってひと眠りしようとした俺を引きとめて、引き出しを開けた。

「親父？」

「おめえどうせ無一文だろうが。どうやって生活する気だ」

「動物を狩って角やらなんやら売る気でいた」

「馬鹿が、動物狩る暇があったら逃げろってんだ。これ持ってけ」

親父がくれたのは袋に入った金だった。結構な額が入ってる、数えた所十萬ギリアはある。

俺が士官学校に行きたいと言ったから、元々金の無い家からお袋と親父は金を作って行かせてくれた。全部俺の好きにやらせてくれた。その親父がなくなしの金を全て俺に渡してくれる。

「でも、こんな……」

「金は働いたらまた貯まる。でもおめえはそう言う訳にはいかねえだろうが……絶対国外に逃げ切れ。死んだら承知しねえ」

親父の言葉を皮切りにお袋が泣き出した。それにつられて俺も泣いて、親父も声押し殺して泣いた。

奥の部屋でルーシエルがそれを聞いていたのを俺は全く気付かなかった。

夜になってルーシエルを起こして一緒に風呂入って、御馳走を作って歓迎してくれるという村人に手を引かれて広場に行ったら、そこには結婚式とか子どもが生まれた時にしか食えない様な御馳走がたくさん並んでいた。

ルーシエルも郷土料理は初めてだろう、目を輝かせてる。

味のしない獣の肉を食っただけだったから飯はめっちゃ美味しく感じた。ルーシエルも沢山食べて美味しそうに微笑んでいた。

皆はずっと俺達をもてなしてくれて、あらかた食い終わった俺達にすぐに寝ろと促してきた。ベッドは俺が使ってたのと、後はお袋と親父のしかない。

親父のベッドにルーシエルを寝かせてる間に、お袋は俺のベッドの布団を干してくれた。ルーシエルと一緒に入ったら太陽の匂いを感じて安心した。

「ダフネごめんね、ダフネは俺が巻き込んだんだよね」

申し訳なさそうに寝る前に話しかけてきたルーシエル。確かに言われてみればそうかもな。でもそんなの関係無いよ。

「俺は御世話係だからな」

そう返せばルーシエルは安心そうにした。今日寝れば夜が明けて朝になる。そしたら馬を借りてシースクエアまで逃げるんだ。絶対に諦めない。

## 11 情報屋ライナ

「ルーシエル、起きろ。行くぞ」

「……もおく？」

今の時刻は朝の5時30。確かにルーシエルからしたら早いかもしれないけど、こっちも急いでる。

速い行動に越したことは無い。

そろそろ城の城下町の鎮静化のあと、俺達にさし向ける兵の準備を始めていてもおかしくない。

### 11 情報屋ライナ

ルーシエルはまだ眠いみたいで朝ごはんをあんまり食べようとしない。それを無理矢理食わせて、牛乳を飲ませ、担ぎあげて俺は親父とお袋と一緒に家を出た。

村人総出で見送りしてくれるらしい、すごい人数になってるけど気にしない。

村の出入り口ではギャバが馬を用意してくれていて、更に馬には既に食糧等が積まれていた。勝手にやってくれたみたいだ。

馬にルーシエルを乗せて俺も馬に乗った。ルーシエルは軽いみたいだし、馬も平気の様だ。

俺は出て行く前に村の皆振り返った。

「ありがとう！本当にありがとう！今度はミツシエルとクラウドシエルも連れて来るよ」

「ありがとう」

ルーシエルがそう言っただけで皆が涙を流す。王子様ってのは偉大だ。

馬の腹を蹴って走り出す。

馬は真っ直ぐ南の方角に進みだした。

親父とお袋が走って俺を追いかけて来る。振り返ったら泣きそうだったから振り返れなかった。

でも俺は絶対に戻ってくるから、そう自分に言い聞かせて馬を走らせた。

---

「ダフネ、お尻痛い」

「まだ我慢」

馬を走らせて3時間、揺れる馬が嫌になったのがルーシエルがぐずりだした。

でもあまり休んでいる時間はない。

シン爺ちゃんがシースクエアの船を持ってる人に書状を書いてくれたけど、シースクエアは港町な事もあり、結構な大きさを誇る街だ。その中でお目当ての人をすぐに見つけれるとは限らないし、船の用意だっですぐに出来る訳じゃないだろう。

シースクエアで2日かかると考えて、シースクエアまでは1週間で向かう所、最低5日間で向かわなきゃいけない。

休む時間が必要以上に取れはしない。

ルーシエルがいくらぐずっても休みは取れない。このまま目的の村までは止まらない。

馬の休憩を考えてもう少ししたら10分程度休憩をとるかもしれないけど。



ルーシエルは断られた事に気を悪くしたけど、時間がない事を説明すれば大人しくなった。

近くにルプス川が見えてきた。この川はサラデイスと次の村マウデイスの中間地点だ。今日中にマウデイスを超えて夜までにルーネスまでたどり着きたい。

とりあえずまずはルプス川で馬とルーシエルを少し休ませるか。

「ルーシエル、何してるんだ？」

「んーとね、宝石見てる」

ルプス川に辿り着き、馬を休ませて水を飲ませている俺の横でルーシエルは国宝石をジッと見ていた。

国宝石の文字をルーシエルは読めるって言ってた。

じゃあもうルーシエルは国宝石の文章が分かってるんだろうか。

「ルーシエル、それなに書いてるの？」

「……ダフネは誰にも言わないよね。ダフネにならないよ」

あ、そっか。国宝石は国家機密事項か。その内容も当然機密事項だ。でも俺なら教えてくれるって言うルーシエルは完全に俺の事を信用してるんだろう。

ルーシエルは解読に少し時間がかかるのか、つつかえながら読み上げた。

「んーとね、森の中、魔法使い、暁の大地、青の宝石とあわせたら完全になるって書いてる」

「森の中？魔法使い……」

この世界で魔法使いで有名な種族、それを言ったらエデンの部族集団しかない。

あそこはフライアンの領土内に存在する独立国家だ。

そして青の宝石とあわせたら完全になる。つまり青の国宝石が必要って事だ。

青の国宝石をどの国が持つてるかは分からないけど、でもこの緑色の国宝石に書かれてる情報を頼りにすると行く先は決まった。

「ルーシエル、そろそろ行こう」

「ん？ うん」

まずはシースクエアからビアナに出て、そこから先はフライアンに向かおう。

あそこはクラウシエルもビアナを介してでしか交流は無いけど、友好条約を結ぶに値する国だって言ってたし。

流石に取って食われる事は無いだろう。

今は少しでもバルディナの非道を世界各国に伝えなければいけない。俺とルーシエルだけじゃバルディナに勝てない。他の国の力が必要だ。

残りの3カ国、パルチナと東天とフライアン、その3つから考えたら力を貸してくれそうな国はフライアンしかない。

東天は鎖国中だからまず入れてもらえないだろうし、パルチナは同じ軍事国家でアルトラントを狙っていた。

バルディナを追い出す事に協力はしてくれるかもしれないけど、アルトラント自体を救う気はないだろう。

可能性があるとしたらフライアンしかない。早く行かなきゃいけない。

俺ははやる気持ちを抑えて馬を飛ばし続けた。

マウデイスの村で少し休憩して、また馬を飛ばしてルーネスまで何とかたどり着いた。

今の時刻は夜の10時、今日はここに宿をとって休憩か。

バルディナの兵も夜中まで馬を飛ばす事は多分ないだろう、馬の疲労も考えて。

朝の6時から夜の10時まで走りっぱなしだった馬に礼を言って馬小屋をレンタルし、同じく疲れ果てているルーシエルを抱えて宿屋を目指した。

途中、ルーシエルがばれるといけなかったので、城下町を出る時に女性にもらったフード付きの服をルーシエルに着せてフードを被せた。ルーシエルは国宝石を小さなカバンに入れてチャックを閉めた。

「ダフネ、お尻痛い」

「俺も痛い。ベッド柔らかいといいな」

「うん、いいな」

ルーシエルと少し会話をしながら宿屋の中に入る。

ここにも情報はまだ広まってないみたいで、村は穏やかな状態だ。

俺とルーシエルが来た事を広める訳にもいかないので、村人には城が落ちたことは言えない。それが少し歯がゆかった。

直にこの村にも支配の手は届くだろう。その時、この人達はどんな  
るんだろうか、考えたくもない。

宿をとって飯を食いに行く為に再び街を出歩く。

1つの食堂を見つけ、俺とルーシエルが中に入ったら、中は騒がしかった。盛り上がってるんじゃない、喧嘩をしてるんだ。

若い色グロの女性と中年の小太りの男が大声で喧嘩してる。

関わりたくないなあと感じた俺は少し離れた席に座り、店員にオーダーを頼んだ。

ルーシエルはここでも聞いた事の無い食べ物に目を白黒させてたけど、店員のおすすみを教えてもらい、それを頼んだ。

その間にも喧嘩は収まらない。2人の怒声がこちらまではっきり聞

こえて来る。

その時、若い女性が声を荒げた。

「嘘なんか言っていない！アルトラントは落ちたんだ！あたしのドリ  
ンが言ってるんだから嘘な訳ないだろう！？」

「ドリンってお前の肩に乗ってる鳥の事かぁ！？ははは！冗談き  
いな！ふざけた事言ってっとタダじゃおかねえぞ！」

アルトラントが落ちた！？なんでその事を知ってるんだ。

まだ他の奴らには情報も伝わってないのに……まさかこいつはバル  
ディナの使いか？

でもそれにしては様子がおかしい。

女性は慌てて他の村人に国外に逃げる事を促している。バルディナ  
の使者ならそんなことは言わないだろう。

ルーシエルをその場に置いて、俺は喧嘩の中心に向かった。

「その話、詳しく聞かせてくれないか？」

「なんだおめえは！？」

「お！あたしの話を聞く気になったのかい？いいよ何でも話すよ！」

席に誘導すれば疑うことなく女性はついてきた。

そしてルーシエルの隣に腰かける。

「可愛い坊やだね。あんたの弟かい？」

「まあそんなとこ。で、話を聞かせてくれ」

「そのまんまさ、アルトラントがバルディナに攻め落とされた。友  
好条約切れてすぐに攻撃なんてバルディナも中々えげつない事する  
よね」

「事実だったとしても何であんたが知ってるんだ？」

「ああ、あたし情報屋なんだ。この相棒のドリンを使って情報集め

て、それを売って生計立ててんのさ。まああたし単体だと探偵業がメインだけどね」

情報屋か……でもこの短時間でこの情報を手に入れるなんて、かなり腕は優れてるみたいだけど。

女性の肩に乗っている体長が30センチ位の鳥はルーシエルを眺めている。

随分鮮やかな色をしてるけど、こんな鳥を俺は見た事がない。

ルーシエルがジッと鳥を眺めると、鳥はまさか言葉を話したのだ。

「才前、誰ダ？」

「わわわっ！喋った！！」

驚いたルーシエルが俺の隣に避難してくる。

でも俺も驚くしかない。話す鳥なんて初めて見たから。これはなんかの魔法なのか！？

女性は慌てたルーシエルを見て爆笑している。

「あはは！ごめんごめん。こいつはねえオウムって言うのさ。喋れる鳥なのさ、特別な調教もしてるしね。見た事ないかい？」

「ないよ！お喋りする鳥初めてだよ！」

「うーん……まあしゃあないね。メジャーじゃないしね。うちの国では結構オウム持つてる奴多いけど」

こいつどこの国の人間なんだ？

「あんたどこの人間なんだ？」

「おいおいお兄さん、あたしの肌の色と髪の色を見ても分からないのかい？あたしはライナ。アルトランドの南側、独立国家オーシャンの出身だよ」

確かに言われてみれば、この小麦色の肌と紫色の髪はオーシャン人の特徴だ。暑い日が1年のほとんどを占めるオーシャンでは肌が黒い人間が多いって聞くから。

でもオーシャンは鎖国とまではいかないが排他的な国で貿易1つしようにしないし国から出もしないらしい。そんなオーシャン人が目の前にいてもオーシャン人とはわからないだろう。

じゃあこいつはバルディナの人間じゃないのか。

少しだけ安心した俺にライナは手を差し出してくる。

「ん？」

「ん？ じゃないさ。情報渡したんだから報酬ちょうだいよ。こっちも生活かかってるんだ」

「わりいな、残念だけどその情報はもうとっくに知ってたよ」

「嘘つくなよ。この村の奴らは皆知らないんだから」

「俺達はこの村の人間じゃないからな。早く食って宿に行こう」

「うん」

ルーシエルもパクパク飯を食いだして、俺も無言で飯をかきこんだ。ライナは俺達2人を無表情で眺めていた。

「ねえあんた達さあ」

「ついてくんなくて！」

なぜかライナは俺達の後をついて来る。

飯を食い終わったんだ。風呂に入って寝なきゃいけないのに。もう金が欲しいなら払ってやるかな。親父がくれた金をもったいないけど……

宿まで付いてこられたら困るから、と言えばライナも宿をとつてほしい。どうやら1人で世界を回ってるみたいだ。良くやるよこの女は。

宿屋まで付いてこられて部屋には居れば逃げられると思った俺にライナはニヤリと笑って笑みを浮かべた。

「ねえあんたさあ、もしかしてルーシエル王子とお世話係じゃないのかい？」

言い当てられて息を飲んだ。

俺のこの反応が不味かった。ライナはケタケタ笑って「やっぱりそうだ」と返した。

「心配しなくても取って食いやしないさ。でも少し話を聞かせてほしいんだよ」

「その情報をバルディナに売る気か？」

「そんな気、毛頭ないって。あたしだって仕事に誇りはある。あんな奴らに売る情報なんかないさ」

その言葉を信用できるかは分からないけど、口止めの為にライナを殺さなければいけないかもしれない。

とりあえず俺はライナを部屋に入れる事にした。

ライナはふてぶてしくベッドに無断で腰かけて、大の字に寝転んだ。ルーシエルがもう1つのベッドに腰掛け、俺は備え付けてあった椅子に腰かけた。

「で、何でお前は知ってるんだ」

「だってあたし情報屋だもの。知ってるさ、ドリンにアルトラントの事件を調査させてたからね。ドリンからの情報で知ったのさ」

「あー！お前かー！」

ルーシエルがドリンを捕まえようと手を伸ばしたけど、ドリンはルーシエルの手から逃れ、遊ぶように飛び回った。

「あはは！ドリンは賢いから簡単には捕まえられないよ。でさ、バルディナは城下町の人間に報告したよ。ルーシエル王子と世話係を逃がしたって。匿ってる奴がいたらすぐに出さないと処刑するってね」

「マジかよ……」

「あたしからしてみれば、国王と后、第1皇女と第1王子を捕まえたんだ。第2王子にそんな躍起になる必要はないと思うんだけどね、なんでかなって思ったらバルディナは言ったよ。ルーシエル王子が国宝石を盗んで逃げたって」

「盗んだだって！？」

嘘を言うな！お前達が侵略してきたんじゃないか！それを盗んだなんてよく言えるもんだ！！

「バルディナは過去に友好条約の継続を申し入れに向かわせた使者を濡れ衣で殺されたって事を公開した。そしてアルトランドが国宝石の力で何かを企んでるって」

「そんなの嘘の情報に決まってるだろ！バルディナが国宝石を盗もうとしたから処刑されたんだ！あいつらは嘘をでっちあげてる！」

「やっぱそう思ったんだよねえ」

ライナがごろんと横になる。

そう思ったって事は、こいつは今までの話を余り信じてなかったのか？

「情報屋やってつとさあ、周りの今までの経歴に敏感になる訳よ。」



アルトラントが情報操作するとは思えないから可笑しいとは思ってたんだよ。そうか、バルディナが世界侵略を始めたか……で、あんたはどうするんだい王子様達。逃亡生活を続けるのかい？」

「祖国奪還を目指すんだ。決まってるだろ」

「2人でかい？」

「そんな訳ねえだろ。でも今は国外に出なきゃいけない。ビアナに向かうつもりだ」

俺の言葉にライナは渋い顔をした。

そんなに可笑しい事を言っただろうか。俺の言ってる事は定石じゃないのか？

「ビアナは止めた方がいい。バルディナの海軍がアルトラントとビアナの領海付近を監視してる」

「なっ……嘘だろ!？」

「逃がしたあんた達を捕えるには国外に出る手段をまず潰すのが定石だろう。そしてジワジワ追い詰めていけばいいんだ」

「じゃあどうすれば……」

「あんた達、オーシャンにおいで。そこからビアナに向かえばいいだろう。シースクエアから船は出てる。まだオーシャンには監視船は来てないはずだ。シースクエアにもまだバルディナの兵は届いてないだろう」

「なんでオーシャンは監視船がないんだよ」

「あたしらは海で生まれて海で死ぬ。領海付近を荒らしまわる奴はバルディナでも何でも容赦しないよ。オーシャンは戦闘民族だ。バルディナも下手な手は打たない」

こいつの言ってる事が本当ならビアナは確かに危険だ。でもこいつが何かを企んでるとしたら……信じてもいいのか？

「その話信じてもいいんだな」

「ああ、嘘は言っていない。でも報酬に……国宝石を見てみたいのさ」  
「そんなの出来る訳ないだろう！」

「国宝石に伝わる伝承がうちの国にある。国宝石を実際に見たら分かるかなあって思ってたさ」

ライナはケラケラ笑ってるけど信用していいのか分からない。

ルーシエルも俺の後ろに隠れてしまった。

でもライナも引く気はなさそうだ。むしろ俺達の存在がばれてる時点で俺達には不利だ。下手に逆恨みされて俺達がここに来た事を漏らされたくない。

「ルーシエル、見せてやれ」

「いいのダフネ!？」

「どうせ読解はできない。ライナが持っても意味ないさ」

「ダフネがそう言うなら……」

ルーシエルがカバンから出した国宝石をライナに渡す。

ライナは真剣な顔で国宝石をマジマジ見ていた。

「何か分かったのか？」

「うん、伝承どおりだ。国宝石に緑の宝石が存在したって事は伝承と同じ」

「伝承？」

「国宝石は5色の色がある。全てを癒す緑、母なる恵みを授ける青、猛き心を内側に隠す赤、全ての色を覆い尽くす黒、そして相手を陥れる紫。アルトランドが緑なのも言い伝え通りだ」

「まだあるのか？」

「全てを癒す力をもった女傑リジアはアルトランドを、その優しさでマザーの異名を持っていたルーンはファライアン、猛き心をもつ

たリーダー、ダレンが東天、その破壊力と慈悲なき攻撃で全てをねじ伏せたグランがバルディナ、そして情報操作に長け、相手を陥れたルイスがパルチナ。この5人は数百年前の戦争の勇者さ」

その話は聞いた事がある。クラウシエルが言ってたやつだな。

ん、ちよっと待てよ。その話をつなげていくと他の国が何色の国宝石をもってるか分かるんじゃないのか!?

気付いた俺にライナはにやりと笑った。

「感づいたね。つまりこの伝承どおりだとバルディナは黒、パルチナが紫、東天が赤、そしてフライアンに青の国宝石があるのさ。そして国宝石に英雄の意志が宿り、国宝石自体も不思議な魔力を持つて聞く。だから国宝石が持ち主を選ぶし、国宝石を真に扱えるのは英雄の意志を継いだ者だけなのさ」

全部クラウシエルに聞いた通りだ。

そしてルーシエルが言ってた青の宝石とあわせたら完全になる。

エデンに行く予定だったけど、青の国宝石をもつフライアンに行かなきゃな。丁度よかった。

でも国宝石に魔力が宿るって……どう言う事だ? 首をかしげてる俺にライナは国宝石を返してきた。

「詳しい話はオーシャンで話そう。爺ちゃんの方が伝承には詳しい」

「あ、ああ。ってお前も同行するのか」

「当たり前だろ。あたしがいなきゃ顔パスできないぞ」

「でもどうして俺達に……」

「……あたしはバルディナを危険視してる。あいつは世界全部を破壊するつもりだ。言ってみれば、あたしはあんた達に賭けてるのさ。あんた達が今の世界を変えてくれるってね。でも最後に教えてくれないかい? 奴らがルーシエル王子をしつこく狙うのは国宝石を持つ

て逃げてるからだけじゃないだろう？」

やっぱり気づいてたのか。

でもライナは恐らく俺達を本当に助けてくれる。ライナになら言っても大丈夫なのかもしれない。

それに伝承の事も教えてもらわなければ。

「ルーシエルは国宝石に書かれた文字を読解できる。だから狙われてるんだ」

「なんだって！？あのゲーティアが隠されてる場所を記してるのか！？だからバルディナが狙うのかい……しかしなんだって読めるんだ？」

「ルーシエルが母親に教えてもらったらいい。でも今の伝承を聞いたら……」

「ああ、その母親は英雄リジアの血を受け継いでるのかもしれないね」

「でも他の国にもいるはずじゃないのか？それぞれ英雄の子孫が」

「あたしらの伝承ではダレンとリジアは恋仲だって聞いた。国宝石もダレンが反対するルイスとグランを押し通して決めたんだ。ルーシンは関わろうとしなかったらしいし、もしかしたら2人しか知らないのかもしれないね」

だからルーシエルが……

不安そうな顔で国宝石を握りしめるルーシエル。

でもそんなルーシエルを見かねてなのか知らないがドリンがルーシエルの頭にとまった。

「暗い顔スナ！ゲス！」

「げす？」

「あはは！ドリンなりの励ましたよ。とにかくもう寝た方がいいね。」

シースクエアまでの道のりは長いよ」

「そうするよ。ありがとうライナ」

「あたしこそ、これからよろしく王子様、お世話係さん」

「俺はダフネだ」

「そうかいダフネ」

とりあえず一刻も早くシースクエアに辿り着かなきゃな。  
明日も早いぞ。

## 12 港町シースクエア

次の日もちゃんと5時30起床。ルーシエルを叩き起こして飲み物と軽い朝食を食べらせてライナと合流して馬を取りに行く。  
でもライナは馬を持って無かったようだ。

### 12 港町シースクエア

「馬持っていないのか!？」

「基本あたしは歩いて世界を旅してるから馬とかいらないのさ」

いや、今はそんな事言ってる場合じゃねえだろ。

歩いて行ったら捕まるに決まってる。そんな呑気な事言ってる場合じゃない。仕方ないからルーシエルとライナを乗せて俺も乗った。

流石に3人乗ると馬の疲労もでくなる。スピードも出なくなるし……でもライナがいなきゃオーシャンには行けない。仕方ないな……頑張ってくれよ。

馬の腹を蹴って再び草原を駆け抜ける。

「この馬中々早いねえ!」

「遅くなったよ! あんたが重いからな!」

「ははは! まあ否定はしないでやるよ。乗せてもらってる身だしね」

ライナは豪快に笑って、食いかけの朝食に手を付けた。

俺に掴まらなくて飯が食えるって辺り、こいつ実際はかなり馬慣れしてるな。どう考えてもただの情報屋には思えない。

女1人で世界を旅してるのもおかしいし。これは男尊女卑か?

馬は真っ直ぐ駆け抜ける。とりあえずあと4〜5日以内にシースクエアにつかないとな……

その後も俺達は少し休憩して馬を走らせて、村に辿り着かなかったら野宿をして過ごした。

そして予定より1日遅れてシースクエアが見えてきた。

「ダフネ！海が見えるよ！」

「あれがシースクエアだ。アルトラント1の港町だよ」

「さあ、休んでる時間は無いね。とっとと船を見つけてオーシャンに向かおう」

「それは大丈夫だ。俺の知り合いの友達が船を持ってて書状を書いてくれた。その人を見つければ早い」

「そうかい、こんな時こそあたしの出番だね。ドリンに探させよう。ドリンは会話が理解できるから、そいつの名前が聞こえればあたし達を案内してくれるよ」

助かるな。俺達は俺達で探すけど、人手は多い方がいい。

この馬もよく頑張ったな。ギャバの馬は本当に利口な馬だった。

シースクエアについた俺はギャバの馬の手綱を解放した。流石に船に馬は乗せられない。ギャバの馬とはここでさよならだ。

ルーシエルに馬が顔を寄せ、ルーシエルも抱きしめる。

俺はフワフワのたてがみを撫でた。

「有難うな。ここでお別れだ」

馬の背中を押すと、すぐに駆け抜けて行った。ギャバの所に戻るんだろうか。

シースクエアにバルディナの兵の姿は見当たらない。どうやら先回

りできたようだ。

俺はシン爺ちゃんが書いてくれた書状を広げて中身を読み上げる。その中には相棒ビッチャムと書かれていた。

「ライナ、ドリンにビッチャムを探させてくれ」

「あいよ。分かったかいドリン、ビッチャムだ。行ってきたな！」

ドリンはそのまま羽ばたいて街の中に入っていく。俺達もビッチャムさんを探すべく、街の中に入った。

シースクエアは港町なだけに物流の中心地だ。市場が広がり、かなり栄えている。

ルーシエルもその光景に目を輝かせていたけど、まだのんびりする余裕はない。俺とライナはビッチャムさんについて聞いて回った。でも中々見つからない。溜め息をついた俺をライナはベンチに座らせた。

「ライナ？」

「そこで待つときな。ここで情報屋のあたしの腕の見せ所だ。15分待つてくれ。市場で買い物しててくれてもいいよ」

ライナはそう言い残し人混みの中に消えてしまった。

確かに情報屋だったら情報を集めるプロだ。ライナだったら探しあててくれるかもしれない。

でも一緒に行かないって事は俺がかなり足手まといだったって事だ。その現実にしほこみながらも、ルーシエルが見たいと言うので、俺はルーシエルの手を引いて市場に向かった。

15分後にベンチに戻った俺達がライナを待っていると、ドリンを肩に乗せたライナが歩いてきた。

ライナは少し深刻そうな表情をしている。見つからなかったのか？



「ライナ？」

「悪いなダフネ、ビッチャムは去年亡くなってるんだそうだ」

「はっ！？嘘だろ！？」

「本当だ。でも心配するな、ビッチャムの息子を見つけた。そいつも物資を運ぶ仕事をしてるから船を持ってる。そいつの家も調べたから行こう。書状を出したら受け入れてくれるかもしれない」

まだ望みは捨てるな。そう言ったライナに俺とルーシエルは頷いた。俺はルーシエルに再びフードを被らせて抱きかかえ、ライナの後について行った。

「ここにビッチャムの息子が？」

「ああ、いるはずだ」

着いた先は普通の民家だった。

ライナが家のドアの前にある呼び鈴を鳴らすと、中から15歳ぐらいの少女が出てきた。

少女は見た事の無い俺達に少しだけ警戒した表情を向けた。

「何か用か？」

「ここにジョーンがいると聞いてきたんだけど、あんた娘かい？」

「そうだけど、親父に何の用だ」

「少し頼みたい事がある。中に入れてくれないか？」

「親父ー！客だよー！」

女の子があがれと言ってきたので、俺達は家の中に入った。

そのまま部屋に案内されて椅子に腰かけるように言われた。少女はそこで待っててくれと言って、父親を呼びに向かった。

暫くすると、ガタイのいいおっさんが腹を掻きながら俺達の前に登

場した。まさかこの人が？

「俺に用があるってーのはおめえらか。何の用だ」

「ダフネ」

「あ、おお。船を出してほしくてシン爺ちゃんにビッチャムさんに協力してもらうように言われて……これ書状なんですけど」

おっさんに書状を渡すと、おっさんは目を見開いた。

「おーシンジジイじゃねえか！あいつまだ生きてたんか！でもおめえ倅じゃねえよな。倅は確か俺と同じ位だからな」

「あ、はい。俺は同じ村の出身ってだけです……書かれてる通り、船を出してもらいたいんです」

「船ねえ……ビアナ行きの船なら就航便が出てるぜ。料金も安いし、それじゃ駄目なのかい？」

あ、そうか。あの書状にはビアナ行きて書いてあったな。

首を横に振った俺におっさんは怪訝そうな顔をした。

「ま、今はビアナの国境線でバルディナが調査やってっからなあ、お陰で俺達も商売あがったりだよ」

「知ってるのですか？アルトラントの事を……」

「ああ、航海仲間だけな。バルディナが第2王子と世話係を探してるって話だ。確かに国外逃亡図るならシースクエアが一番の逃げ道だからな。俺達も氣にくわねえよ。王子に手え出したらただじゃおかねえ」

意気込んでくれてるみたいだけど、騒ぎは大きくしたくない。身分は隠すに越したことは無いはずだ。

俺はそうですか、とだけ呟いて、要件を告げた。

「その書状にはビアナと書かれています、俺達をオーシャンに送っていただけませんか？」

「オーシャンか！？」

驚いたおっさんに今度は俺達も驚いた。

オーシャンが何でそんなに驚く要素があるんだろう。おっさんの後ろに待機していた女の子も複雑そうな顔をしている。

「あんたオーシャンは中々難しいな」

「な、なんでですか？」

「オーシャンはちいっと領海付近に近づくと威嚇してやがる。あの独立国家は東天よりもタチがわりい鎖国国家だからよ。貿易一丁でもえれえ肝が冷えんだわ」

「そこは大丈夫、あたしがいれば向こうは何も言ってこないだろう」

「お前はオーシャンの人間か？」

「ああそうだ。オーシャン民族は仲間には寛容だ。あたしがいるだけで顔パスを使える」

「しっかしなあ……俺にメリットねえしなあ」

「シン爺ちゃんの頼みだ！聞いてくれたっていいだろう！」

「あーまあそうだな。シンジジイの頼みは断れねえ。ガキの頃世話になったからな。よっし送ってやる！早速出向だ！」

おっさんが立ち上がって船を用意するから1時間待ってくれと言って家を出て行った。

おっさんの娘が1時間後に港の船乗り場に来てくれたらいいって言ってたから、それまで俺達は食料を買い込んだりする事に決めた。やっとこれで国外逃亡が出来る。

このあとオーシャンからビアナを經由してフライアンに向かおう。フライアンに向かえばきつと何とかなる。

ルーシエルもやっと光が見えてきたのが顔を輝かせた。

ここまで疲れ果てたよ。やっと前に進める。

ライナに準備をしに行こうと言われて、俺とルーシエルは再び市場に足を向けた。

「なあダフネ、あんたビアナに向かった後どこに向かうんだい？」

不意にライナに問いかけられて後ろを振り向く。

ライナの表情からは、何となく答えが分かってるんだろうけど、確認の為に俺に聞いたんだろうな。

「フアライアンの向かう事にするよ。5大国家の力を借りなきゃバルディナは止められねえからな」

「全面戦争する気かい？」

「アルトラントを救うにはそれしかねえ。バルディナは話なんか気かねえよ」

ライナの表情は複雑そうだ。そりゃアルトラント出身の俺がバルディナと戦争なんて夢物語だ。

あっちは軍事国家でこっちは敗戦国の生き残り。どう考えたって俺に勝ち目はないんだから。でも行動を起こさなければ何も始まらない。

援助してくれる国が絶対に必要だ。

「まあ東天は鎖国中、パルチナは南下目的でアルトラントに侵略した事があったね。その時、条約のおかげでバルディナが助けてくれたんだっけか……」

「ああ、ほとんどバルディナ対パルチナの戦争だったよ。バルディナが不利だったらしいけど、最終的には逆転勝ちしたってのも聞いた

た。でもそんなの30年も前の話だ。今のバルディナは昔とは違う」  
「5大国家の中で最も協力的なのがフライアンなのも理解できる。だが気をつけな、フライアンは事実上5大国家の中で最も危うい国と言っても過言じゃない」

ライナの言葉が理解できなかった。

フライアンは今は福祉に力を入れてるけど、少し前までは軍事国家だった。バルディナとパルチナと並ぶほどの。今こそ毎年の軍費は少なくなっているが、それでも十分バルディナに匹敵する軍隊を持ってる。

それなのに何で危うい国なんだ。

「……アルトラントではあまり知られてないのかもしれないね。まあそれも無理はない。フライアンは数年前にフライアン崩壊のカウントダウンと言われるほどのクーデターがあったんだよ」

「は……？」

「犠牲者は市民と騎士団、議員を合わせて数万人もの規模に膨れ上がり、特に騎士団の被害はでかかったそうだ。第1騎士団の団長、つまりフライアンの軍団長も死亡したし、前女王も首を吊って死んだはずだ。フライアンが女王国ってのはあんたも知ってるだろ？ 女王が自殺なんて……よほどの事が無い限りしないよ」

クーデター……そんなのがあったって言うのか？

初めて知った事実に驚きが隠せない。なぜ情報が伝わってこなかった？ なぜライナは知ってるんだ？

「一時期、フライアンは東天同様、数ヶ月間の鎖国状態が続いた。その期間にクーデターが起こってたって事だ。今の福祉国家の看板はね、クーデターの傷跡を取り除くためにやってるのさ」

「そんな……」

「でもここ最近、議会と騎士団の不仲が囁かれてる。国を牛耳っている騎士団と議会の反発は国民にも影響を出すだろうし、何よりも女王が数年もの間、全く表に顔を出さない。死亡説まで流れてるからね」

そう言えば女王は見た事が無い。いつも国同士の会議でもフアライアンの代表は最高議員のデューク議員か、第1騎士団団長のジェレミーが代表出席してる。

でもその議会と騎士団の不仲……そんな状態でバルディナに対抗できるのか？

でもパルチナは信用できないし、東天は難しすぎる。結局フアライアンに頼るしか道はないのだ。

「気をつけときなダフネ、フアライアンは確かにあんたに協力してくれるかもしれない。でもそれは向こうにとっても何かしらの利益があるからだ。下手したらルーシエル王子を英雄に祭り上げてバルディナに宣戦布告し国を一体化させるかもしれない」

「まだ子供だぞ!？」

「子供だからじゃないか。子供だからこそ自分達の好きに操れる。居候の身分じゃ何も文句も言えないさ。とは言え、残りの2カ国はもっと信用できない。今はフアライアンしか頼る相手はいない」

どの国も完全に信用したらいけないんだ。自国の利益が無ければ戦争をしてくれる国なんかが現れるはずが無いから。

でもそれでも頼らなければいけない。皆を助けなきゃいけないから。ミッシェルとクラウシエル、それにセラ達も……特にミッシェルは姫って言う肩書を持つてる。早く助けなきゃ結婚という名の人質にされ、バルディナに連れて行かれるかもしれない。

立ち止まってなんかいられない。わずかな可能性があったら賭けるしかない。最初から選択肢なんてわずかしがなく、選ぶほどの数な

んてないんだから。

### 13 船に揺られて

1時間後、船着き場に向かった俺におっさんと娘が待っていて案内してくれた。

その船に乗り込んで、おっさんと娘の一緒に乗り込む。

「さあてこっからオーシャンの国境付近までは船ぶっ飛ばし続けて2日はかかる。船酔いには気をつけろよ」

#### 13 船に揺られて

「俺船初めて」

ルーシエルは船に乗った事がないらしい。

忙しなく視線を動かすルーシエルにライナが笑って声をかけた。

「あんまり首動かなさい方がいいよ。慣れてない奴は船酔いしちゃうからね。横になっときな」

「船酔い？」

「まあ簡単に言えば気持ち悪くなって吐き氣が来るんだよ。でも王子様は馬にあんだけ揺られてても平気だったから多分大丈夫だろうねえ」

軽い会話を交わしていると、おっさんが出るぞーと合図して船が進みだした。

ルーシエルは初めて乗った船と動きだした事に興奮して甲板に身を乗り出して海を眺めだした。



「おい危ないぞ」

「すごい！海の上を走ってるよ！」

「面白い表現するなお前」

おっさんの娘、確かイオリだっけ？がルーシエルの頭をポンポン叩いて笑っている。

このまま行けば大丈夫だ。ライナも大丈夫って言ってたし、後はオーシャンに入れさえすれば、そこからビアナを経由してフアライアンに迎える。

そこで青の国宝石を探そう。そして魔術国家も。

正直言って、バルディナに解読される前に国宝石の読解をするべきだと思う。

バルディナにだけはゲーティアを渡してはいけない、その妨害をしなきゃいけない。だから必然的に俺たちがゲーティアを探さなければ……

いつの間にか暗い顔をしている俺の頭をライナがこずいてきた。

「暗い顔しなさんな。辛気臭いねえ〜なんだいお姉さんに話してごらん？」

「お姉さんって同い年くらいじゃねえのかよ！」

「えーあたしは22歳だよ。あんたあたしより下だろう？」

「……俺は20歳だ」

ライナはほらな！と言って笑っている。

ていうか年上だったんだなあライナの奴……どうりで兄貴風吹かせると思った。

「なあライナ、考えてんだけど……もし万が一ゲーティアを奪われたらどうなるんだろ」

「それはそんな時になってみなきや分かんないね。最悪の事態ばっか恐れたって何も変わりゃしないよ。最良の未来を見据えて突っ走るしかないんだよ」

「……」

「怖い事考えたら足が震える。でも震えてたって始まんないだろう？進まなきゃいけないんだ、特にあんたは。王子様が狙われてる以上、王子様はあんたしか頼る相手がいないんだ。そのあんたが揺らいでちゃ、王子様も崩れちゃうよ。凄いと思わないかい？家族と引き離された王子様だよ。世間すら知らない幼い子供が、あんなに懸命に生きてる」

そうだ、ルーシエルは頑張ってる。家族を助けようと必死になっている。

そんなルーシエルを支えるのが御世話係の俺じゃないか。俺がこんな事じゃルーシエルは守れない。

世界を旅してきたライナはやっぱり世界情勢に詳しいのもあるし、冷静だ。冷静に第3者からいろんな角度で物事を考える事が出来る。俺もそうならなきゃ……

ライナは小さくなっていくシースクエアの港を見ながら呟いた。

「そろそろバルディナの兵がシースクエアについてもいい頃だろうな」

「……俺達はギリギリだったのかな」

「ああ、でも大丈夫だ。身分と素顔を隠してたから、兵たちが聞きまわっても中々情報は出ないさ。まあその前にシースクエアは中々でかい街だ。アルトラントが落ちたって情報が全土に広がるだけで最初は暴動が起こるさ。まだ知ってる奴らは少ないみたいだしね」

「あいつらは一般市民も殺したんだ……そんな最低な奴を騎士なんて認めねえ」

「おいおい、そりやどう言う話だい」

声が聞こえて顔を上げたら、そこにはおっさんが立っていた。  
おっさんは複雑そうな表情で俺達の前の椅子に腰かけた。話を聞か  
れてしまった……

「船はどうしてるんだ？」

「ああ？娘のイオリに任せてある。それより気になるじゃねえか、  
続き話せよ。下手したら俺はやばい事に首突っ込んでる事になる」

有無を言わせない言い方に息を飲んだ俺にライナは安心させる様な  
声を出した。

「ダフネ、言った方がいいね。どっちにしろおっさんはシースクエ  
アに戻ったらバルディナの兵に詰問される可能性が高い。シースク  
エアで王子たちが見つからなかったら、船を持ってる奴が逃がした  
って可能性をバルディナは真っ先に疑うからね。その時に下手に口  
滑らされるよりかはマシじゃないか」

「でも……」

「おっさんおっさん言うんじゃねえ。俺はジョーンだ」

「ジョーンさん……あの子供は第2王子ルーシエル様です」

「第2、王子だとお！？あのバルディナが追ってるって奴か！？」

「はい、俺達は国王の命令を受けて国外逃亡を図ってるんです。祖  
国奪還を目指して今は逃げてる途中です」

信じられない顔をしてジョーンさんは考え込んでしまった。

その時ルーシエルが顔をのぞかせて、こっちを見ている。おいでと  
言えば膝に乗ってきた。

「ルーシエル、指輪を見せてくれ」

「指輪？ いいよ」

ルーシエルがカバンから出した指輪をジョーンさんに渡す。  
これを見れば分かるだろう、ルーシエルが本物だって言う事を。

「シンボルの女神像の刻印の入った指輪……まさか本物かい。光栄だ、王子様の国外逃亡に肩貸せるなんてねえ」

ジョーンさんは豪快に笑い指輪を返してきた。

それを大事にルーシエルがカバンに入れたのを確認して、ジョーンさんに向き直る。

ジョーンさんは何かを考えて顔を上げた。

「おめえら最終的にはビアナに行くつつつてたな。その後はどうすんだ」

「すみません。それは言えません」

「ま、そうだろうな。迂闊に口滑らせたら大変だもんな。細けえ事は聞かねえよ、聞かなくなつて何となく分かるからよ。逃げるつつたら、あそこしかねえ。だが無理だけはすんなよ」

「はい、有難うございます」

ジョーンさんはニカツと笑って、室内を出て行った。

話の分からないルーシエルは首をかしげてたけど、大丈夫だよ。とだけ告げれば安心した様にふにゃつと笑った。

でも眠くなってきたのかあくびを1つ。

この部屋には寝る場所がちゃんと用意されている。ルーシエルを抱えてベッドに横にすれば、ルーシエルはすぐにスヤスヤ眠りについた。

「あんたも寝たら？ 疲れてるんじゃないのかい？」

ライナにそう言われたので俺も眠る事にした。

ライナはピンピンしてる。どうやら不規則な生活には1人旅をしてる手前、慣れてるそうだ。本当にライナはすごい奴だな。

城の女にこんな個性的な奴いないぞ。いや、城の奴らも個性的だったけど……

セラはどうなったのかな。城は落とされちゃったけど生きてるよな。セラだけじゃない、ジェイクリーナスもヤコブリーナスもイワコフもミカエリスもマリアもミリアもコラッドもサヤカも皆生きてるよな。

クラウシエルは大丈夫だったのかな。俺達を逃がす為に命を張ってくれた。

生意気な子どもだと最初は思ってたけど、あいつは本当に王子としての使命感に駆られていた。俺達を逃がした時のあいつの誇らしげな表情が頭から離れない。本当にあいつは勇敢な奴だった。

ミッシェルも生きてるよな。殺されたりしてないよな。

流石にわがままが通用する状況じゃないからストレス溜まってないかな？ちゃんとお菓子出してもらえてるかな。

3人にこき使われる毎日を送っていたせいか、完全に身体は御世話係体質だ。

自分の目の前からいなくなってしまった王子と姫の事を考えると胸が痛くなる。

でも俺以上にルーシエルの方が傷ついてる。俺がルーシエルの前で弱いところを見せたら駄目なんだ。

それはライナも言ってたし……

船はまだつかない。まだまだ時間はある。

とりあえず国外逃亡を果たす瞬間が近付いてきたんだ。まだ焦る必要はない。ルーシエルと国宝石が手元にある内は、祖国奪還の希望

を捨てる必要はないんだ。

ダフネとルーシエルが休憩している間、ライナは1人で海を眺めていた。もうすぐ自分の祖国に帰れる、それに比例して憂鬱になる気持ちと戦っていた。

その時、ライナの姿を見かねたジョーンが己の質問を投げかけるため、ライナに声をかけた。聞きたい内容は決まっている。

「よお姉ちゃん」

「なんだいジョーン。あたしに何か用かい？」

「御国は今どんな状況なんでえ。シースクエアはアルトランドの中でも特殊な場所だからよお、バルディナの奴らも貿易に支障が出たらいけねえから俺達にはあまり規制がかかんねえって話だ。俺達は比較的前と変わらない生活が約束されてるらしいが、祖国はどうなんだろうな」

できるだけ軽い口調で問いかけたが、ライナの表情は暗い物になっていく。その姿を見て、笑いながら聞いたジョーンも顔の筋肉を緊張させた。

お互いに嫌な空気が流れ、ライナが気まずそうに声を出した。

「城下町で暴動がおこった時、バルディナの兵は一般市民すら剣で切り捨てたとダフネが言っていた。それで分かるだろ」

「……まさか奴隷、とかは無いよな」

「バルディナの侵略国に対する扱いは悪い。侵略してから50年は自分たちの思想を植え付ける為に徹底的な奴隷政策を行う。アルトランドすら例外じゃないだろうね。反抗する気力すら起こさせないのがバルディナだ」

バルディナの奴隷政策。話には聞いた事があったが、本当に行われているかは謎のままだった。しかしアルトランドは間違いなくライナ曰く奴隷政策が実行される予定らしい。途端に家族や知り合い、友人の顔が思い浮かんで嫌な汗をかく。そんなジョーンを操縦室からイオリが複雑そうな顔で眺めていた。

「マジかよ……」

「シースクエアはアルトランドの物資の8割が集まる場所。そこを規制すれば世界貿易に支障をきたす。ファイアアンもパルチナも下手したら東天も出て来るだろう。だからシースクエアだけは安全が保障されてるんだよ。後の村や町は酷い事になりそうだ……国外逃亡を目指す者達が増えて来るだろうし、シースクエアにそんな者達を国外に逃がす密輸船も出て来るだろうね」

ライナの言葉に絶望した後にジョーンの脳裏に浮かんできたのはアルトランドの希望、国王と妃だった。この雰囲気では逃げられたのはルーシエルだけだろう。

では我らの国のシンボルはどうなるのか。

「国王と后はどうなるんだ!？」

「……ダフネには言えずじまいのままだが、1年以内に国王と后の公開処刑を行うと既にバルディナが宣告している」

「そんなの止めなきゃいけないだろうが!畜生バルディナめ、何もかも奪って行きやがる!まさか王子と姫もか!？」

「いや、その話は出てない。王子と姫はまだ処刑されないだろうね。あんな幼い王子達まで処刑したら国民の怒りは頂点に達し、そこそアルトランド各地で暴動が起こるだろうからね。バルディナもそれは避けたい。意気消沈させる為に国王と后を処刑するんだ。利用価値がある内はまだ殺されはしないだろう」

「利用価値、だと？」

幼い王子達がなんに利用できるんだ。第1王子は賢いと言われているけどもまだ子供だ。政治に携われる訳でもないだろうし、姫だって王子より幼い。

そんな2人を一体何に利用しようと言うんだ。

「恐らくだ、あたしの考えだから真に受けなくておくれよね。あいつらはミッシェル様をバルディナの第3王子クリスティアンの妻として迎え入れる気かもしれない」

「なんだって……」

「これでミッシェル様は良く言えば嫁入り、悪く言えば人質と言う形でバルディナに連れて行かれるだろう。そして国王と妃、ダイナスとノーヴァもないアルトラントで今最も国民に影響を与えるのが第1王子のクラウシエル様。聡明な方だけにバルディナも子供だからと言って手加減はしない。ミッシェル様を手の内に入れる事でクラウシエル様を人形の様に操りたいのさ。クラウシエル王子が直接伝えれば、国民も反発できないだろうからね」

ダイナス様とノーヴァ様までもが殺されていたとは……

大きな絶望が襲いかかる。だがライナの考えをジョーンは個人の考えとは思えなかった。容赦のないバルディナだ、そのくらいはやる。そう思わせるには十分だった。

「バルディナは何としてもクラウシエル様の動きを封じたい。クラウシエル様だけは処刑に持っていきたいみたいだが、今はまだ様子見だろうね」

「な、なんでクラウシエル様だけ……」

「簡単だ、クラウシエル様が国民の目に見える最後の砦だからだ」



最後の砦？

バルディナがそうまでしてクラウシエル王子の動きを封じたいと言う理由が分からない。

「最後の砦？クラウシエル様がか」

「正確にはルーシエル様とクラウシエル様の2人だ。バルディナの最大の痛手は第2王子ルーシエル様を逃がしてしまった事。ルーシエル様が戻ってくれる事を国民は願ひ、その時が来た時、国民は自らの命を賭けてバルディナに祖国奪還を宣言するだろう。その時、バルディナとアルトラントの戦争を指揮するのが……」

「まさかクラウシエル様だって言うのか……？」

「ああ、あれだけ聡明な頭脳をお持ちだ。軍師としても有能な将になるだろう。だがこれだけは断言できるね、クラウシエル王子は隙を見てバルディナに祖国奪還の戦争を宣言する。その隙を作るのがルーシエル様の仕事だ。その為にはバルディナの兵力をある程度削る必要があるが」

ライナの言い方に少し疑問を持った。祖国奪還を宣言……下手したらそれはバルディナと戦うと言う事になる。

でもそんな兵力、アルトラントにあるはずもない。

「じゃあダフネは……」

「ああ、ダフネはバルディナと全面戦争をするつもりなんだよ。第3者の力を借りてね……そしてバルディナからルーシエル様と国宝石を守るのがダフネの使命だ」

国宝石。国の宝とも言われている。ジョーンにはその価値が分からないが、国が落ちたんだ。国宝石は相手の手の内に渡っているだろう。

「国宝石？でもよ、城が落とされたんだ……もう遅いんじゃないか？」

「いや、国王がルーシエル様に国宝石を持たせてダフネに預けた。バルディナは国宝石を求めて他の国へも侵略する。そしてフアライアン、パルチナ、東天、5大国家全てを潰すつもりだ。奴らは世界侵略をスタートさせている」

この間までは平和だった。しかしたった1週間。たった1週間で全てが変わってしまったのだ。自分達は敗戦国の民になり、奴隷生活が待ち受けている。

そして祈るしかないのだ。バルディナを倒してアルトランドを開放に導く救世主が現れる事を。

「そんな事が……」

「知らないのも無理はない。まだ早駆けの兵も到着していないシースクエアに情報が届く訳がないからね。だがもうバルディナの兵がルーシエル様達を探しに来ているだろう。バルディナの奴らはルーシエル様達がビアナに来る事を読んでシースクエアからビアナへの進行を塞いでいる。後は行く場所無くシースクエアで困ってるルーシエル様達を捕えようって魂胆だろうが、そうはいかなかったね」

この女は何者なんだろうか。頭が切れてクレバーだ。そして何よりもオーシャン民族であると言う事。

オーシャン人で無償に他国の人間を助けるメリットがあるのだろうか。バレたらバルディナは次はオーシャンに侵略をスタートさせるはずだ。

「お前さん……一体何者なんだ？」

「あたしかい？あたしはライナ、ただの情報屋さ」

「ただの、ねえ……」



## 14 戦闘民族リーフ族

船に揺られて2日が経った。

飯は船で釣りをして釣った魚をさばいて食ったり、焼いて食ったりした。

初めての釣りにルーシエルは興奮してたけど、魚に引っ張られて海にも落ちかけていた。

### 14 戦闘民族リーフ族

「船の生活も飽きちゃった」

娯楽施設の付いてない船の中でルーシエルがドリんと戯れながらポツリと呟いた。

船酔いの心配はないけど、ルーシエルにとっては景色が変わらない海を見続けるのは暇になっていつてるらしい。

甲板に出て辺りを見渡しても360度青い海が広がっていて、シースクエアは全く見えなくなっていた。

俺の後をルーシエルはついてきて甲板に身を乗り出す。

「危ないぞ」

「ん、大丈夫だよ。ねえダフネ、もうすぐ着くのかなあ」

「着くよ。もうそろそろ海の色も変わるはずだ」

ジョーンの娘のイオリが俺達に近づいてきて海を見下ろす。

オーシャンは行った事がないけど海がとても綺麗な場所だって言うのは聞いた事がある。

オーシャン民族の中でも比較的友好的な部族は、この海を観光に利用して観光業で生計を立ててるって話も聞いた。

全く文化の違う独自発展した独立国家。独立国家に行った事の無い俺は正直少しだけワクワクしてる。そんな状況じゃないってのに。その時、前方にうっすらとだけ島が見えてきた。あれがオーシャンなのか？

イオリがジョーンに大声を出して操縦室に走って行き、代わりにライナがやってきた。

「もうちょいだね。そろそろ見張りの船も見えて来るし、なんとって海の色が変わるよ」

「なあライナ、オーシャンって確か大小10の島が1つの国になってんだよな。あれはなに島だ？」

「今前方に見えてるのはオルハ島、オーシャンの中で唯一観光として使われてる島だ。あの島より奥の島には国外の人間を入れてはいけない掟があるからね。物資の交換もあの島を介して行うのさ」

ふうん……あ、なんか小さな船が見えてきた。

前方には数隻の船が待機しており、何かの楽器を吹いて俺達を威嚇してくる。

「ラボッサ。オーシャンの古い言葉で警戒を意味する。止まらなきゃ攻撃するぞって合図だ」

「え！？ジョーンに言わなきゃ！」

「大丈夫だろ。ジョーンはこの意味をちゃんと理解してるさ」

ライナの言った通り、船のスピードが少しずつ遅くなっていく。そして海の色が変化した。エメラルドグリーンの美しい海はサンゴ礁や魚が透けて見えるくらい透き通ってる。

ドリンがカラフルな色をしている様に魚の色もカラフルだ。少なく

とも、こんな黄色や白、黒のしま模様の魚なんて見た事が無い。あ、青もいる。

すげえ……これがオーシャンの海か。自然と調和するオーシャンが最も大事にしている海。

船が止まったのを確認してオーシャン民族が小型船で近づいて船に接続してきた。そして甲板に足を踏み入れたオーシャン民族は俺達をジロリと一括して、ジョーンに声をかけた。

「貴様何のつもりだ。物資の交換の時期ではないはずだ。我らオーシャンの領海を無断で入った事は理解できているのだろうな」

「ああ、ちゃんとしてるさ。だが危害を加えるつもりはねえ。話を聞いてくれや」

既に喧嘩腰のオーシャン民族は槍を構えている。

焦った俺は傍にいたライナに耳打ちした。

「なんだあいつら？」

「戦闘民族リーフ族。7部族あるオーシャン部族の中でも特に力を持つ3大部族の1つで排他的で好戦的な部族さ。奴らは他国の人間との親交を好まない。返答次第によってはこの船を沈めるつもりだね」

「なんだって!？」

「まあ任せな。あたしの出番だね」

ライナが俺の肩を叩いてオーシャン民族の前に歩いて行く。

オーシャン人もライナに顔を顰めたが、同じオーシャン民族と言うのを理解したらしく槍を降ろした。

ライナはそいつらを一瞥し、偉そうに腕組みをした。

「随分な歓迎だね。あたしを誰だか分かってやってるのかい？」

「何だお前は。他国に出て行った部族を我らは仲間とは考えぬ」

「お前らの民族とあたしの民族の価値観を一緒にするな。あんたに仲間にも思ってもらわなくてもいいさ。でもあたしに手を出したら他の部族が黙ってないよ」

「何が言いたい!?!」

「あたしはダナシュ族の長、マイアの孫娘のライナ。今日は長に会いに帰還したんだ。この首飾りで分かるだろう」

自慢げにライナが首飾りを見せる。

それを見せた瞬間、オーシャン人達は目を丸くして、ライナの顔を見た。

「その首飾りは……まさか本当にライナ様なのか!?!」

「そうだと言ってるだろう。ここを通す気があるのか、無いのか? 早く決めろ。あたしらには時間がないんだよ」

「……分かりました。ライナ様の命令です。特別にオルハ島までは許可しましょう。その後は我らの船での移動になります」

「ああ、いいだろう」

まさかライナがダナシュ族の長の孫娘だったなんて!

ダナシュ族って言えばオーシャンのリーダー的な部族だ。よく5大国家と独立国家の宰相が集まる世界貿易の協議でもオーシャンの代表はいつもダナシュ族だ。

じゃあライナはお姫様だったのか!?!

こんな言葉遣いの悪いお姫様がいるか? って言うか姫の癖に1人旅で情報屋とかやってたのかよ! ミッシェルよりタチが悪いじゃないか!

考えれば考えるほどライナが分からない。

船が進み出し、ルーシエルとイオリが海に興奮している中、俺はライナに声をかけた。

「ライナ」

「黙ってて悪かったね。まああんたも聞いてこなかったしね」

「それはいいけど……お前姫の癖に1人で世界旅してたのか？ 家族は止めなかったのか？」

「止めたさ。でもあたしが無理矢理世界に出たんだ。オーシャンの人間はね、極度に国外に出るのを恐れる。オーシャン民族の8割は国外どころかオーシャン内の島を全て回らずに一生を終えるんだよ。あたしは見たかったのさ、そんな閉鎖された世界じゃなくて本当の世界をね」

つまりは好奇心に負けたってところなのか？

でも俺の単純な思考とは違い、ライナはもっと複雑な事を考えているようだった。

「こもってる間は幸せかもしれない。でも他国は待ってくれない。

バルディナの手はいずれオーシャンにも伸びるだろう。あたしは一刻も早くオーシャンにかつての姿を取り戻してほしいんだよ」

「かつて？ でも俺は生まれた時からオーシャンは結構閉鎖的だっただろ？」

俺とライナの年齢は大して変わらない。かつてって言ったって、俺たちが生きている間ではないはずだ。でもオーシャンは過去に世界に出てた事があるんだろうか？

ライナは力なく笑う。

「昔、2つの国が世界の覇権を取りあったのを話したね」

「ああ、聞いたな」

「オーシャンもそれに参加してた。でもね、オーシャンは捨て駒にされたのさ。背後から挟み撃ちするって話を信じて単独で突き進ん



だオーシャンを奴らは見捨てた。結果、オーシャンは相手にも痛手を負わせたけど、こっちも壊滅的な被害をこうむった。でも奴らはオーシャンを捨て駒にし続けた。色黒は優劣人種だ、醜い、そんな理由でね。オーシャンはそれに耐えれず国を閉ざした。もう他国の奴らに関わるのはごめんなんだよ」

「ライナ……」

「前まではそれで良かったかもしれない。でも今は事情が違う。軍事増強を続けるバルディナにオーシャンが敵うはずがない。じつちゃんには一刻も早く世界に目を向けて、バルディナの脅威を感じてほしいんだ。恐らく他国の情報を知り得ているのは観光をメインに取り扱ってるアデレイド族とバルフォア族、後は貿易を担ってるフイエロン族くらいなものさ」

オーシャンにも色々あるらしい。

やっぱり7つも部族があったら、色んな小競り合いが多そうだ。

ダナシュ族がそれを主に納めてるんだろうけど……俺はあまりオーシャンの知識を知らないから現状がどうなってるのかが分からない。

「なあライナ、オーシャンってどういう仕組みになってるんだ？ 3大部族とか言ってたけど」

「オーシャンはさっき言った通り7つの部族で形成されてる。その中でも絶対的な発言力を持つ部族がダナシュ族とリーフ族、もう1つがフイエロン族。リーフ族は他国の人間が嫌いな攻撃的な部族でフイエロン族は貿易を担ってる事から一番世界情勢に詳しい部族だね。そしてダナシュ族はいわゆるタカ派のリーフ族とハト派のフイエロン族の仲介役ってとこだ。残りの4部族の中でもアデレイド族とバルフォア族は観光で生計を立ててる部族だから、ある意味他国の人間に対する偏見はあまりないが、残りの2つのウルジー族とノックス族は本当に閉鎖的な部族だ。リーフ族とウルジー族、ノックス族は前の大戦で戦争の場所として使われた事から住み家のあちこ

ちに戦争の名残がある。だからこの3部族は他国嫌いが特に強くなるのさ。ダナシュ族は決定権を委ねられてる苦しい状況なんだよ。リーフ族、ウルジー族、ノックス族とフィエロン族、アデレイド族、バルフォア族は互いにも仲が悪いしね」

仲が悪いね。何となく合わないような感じはするけど。

「まあ貿易や観光を生業にしてる3部族にとって、さっきみたいに威嚇してくるリーフ族とかは商売あがったりで迷惑だと思ってるし、リーフ族達からしてみれば、自らの国を他国に売る売国奴って思ってる。だからお互いの3部族は仲が悪いのさ。ダナシュ族はあくまで中立の立場をとってきてたから今の状況だが、どちらかに肩入れすれば……」

「オーシャンが変わってくる、そう言いたいんだな」

「そうだ、だからダナシュ族は決めあぐねてるのさ。どっちかの肩を持ったらどっちかの反発を買うからね。でもあたしはフィエロン族の言っている様に世界に開けた国家になりたい。情報戦を制さなきゃ、またオーシャンは過去の大戦と同じ目に遭う。今のままじゃ駄目なんだ」

そう語ったライナの瞳には力が宿っており、ライナの決意が本物なんだと感じた。

そして申し訳なさそうに振り返ったライナに俺は首をかしげた。

「軍事増強を続けるバルディナ、南下を目論んでいるパルチナ、他国に干渉しないフライアン、鎖国を貫く東天……オーシャンは自力で強くなるしか道が無いんだよ」

「ライナ……」

「悪いねダフネ、本当はあたしはあんた達をじっちゃんに連れていって説明させる道具にしたかっただけなんだ。陥落したアルトラン

トの王子と御世話係の話くらいは知ってるはずだ。その2人を連れていって真実を知らせたらダナシユ族も動かない訳にはいかないからね」

なんだそんな事か。

「いいよ別に」

「え？」

「お前のお陰でここまでこれた。それで十分だ。後は俺達で何とかするよ。国外に出てファライアンに行けたら、結局は自分たちで何とかするしかないくなるんだ」

「ダフネ……」

最初からそのつもりだった。俺とルーシエルで祖国を奪還するつもりだったんだ。ライナはそれの手助けをしてくれたにすぎない。ライナにも目的はあり、俺達にも目的がある。利害が一致しただけ。それだけだった。

ライナは俺の隣に腰かけて、空を見上げた。

「なあダフネ、あんたは祖国に好きな子はいるかい？」

「なんだよいきなり」

「聞いてみただけさ。王子様の為だけじゃないだろう？」

「……そりゃそうさ。城の奴らもそうだし親父とお袋や村の人たちだってそうだ。士官学校の友達も……知り合い全部助けたいって思ってるさ」

国の奴らがどうなってしまったかは分からないけど。

皆無事なのだろうか、セラはちゃんと生き残ったのだろうか。あの時セラが俺を叱ってくれなかったら、俺はそのまま門で奴らと戦ってただろう。

セラがいなかったら俺は今ここにいなかった。

助けなきゃいけない。

いつの間にか強く握りしめていたらしい、拳は鈍い痛みを俺にもたらした。それを見たライナは再び空を仰ぐ。

「これからどうなんだろうね、あたし達は。世界はバルディナの侵略を皮切りに600年前のような世界大戦が起ころうとしてる」

「……」

「簡単に言えばバルディナ対フライアンだろうね。そしてパルチナがマクラウドを巻き込んで第3国として名乗りを上げる可能性もある。パルチナが出てくりゃ、パルチナと領土問題抱えるヴァシュタンがパルチナを潰すために出てくる。ザイナスに対抗するためにフライアンはエデンを戦争に参加させる。オーシャンも悠長に構えてる場合じゃない」

全ての国も対岸の火事じゃない。1つの国が連鎖して全ての国が巻き込まれていく。ライナの言うとおり600年前の世界大戦が俺たちの時代に起ころうとしてる。何万、何十万の犠牲を払って。

600年前の戦争に勝利した英雄ダレンの様な奴が現れるのか。

船がオルハ島に近づいて行く。ジョーン達とはここでお別れだ。

その後はライナの力を借りて船を借り、ビアナに向かおう。そこからフライアンに向かう。

大丈夫だ。絶対に大丈夫なはずだ。

## 15 ダナシュ族の長

「おめえら気をつけろよ。こっから先はいわゆる敵地だ。おめえらに全てかかってんだからよ」

「有難うジョーン」

オルハ島に上陸した俺達の肩を叩いてジョーンは豪快に笑った。そしてルーシエルに跪いて頭を下げた。そうだ、全てルーシエルにかかってるんだ。

### 15 ダナシュ族の長

ジョーン達も船で戻って行き、リーフ族の奴らの船に乗り込む。

ここから先は3時間程度でダナシュ族の縄張りの島、バイゴッド島につくらしい。

その島に近づくにつれてライナの表情は緊張を含み、口数も少なくなった。

ルーシエルは不安になってきたのか、しがみついてきたので、俺はルーシエルを抱き上げて安心させるしかなかった。

3時間後、バイゴッド島の入江に到着した俺達を降ろしてリーフ族の奴らは再び監視の為にオルハ島に戻っていったしまった。

確かにあんな奴らが監視してちゃ、観光する時に商売あがったりだろうなあ。すげえ威圧感だったし……

入江に人は少なかったけど、褐色の肌を持つオーシャン人の中に褐色の肌じゃない俺とルーシエルがいるんだ。島の奴らの視線は釘付けた。

そしてここはかなり暑い。

俺は袖なしの服だからいいが、ルーシエルは暑かったらしい、フー  
ドを脱ぎたがった。

ライナが情報が届いてないからルーシエルとバレる心配はまずない  
だろうと言うので、俺は暑がるルーシエルのフード付きの服と、上  
着を脱がせてやった。

薄着の長そで1枚になったルーシエルは少しマシになったのか、走  
り回って海を見つめた。

「すごいね、魚が泳いでるよ。貝殻がある！」

「王子様、海で遊ぶのは後だよ。あたしの後についてきな」

ライナが歩いて行った後を俺とルーシエルが追いかける。

ダナシュ族の視線と小声で俺達の事を会話する声が聞こえた。ライ  
ナは気付かれないんだろうか、お姫様なのに……

「ライナ、お前は大丈夫なのか？ 姫なのに待遇悪くないか？」

「皆あたしがライナって気付かないのさ。ここを出た時のあたしは  
まだ15歳だったし、大人しい外見だったからねえ、今の様にセク  
シーお姉さんじゃなかったのさ」

「本人が言うから眉唾ものだけどな」

「ダフネ、お前なあ……」

ガックリ項垂れたけど、ライナの足が止まる事は無い。

ジャングルの様な森の中の細い道を歩いて行く。本当にここは自然  
しかないって感じたな。そしてオーシャンの動物の特徴なのだろう、  
鳥達を発見したけど、どれもこれもカラフルだ。

魚達もカラフルだったし、どうやらオーシャンの生き物はなぜか色  
が鮮やかな物が多いみたいだ。

しばらく森を歩いていると、開けた道が見えた先には森を切り取って出来た場所に沢山の家が並んでいた。ここがダナシユ族の集落だな。

ドリンが喜んで羽をばたつかせている。故郷に帰れたのが嬉しいみたいだ。

そして集落に入った俺達にダナシユ族の男たちが詰めかけてきた。

「お前、国外の人間だな？そっちの女はオーシャン民族みたいだが……他国の人間がバイゴッド島に入るのは禁止だ。即刻立ち去れ」  
「お前誰にものを言っている。あたしはライナ、ここの長マイアの孫娘だぞ」

「ラ、ライナ様!？」

男の声で周りにいたダナシユ族が俺達を囲ってきた。

良く帰って来てくれた、とか御無事で何よりです、とか。完全に俺とルーシエルは放置されている。

ライナはダナシユ族の言葉を受け流し、道を開けろと言った。開いた道を進んでいくライナの後について行く。

「ライナ様、彼らは……」

「客人だ。マイアに会わせる」

「は、はい」

一番奥に集落の中でもでかい家が見えた。多分あれだろうな。

ドリンが喜んで飛んで行き、その家に入っていった。やっぱそうだな、あそこがライナのじいさん、ダナシユ族の長マイアの家だ。

息を飲んだ俺とルーシエルを待ってくれないライナは時間もくれな  
いまま藁でできた入り口をくぐった。

「じっちゃん、お袋、カーシー」

「なんじゃ……お前、ライナか？」

中にいたのは髭を生やして痩せ細った老人と、50歳くらいのおばさん、そして20後半ぐらいの男性だった。

ドリンはその奥にいる似たような姿をした色の違う鳥と寄り添っている。まさか彼女か？彼氏か？そう言えばドリンってオスなのか？メスなのか？

老人は一瞬ライナを睨みつけたが、相手がライナだと分かると、おぼつかない足腰で立ち上がり、ライナの腕を掴んだ。

ライナはそんな老人を抱きしめて、再び部屋の真ん中に座らせた。驚いて言葉を発さないおばさんと男性を尻目に、ライナは俺達に座るように促してきた。それを見た男性、カーシーが声を荒げた。

「ライナ！お前村を出て連絡1つ寄こさないでやっと帰って来たと思ったら異国の男を連れてきて何のつもりだ！？」

「その事で話をしに来た。あたしは自分のやった事を後悔なんてしてない」

「お前っ！」

「カーシー、まずはあたしの話を聞いてくれ、お袋もじっちゃんも」

「じっちゃん！聞く必要ない！こんな国を捨てた奴の話なんかを！」

「まあ待て、話だけならばまず聞こう」

「助かる」

ライナは手を動かし、頭を深く下げる。これがオーシャンの礼の仕方なんだろうか。

「じっちゃんに伝承を教えてもらいに来たんだ。国宝石のな」

「国宝石……？なぜじゃ」

「アルトラントがバルディナに侵略された」

「なんじゃと！？」



やっぱり情報が伝わっていなかったみたいだ。老人、マイアが目を見開いて身を乗り出した。

余程衝撃的なようだ、それも無理はない。そしてライナのお袋もカーシーも驚いている。

ライナはその反応を見て話を続けた。

「バルディナは国宝石について研究してる。多分ゲーティアを探す気なんだろう。あたし達はそれを止める為にヒントになるかもしれないから伝承を聞きに来たんだ」

「……なんと言う事じゃ。じゃあそちらの御二人は？」

「ああ、アルトラントの人間だ。ただの人間じゃない。第2王子ルーシエル様と御世話係のダフネだ。2人は祖国奪還の為に国宝石をバルディナから守らなければならない」

「王子殿下！？……しかし国宝石は国にあるのじゃろう？」

「俺持つてるよ」

ルーシエルがカバンから出した緑色の国宝石を見てマイアが再び目を見開いた。

まさか国宝石を生で見ることが出来るとは思わなかったんだろう。

「じっちゃん、バルディナは世界侵略を目論んでる。恐らくカーシヤンにも手は伸びて来るだろう。もう閉じこもってる場合じゃない、カーシヤンも世界に情報を発信するんだ。ファイアンなり東天なり手を組んでくれる国を探さなきゃ潰されるぞ。貿易にあまり関与してないカーシヤンを無償で助けてくれる国なんかありやしないんだからね」

「何と言う事じゃ……」

頭を抱えて項垂れたマイア、確かに今まで先延ばししていた結論を

すぐに決めろと言われても決めれる物じゃない。  
でもカーシーがライナに食ってかかった。

「何言っただよライナ！いきなり帰ってきて訳わかんねえ事を……  
大体その情報自体本当かわかんねえし王子が本物かもわかんねえ  
だろ！その国宝石も本物なのか！？」

「あたしが嘘をつくとも思っただのかい！？いくら兄貴でも容赦  
しないよ！」

「落ちつきなさい2人とも。じいちゃん、すぐに部族会議を開くべ  
きだわ。ライナの話が本当ならバルディナの脅威は目前に迫ってい  
る。アルトラントが落ちた今、バルディナとオーシャンは隣国にな  
ったのだから」

「そうじゃな……至急会議を開く。カーシー頼んだぞ」  
「チッ！」

カーシーは不機嫌を隠さず家を出て行ってしまった。何だあいつは、  
そんなに嫌いなのか？

首をかしげた俺にマイアは申し訳なさそうに頭を下げた。

「すまない王子殿下、ダフネ様。あれは目の前で父親を失くしてし  
まってなあ、そのせいもあるのか、他国と交流を拒絶しておるのじ  
ゃ」

「父親を？」

「ヴァシユタンに襲撃されたのよ。私の夫はそこでカーシーを守っ  
て亡くなった。カーシーが貿易で初めて国外に出た時よ。初めての  
カーシーには辛い経験だったのよ……勿論私も」

「あれは既に結婚しており、子供もおる。子供に辛い思いはさせ  
たくないんじゃない？」

そういつて涙を流したライナのおばさんとマイア。そんな衝撃的な

事件があつたのか……

カーシーは怖いんだ。外の世界が……だからライナの言ってる事に賛成できないんだ。

2人が悲しそうにしている中、ライナだけポカンとしてる。カーシーの父親って事はお前の父親だろう？なんでそんなアホ面晒してるんだ。

「カーシーは結婚してたのかい？」

「お前はどこにいるかも分からん。連絡のしようが無いじゃろう！4年前に結婚したわい！」

「知らなかったよ！誰とだい？」

「同じダナシュ族の娘じゃ。今度挨拶に行きなさい」

「ああ、今回は忙しくて無理だろうが、次は挨拶に行こう」

なんて奴だ……自分の家族が結婚した事も知らなかったのか。ライナは本当に国を出て行ってから1度も帰ってきてなかったんだな。それだけライナの決意は本物だったんだ。

マイアはライナに一瞬だけ悲しそうな顔をしたが、ルーシエルに視線をよこした。

「王子殿下、あんたは伝承が知りたいんじゃない？なぜそう思うのじゃ」

「だって国宝石の秘密を知らなきゃいけないんでしょ？ダフネが言ってるよ」

「幼い王子殿下にはまだ難しい話かもしれんのお……ダフネ殿、あんたはどうするつもりなのじゃ？」

急に話を振られて焦ったけど、でも俺の願いは決まってる。

「祖国奪還を目指す為にも、バルディナにゲーティアを渡す訳には

いけない。先にゲーティアの在り処を突きとめたいんです」

「それはお前さんがゲーティアを手に入れただけじゃないのかね？」

「え……」

「ゲーティアは禁断の魔法を集めた魔術書じゃ。その強大さゆえにゲーティアを求めている戦争を恐れた英雄たちが封印した。しかしお前さんはバルディナから守るのを口実にゲーティアを手に入れて祖国奪還を目指したい。違うのかい？それはバルディナと同じじゃ」

そう言われてみたらそうなのかもしれない。

自分が使う事を考えはしなかったが、バルディナからゲーティアを守る為に先にゲーティアを手に入れようと思った。

じゃあ今の俺はバルディナと同じなのか……？

「違うよ」

「王子殿下？」

「ダフネはね、違うよ。バルディナと一緒にじゃないよ。だってダフネは皆を守りたいだけなんだもん」

ハッキリとしたルーシエルの言い方にライナもマイアもライナのおばさんの笑みを浮かべた。

でも俺はルーシエルの言葉をそのまま受け入れる資格があるんだろうか。

祖国奪還の為に力が欲しいと思ったのは嘘じゃない。俺はバルディナと一緒になのか？

「慕われておるんじやのダフネ殿」

「俺は……」

「ダフネ殿、ゲーティアを探しなさい。ゲーティアは確かに禁断の魔術書じゃ。じゃがその力に魅入られない強い信念があれば、ゲー

ティアすらも扱いこなせるじやろう。英雄もゲーティアを扱えたからこそ大戦に勝利したのじゃ」

英雄が扱えたって言っても俺が扱える訳が無い。見つけたと言っても使えないだろうな。

俺は最後までルーシエルにつき従うだけだ。御世話係としてルーシエルの騎士として。

ルーシエルは国宝石を握りしめて俺に振り返った。

「俺とダフネなら絶対にバルディナをやっつけられるよね？ ミッシェルとクラウドシエルとパパとママと皆を助けられるよね？」

「……ああ、絶対に助けよう」

それしか言えなかった。

俺はバルディナを倒したい。でもその為にゲーティアを求めるのはバルディナと一緒に。矛盾してる、自分の考えが。

グルグル回って分からなくなってきた。

でもルーシエルの望むままに俺は動く。ルーシエルが祖国奪還を願うなら、俺はどんな手を使っても望みを叶える。今はまだそれでいい。

「そうじゃな、じゃが伝承を聞いたとて国宝石にゲーティアの在り処が記されておる。わしらは国宝石の字は読めん。あれは英雄が独自に考えた時じゃからのお」

「じっちゃん、ルーシエル王子がなぜバルディナに狙われてるか、その理由の1つに国宝石を持って逃げた事もあるけど、ルーシエル王子自身が国宝石に書かれた文字を読解できるんだ」

「なんじゃと？ そのような者がいるのか！？」

「王子は母親に教えてもらった文字だと言っていた。恐らく母親はアルトラントの英雄リジアと何かしらの繋がりがあったんだろう。」

そしてルーシエル王子にだけ、その文字を教えていたそうだ」

「そうか……分かった。我が島の伝承を全て話そう。ルーシエル様、あんたは救世主だ。あんたとダフネ殿が次の英雄になる御方なのじゃ」

そうだ、ルーシエルに全てがかかっている。

ゲーティアの行方もアルトランドの命運も。ルーシエルがいなきゃ祖国奪還は考えられない。国民を先導できる最後の希望だから。

ルーシエルが第3カ国の力を借りてバルディナに宣戦布告、そして弱ったバルディナを背後から突くのがクラウシエルとミツシエルの仕事だ。

クラスシエルは賢い、祖国奪還を願う気持ちも強いはずだ。少しの隙も見逃すはずが無い。クラウシエルが国民を率いてバルディナの騎士たちと最終対決する。その時、アルトランド解放の全てがかかる。

全てこいつらにかかっている。俺たちの未来もアルトランドの未来も何もかも……

マイアが伝承を口にする。

その話を集中して聴くべく、俺は耳を傾けた。

## 16 オーシャンの言い伝え

「まず、なぜわしらがこの伝承を知っているかと言うと、世界を手に入れた英雄達は国宝石を封印する際、第3者からの協力を要請した。英雄たちは前の大戦で迫害を受けたわしらに、その役目を担わせてくれたのじゃ。1つは償い、もう1つは新世界にわし等が必要じゃとな」

### 16 オーシャンの言い伝え

「わしらの民族は英雄たちと敵対していた国に協力をしておった。そして迫害を受けた。しかし英雄達はそんなわしらを救ってくださったのじゃ。しかしわしらの先祖の傷はいえなかった。十数万いたと言われるオーシャン民族もその時はわずか四万程度にまで減少したと言われておったからな。そして英雄達は我らに国宝石を封印する見届け人になってほしいと言ってきた」

「見届け人？」

「国に返還される国宝石を見届け、監視するのじゃ。英雄たちはその時に誓った。この世界の中心に我が力の全てを捨てた。そしてその欠片を世界各地にばらまいたと。そして英雄しかその場所には辿りつけぬと」

「どう言う事だ？」

その話を聞く限りじゃ、ゲーティアはこの世界の中心に位置する場所に隠されたって事がすぐに分かるじゃないか。

首をかしげた俺に何かをひらめいたライナが顔を上げた。

「世界の中心でどういう事だい？」

「英雄たちはゲーティアが人の手に渡るのを恐れ、ゲーティアに封印をかけて世界の中心に沈めた。そしてその封印を解かぬ限りゲーティアは我らの前には現れん。生憎、中心と言う言葉の意味までは分からん。それは英雄にしか分からんことじゃろう」

まあオーシャンが知ってたら、国宝石に場所を隠す必要なんてないもんな。

でも封印するくらいなら壊してしまえばいいのに。それか証拠を残さず隠すとか……中途半端なことするからバルディナが国宝石について研究しだしたんじゃないか。

なんで英雄はあえてヒントを残したのか。

「そして英雄達は続けてこう言った。我が国の宝にゲーティアの封印を解く5つの鍵を宝石に封印した。その意味を理解した者にしか力は授けられん」

「じゃあこの国宝石には……」

「国宝石はゲーティアの居場所を記している。それともう1つ、ゲーティアの魔法の1つを宿しておるのだ。英雄は再びゲーティアが必要になった時、探し当てる事が出来るように国宝石に魔力を残してヒントを与えた」

そう言うことだったのか……バルディナがどこまで知ってるかは知らないけど、国宝石全てを集めて読解しなきゃゲーティアを見つける事は出来ないんだ。

バルディナはまだ国宝石に書かれた文字を読解出来てない。そして読解にまだかなりの時間がかかるだろう。

だからルーシエルが欲しいんだ。

世界を敵にしたバルディナが世界から攻められる前にゲーティアを手に入れる為には時間がない。ルーシエルを手に入れて一気にゲー



ティアを手に入れたかったんだ。

「そこまでして封印しなければならぬほど危険な物だったんだね」  
「そうじゃ、5人の英雄には異名がある。これはライナ、お前も知っている伝承じゃ」

「ああ、ダフネにも伝えた」

「ゲーティアに封印されている魔法は5種類。1つ目は勇気、民衆を導く絶対的なカリスマ。2つ目は慈愛、罪深き物を許し、抱擁する力。3つ目は癒し、どんな傷も癒す力。4つ目は破壊、歯向かう者がいなくなる絶対的な力。5つ目が嘘、周りを欺き、常に相手をコントロールする力。ゲーティアにはこの5つを手に入れる魔法が記されていると言われておる。そして国宝石にはこのそれぞれの魔法を凝集させている。しかし強大な魔法には代償も付き物じゃ。残念ながらそこまではわしも分からんのだがな」

やっぱりただでは使えないって訳か。でも緑の国宝石の中には緑……つまり全てを癒す力が秘められている。それをどうやって使えるかは分からないけど。すごい物を手に入れてるんだ。

でもちゃんと代償があるんだな。まあそんな都合のいい魔法が存在するはずがないもんな。

これで分かった。ゲーティアを見つける方法が。まずはこの緑の国宝石に書かれた内容を解き明かさないとイケない。  
やっぱりファライアンに向かうのが最優先事項だ。

話が終わって、1時間後程経った時、カーシーが戻ってきた。

「じっちゃん、伝えてきたぜ。今日の夜話し合いを開こうってさ」  
「おおそうか。お前達は今日は休みなさい。疲れたじやろう、奥の部屋を好きに使っていい」

「そうさせてもらいます。行こうルーシエル。ライナはどうするんだ？」

「あたしはもう少ししたら行くよ。ゆっくり休みな」

ライナはまだ話す事があるようだ。まあ折角の家族水入らずだ。俺が邪魔するの悪い。

村の外には出ない方がいいと釘を刺され、俺とルーシエルはそのまま奥の部屋に缶詰めになった。

まあ確かにオーシャン民族からしたら、他国の人間入れたらいけないんだから仕方ないけど、缶詰は船の中だけで終わると思ったのになあ。

「海で遊びたかったな」

ポツリとルーシエルも呟く。

仕方ないから昼寝でもしよう。こんなにのんびりできる事も中々なかったしな。

——ライナ side ——

「じっちゃん、本当に国を解放する気か？ 国を閉鎖する事で他国との摩擦を失くしてきたのに、また国を解放したら奴らは俺達を襲ってくる」

「しかし今のままではバルディナが攻めて来るのは承知。まず全ての部族を1つにまとめねばならん」

カーシーは今一つ納得が出来てないみたいだね。こんな世界を冷静に監視できない奴が直族長になるなんて恐ろしいっらないよ。まあそれもしようがないのかもしれない。

カーシーは前までは世界に興味を示していた。世界に出てみたいと口にしていた。

でもその夢が叶って初めて外の世界に出た時に、親父を目の前で殺された。その時あたしはまだ6歳でカーシーは12歳だった。

理由はヴァシユタンのお宝をオーシャン人の一部が横から奪った事、カーシー達はたまたまタイミング悪く、その場に居合わせてヴァシユタンに勘違いされた。

誤解が解けた後、ヴァシユタンは勿論謝罪してきたし、それ相応の態度を示してくれたが、勿論そんなもんであつたし達の傷はいえない。親父が戻ってこない事を理解できないあたしは、いつも村の入り口で日が沈むまで親父を待っていた。

そんなあたしにカーシーは泣きながら何度も何度も謝った。

それ以来か……カーシーが外の世界を見なくなったのは。

そして頑なにオーシャン内だけで生きようとした。その反面教師なのか、逆にあたしが外の世界に憧れて村の反対を押し切って外の世界に飛び出した。

“ライナ、一緒に行かないか？もうこんな所に閉じ込められる必要なんて無いんだ”

そう言つて手を伸ばしてきた幼馴染。あたしが国を飛び出す1年前にそいつはそう言っていた。本当はあたしだって行きたかったさ。でもカーシー達を見捨てるなんて、その時は出来ないと思つてた。結局あたしは首を横に振り、そいつは残念そうにして出て行つた。幼馴染はオーシャンでは誰もが知つてゐる英雄の子孫だつた。その為、そいつには他の奴の何倍もの束縛と枷が待ち受けていた。自由を望んだあいつは国と家族を捨てて、1人出て行つてしまった。

あいつ……リインは今どうしてるのかねえ。

そしてあれから7年、15歳だつたあたしは22歳に、21歳だつたカーシーは28歳になった。でもお互いの考えは今も変わらないようだね。

不機嫌になつたカーシーをじつちゃんが複雑そうな顔で眺めている。

じっちゃんもカーシーに外の世界を見せるのは怖いんだろう。でもそんな1人の孫の為に国全体を危険にさらす訳にはいけない。分かってんのかいカーシー、もう駄々をこねて許される場合じゃないんだよ。

他の部族が集まるには最低でも5時間はかかる。今夜の話し合いは遅くから始まってしばらく続くだろう。

国の運命がかかってるんだ。あたしも参加して積極的に発言しよう。勿論ダフネも参加させる。

王子様は話が分かんないだろうから奥の部屋に待機させよう。話自体はダフネがいれば成り立つんだ。

問題はリーフ族とウルジー族とノックス族をどう納得させるかだ。話し合いが終わり次第ダフネ達に船を貸そう。そこからビアナに向かえばいい。

オーシャンからビアナへの通路にバルディナの監視船は無いはずだ。ビアナに入っちゃえばこっちのモンだからな。

巻き込んでしまつて悪かったが、ダフネ達を連れて来れたおかげでじっちゃんに危機感を与えられたようだ。

後はじっちゃんがどう動いてくれるか……

## 17 話し合いの結末は

「皆の者、今日は集まってくれて感謝する。情報はそれぞれ行き届いておるはずじゃ。わしらはこれからのオーシャンの方針を今日決めなきゃならん」

夜、夕飯を食い終わってライナに話し合いに参加しろと言われた俺はダナシユ族の集会所に足を運ばせた。

正直ルーシエルを連れて行けないのは気になったけど、確かにこんなピリピリした空気の中でルーシエルを連れていったら愚図ってたかもしれないな。ルーシエルはライナの家で大人しく留守番している。まあライナのおばさんもついてるし、大丈夫とは思うけど。

### 17 話し合いの結末は

集まっていたのはマイアと直族長のカーシー、それぞれの部族も族長と族長補佐が出席していた。皆が緊張した面持ちで待機している中に入るのは気まずい。

顔にペイントを施している部族もあれば、比較的アルトランド風の服を身につけている部族もある。かと思えばオーシャン特有の露出の高い服を身につけている奴もいて十人十色だ。

「ライナ、全員揃ったのか？」

「ああ、左からリーフ族、その隣の身体にペイントを施してる奴がウルジー族、そしてオーシャンの伝統的衣装であるチャグスを着ている奴がノックス族さ。少し距離を置いて座ってるのが左からフィエロン族、アデレイド族、バルフォア族だ。この3部族は外の世界

と交流があるから文化もどちらかと言えばアルトランドやファライアンに似てる部分があるだろ」

交流があるのとないで、これだけ服から何から変わってくるんだな。

ダナシユ族は他国との交流は基本、国の会議でない限りは今の3部族に任せてるみたいだから、ライナも含めてオーシャン人独特の格好をしている。

全員が揃った事を確認してマイアが声を出した。

「さて、今日は皆に伝えねばならん事がある。バルディナがアルトランドを侵略したそうじゃ。もしかしたらバルディナはオーシャンへの侵略も考えちよるのかもしれん」

集会場がざわめきだす。

やっぱり信じられない状況の様だ。本当なのか？とざわつく声が耳に届く。

しかしその時、リーフ族の族長であるガタイのいい男が言葉を發した。

「ならば我らも国を守る為に戦わなければならん。守備を徹底させる為にな」

「何を言ってる。オーシャンの人口と攻撃力じゃバルディナには敵わない。バルディナの武器や装備はオーシャンのよりも格段にいいからな」

フィエロン族の族長の隣にいた族長補佐の青年が反対意見を出せば集会場は荒れた。

リーフ族、ウルジー族、ノックス族は腰ぬけの売国奴と声を荒げ、フィエロン族、アデレイド族、バルフォア族は狭い世界しか見ない

お前達に情勢が分かる訳がないと反論した。  
荒れているこの場をマイアは冷静に見ている。  
そして1つの結論を下した。

「皆の者、わしは今回フィエロン族達の考えを支持しよう。オーシヤンを世界に開き、情報を集めるのじゃ。今の封鎖された世界ではわし等を救ってくれる国も現れん」

「じっちゃん何を言うんだ！？そんなの俺は反対だ！」

「カーシーの言う通りだマイア、わしらは他国の干渉は受けん！先の大戦での屈辱を貴様は何も理解していない！」

「オーシヤン全土に関わる一大事に過去を持ちだしてどうする！？もう600年も昔のことではないか！」

「我らが住処には過去の傷跡が今も残っている！貴様らに我らの気持ちに分かるはずがないであろう！」

ウルジー族の族長がバルフォア族の族長に掴みかかり、乱闘にまで発展する。こんなに国内でいがみ合って、どうやって世界と交流するって言うんだ。

ライナの言う通り、オーシヤンには問題が山積みだ。同じ国の人間達がこんな状況じゃ、バルディナが手を下さずとも自滅だ。この国を救おうとは東天もパルチナもフアライアンも考えないだろう。

そのまま終結しない話しあい嫌気がさしたのかライナが立ち上がって声を張り上げた。

「いい加減にしな！あんた達は本気でオーシヤンの未来を考えた事があるのか！？バルディナの侵略国に対する扱いは知ってるのか？奴隷政策だ、自分達に反抗する気力すらも失くすほどの過酷な奴隷生活を強いられる！自分の子どもや孫たちに、その苦しみを味わわせる気なのか！？オーシヤンを守る為なら、どんな恥をかいても泥を被っても耐えるのが族長の務めじゃないのか！？」

ライナの怒りの籠った訴えに集会所は静まり返った。

でもそれ以前にバルディナの奴隷政策に戦慄が走った。親父とお袋は大丈夫なんだろうか、どんな過酷な事をさせられるって言うんだ？ セラやジェイクリーナス達は？ クラウシエルとミッシェルと国王たちは？

顔が真っ青になった俺をライナは皆の前に突き出した。

「いって！」

「この男はアルトラントから国外逃亡してきた男だ。バルディナの非道をこの目で見てきた。ダフネ、こいつらに話してくれ」

「そんな事より奴隷政策の事をっ！」

「悪いな、それは後で話す。今この場に協力してくれ……頼む」

ライナの真剣な顔に言い返す事が出来なくなった。

奴隷政策の事が気になって仕方なかったが、ここはライナの言った通り、こいつらに真実を伝えよう。

「バルディナは俺達に因縁を吹っかけてきた。国宝石を盗もうとしたバルディナの使いをアルトラントの国王が処刑した事に腹を立てた。あいつらは反抗した一般市民をも剣で斬り殺した。わかるか？ 剣も持っていない市民を騎士が斬って捨てたんだ。あいつらに騎士の誇りなんかない！ 奪うもの全てを奪って行く！ そうなったらお終いなんだよ！」

「我らは戦のノウハウを学んでいる！ 海戦ならば負けはしない！」

「あんた達は世界に目を向けなすぎる。バルディナの海軍がどれほど強大か分かってないんだよ。あんた達が所持するあんなちっせえ船じゃバルディナの軍艦の体当たり1発で沈没さ」

「貴様っ！」

「事実だ、バルディナの軍事増強は著しい。奴らは本気で世界侵略



を始めてる。ビアナの領海付近をパトロールしてるし、ビアナの商人も参ってるよ」

アデレイド族がそう告げれば、リーフ族、ウルジー族、ノックス族は黙ってしまった。どうやらバルディナの強大さが少しは伝わった様だ。

静まり返った場を壊すようにマイアが紙を広げた。紙には読めない文字が並んでる。

どうやらオーシャン専用の文字の様だ。

「ライナあれ……」

「オーシャン古来から伝わる古代文字だ。先の大戦の英雄たちによって文字と言語が統一される前まで使ってた文字さ。オーシャン内でもあれを読める奴は少ないんだよ」

「お前読めないのか？」

「残念ながらね。普段使わないから読めなくても困らないし」

ああそうですか。全くこいつは……

でも他の族長たちは読めるようだ。顔を上げてマイアを見ている。マイアは頷き、そこに自分の名前を部族名を書いて行く。

「これは協定の証じゃ。我らオーシャンは何者にも屈さぬ。まずは皆で協力してバルディナの動向を探るのじゃ。古いしきたりはこれでもう終わりにしよう」

「マイア……」

フィエロン族、アデレイド族、バルフォア族が次々と署名をしていき、残りはリーフ族、ウルジー族、ノックス族だけになった。ウルジー族は何かを考え込み、顔を上げライナに視線を向けた。

「ライナ、お前の言う通りだ。我ら族長はオーシャンを守る為ならどんな屈辱でも耐えて見せる」

「そうかい、やっとその気になったかい」

ウルジー族とアデレイド族が署名をし、リーフ族だけになる。

リーフ族の族長は険しい顔を崩さなかったが、溜め息について筆を取った。

「1部族だけが違う方向と言う訳にも行くまい……不本意だがな」

リーフ族も署名をし、全ての族長がオーシャンから世界に出る決意をした。

オーシャンがどうなるかなんて分からないけど、でも団結する事でバルディナに脅威は与えられるはずだ。オーシャン人が気性が荒いつてのは俺でも知ってる情報だ。バルディナが知らない訳がない。

そのオーシャンの7部族全てが1枚岩になったんだ。本気で怒らせたら怖い事になりそうだ。

まずは牽制できたら上出来だろう。少しずつ軍備を集めて、他国との情報交換をスタートさせればいい。

でもこの状況を未だに快く思っていないカーシーが集会所を出ていつてしまった。

カーシーは頑なにオーシャンを開きたくないと言っていたから無理はないのかもしれないが、同じ考えのリーフ族達が同意したんだ。

カーシーも受け入れてくれたと思ってたんだけど……

マイアも今は1人にした方がいいだろうと言ったので、俺達はカーシーを追いかける事はせず、その後も話し合いは続いた。

「なあライナ、奴隷政策の事教えてくれよ」

族長たちの話し合いもひと段落つき、俺とライナは先に戻る事にした。

札を言ってきたライナに俺は奴隷政策の事を訪ねた。

「そんなの簡単さ。全てを制限するんだよ。買い物も食料も外に出る事さえも」

「そんな……」

「そしてバルディナの奴隷になり下がったと判断したら規制を解除してある程度の自由を認める。分かるかい？その時に国民はバルディナの国王に酔いしれるのさ。自分達を奴隷から解放してくれたってね。全く上手く人間の心理を逆手に取ってるよ」

「じゃあやっぱり急がなきゃいけねえ……」

「だけどダフネ、国民の希望がある限り、国民の心は折れない。ルーシエル王子に思いを馳せ、そして国王と后、ミッシェル王女とクラウシエル王子が折れさえしなければ、国民の心がバルディナに染まる事は無い」

ミッシェルとクラウシエル達が……

途端にクラウシエルの言葉が思い出された。自分は王になる為に今まで生きてきた。こんな所で無駄にする気はないって。

クラウシエルならきつと折れない。ミッシェルだってそんなクラウシエルを見たら耐えてくれるはずだ。

待ってるよ。必ず助け出してやるから……

「ダフネさん！ライナ！大変なんだっ！」

その時、ライナのおばさんが俺達に向かって走ってきた。息を切らしてパニックになってるおばさんをライナが支えてどうしたのかと聞くと、おばさんとはんでもない事を口にした。

「カーシーが……ルーシエル様を連れて行ったんだよ！もしかしたらルーシエル様を使ってバルディナと交渉するのかもしれない！」  
「なんだって！？」

ルーシエルがカーシーに連れて行かれた！？

どこに向かったと聞けば入江の方面に連れて行かれたとお婆さんは口にした。どうやらカーシーは無理やりルーシエルを連れて行ったようだ。止めようとしたお婆さんは突き飛ばされたらしく怪我をしていた。

助けなければ！やっぱりルーシエルから目を離したら駄目なんだ！カーシーがルーシエルを引き渡さなかったら……ライナ達には悪いけど、カーシーは俺が殺す。

俺とライナはカーシーが向かったと言う入江に走って向かった。

## 18 誘拐されたルーシエル

「放せえ！ダフネの所に返せえ！」

「うるさい黙ってろ！お前をバルディナに引き渡す。その見返りにバルディナにオーシャン侵攻をさせないように約束させるんだ！そうしたら今までの様に行けるっ」

「ダフネッ！ダフネエ！！」

## 18 誘拐されたルーシエル

「ライナ！入江って俺達が入った所か！？」

「いや、恐らく別の場所だ。カーシーの船はここから東に向かった入江だ。ドリン！ルーシエルをカーシーから守るんだ。お前には辛いだろうけどやってくれ」

「ルーシエル！ルーシエル！」

ドリンが大きな声でルーシエルの名前を呼び、上空に飛び立った。多分ドリンの方が先にカーシー達を見つけるだろう。ドリンがルーシエルを止めてくれればいい。

船で海に出られたら探すのが困難になる。そんな事になったら本当にお終いだ！

祖国奪還を果たすどころか、俺のせいでこんな事態になってしまった！

「ダフネ、悪いね。うちの兄貴がとんでもない事をしたよ」

「……もし反抗したら俺はあいつを殺しちまうかもしれないね」

「あんたにはその権利がある。好きにすればいいさ。でもあたしは

オーシャン民族として、カーシーの妹としてあんたを止めるけどね」

やっぱりお前はあいつの味方かよ。まあそれは仕方がない事だ。家族の命がかかってたら助けるのは当然だ。

でもそれは俺も同じ。ルーシエルの命がかかってる。カーシーを殺してでも止めなきゃいけない。

走り続けて20分ぐらいが経過した時、森が開けてきた。この先が多分入江なんだろう。

そして次第に子どもの声と片言の声、そして男の怒声が聞こえてきた。

「くそっ！ドリン、俺が分らないのか！？」

「放せ！カーシー、ルーシエル放せ！」

「あやややや！落ちるうゝゝ！！！」

入江についた俺達の前には小さなボートに乗って海に出ているカーシーがいた。

でもまだ沖には出れていない。ドリンに邪魔されて小さなボートは危なく揺れている。転覆するんじゃないか！？

「間にあったね。この入江にダナシユ族の船全てを船舶させるのは無理だから、ボートで自分の船まで漕いで行かなきゃいけないのさ。あたしらも追いかけよう！」

ライナは近くにあったボートに手をかけて岸に繋いである紐をほどいた。

動きだしたボートに俺も慌てて飛び乗り、ルーシエル達の元に向かう。

ボートはカヌーの様に手動なのでライナがやってくれてるが、やろうかと言われたら断られた。素人は上手くできないからって。まあ

それはいい。それよりもルーシエルだ！

ドリンの攻撃を受けてよろめいているカーシーのお陰でボートは完全に傾いている。ルーシエルも必死にボートにつかまってるけど、多分もう持たないだろう。

そしてカーシーがボートから落ちて、その衝撃でボートが転覆してルーシエルも落ちた。

「ルーシエル！」

「ダヒユネ〜」

ルーシエルは必死になって俺の所に泳いでこようとするけど、そのルーシエルの腕をカーシーが掴む。

でもドリンがそれを邪魔して、カーシーの顔にキックを喰らわす。

そしてカーシーの腕から逃れたルーシエルがつたない泳ぎ方でこっちに向かってきた。

居ても立ってもいられなくて、俺も海に飛び込んでルーシエルの所に泳いで遂に捕まえた。途方もない安心感が包み、ルーシエルを抱きしめて、そのままライナのボートまで泳いだ。

「くそっ！ライナてめえ！」

「カーシー、あたしは情けないよ。あんたはこんなくだらない事する人間になり下がっちゃったんだね……助けはしないよ。オーシャン民族なら自力で入江まで辿り着きな。さあ戻ろう、王子様もダフネもびしょ濡れだ。風呂に入るといい」

ルーシエルはジッとカーシーを眺めていた。

あんな奴に視線を送る必要なんてないと思うのに。ルーシエルは少し悲しそうな顔でカーシーを見ていた。

「あの人、怖い人だけど可哀そうな人だね」

「ルーシエル？」

「外に出るのが怖いって。外に出て行った仲間が殺されるのを考えたくないって」

カーシーはトラウマになってるんだ。始めて外に出た時に父親が殺された事を。

それは仕方がない。俺だってそんな目に遭えば外に出るのが怖くなってしまうはずだ。

でもそれを乗り越えなきゃ先に進めない。ライナだってそれを乗り越えたんだ。カーシーだってきつとできるはずだ。

集落に戻るまで、ライナは一言も言葉を発さなかった。

集落に戻った俺とルーシエルは服を洗って一緒に風呂に入った。

海に落ちたからびしょ濡れだけど、オーシャンは熱帯気候だ。少し蒸し暑い今は濡れても風邪を引く事は無いだろう。

ルーシエルも寒がる事は無いけど、初めて海に落ちたんだ。海の水が辛い辛い言っていた。

「ねえダフネ、何で海の水は辛いのか？」

「塩が入ってるからだよ」

「誰が入れたの？」

「……誰だろうなあ」

「神様かなあ？神様が海にお塩まいたのかな」

「どうだろうな」

中々難しい事聞いて来るな。でも子供の好奇心はそんな物だろう。適当に誤魔化してもルーシエルは真剣に考え込んでしまった。

風呂からあがってライナのおばさんが用意してくれた着替えに袖を通して部屋に向かったらライナが立っていた。

ライナは畏まって俺達に頭を下げる。



「カーシーが申し訳ない事をした。王子を巻き込むなんて謝って済む問題じゃないけど」

「俺怒ってないよ。あの人の事」

ルーシエルのあっさりした回答にライナは少し驚いていた。

そりゃそうだ。誘拐犯を怒ってないって言われるとは思ってなかっただろう。

「王子様、いいのかい？」

「だってダフネが助けてくれたもん。ライナお姉ちゃんのお兄ちゃんなら悪い人じゃないよ」

「……優しいね、本当に。ありがとう」

ルーシエルは笑って俺の手を引いて部屋に行こうと促してくる。こいつは本気で言ってるのか？多分何も考えてないんだろうけど。子ども特有の無邪気さって奴だろうか？

今度はルーシエルを1人にしない為にも俺は一緒に部屋に戻る事にした。

「聞いたかいカーシー」

「……ああ」

「これでもまだやるのかい？」

「やらねえよ。もう」

「そうかい」

もう夜の2時だ。ルーシエルは眠かったらしく、すぐに眠ってしまった。かく言う俺も猛烈に眠い。さっさと寝よう。

そう思った時に部屋の扉がノックされた。開けた先にはライナの姿。

「なんだよライナ」

「マイアが船を用意してくれる。明日にでもビアナに出向できるだろう。いつでも準備ができた時に声をかけてほしいと言っていた」

「そっか。助かる」

ライナとはこれでお別れだな。

ライナがいてくれたから国外に出て来れたんだ。感謝してもしきれないだろう。

「ビアナまではオーシャンから船で4日程度かかる。まあそれなりにでかい船を用意してくれるみたいだからベッドとかもちゃんとしたのがあるだろうけどね」

「4日か……ルーシエルが愚図りそうだな」

「そこは御世話係の腕の見せ所だろう」

「さいですか」

ライナに改めて礼を言おうとしたけど、ライナはすぐにお休みと言って扉を閉めてしまった。

まあいいか。明日また会えるんだし、礼は明日でいいか。ついにビアナに行けるな。そこから船でフライアンに向かおう。

そのままオーシャンからフライアンに出来れば向かいいたいけど、フライアンは入国してくる船を検査している。

何の許可もとってないオーシャンの船を港に停泊させる事は出来ない。

でもビアナからは就航便が出てるから、安心して行けると言う物だ。シースクエアからビアナへの行き道を監視してるからバルディナは俺がオーシャンにいる事も知らないだろうし、オーシャンからビアナに行く事も知らないはずだ。

ビアナの中にバルディナの兵はいないだろうし、ビアナの長がまあ

反対するよな。

色々考え事をしてたら眠気はすぐに訪れ、俺は意識を手放した。

次の日の昼、準備を終えた俺とルーシエルはマイアに声をかけた。マイアはすぐに船を用意してくれて俺達を入江につれていく。でもその中にライナの姿は無かった。

礼を言いたかったのに、朝からライナを見ないし、あいつどこ行っただんだ？

結局船について乗り込んでもライナは現れず、俺は見送ってくれるマイアに話を聞いてみた。

「ライナはいないんですか？」

「あの子は朝から姿を見ておらん。まあ自由奔放な子じゃからなあ」

確かに……でも見送ってくれてもいいんじゃないか？薄情者め。

ルーシエルは海で遊べなかったのが残念だったらしく、また来たいと言ってくる。そうだな、またこれたらいいな。今度はバカンスだな。

船が出ると船長が声をかけ、船が動きだした時声が聞こえた。

「ちょっと待っておくれよ！置いてくなんて薄情じゃないか！」

ライナが走ってきて、ギリギリの所で船に乗り込んだ。

あっけにとられた俺にライナは当たり前のごとく置いて行くなと怒ってくる。

いや置いて行くなって……だってお前ここに留まるんじゃないのかよ！

「何で来たんだよ」

「あんたただけ薄情なんだい？旅は道連れ、世は情けだろ？まだフラライアンには行った事がないんだ。行くしかないだろう」

「マイアはいいのか！？」

「いいさ。あたしが国外の情報をマイアに送るんだから何も問題ないじゃないか」

マイアは全く止める事をしない。いいのか！？こんなナリだけど一応姫なんじゃないのか！？

ライナは相棒のドリンを肩に乗せて、いつもの様に豪快に笑った。その手には何やら袋が握られている。

「何持ってたんだ？」

「これかい？これはパールって言うオーシャン特有の宝石さ。これがビアナでは交易で高く売れるんだよ」

「そうやって資金稼いでんのか？」

「あんたみたいに獣狩って生活なんて一昔古いね。今は交易って手もあるんだから楽して金は手に入るんだよ。頭さえあればね」

はいはいそうですか。

完全に付いて来る気満々じゃねえか。

船が出港し、ライナは奥の部屋に引っ込んでしまった。家族からの見送りの受けないなんてそっちの方が薄情じゃないか。

でもまあライナいてくれたら心強いし、損は一つもないんだけどな。やっとビアナに向かう。そこから全てを始めればいいんだ。

## 19 商人達の国ビアナ

「ライナ達、もうすぐビアナが見えてくるぜ」

船員のおっさんが俺達に声をかける。

ルーシエルとライナは甲板に向かって行ったけど、俺の方は4日間も揺れる船に乗って少し酔ってしまった。まさか自分が酔うとは思わなかったよ。ライナから外に出たらいんじゃないかと言われて、仕方なく後ろを付いて出て行く。

今まで真っ青な海と空しか見えなかったけど、今は甲板から沢山の船と島が見えた。

### 19 商人達の国ビアナ

「あれがビアナ？何か船が一杯あるね」

「そうだろう、なんせ世界中の物資が集まる場所だ。世界で1番栄えてる国と言っても過言じゃない。王子様、ビアナの中ではフード必須で身分は隠すんだよ」

「どうして？」

「ビアナは世界中の商人が集まる。勿論バルディナの商人もだ。下手な行動はしない方がいい」

ルーシエルとライナが話しているのを後から甲板に出た俺は壁に凭れて耳だけ傾ける。

ビアナには初めて行ったけど、やっぱり凄く栄えてると言ってもよさそうだ。色んな船が船舶し、ここから見える島だけでも緑色の部分が見えない。つまり森や木があまりない、開拓されていると言う

事だ。

ビアナは面積がそこまで大きくは無いけれど、人口はかなり多い。森を開拓して家を作ってたら、ビアナ内に森はほとんど無くなってしまったらしい。

「じゃあアルトラントの商人にも会えるのかな!？」

「会えるだろうね。シースクエアの連中からの情報を仕入れてりや、祖国に戻ろうなんて思わないはずさ。何人かには会える可能性がある。でも会ったら駄目だ。王子様の身分をばらす事になるからね」

「そんな……」

確かにライナの言う通りだ。ここでアルトラントの人間を探す訳にはいかない。

そいつから下手したらビアナ全体に広がってしまうかもしれない。そしたらバルディナはビアナに兵を向けるだろう。いや、恐らく隠密にビアナに兵を向けているはず。ルーシエルはフードを深く被ってばれないようにする必要がある。

基本ルーシエルは国王の公務にも幼い事を理由に参加しない事が多いからミッシェルやクラウシエルと違って顔は割れていない。でもバルディナの奴らは恐らくルーシエルの顔を知ってるだろう。探す相手の顔を知らない訳がないからな。

あと1時間程度でビアナの領海に入ると船長に言われ、ルーシエルにフードを被せた。

ビアナの領海を示す海域には堤防が建てられており、そこでビアナの商人が船を入念にチェックしている。

何時に来る物資とか、船のコード番号とか……大丈夫なんだろうか。俺達はここを抜けれるのか？

不安そうな俺に感づいたらしいライナが平気平気と軽く答えた。

「余裕さ、ビアナは他種族の商人が移り住んで出来た国。その分、他の船とかにも寛容だ。旅行者も多いし、個人単位での船での旅行も受け入れてる。船での旅行って答えれば大丈夫さ」

「でもそんな緩くて国は大丈夫なのか？侵略され放題じゃないか」

「ビアナは世界の交易処、そこを襲ったら世界中から袋叩きさ。それがビアナの国の強みでもあり、ビアナが戦に無関係でのんびりやれる証拠さ」

確かにそうだろうな。ビアナが潰れたら世界の交易や貿易がストップする。上手い事どの国にもひいきされる事で戦を回避するのか：ある意味、もっとも賢い国だろうな。

その分、貿易や交易は頭がいる仕事だし、関税の割合や、物資の値段などの相場もビアナが決めている。

働きづめの生活なんだろうけどな。

そのくせに国内の法規制が緩いから治安は結構悪いって聞く。緩いおかげで簡単に入国できるのはいいけど、盗賊やトレジャーハンターの住処になってるって言うから困りものだ。

ビアナの堤防が近づくにつれて、ビアナの領海内に入ろうとする船が並んでいる。俺達の船にビアナの船が近づいてきて、旅行者は3番ゲートで許可を貰ってくれと言ってきた。

それに従って3番ゲートに向かうと、大型の団体客を乗せた大きな船や、個人旅行なのか小型の船が数隻並んでいた。1時間半くらいそこを並んでいると、俺達の船の番になる。堤防の前に建てられた浮島のような建物が建てられており、そこに船を停泊させて色々質問に答えなければいけないようだ。

「えーと今回は個人旅行かなんかかい？」

「まあそんなとこだ」

「どこの国の人間が何泊する予定なんだい？まああんたは髪の色と

肌の色で見た所オーシャン人だろうけどな」

まずい、俺とルーシエルはアルトランド人って言ってもいいんだろうか。アルトランドは侵略されたのをビアナなら知ってるはず。いや、もう情報は世界に回ってておかしくない。

何て答えたらいいか分からない俺の顔をビアナの奴が覗き込んできた。

「あーあんたアルトランド人だな」

「な、何でそう思うんだよ!」

「なんでって言われてもなあ……まあ俺の仕事がらの勘だよ。こんだけ他国の人間見ると見分けつくようになんだよ」

すげえな……やっぱ違う人種が集まってできたビアナだからこそだろうな。俺は見分けなんて使ないわ。

ライナがオーシャン人だって言うのくらいしか……バルディナとアルトランドは人種が同じだから似通ってるし、他の国は知らないからなあ。

「見分けてどうやって分かるんだ?」

「そんなん目の形や彫の深さってとこか。まあ普通に見てたらあんまり分からない変化かもな。特にアルトランドとバルディナとかはな」

「ふうん……」

「ま、あんた達は旅行って言うってるけど逃げてきたんだろ? アルトランドの情報は知ってるよ。良くここまで辿り着いたな。ここでは国や人種は関係ない、歓迎するよ。そのまま5番ゲートの港に入港してくれ」

そいつはそう言って入国許可書をくれた。これがないと万が一の場



合は不法滞在だと判断されて追い出されるんだそうだ。それを自分のカバンに折りたたんで入れて、船が港につくのを待つ。領海に入ったとしても、実際に港に船を入れるには3時間近くかかるらしい。まだ船に乗らなきゃいけないんだな。マジで嫌になる。

「なあライナ、他の国の奴らの見分け方は何かないのか？」

「さあねえ、そこまで他人の顔をまじまじ見てるなんてしないから」

「なんだ分かんねえのか」

「簡単に言えばね」

くだらない話を話している間にも5番と書かれたプレートにそって船が進んでいく。次第に街の喧騒も聞こえてきて、本当に栄えてるんだなと感じる。

治安はあれだけ戦争に無関係でいられるから、ここに移り住んでいく人が多いのも分かる気がするよ。船が5番ゲートの決められた位置に入港し、それを係の奴らが色々入力していく。そして降りる許可が出て、俺達は4日ぶりに大地に足を付けた。

「あーやっぱ地面はいい！もう暫く船はごめんだね」

「あんたは弱いねえ……大丈夫かい？」

「うん」

ルーシエルもビアナの地に足を踏み入れ、船長達は船を下りて少し観光してから帰るそうだ。確かに港にはお土産屋が大量に軒を連ねている。

シースクエアも中々の都市だけど、ここには全く敵わない。それほどここは賑やかで栄えている。さすが世界の交易どころ。船長達と別れてライナと3人で少しビアナ内を見て回る事にした。

「そう言えばダフネ、王子様に名前を付ける必要があると思わない

かい？」

ライナが小声でコソツと俺に耳打ちをして来た。でも確かにその通りかもしれない。

ルーシエルと呼ぶのは流石にまずい。王子様って呼ぶのアウトだ。ここで偽名を付ける必要があるだろうな。

「じゃあ頭をとってルー、語尾を取ってシエルはどうだい？」

「そのまんまだなあ……もうルーでいいんじゃない？ 分かりやすいし。平気か？」

「うん、どっちでもいいよ」

「えーシエルは可愛くないのかい？」

「じゃあお前はシエルって呼べよ。本人が分かればいいんだから」

ノリの悪い奴だねえ、ライナがブチブチ文句を言っているが、とりあえずルーシエルの偽名は決まった。めっちゃめっちゃ安直だけど分かりやしないだろう。ルーもシエルも子どもの中ではマイナーではない名前だ。メジャーでもないけど。呼んだだけでばれる心配はないだろうな。

ルーシエルを連れて、俺達はビアナの中心部に向かって歩いて行く。

「さ、ファライアンに気のチケットを買おう。ビアナは戦には中立を貫いている。ここでバルディナの事悪く言っちゃって手は貸してくれないさ」

「そうだな」

中立国家のビアナに協力は正直言って期待できない。向こうも戦争に巻き込まれたくないから中立を貫いてるんだ、頼んだって頼まれてくれないだろう。ビアナは中々でかい海軍を所有してるから力を貸してくれたら頼もしいんだけどな。

ここはさつさと準備だけしてフライアンに向かうのが手だろうなあ……本当はオーシャンから直接行けばいいんだけど、フライアンはビアナと違って許可の無い船での領海入りはかなり厳重な検査があるって聞いてるからな。

ビアナからの就航便で行くのが一番検査も少なくて手っ取り早い。ライナはビアナには既に足を運ばせた事があるらしい、ビアナの中を良く知っている。とりあえずライナに従って、まずフライアンへのチケットを取りにチケット売り場に足を運ばせた。

チケット売り場は結構にぎわっていて、プレートに書かれた料金の値段を払ってチケットを買っている。親父に渡された金を使えばフライアンまでのチケットは買えるだろう。

ライナもある程度の金は持っているらしく、すぐにチケット売り場に並ぶ事にした。20分程度並んで、遂に俺達の番になり、俺は受付の人に行きたい場所を答えた。

「フライアンへの周期便は何時のがあるんですか？」

「そうですね、今現在だと一番すぐの時間は2時間後の13時になります。この便は席がもう満席なので次の便は20時になります。その後は次の日の13時ですね」

20時を逃すと次の日になっちゃうのか……ビアナの中は安全だ。特に急がなきゃいけないってわけじゃないから、別に明日でもいいけど。あまり立ち止まるのは好きじゃない。もう少し事が発展したら落ちつけるんだけどな……

とりあえずここは自称先輩のライナの意見を仰ごうか。いい意見をくれよ先輩。

「どうするライナ？」

「20時のに乗っちゃおう。ビアナでの準備は短くなるから忙しい

けど、どうせ船に乗りゃ、やる事ないから寝るしかないんだ」

「そうだな、じゃあ20時の便を3人で」

「はい、お部屋は3人ご一緒になさいますか？」

「えっ？」

「何赤くなってるんだい？安くつく方がいいだろ。3人一緒に構わないよ」

いいのかよライナ！お前一応女だろ！？

でも言ってしまったからにはもうどうしようもない。受付の人は3人1部屋での値段を計算している。そして指定された値段を払い、チケットを貰った。

なんだかすごい気恥しいな。だって女と一緒にの部屋とか……でも俺の気持ち伝わったのか、ライナは俺の肩を叩いて笑った。

「心配しなくていいよ！あんたが妙な気起こしたらぶっ飛ばして目覚まさせてやっからさ！」

「起こさねえよ馬鹿！」

ルーシエルが俺とライナの会話をキャッキヤと楽しそうに聞いている。傍から見たら漫才なのかこれは。

その後はライナの後について行って、色々必要な物を買っ込んだ。まあフライアンまでの船の中は食事もあるらしいから飯の心配はなさそうだけど、世界中の物が集まるんだ。少しは特産品のお菓子でも買って行くか。

ピアノからフライアンまでは5日間の道のりだと聞いた。

フライアンに向かうバルディナの兵は流石にいないかな？だったらまあルーシエルを部屋の外に少しは出しても大丈夫だろうな。フード被せて顔を余り見えなくすれば。

ライナは中央の市場から少し外れた所に行っているかい？と聞いてき

て、俺とルーシエルは再びライナの後をついて行く。どんどん西の方角に向って行くにつれて、飲み屋街などが増えてくる。それに比例して治安も余り良くない雰囲気になっていく。大丈夫なのかここ。不安にかられながらも後を付いていくと、1つの宝石店に辿り着いた。ああ、自分が持ってきたパールを売るのか。

ライナはその店でパールを中々いい値段で売り払い、店主に小声で何かを話しかけた。

すると店主は隣の部屋に行けと促してきて、ライナは俺達について来いと言った。一体何があるんだ？隣の部屋はいたって普通の部屋だったけど、ライナはその部屋にある本棚をなんと動かした。

「おいライナ!？」

「心配しないでいいさ。ほら、早く入りな」

動かした本棚の床には小さなドアみたいな物がついていて、開けた先には階段が見えた。ここに入るのか？

不安そうな俺とルーシエルを置いて、ライナはさっさと入っていつてしまった。慌ててその後を追いかけたけど、この先には一体何が待ってるんだろうか。

「さあダフネ、ルー、今までがビアナの表の顔。そんで今から行く所がビアナの裏の顔さ」

「裏の顔……」

「そっちの道の奴しか入れない場所って奴だ」

## 20 裏市場

「さあ着いたよ。ここがピアノの裏通りさ」

地下通路をライナに案内されて10分程度歩いた先には地下なのに広い場所に出て、市場みたいなのが広がっていた。そこに色んな品が並べられている。ここは一体何なんだ？

ピアノの裏通り……つつつても穏やかな場所じゃない。そっちの道しか入れないって結構危ない場所なんじゃないか？

## 20 裏市場

「ここはいわゆる裏市場って奴だ。ピアノには情報が集まるからトレジャーハンターが多くてね、そのトレジャーハンターに情報売る情報屋達がここに集まってるし、奴らが手に入れたお宝もここで売ってる訳さ」

確かに商人が広げている物は見た事ない物や、切れ味の鋭そうな剣、豪華な宝石、様々だ。ライナがさっきパールを売った店は、この裏市場の会員だったらしい。それでライナもその会員に入ってるらしく、仲間も含めて顔パスで入れるそうだ。本当にこいつはすごい奴だ。

裏市場の癖に意外と人が多くて賑わってる。こんなことなら表に出ればいいのに。まあピアノは原則トレジャーハンターの横行を禁止してるからな。こうなってんだろうけど……それにしてもこんな状態になってるのに、法規制をしなくても大丈夫なのか？

「なあライナ、流石にここはやばくねえか」

「まあ確かに裏通り内のもめ事は自己責任だけだね。中々レアな情報が集まるんだよここは」

「だからって……ビアナは何もしねえのかよ」

「あんたビアナの事何も分かってないね。ビアナだって住民の事を考えて、もう少し法規制したいって思ってるさ」

じゃあなんでこんな事態になってんだよ。

そう突っ込んだら、ライナは可笑しそうに笑っている。悪かったな世間知らずで。

「ビアナは言ってみれば世界の商人が集まってできた国、それぞれの国の文化が入り混じってるんだ。だから法規制を厳しくすると、それぞれの国の文化を潰す事になりかねない。反発だって必死だ。でも全ての国を納得させる法律なんて作れるはずもない。でもそこで規制せずに緩いままダラダラ来ちまったんだよ。もう規制しようにも規制できないって感じだね」

「ふうん……」

「それにビアナの現当主のイグレスシアの右腕って言われてるレオンもトレジャーハンターでここを良く利用してるみたいだよ。それもあって寛容になってんだよ」

そんな奴がトレジャーハンターって……いいのかよそんな事。だってさあ、そんな奴普通に要人にしちゃ駄目だろ。本人はしらねえのか？住民たちはそういう話をしている節は余りなかった。っつー事はレオンの表の顔はイグレスシアの付き人で裏の顔がトレジャーハンターなんだろうな。

なんだか益々ビアナの異常さが浮き彫りになった気がする。自由すぎるのも考えものだな。

「はあ？ いいのかそれで」

「イグレシアはまあ黙認してるからね。こういうので財政が潤ってる面は否定できないから。お陰でここはいい情報屋が集まって助かるんだよ。でも気をつけな、あんたは名前を名乗るなよ。今のままでフードを深く被つときな。あいつらは金だしや、どんな情報も教えてくれるけど、逆に他の奴にも同じ情報売る。あんた達がばれたら奴らはすぐにその情報を金払った奴に売りさばくさ」

「あ、ああ」

「金以外を信用するな。それがこの市場での暗黙のルールさ」

ライナが信頼してる奴がどうやらこの中にいるみたいだ。俺達は人混みをかき分けてライナが言う情報屋の元に向かった。市場から少し離れた場所に小さな小屋が立っている。ライナいわくあそこらしい。

中に入ると、やっぱり中は狭く、俺達が入っただけでもう結構ギュウギュウだ。部屋の真ん中に机といすが置かれており、肝心の本人は机に突っ伏して眠っていた。

「まあた寝てるね。この爺さんは……」

「こいつなのか？」

「ああ、まあ情報を集めるのはこいつの息子と孫たちだけだね。おい爺さん起きな」

ライナが揺さぶれば、爺さんは眠そうに顔を上げた。

でもライナを瞳を捕えると、嬉しそうな顔をして飛びかかって行った。

「ライナちゃんじゃないか！ 相変わらず美人さんじゃ！ 再開のあいさつに熱いハグを……」

「馬鹿な事言ってるじゃないよ。早く情報を売りな、このエロ爺が」



ライナのきつい一言と回し蹴りに爺さんは吹っ飛んだけど、ピンピンしてるようだ。

すげえパワフルな爺さんだな。ヤコブリーナスより強えや……

ルーシエルも初めて見る気味の悪い爺さんに少し怯えている。俺の後ろから離れようとしないう。ライナは胸倉を掴んで爺さんを持ちあげた。本当に一国の姫のする事なんだろうか。

「ライナちゃん相変わらず怖いのお」

「もうあんたじゃ話にならないね。息子と孫はいないのかい？」

「勿論いるよ。息子と上の孫は情報集めに行ってるが、下の孫はね。おーいフラン！」

「はあい」

爺さんに呼ばれて出てきたのはクラウシエルと同年くらいの女の子だった。

女の子は俺達を見て、首を傾げたけど、ライナを見て表情を明るくさせた。

「あ、ライナさん！いらっしやい。今日はどんな御用件で？」

「聞きたい事があるんだ。バルディナがアルトラントに侵略してアルトラントが陥落した事だが、アルトラントの今の状況、そしてアラリアンや東天、パルチナの情報を聞きたい」

「そうですね。ではここに腰かけてお待ちください。すぐに資料をとってきますんで！」

フランは俺達をソファに座らせて、奥の部屋に入って行ってしまった。

この爺さんにはもったいない出来た孫だ。

その時、ドアが開いて少年が入ってきた。見た所クラウシエルより

少し上くらいかな？14〜5歳くらいの少年だ。

「おーフレン！久しぶりだねえ」

「あれ？ライナさんじゃないっすか、こんちわ。今日は何の情報欲しいんだい？」

「さっきフランに言ったんだ。バルディナの事と世界情勢さ」

フレンはその言葉を聞いて、ポケットからメモを取り出した。そのメモをパラパラめくりながら、爺さんに視線を向けた。

「爺さん、この話の料金はいくら取る？」

「まあまずは相手の予算からじゃな。最低6000ギリアからじゃ」  
「了解」

6000ギリアって結構高くないか？でもそれだけ表には知られてない情報なんだろうな。

フランが俺達にお茶を出してきて、フレンと一緒にソファに腰掛ける。フレンはフランに何を聞かれたかを聞き、フランが持ってきた数枚の紙と自分が持っていたメモを見比べながら話をした。

「ライナさん、今回の予算は？」

「そうだね……18000ギリアまでなら出そう」

「了解。んじゃあそこら辺の値段までの情報をお話しますね」

おいおいおいのかよ。

ライナの肩を掴んでコソツと耳打ちする

「いいのか？あいつらにぼったくられるんじゃ……」

「ここはそんな事しないよ。それに見合った情報売ってくれる。心配いらないさ、世間知らずのあんたはあたしに任されときゃいい

んだよ」

なんだよ、心配してやってんのに……世間知らずで一刀両断されちまった。そりゃあライナよりは俺は世界を回っては無いけどさあ……大体ライナが逞しすぎなだけなんだよ。1国の姫の癖に。

フレンはフランとどこまで話すかを打ち合わせ、俺達に顔を向けた。その後ろでは爺が椅子にもたれながらニヤニヤしている。なんだか嫌な雰囲気だなあ。

「じゃあまずバルディナが侵略した後のアルトランドですけど、バルディナの奴隷政策の一環が1週間後に発表されます。まあ暫くは貿易も行動も制限されるでしょうね。内容まではまだ発表されてないけど過去のデータから推測すると、恐らく同化政策が一番に始まります」

「やっぱりそうか……本格的にアルトランドを吸収しようとしてるね」

同化政策……なんだそれ。

ライナだけが納得して俺とルーシエルは訳が分からない。聞いてみてもいいのかな？ライナが後で教えてはくれるだろうけど、今知りたい。アルトランドに関係する事なんだ。少しの事でもすぐに知りたい。

「悪い、同化政策って何なんだ？」

「幼い子供をバルディナで育てるんだよ。まだ常識を身につけていない子供をバルディナの育て方で育ててバルディナ人として成長させる。バルディナからすればアルトランドの未来を担う子供を自分達の物にできるし、未来の反乱分子を潰せる。更に子供は人質代わりにもなる。動乱も抑えられて一石二鳥な訳」

なんだって！？そう叫びたかったけど、叫んだら俺がアルトランドの人間だって怪しまれる。

驚いて固まってるルーシエルを抱き寄せて、安心させるしかできない。

ライナはそんな俺達に視線を向けた後に、フレンに話を続けるように促した。

「その他の奴隷政策の具体的な物は今までの通りになりそうか？」

「詳しくは分からないけど、そこまで大きな変化はなさそうですね。あ、でも国王と後の処刑の日取りはこの間発表されました」

「処刑……？」

震えたルーシエルの声が響く。それは俺も同じだ。処刑される？国王と后が？

頭が真っ白になった俺の腕をルーシエルがすりぬけ、フレンに掴みかかった。

「どう言う事なの！？パパとママが処刑って何？殺されるの！？」

「な、なんだよあんたは！」

「ルー止めな！」

ライナに取り押さえられたけど、取り乱したルーシエルはそのまま泣きだして暴れ出した。

爺さんはルーシエルに視線を向けている。まずいっ！

何かを口にしようとしたけど、その前に爺さんが口を開いた。

「もしかしてお前さん……ルーシエル第2王子かい？」

「なんだって！？」

フレンとフランの驚いた声も聞かずに、ルーシエルは泣き続けている。

ライナの気まずそうな表情に確信したらしい、爺さんとフレンとフランはお互いを見合わせていた。

「こりゃあまさか渦中の人物が情報屋に来るとはなあ……」

「ルーシエル王子はバルディナから逃げたと聞いてたからね……でもまさかビアナに辿り着くとは思わなかったわ。良くあのバルディナの海軍の隙を付けたわね」

「すまない。爺さん、フレン、フラン、この情報は誰にも売らないでくれないかい？こっちも事情があるんだよ」

「ライナさん、俺達情報屋の間で情報の独り占めはタブーですよ。連れてきたライナさんの責任です」

舌打ちをしたライナにフレンがひるむ事は無い。

このままだと万が一他の奴らに聞かれた時、ルーシエルが来た事をこいつらは漏らしてしまう。それだけは避けなきゃいけない。

俺は爺さんとフレンとフランに頭を下げて頼みこんだ。

「頼む、黙っててくれ！このままだと俺たちはバルディナに捕まっちゃう！」

「残念だけど俺達には関係ないね。でもどうする爺さん？」

「そうじゃなあ……じゃあ等価交換でどうじゃ？あんた達がわたしの知らない情報を1つ教えてくれたら、等価交換でその情報を葬ることを約束しよう。ただし売れそうな役に立つ情報を頼むよ」

「そんな事言われても……」

「その王子様の情報との対価よ。余程の情報じゃなきゃ受け付けない」

フランにそう言われて、ますます困惑してしまう。そんな情報持っていないよ。

ライナも今の情報に困ってるようだ。泣いてるルーシエルの世話で

手が一杯でそれどころじゃないはずだ。

その時、肩にとまってたドリンがライナに声を出した。

「ライナ、ライナ、国宝石、謎！」

「それは駄目だ！それだけは売れない……」

「なんじゃ？国宝石に関する情報があるのかい？」

「それは国家だけじゃなくトレジャーハンターでも夢の様な情報だな。内容によってはOK出すぜ」

「だけど……「それで俺達の邪魔しない？」

ルーシエルの声がぼつりと響いて、部屋の中が静まり返った。

泣きはらして真っ赤になった目でルーシエルはカバンから国宝石を取り出した。

初めて見る国宝石に爺さんとフレン達が息を飲むのが分かる。

「あれが国宝石……ゲーティアの在り処を示した物……」

「これのね、文章が俺読めるの。その内容と引き換えでいいでしょ？」

「ルーシエルッ！」

「乗った。むしろお釣りがくるくらいだ！今日話す情報全てをタダにしてやってもいいくらいだ！」

フレンは話に乗ったけど、フランは今一信憑性がないらしく首をかしげた。

「でも国宝石の文字って読めないでしょ？どうして貴方が……」

「何言ってんだフラン、バルディナがルーシエル第2王子を狙う理由……ルーシエル王子が国宝石の文を読めるからだ。バルディナはルーシエル王子を捕まえると大々的にアピールしてるからな」

やっぱりここまで知ってるのか。流石は情報屋だ。

フレンは嘘つくなよ。とルーシエルに釘を刺した。でも嘘ついちまえばいい。どうせこいつらは情報が嘘かどうかもわかりやしないんだから。

「緑は全てを癒す力、その代償に全ての傷を受け入れて緑の命はすり減っていく」

「ルーシエル……？」

聞いた事の無い文章に俺だけじゃない、ライナも首をかしげた。でもフレン達は満足の様だ。その言葉を早速メモをして、爺さんに預けた。

「まああんた一部分だけ切り取って言った感がありだけど、国宝石の情報は出た事がない。希少価値を見出して、それで取引してやるよ。でもその不完全な情報じゃ今回の情報をただでは無理だ。きつちり18000ギリア払ってもらうぜ」

「ああ構わない。続きを説明しな」

「はいはい。国王と後の正式な処刑日は今から10ヶ月後。国民を奴隸政策にある程度慣れさせて行いうバルディナのいつものやり方です。ファライアンや東天、パルチナの国王を呼んで公開処刑にするって噂もある」

「ミッシェルとクラウシエルも殺されちゃうの!？」

「いや、今の所第1王子と王女にその話は出てません。まあそこまで一気にやったら一般市民も黙っちゃいねえ、暴動に発展する前に止めとくんでしょうね。ただ確実な情報がある。バルディナは国王と后と引き換えに恐らくあんたを要求してくる」

なんだって？

ライナが汚い手口だ。と不快感を露わにし、フレンもバルディナは

こういう国でしょ。と苦笑いを浮かべた。  
ルーシエルを要求する？取引する気なのか？

「バルディナは世界にこの情報を発信するだろう。国王と後の命と引き換えにルーシエル王子が自ら戻る事ってね。それかフアライアンに情報を発信するはずだ」

「フアライアンに……？」

「バルディナが一番恐れてるのは王子たちにフアライアンに逃げ込まれる事。フアライアンに戦争の話を持ち掛けて、ルーシエル王子を引き渡す事で戦争回避。あり得る話でしょ？」

「そんな……」

「ルーシエル王子、これは情報屋としてじゃなく一個人としての助言だが、今のバルディナは話を通じる相手じゃない。あいつらが言った事は何かあっても聞き入れない事だ。皇帝イマニユエル・ネイサンも変わり果てちゃったらしいからなあ……」

ルーシエルは啞然としている。自分が取引材料に使われるなんて思ってたなかったからだろう。

でも何があってもルーシエルだけは渡さない。国王やクラウシエル達が命をかけて守ったんだ。それを裏切る訳にはいかない。

「それで、他の国の情報は？」

「フアライアンはかなりバルディナを警戒してますね。今の所は動く気配がないけど、何かがあつたらバルディナとの全面対決も辞さないって発表してる。ライナさん、逃げるならフアライアンに向かった方がいい」

「分かってるよ」

「東天は相変わらず鎖国してるから国内に入り込めなかった。でも貿易経由してる東天の誉鳥島よどりでの情報では、東天も動く気はないらしい。でも侵略者は排除するって言ういつものスタンス。いつまで



持つか分からないけどね。でもパルチナはバルディナともしかしたら軍事協力の為に同盟を結ぶかもしれない」

「そいつはまずいね」

「バルディナとパルチナはフアライアンを潰したいみたいだ。東天と組まれる前にね」

パルチナは軍事国家だ。その2つが組まれるとなると……フアライアンでもかなりきついはず。

でもフレンが警戒してるのはそれだけじゃなかった。

「ザイナスは正式にバルディナに協力してるみたいだし、フアライアンはエデンとヴァシユタンに協力要請する可能性もある。ヴァシユタンはパルチナと領土問題抱えてて頭に来てるから、パルチナが関わってきたら手を貸すかもな。エデンは分からねえな。オーシヤンもどう動くかは今は分からない」

「なんでザイナスが協力するんだい？バルディナと10年前まで戦争をしてたはずだ。条約があると言っても国民のバルディナに対する感情はなくなるだろう」

「バルディナは今回の戦争の報酬にザイナスに独立国家としての地位を与える事を正式に発表してる。ザイナスの間では議論があったみたいけど、ザイナスの長のグレービスが他の奴らの反対を押し切った形になってるみたいですね」

「じゃあマクラウドはどうなんだ？あそこは何の情報も手に入らない。実質パルチナの植民地かい？」

「いや、あそこはきちんと独立国家を形成出来てるみたいですよ。なぜかパルチナの軍事侵略をことごとく跳ね返してる。だがパルチナの情報操作のおかげで詳しい事は分からない」

マクラウドか……パルチナの領土内に位置してるから、立場は独立国家でも実際はパルチナの植民地かと思ってたけど違うのか？だけ

ど軍事国家であるパルチナの侵攻を跳ね返せるほどの技術を持っているとは思えない。

ザイナスには銃と爆弾と言う武器がある。特に爆弾は一瞬で大量の人間を巻き込む恐ろしい武器だ。そんな特殊な技術を持つてるザイナスなら話は分かるけど……

フレンは言いたい事を終えたのか、残りの情報を一気に述べてメモ帳を閉じた。

「俺が言えるのはここまで。まあ今の情報足すと16500ギリアってとこだ」

「はいよ。確認してくれ」

どうやらライナが奢ってくれるらしい。渡した金をフレンが数えてちゃんとある事を確認して、俺達は外に出た。

ルーシエルは未だにショックを隠しきれてない。それもそうだが、自分の父親と母親が処刑されるって言われたんだ。気持ちが下がるのもしようがない。

でもそれと同時に気になる事があった。

「ルー、お前が言った国宝石の文章、どう言う意味だ？」

「ダフネに言ってなかったね。他にも文章があったの、あれはその1つ。でも俺にも良く分からないんだ」

「そうなのか」

どうやら国宝石にはまだ書かれてる事があるらしい。

ルーシエルは全てを俺達に教えてくれたわけじゃないみたいだ。そう考えると俺もライナも完全には信用されてないのか？

いや、国宝石の情報はばらしちゃいけないんだ。俺にもライナにも当然だ。

未だにグズグズ鼻を鳴らすルーシエルを抱き上げて、俺達は地下通路から出る為に出口に向かった。

## 21 レオンからの忠告

「さあ、そろそろ時間だね。これだけ買い物すりゃ大丈夫だろ」

あれからまた表の市場に向かった俺達は色々買い物をした。

泣き続けるルーシエルを励ます為に物で釣り、お菓子を大量に買い与えた。まあ買い物ほとんどがルーシエルへの貢物なんだけどな。

### 21 レオンからの忠告

船着き場に向かうと、ファライアンに向かう大きな船が船舶し、既に乗客の乗り込みが始まっていた。

船に乗り込むには1人1人検査を行っている。

まずはチケットを渡し、その後に顔を見せて名前を名乗らなきゃいけないようだ。そしてそれを行っている検査官にライナは顔をしかめた。

「ダフネ、今回の検査者はレオンとルイーゼみたいだね」

レオンは知ってる。さっきライナも説明してた通り、ここの当主イグレシアの右腕だよな。でもルイーゼって誰だ？

首をかしげてる俺にライナは1から説明してくれた。

「ビアナの当主、イグレシアの腹心を任されている奴は5人。それぞれ東西南北を治めている。トレジャーハンターでもあり、諜報能力に優れたレオンと弟のリオンは西、軍団長モルガンが北、国一番の医師コーネリアが東、国一番の商人ヴェロニクが南って具合にね。

東西南北の文化に適した奴が当てはめられてんだよ。一番栄えてるのが南、まあここに港があるからね。北は軍事に関する全てが整えられてる。東は住宅街、西がトレジャーハンターや情報屋が集まる裏通りや飲み屋が多い場所さ。ルイーゼはコーネリアの孫だ。コーネリアは高齢だからルイーゼが今は仕事をほとんど任されてんだよ」

「ふうん……」

「そんな大物がわざわざ検査に出向いてる。何かあるのか？」

ライナが首をかしげ、ドリンに小声で何かを命令した。

ドリンは言われた通りに飛んで行き、俺達の少し離れた所を飛びまわっている。その姿を確認した子どもが指を指している。カラフルな鳥がいると。

レオン達は検査をしてる為、ドリンの存在に気づかない。そのままドリンはライナの肩に戻ってきた。

「どうだったドリン？」

「写真、ルー、写真」

「……どうやらバルディナの手が伸びてたようだね」

「どう言う事だ？」

「あいつらあたしらがファライアンに行く事を読んでたみたいだね。ピアノに協力を頼んでやがる。就航便で行く場合は検査してくれてね。あいつらが見てる紙は恐らくルーの写真だろう」

「マジかよ……」

ここまであいつらの手が伸びてるのか。ならば早く逃げなきゃいけない。

でも逃げた所でどうすればいい。ファライアンへ他に行く手段がない。あそこは厳密な入国審査がある。就航便以外の個人船での入国は国の正式な許可書を役所でもらった旅行者じゃないとかなり厳しい。ここをどう突破するのか……見つかる可能性の方が高すぎる。

ライナと顔を見合わせて、とりあえずこの船に乗るのを諦める為に引き返そうとした時、周りにいたビアナの自警団に止められた。

「おい、もう船の搭乗は締め切られる。お前らチケット持ってるじゃないか、早く乗れ」

「いやーやっぱりキャンセルを……」

「ならその手続きがいる。手続きなしでのキャンセルはキャンセル料が発生するぞ」

「別にいいから！」

「どうした」

俺達の騒ぎを聞きつけて、レオンがこっちに歩いてきた。近くで見ると、俺よりどう見ても年の変わらない20代前半の男だった。こんな奴がイグレスシアの片腕なのか……って、そうじゃない。どうするんだよこの状況！

ライナはポツリと終わった、と呟いた。まだ諦めんなよ！

レオンはこちらにチラッと視線を向けた後、何かに気づき、手元にある資料をめくった。あ、ばれた。もう終わりだ……心臓が有り得ないくらいバクバクなっている。俺達はここでバルディナに返されてしまうのか。でもレオンの言葉は予想外の物だった。

「……何してるんだ。さっさと船に乗り込め、時間が無いぞ」

「え？」

「お前達はチケットを持っている。乗るのなら早くしろ」

レオンはそれ以上何も言わずに、再び検査をする場所に戻っていった。しまった。

「なんだかわかんねえけどラッキーだな。行こうぜ」

「待ちなダフネ、こんな上手くいくものか？もしかしたらあの客は

全てサクラで、あの船はフライアンじゃなくてバルディナに向かうのかもしれない」

「そんな……」

「乗るかどうかはあんたが決めな。あたしは怪しいと思うけどね」

確かに言われてみればライナの言う通りだ。あいつは明らかに俺達に気づいてた。それなのに見逃すとかあり得るのだろうか、それはビアナに利益が無いはずだ。

レオンの独断なんだろうか、それともビアナがバルディナに真っ向から対立してるんだろうか。わからない、でも他に方法が無いはずだ。

「俺は乗る」

「ダフネ……」

「国王と後の処刑の日は10ヶ月後だ。10か月以内に何とかしなきゃいけない。こんなところで足止めを食らう訳にはいかない」

「そうかい。分かった、じゃあ乗り込もう」

「ライナはいいのか？俺達に巻き込まれる必要はないんだ」

「いいさ。乗りかかった船、一緒に行こうじゃないか」

ライナがそう言って笑ってくれるのが心強い。なんだかあんま歳は離れてないのにメチャクチャ先輩みたいだ。

俺とルーシエルとライナはそのまま船に乗り込もうとした時、レオンがぼつりと呟いた。

「ヒルダって女には気をつけろ。船の中ではハインツの傍を離れるな」

「え？」

「何をしてるんだ？さっさと乗れ」

聞こえた声に聴き返そうとしたら、レオンはすでに俺から目を放して、いて他の奴の検査をしている。

訳が分からなくて、とりあえずライナに報告する為にまずは部屋に行ってからしよう。俺はルーシエルを抱き上げてライナと部屋に向かう事にした。

「うーん……やっぱ普通の船だからそんなに綺麗な訳じゃないねえ」  
「そりゃそうだろう。一番格安の船だから」

部屋は最低限の物しか置いていない。しかも広くもない。

まあそれもそうだろう、そんな値段のいい船を選択した訳じゃないんだから我慢するしかない。

それはそうとルーシエルを降ろしてベッドに座らせて、俺はライナに気になった事を伝えた。

「さっきレオンが言ったんだ。ヒルダって奴に気をつけろ、ハインツの側にいろって」

「ハインツ？」

「わかんねえんだ。でもあいつは確かにそう言った」

「そうか……とりあえず言われた通りハインツって奴を探そうか。話はそれからだ」

ライナに言われて、俺達はハインツを探しに船の中を散策する事にした。船に乗っている人は80人程度、まあこの部屋の数だったらこのくらいだろう。でも80人の中からハインツさんって人を見つけるのは苦労しそうだ。

それぞれが部屋に入ってるんだろう、あまり俺たち以外の人は見つからない。見つけた人に聞いてみたけど、皆ハインツさんじゃないと言われた。そしてその中のショートヘアの1人の女性に声をかけた。ハインツって名前は男の名前だけど、知り合いの可能性もある



から一応。

「すみません、ハインツさんを知りませんか？」

「ハインツ？いいえ、知らないわ。私はヒルダ、貴方はどなたなの？」

ヒルダ！さっきレオンが言っていた奴……

俺は適当に誤魔化すべく、偽名を名乗り、その場を去ろうとしたのをヒルダは止めた。

「可愛い子ね、なんでフードを被ってるの？船内なんだから取ればいいのに」

「あーそうですね。こいつ恥ずかしがりやで……な」

「う、うん」

ルーシエルは俺にしがみついて顔を隠した。恥ずかしがってる訳じゃない、本気で何かに怯えている顔だ。ルーシエルの反応にヒルダは少し残念そうな顔をしただけで、すぐに笑顔を浮かべた。

そしてヒルダは人のいい笑みを浮かべて去っていく。その瞬間に僅かに嗅ぎなれない匂いを感じた。なんて言うんだろう、物が焦げたような匂いっつーか……うーん上手く表現できねえわ。

でも先入観があるからかもしれないけど、この女には嫌な雰囲気しかしない。でもハインツさんは見つからなさそうだな。飯の時は食堂に来るよな。その時に言えればいいか。

しばらくは部屋の中で時間をつぶしたり、ルーシエルが海を見たいと言ったので外に出たりした。

ルーシエルはオーシャンの海を見た後だったので、海があんまり綺麗じゃないと文句を言っていたが、それはもうしょうがない。

そのまま夕飯を食べれる時間帯になったので、俺とライナは食堂に向かった。

食堂は賑わって、今まで部屋の中にいた人が皆出て来てる感じだ。やっぱこんだけ人が乗ってたんだな。

何種類かの飯を取って、適当に席をとって腰かけた。でもこんだけ人がいたら逆にハインツさんかどうか話しかけるのが少し気まずいなあ。

そう思ってた時、俺達の席に1人の青年が相席してもいいかと聞いてきたので、断る理由もなかったからOKしたら、そいつは俺の隣に腰かけた。飯を食いながらそいつは俺達に声をかけた。

「俺の事探してるってあんた？隣の部屋の夫婦が声をかけてきたんだけど」

「え？じゃあ貴方がハインツさん？」

「まあね、俺がそうだけど。で、あんた達は何の用なんだ」

用と言われて困ってしまった。

レオンから離れるなって言われただけで、個人的な用は全くない。何も言えなくて固まってる俺にライナが助け船を出した。

「レオンって奴があんたの傍を離れるなって言ってたんだよ。あたしらも良く意味が分かんないんだけどね」

「レオンがあ？ったく、あいつ厄介事しか人に押し付けねえからな」

溜め息をついたハインツさんになぜだかこちらが罪悪感。まあ悪いのは俺達なんだけどさ。

でもレオンは何でそんな事言っただ？ヒルダって奴が怪しいって言ってたのは何となくわかるんだけど……その時、噂のヒルダが近付いてきた。ヒルダもトレーに飯を乗せて相席を希望してきた。何これ気まずい。

ルーシエルは机をぐりぬけて俺の膝に避難してきた。よっぽどヒ

ルダが嫌いみたいだ。

ヒルダはそれに気にした様子もなく、飯を食いだしたけど、そんなヒルダにハインツさんの視線が突き刺さる。ヒルダはそんなハインツさんに気づいてるのか気付いてないのか、笑みを浮かべたまま俺達に声をかけて来る。

「貴方達は今回は観光でフライアンに？」

「え？あ、まあ。そっちは」

「私は仕事でなの。フライアンには初めて行くんだけどね」

「そうなんですか」

飯を食うからフードを被ってないルーシエルが気になる。顔をかくしてしまってるルーシエルに不安だけが募ってしまった。とりあえずハインツさんを見つけたんだ。なんかあったら頼ればいいだろ。元々食べる量も少なかったのか、ヒルダはさっさと食い終わって食堂を出て行った。その後ろ姿をハインツさんは睨むように見ていた。

「……くせえな、あの女。火薬の匂いプンプンさせてやがる」

「え？何か言いました？」

「いや、忠告しとくぜ。あの女には近づくな」

ハインツさんもレオンと同じ事を言っただけを持って行った。本当に何者なんだヒルダって奴……飯を食い終わって、俺達も部屋に避難。

そのまま寝ようとした時、部屋の扉をノックしてヒルダが入ってきた。

「あの、ヒルダさん何か……」

「ねぇ貴方ってダフネさんよね？」

「えっ？」

「お仕事なの、私と一緒に行きましようか。ルーシエル王子を連れてね」

そう言ってヒルダが俺達に向けてきたのは見た事の無い武器だった。なんだあれは……

剣を持つとうとした俺をライナが慌てていさめた。

「馬鹿よせ！あれは銃だよ。ザイナス特有の武器……」

「え？じゃあ……」

「ザイナスはバルディナと協力してる。こいつはあたしらを連れ戻す為に潜入してたんだよ」

レオンが言ってた事はこれだったのか！

ルーシエルは怯えて何も話す事が出来ない。そんなルーシエルに駆け寄る事も出来ない。

どうする……どうする！？

「ビアナも当てにならないわ、あんた達を船に通すなんてね。でも私がいるから何も問題は無い。さあ、観念なさい」

## 22 ファライアン第3騎士団団長オルヴァー

「動くな。動いたらうつかり脳天ぶち抜いちゃうかもしれないからね」

クスクス笑っているヒルダは見た事の無い武器、銃を突きつけている。

あれがザイナスがひたすらに表に出さない武器……あのお陰でバルディナからの実効支配を免れ、独立国の地位を確立させた。

### 22 ファライアン第3騎士団団長 オルヴァー

ジリジリ近づいて来るヒルダに俺達は一步一步後退するけど、ついに壁に背中がついて逃げ場所を失う。

ルーシエルはその場に座り込み、ライナも冷や汗をかいている。どうするべきなんだ！

でもその時、間拔けなコンコンと言う扉を叩く音が聞こえた。

勿論そんな物にヒルダが応じる訳がない。シカトをしてたけど、ノックはしつこくなっている。

「ちっ……しつこいな。おいお前」

「あたしかい？」

「さっさと出ろ、追い出してこい。だが私の視界に入らない角度に向かったら撃ち殺す」

ヒルダは俺に銃を突き付けたままライナに出ろと促した。

ライナも俺とルーシエルを人質に取られたら逆らう訳にもいかない

らしい、悔しそうに扉に手をかけた。

そのままお前だけでも逃げろ！ルーシエルだけだったら俺1人で何とかなるかもしれない。

相打ちと言ったら聞こえは悪いが、この女1人倒すぐらいはっ！

ライナが扉を開けた瞬間、何が起こったか分からなかった。

ヒルダの持っていた銃が飛んできたナイフに弾き飛ばされ、地面に落ちた。

何が何だか分からなかったけど、とりあえずこのチャンスを逃す手は無い。俺は無防備になったヒルダに飛びかかった。

ヒルダはナイフを持って抵抗したけど、そこはもう1人加勢してくれたお陰で何とかなかった。

「ハインツさん！」

「やれやれ……レオンから物騒な奴が船にいるって聞いてたけどな」

どうやらハインツさんはレオンから情報を聞いていたようだ。そのままヒルダを組み敷いて溜め息をついた。

でもなんだってハインツさんが……

ヒルダは悔しそうにハインツさんを睨みつける。

「なんだよ！あたしの邪魔しやがって！」

「おいおい、ここはフアライアンの領海だぞ。ザイナスの暴挙を許す訳ねえだろうが」

「何者だ！？」

「俺はオルヴァー、まあ名を知ったところで意味ねえだろうけどな。でもこれは貰つとくぜ。ザイナスの技術研究を調べるのにいい機会だ」

ハインツさんはヒルダから銃を取り上げた。これで少しは安心だ。

でも良く考えろ、ハインツって名前は偽名でオルヴァーが本名だった。オルヴァーって言ったらフライアンの第3騎士団の団長の名前じゃないか！レオンが言ってたハインツに頼れてこの事だったのか……！？

呆気にとられている俺とライナの横でハインツさん改めオルヴァーは銃をしげしげと眺めている。

「なんか良くわかんねえ作りだなあ。とりあえず研究所に回せばいいか。コピーして量産出来りゃこっちのもんだぜ」

「あの……」

「ああ、驚かせて悪かったな。ザイナスやバルディナがフライアンにスパイ送ってるのは知っててよお、その駆除に走り回ってた所なんだよ」

あっさりと言われけど、まさかお忍びでそんな事をして回ってるなんて思わない。こんな所でフライアン騎士団、別名女王騎士団に会えるなんて思ってた。なかつた。

ヒルダを連れていこうとしたオルヴァーさんに俺は勇気を持って話しかけた。

「あのっ！後でお話があるんですが……」

「ああ？いいよ聞こう。少し待ってくれ、何やら訳ありのようだ」

よし、なんとか話を聞いてもらえそうだ。ここで上手い事言っつてフライアンに力を貸してもらうしかない。それにしてもこう言っちゃなんだけど運がいい。もしかしたら女王の謁見が許されるかもしれない。そんなチャンス滅多にないはずだ。

オルヴァーはヒルダをきっちり縄で縛り、そのまま受け渡すと言っ出て行った。それがすんだら戻ってきてくれるだろう。そこから交渉開始だ。

しばらくしてオルヴァーが再びドアをノックして入ってきた。  
ルーシエルは緊張の糸がとれたのか、その場でベッドに横になって  
たし、ライナもかなり参った様だ。

命がいくつあっても足りないとはやかれた。

オルヴァーは机に備え付けられていた椅子に腰かけ話を聞く体制を  
とる。どうやら俺達自身には全く興味が無いらしい、何も聞いては  
来ない。

このままでは埒が明かないので、俺は思い切って先陣を踏み切った。

「俺達はアルトラントの人間です。バルディナの侵略で落ちたアル  
トラントから国外逃亡を図っている途中でした。この御方は第2王  
子ルーシエル様です」

「……一応驚いておこうか。王子は見ない顔だが女神像の刻印の指  
輪、本物みたいだな。第2王子は公務には大抵ついて回られなかつ  
たから顔は知らなかったんだが、それを抜きで1国の王子にとんだ  
無礼を働いた」

頭を下げたオルヴァーに慌ててしまった。こんな事を言わせたい訳  
じゃないんだけどな。

顔を上げてくれと言ったら、オルヴァーは顔を上げて、再び話を聞  
く体制をとる。

どこから話せばいいんだろうか、あまり良く分からないけど、でも  
単刀直入で言うのが一番分かりやすいんだろうか。

グルグル頭が回り、口から出てきた言葉はストレート以外の何物で  
もない。

「そのっ……できれば力を貸していただきたいんです!」

「俺に?」

「えっとオルヴァーさんもそうですけど、ファライアン自体に」



「……それは女王の意志を聞かなければいけない。俺個人で決められる判断じゃないからな。あんたが言うには守ってほしいって事だろ？」

間違っでは無いんだけど、少し違う。俺達はバルディナと戦うのに協力してほしいんだ。

でもそんなのいきなり言われてOKな訳もないし、下手な事言ったらファライアンへの入国すら許可されないだろう。

ここは頷いておいた方がいいのか？

「自国の問題をファライアンに持ち込まれては困る。こちらでもパルチナとバルディナとの睨み合いが続いてる。下手な事をして後ろから打たれたくないんでね」

「それは……」

「帰る場所が無くてファライアンの国民になるのなら、それなりの手引きはしよう。相手は王子様だからな。だが女王への謁見は許されない」

「なっ……どうしてですか？ルーシエル、いや王子が面会を望んでも？」

「駄目だ。あんたも知ってるだろう？ファライアンは女王を表には出さない。それはこちら側の事情でそうやっているんだ」

確かにファライアンの女王の姿を見た事のある奴はいない。国際会議でも代理の総司令官や最高評議委員、軍師とかがいつも出席してる。

女王の姿を自国民でさえ見た事が無いと言う奴だっているんだ。

その余りにも表に出て回らない事から鉄の女王、そう言われている。鉄のカーテンに守られているかのごとく、姿を現さないからだ。

その時、ルーシエルがカバンから国宝石を取り出してオルヴァーに見せた。

「ルーシエル王子？」

「これね、国宝石なんだよ。俺ね、これの文字が読めるんだ」

「……それは存じ上げております。レオンからその話は聞いていました」

「そうなの？」

「はい、バルディナはビアナに王子の引き渡しを要求していました。イグレシアの片腕として優秀なレオンはその情報を極秘で知っていましたから」

レオンはじゃあ本当に俺達を見逃してくれたのか？でもどうして……ビアナには何のメリットもないはずなのに。

「ルーシエル王子、国宝石を持ちだしてフアライアンをどうなさるおつもりなのです？」

「あのね、俺達ゲーティアが欲しいんだ。それで皆を助けるんだ」

ルーシエルの言葉にオルヴァーの目の色が変わった。

やっぱり知ってるんだな、ゲーティアの存在を。俺達は危険因子って思われたのかな。

オルヴァーは首を振って、ルーシエルを制止させた。

「王子、それはおやめ下さい。ゲーティアに選ばれた者は確かに英雄になれましょう。しかし強力な力にはそれ相応の代償があります。その代償はあまりにも重い」

「代償……それってこれに書いてるのと同じ事なの？」

「王子がそう仰られるのなら、そうなのかもしれません」

「オルヴァーさん、あんたは何を知ってるんだい？」

「……それは言うことはできない。俺たちフアライアンも今現在ゲーティアを探してる。探すことには協力できるが、それを受け継ぐ

のはやめた方がいい」

そんな話は知らない。だって聞かせてもらった事が無いから。でもルーシエルが言っていた。緑の国宝石は他者を癒し、緑を削ると…あれは何を意味してるんだ。

それにしても話がおかしくないか？ファイアンはゲーティアを探してるんだろ、それなのに受け継ぐのは止めるだなんて、自分達の欲望が丸見えじゃないか。

「ファイアンはゲーティアをどうするつもりなんですか？」

「……呪いを解くためだ。それ以上は言えない」

呪い？それは一体どういう事だ？ゲーティアを手に入れたら、その呪いつてのが解けるとでも言うのか。

オルヴァーはルーシエルの手に国宝石を握らせた。

「ルーシエル様、この国宝石の魔力は強大ですがご自身にかかる負担も大き過ぎる。その代償に後悔する時は必ず来る」

「……」

「今一度、お考え直して下さいませ」

ゲーティアの件は手伝ってくれそうだけど、それは根本的な解決にならない。

このまま逃げ続けても埒が明かない。現にこっちは既に選択肢がなくなりかけてるんだ。ファイアンしか選択肢が残されていない。

「俺平気だよ。だから手伝って」

「王子？」

「俺、どんな事にも耐えるって決めた。命をかけて俺を守ってくれたクラウシエル達やパパとママを助ける為ならどんな事だってする。」

皆が死んじゃうかもしれないんだ……どんな事でもするから、だから話だけでも聞いてよ！」

ルーシエルはもしかしたら俺より強いのもかもしれない。その目は凜としており、微塵も後悔等は感じ取れない。

オルヴァーはそんなルーシエルを見て、何かを思ったのか、態度を変えた。

「ダフネって言ったか。フライアンについたら城に案内しよう。女王は無理かもしれないが、軍団長の謁見は交渉してやる」

「え？ いいんですか!？」

「ああ」

オルヴァーはそのまま部屋を出ていってしまったけど、良かった……上手く行ったんだ。

何がそうさせたのかは分からないが、とりあえず胸をなで下ろした。

---

「随分ころっと態度を変えたね。どう言うつもりだい？」

「なんだあんたは」

「あたしはライナ、オーシャン一族の人間だ」

「オーシャン民族か、姿は初めて見たな……別にどう言うつもりはない。世界は今光を求めてる、ルーシエル王子はその光に相応しい、そう思ったままで」

オルヴァーの言い方が妙につつかえを感じる。こいつはまさかルーシエルを……

「まさか……あの子を英雄に祭り立てる気じゃないだろうね」

「そうかもしれないな。だが彼の力が無ければ女王を救う事が出来ない」

「女王……フライアンのかい？」

「ああ、鳥かごとらわれた哀れな我らの女王さ。彼女を救う為ならば、どんな事でもするさ」

## 23 水の都フアライアン

「ここがフアライアンなのか」

4日後、船は無事にフアライアンの港に到着した。

そこで降りた奴らは簡単な検査を受けて入国を許可される。検査つつても世界中に指名手配されてるような奴じゃない限りは入国OKなんだけどな。

### 23 水の都フアライアン

フアライアンにはバルディナの情報があまり入って無いらしい。まあフアライアンとバルディナは元々仲の悪い国だからな。バルディナは旧体制と言われており、昔の伝統を重んじているが、それと比較してフアライアンは新体制と言われ、結構新し物好きで常に何か国を良くする為に色々模索している。

その為、バルディナの少し古くさい考え方がフアライアンには余り受けないっつーか、まあフアライアンも伝統は大事にしてるんだけど、バルディナが頭固いって感じで話が合わないらしい。

でもバルディナはそのお陰か知らないけど、情に厚く、裏切らないって言われてたんだけどな……現に30年前のバルチナ南下戦争の時はアルトラントを守ってバルチナと戦ってくれた。それなのにどうしてこんな事になったんだ。

オルヴァーに気付いた検査官達が頭を下げる。それをオルヴァーは軽く手を上げていなし、俺達について来いと促した。

フアライアンは初めて行くけど、水の都と言われているだけあって

綺麗な場所だ。穏やかな雰囲気で、白い壁の家は太陽の光に包まれて、明るい街並みを再現しているようだ。港には魚介類の市場が開かれていて、かなり賑わっている。

その人込みを掻い潜って、俺達はオルヴァーの後をついて行った。それにしてもオルヴァーは第3騎士団の団長のはずだろ？もう少し歓迎モード的な物があってもいいはずなだけだな。気になってこそっとライナに耳打ちすれば、ライナはその情報はちゃんと知っていたらしい、教えてくれた。

「第3騎士団は主に暗殺や密偵を仕事にしてるからね。顔がばれたら危険じゃないか。だからそれぞれ単独で顔を伏せた仕事が多い。戦争でも極力名前が残らない使用に国自体がしてるらしいね。まあ所謂縁の下の力持ち的な奴だろうね」

「だから住民は顔を知らないのか……名前自体は有名なんだけどな」  
小道を歩いて行くと、次第に大きな城が見えてきた。多分あれがそうなんだろうな。綺麗な城だ。

でもまだまだ城に着くには長そうだ。あちこちに目が泳いでいるルーシエルをがっちりつかんで、俺達はただ黙々とオルヴァーの後をついていった。

そのまま3時間程度歩き続け、何とか城の前まで到着した。

オルヴァーは多分フアライアンの兵士の証なんだろうな、何かの印を見せて俺達を紹介し、門をくぐる。

中は綺麗な花が壁のいたる所に飾られて、綺麗に整理されている。やっぱり綺麗な城だ。

そして俺達は1階の応接室に入れられた。

「ここで暫く待っていてくれ。話を付けて来る」

そう言ってオルヴァーは部屋から出て行った。

召使いが俺達にお茶とお菓子を出してきて、ルーシエルがそれを嬉しそうに食べている。ライナはオーシャンの習慣なのか、そのまま素手で食いものを掴んで食べた。いや、それは流石に素ではま  
ずいだろ……

突っ込もうとしたけど、ライナが真面目そうな顔でこっちを見てきたから、突っ込めなかった。

「妙に上手く行ったと思わないかいダフネ」

「ああ、でも本当に謁見出来るならさせてもらいたい。コネは少しでも作るべきだからな。それにルーシエルの国宝石には青の国宝石とあわせて完璧になるって記されてたそうだ」

「青？」

「ああ、オーシャンの伝承ではファライアンが青なんだろう？ それならこれは丁度いい」

「そうだね」

その部屋で1時間程度待たされて、時間はもう昼時か。オルヴァーが部屋に入ってきて移動を促した。もしかして話が通じたのかもしれない。そのまま再びオルヴァーの後をついて行き、辿り着いた先には物々しい扉。それを兵士が開け、中に招き入れられる。

知らず知らず緊張していたらしい、冷や汗が出て来る。

そして開けられた先には大きな青いソファと豪華な机が置かれた部屋に通された。しかしソファには誰も座っておらず、ソファの横に4人の男が立っていただけだった。

「ジェレミー、ランドルフ、ローレンツ議員、デューク議員、連れてきた」

「はいはいご苦労さん」

青色の髪の男がオルヴァーに軽く手を振る。この男の青い髪見た事



がある……多分こいつは第2騎士団団長ランドルフ。たしかアルトランド人とファイアン人のハーフだって話を聞いた。だけど生まれも育ちもファイアンだからアルトランドに特別な感情は特に無いらしいけどな。

その横にいる50代くらいの男性がデューク議員……ファイアンの最高評議委員か。すごい貫禄だな。

でも隣のメガネをかけた奴は知らないな。ローレンツって奴らしいけど……こんな国の中心人物が集まってる中、なんだか少し不釣り合いのようにも感じる。

じゃあ残りの茶髪の男が……第1騎士団団長であり軍団長のジェレミー。戦の申し子、軍神の異名をとる男。

でも女王らしき人は見当たらない。やっぱり女王との面会は駄目みたいだ。

とりあえず礼儀に従わなければいけない。俺達は頭を下げて感謝の意を述べた。すると青髪の男、ランドルフは少し機嫌が悪いのか、吐き捨てるように鼻で笑った。

「お前ら助ける訳じゃねえよ。こっちも国宝石の事を知りたい。王子様がいればそれが分かるんだろ？」

やっぱりオルヴァーが俺達を城に招いてくれたのは国宝石をルーシエルが読めるからなんだろうな。

その癖、俺達には国宝石が危険だって言ってくるし、訳が分からない。まあそんな危険な物をルーシエルに使わせる訳にはいかないんだけどな。

ランドルフの乱暴な物言いをデュークがいさめて、俺達に改めて挨拶をした。

「ランドルフ、礼儀を弁えろ。ランドルフが御見苦しい真似を。お初にお目にかかります王子様御一行。私はデューク、この男がラン

ドルフで、彼がジェレミー、私の隣にいるのがローレンツ。今回のアルトラントの件は心中お察しいたします」

社交辞令を踏まえて頭を下げて来るデュークにもう1度俺達も頭を下げる。でもルーシエルは今か今かと話が切り出されるのを待てるようだ。

でも中々向こうから会話を振ってこない事に痺れを切らせて一步前に出た。

「俺ね、皆を助けたいんだ。力を貸してほしいんだ」

「ルーシエル」

「その事でこちらにも提案がある」

ジェレミーが一步前に踏み出した。一体何を言うつもりなんだろうか。

「バルディナの動きは察知している。かの国には牽制が必要だ。バルディナに包囲網を敷き、圧力をかける為に、エデン、オーシャン、ヴァシュタン、そしてパルチナ、この国達と同盟を結びたい。それに協力してくれば、君達の願いもある程度叶うはずだ」

「つまり俺達にその役目をも？」

「ああ、いま俺たちも手が離せなくてね。まあまずは女王の許可を得なければならぬが……ルーシエル王子、貴方だけを女王の部屋に案内する」

ルーシエルだけを！？

オーシャンでルーシエルを1人にさせた事で誘拐事件が起こった。しかもここは言ってみれば敵国、ルーシエルを奪われたら取り返せない。ルーシエルを行かせる訳にはいかない。

警戒心がむき出しになっていたのか、ジェレミーがつけ足した。

「我らはルーシエル王子に危害を加えるつもりはない。だが女王を必要以上に表には出せない。了承していただかなければご引き取り願うしかない」

こんなの選択肢なんかねえじゃねえか！

ライナもここは言う事を聞くべきだって言ってる。確かに話がスムーズに進むにはそうなんだろう、でも……俺はルーシエルを守らなきゃいけないんだ。

でもルーシエルは俺の手を放して前に出た。

「ルーシエル？」

「大丈夫だよ。俺行ってくる」

「では王子、俺の後を」

止める間もなく、ルーシエルはジェレミーに引き連れられて歩いて行ってしまった。俺達はその間、ここで待つしかないんだろうか。嫌な空気が漂う、付いて行きたい。くそっ！なんで女王を人前に出せないんだよ！これじゃお飾りと一緒じゃないか！

「女王はこれじゃただのお飾りだね。本当に存在してるんだろうね？」

ライナの場をわきまえない痛烈な一言に室内が凍りついた。

慌てて口を塞ごうとしたが、ライナは今の状態が不満らしい、もう1度お飾りだと強調した。

それに笑って答えたのはランドルフだった。

「ははは！そうだな、女王陛下はお飾りだよ。それは認める、だがあの方を表に出しちゃいけないんだよ」

「どうしてだい？」

「善悪を区別できないから。俺達が箱庭の中で大事に大事に壊れものを扱うかのように育てたからな。他人の悪意も善意も分らない」

「ランドルフ、それ以上は言うべきではない」

メガネの男、ローレンツに釘を刺され、ランドルフはわざとらしく大げさにリアクションして口を閉じた。でもそれはこいつらのせいじゃないか。そんなのでお飾りなんて言われたら女王陛下が可哀そうだ。

こいつらは女王を閉じ込めて陰で国を牛耳ってるだけなんじゃないのか？ だとしたら悪いのは間違はなくこいつらだ。女王は被害者じゃないか。

納得がいかないライナにオルヴァーが釘を刺した。

「この国の事情は誰にも話す事は出来ない。まあ心配せずとも王子に女王が御話なされるはずだ」

「だからどういう意味だって言ってるんだよ」

「よそ者のあんた達ならいずれ分かる。城の中、国民を見ていたら嫌でもな……」

よそ者ならいずれ分かる？ その言い方じゃ国民は皆判ってないとも言いたいんだろうか。少しふざけすぎてないか？ 女王を表に出さず、議会と騎士団が国を牛耳り、更に不仲とまで言われている。

可笑しい、この国はどこか可笑的い。アルトラントの様な国じゃない。他国だから情報があまり入ってこないから知らなかったけど、この国は俺が思っている以上に何らかの事情があるみたいだ。

そしてこいつらは女王を一体どうしてるんだ？ ライナから聞いたクーデターの件と関係があるのか？

何とも思わないのか？ デューク議員も表情を変えず、ローレンツもランドルフとオルヴァーを止める事をしない。実際、女王は騎士団

によって幽閉されているのか？何も分からないし、向こうも教えてくる気は全くない。

とてつもない焦燥感が襲いかかる。ルーシエルは大丈夫なんだろうか、あいつに何かされてないだろうか。

そして俺は知る時が来る。

この国の女王に課せられた辛い使命を。

「すぐに分かるさ。この国がどれだけ異常で、どれだけ脆いかって事をな」

## 24 箱庭の女王

ジェレミーさんについて来いって言われてダフネとライナお姉ちゃんと別れて、後について行って先には隔離された空間があった。塀の扉を開ければ、中には綺麗なお花がいっぱい咲いたお庭の中に、小さな家が建っていた。ここが女王様のお家なのかな？

### 24 箱庭の女王

女王様のお家なのになんでこんなところにいるんだろう。ここもお城なんだけど、お城の中に自分の部屋は無いのかな。なんだかここだけ別の世界って言うか……不思議な空間だ。

ジェレミーさんがノックして扉を開けたら、赤毛の女の人が入ってきた。

「あれジェレミーようこそ！待っててね、今紅茶入れるね」

「ああ、今日は客も連れてきた。その分もよろしく頼むよ。それより……感づいたのか？」

「……うん、ローレンツから貰った書類見てね……無意識に」

「そうか、議員が1人怪我をしてね。タイミングがタイミングだけに不思議に思っていたら……あれほど考えると言ったのに。また約束を破られちゃったな……後は俺たちがやっておくよ。彼女には荷が重すぎた」

そう言って笑うジェレミーさんは悲しそうだった。女王様は身体が弱いのかな。でも約束を破られちゃうって何なんだろう。無理して働き過ぎちゃったのかな？

女の人はこっちに視線をよこして何かを言おうとしたけど、ジェレミーさんが女王様が来てくれたら話すって言ったから、女の人はそのままお家の中に引っ込んでしまった。ジェレミーさんに案内されてお家の中に入る。

「少し狭いけど我慢してくれ王子様」

「大丈夫だよ。でもこのお家可愛いね。おとぎ話に出て来るお家みたい」

「女王の好きな物ばかりを集めたからね」

お家の中は可愛い小物や家具で埋め尽くされてた。1つ1つが可愛らしく作られた物ばかり。ミッシェルがすごく喜びそうなお家だな。女王様と仲良くなったらミッシェルを連れて来てあげたいな。中の部屋に通されて、ふかふかのソファに腰掛けたら思った以上に身体が沈んじゃってジェレミーさんに笑われちゃった。うー俺はダフネ達の代表なんだから、もっとしっかりしなきゃ駄目だよ。奥ではいい匂いが漂ってくる。紅茶の匂いかな。

その時、隣の扉が開いて中から出てきたのは金髪の女の人だった。すっごく可愛い人。線が細くて華奢な女の人。もしかしてこの人が女王様なのかな？

ジェレミーさんに支えられてソファに腰掛ける姿を見て、女王様だって確信した。

でもジェレミーさんは少し怒ってるみたい。

「また約束破った」

「ごめんなさい、考えちゃ駄目って分かっているんだけど……自分でよく分からなくて」

「貴族の腐敗がどこまで進んでるかは分からないけど、俺達が何とかする。イヴは何も心配しなくていい。約束して、もう力を使わないって」

「うん」

2人は指切りしてる。なんだかすごく仲がいいみたい。俺とダフネみたいな感じなのかなあ？

赤髪の女の人が紅茶とタルトを持って来て、イヴさんの隣に腰かけた。食べていいって言われてタルトを手にとって口に入れた。

すごく美味しい！しかも温かいから手作りでできたばっかなんだな！

むしゃむしゃと食べながら何を話すんだろうってドキドキしてたら、不意にジェレミーさんが話を振ってきた。

「イヴ、あの子はアルトランドの第2王子。国宝石の文字が読めるらしい」

「そうなの……」

悲しそうな顔をして俺を見て来る。俺ってそんなに悲しい子なの？自分では全然理解できないけど。

ジェレミーさんは俺の紹介を軽くした後、いきなり本題をイヴさんに突きつけた。

「イヴ、バルディナとアルトランドの話だ。アルトランドはバルディナに侵略された」

「え？」

目を丸くするイヴさん。まさか知らなかったの？国の女王様なら知ってて当然の話なのに。ジェレミーさん達は教えてなかったの？口をパクパクさせているイヴさんを庇うかのように赤髪の女の人がイヴさんの体を抱きしめる。

そしてあやしながらイヴさんに大丈夫だよって囁いてる。なんだかダフネが俺にやってるみたい。変なの、イヴさんは俺よりも年上な



のに。

「メリッサは知ってたの？ どうして教えてくれないの？」

「それは……」

「そうやって感情的になるからだよ」

ジェレミーさんの言葉にイヴさんは何かを思い出し、俯いた。感情的になったら駄目なの？ 悲しいって思ったら駄目なの？ なんてイヴさんが悪いみたいな言い方するの？

「イヴ、バルディナは国宝石を解説し、ゲーティアを探す気だ。ルーシエル王子は国宝石に書かれた文を解説できる。バルディナが狙っているのはそれだ」

「うん……」

「そこでだイヴ、俺達はルーシエル王子に協力してゲーティアを探したいと思ってる。もし探し出せたら……お前を外に出せるかもしれない」

「外、に……」

外に出せるって何？ 女王様はここにずっと閉じ込められてるの？ 訳が分からないよ。

でも女王様は何も知らない。もしかしたら俺よりも世間知らずなんじゃないのかなあ。ここに閉じ込められてるのなら。どうして女王様にそんな事するの？ 外に出せるってどういう事？

でもイヴさんは外って単語に敏感に反応して何度も頷いた。その目には期待が入り混じってる。

「私、外に出たい」

「ああ、俺も出してあげたい。だからイヴ、君も協力してくれ。それにバルディナの侵略に対抗する術はゲーティアしかないんだ」

「バルディナはここも襲ってくるの？ そんなの駄目っ！ 駄目駄目駄目！」

「イヴ、感情的になるな！」

「落ちついてイヴ！」

ジェレミーさんとメリッサさんに言われて、イヴさんは冷静さを取り戻した。

なんだったんだろう。でも俺だって同じ反応するのに……どうしてイヴさんがしたら駄目って言うんだろう。あんなに怒られるなんて納得いかない。

イヴさんは気まずそうにしながら、俺に視線をよこした。

「ルーシエル君、国宝石の事なら私も少しは役に立てる。だから一緒に頑張ろう」

「え？ うん。頑張る」

笑ったイヴさんはさっきまでの雰囲気嘘の様だ。柔らかく優しい笑みを浮かべている。

なんだかイヴさんは少し幼い気がする。あ、俺が言ったら駄目なのかなあ。お話が合いそうだからお友達になれそうって思ったんだ。イヴさんの話を聞いたジェレミーさんは安心したように笑って立ちあがった。もう帰るみたいだ。ってことは俺も帰るんだよね。俺も立ちあがったらイヴさんは寂しそうにした。

「もう帰るの？」

「ああ、また来るよ。何か欲しい物はある？」

「そんなの無い。でもお外に出たい。お城の中でもいいの。ここから……」

「……それはまた今度だよ。外の世界は汚い物ばかりさ」

悲しそうなイヴさん。どうして外に出ちゃいけないの？ミッシェルもいつも外に出たたって我侭言ってたけど、お城の中は比較的自由に行動できた。誰の制限も無かった。ご飯やおやつの時間までに戻ってくれば。

でもこの女王様はそれさえも許されない。お城の中を歩くことさえ駄目なの？そんなの可笑しいよ。女王様なんだから、ここは女王様のお城なんでしょ？なんでその中を好きに歩いちゃいけないの？

ジェレミーさんが一体何を考えてるか俺にはさっぱり分からないよ。

「イヴさん、今度ね、一緒にお城探検しよう」

「え？」

「面白い物あるといいね」

「う、うん！」

ほら、イヴさんは嬉しそうに笑う。

でもそれをメリッサさんは気まずそうに、ジェレミーさんはかなり迷惑そうな顔をした。

どうしてそんな顔をされなきゃいけないの？確かにジェレミーさん達は外に出したくないって言ってたから、俺のこんな誘いは駄目って思うかもしれないけど、イヴさんは喜んでるじゃん。嬉しそうにしてるじゃん。

なのにどうしてそんな顔をするの？

イヴさんが大切ならイヴさんが笑ってくれたら嬉しいんじゃないの？なんでそんな嫌そうな顔をするの？

ジェレミーさんが俺に出ようと言って来て歩いて行った後を追いかける。

後ろから、約束だよ！って聞こえて、俺も笑って頷いて手を振った。お城の中を探検するって楽しそうだな！

お家から出て、綺麗な庭を前にして黙っていたジェレミーさんが振

り返った。その目は少しだけ怒りを宿していて、何だか怖くなって、少しだけ後ずさってしまった。

「王子、我らの事情に口出しはしないでいただきたい。女王に余計な希望は与えないでくれ」

「余計な希望って……だってここは女王様のお城でしょ？ ファライアンって女王国でしょ？ なんで女王様がお城の外だけじゃなくて、お城の中も歩いちゃいけないの？ そんなの可笑しいよ」

「それを貴方が知る必要はない。女王をこの場所から外に出すのは許されない」

「こんな所に閉じ込めてたら駄目だよ。可哀そうだよ！」

「これはファライアンの女王の宿命だ。外の世界に疑問を持たせられない、女王は死ぬまであの場所で過ごすのがファライアンでの女王の生き方なんだ」

何それ……あのお家とこのお庭の中に死ぬまで閉じ込める気なの？ そんなのあんまりだよ！

ファライアンの綺麗な港を見ないの？ 賑わってる市場を見ないままなの？ 白い壁の綺麗なお家の中に入れないまま死んじゃうの？ そんなのいじめだよ！ こんなとこに閉じ込めちゃ駄目だよ！

「こんなの酷いよ……ここは牢獄だよ」

「牢獄よりは設備がいいだろう？ 箱庭って言ってくれないか？ この景色は変わらない。いつまでも綺麗な花が咲き誇って、ゆったりとした時間が流れて、外の喧騒とは無縁の世界……理想的だろう？」

「そんな場所、一生いたらつまらないよ」

「……王子には多分一生理解できないよ。それでもいい、王子の理解を俺達は求めてないし、王子の理解も俺達には必要ない。ただ女王をこの場所を守るのが俺達の使命」

そう言ってジェレミーさんは先に歩いて行ってしまった。

残された俺は追いかけるしかできなくて、閉められていく門をただジッと見ていた。

その後、部屋に通されて、心配していたダフネが何かされなかったか？って一杯聞いてきてくれて嬉しかった。これが普通なんだよね。こうやって心配してくれて、でもちゃんと外に行くのを許してくれる、これが普通なのに……

「ルーシエル、どうしたんだい？」

「なんでもないよライナお姉ちゃん」

本当は何でも無い。この国に来て正解だったのかな。もしかしてなくても俺は利用されてるんだよね。

フライアンに行けたら何とかなるって思ってた。でも違う、絶対に違う。

ここは可笑しい。

## 25 腐敗した議員

ルーシエルが女王の所に連れていかれて何を見てきたのかは分からない。でもルーシエルは何か引掛かっているようで首をひねっている。その理由がなんなのか、俺には分からない。

聞いても内容は教えてくれない。教えたら駄目だとジェレミーに言われたらしい。それなら仕方ないんだろうけど、正直気になって仕方が無い。

## 25 腐敗した議員

「おいダフネつつったか。ちょっと面貸せよ。王子もいなくて暇だろ？」

ルーシエルが戻ってきてから与えられた部屋に泊まり1日が過ぎた。この日もルーシエルは女王の所に向かい、ライナと2人で他愛ない話をしている最中に扉が開き、第2騎士団団長のランドルフが入ってきた。

相変わらず何だか嫌な態度の男だな。確かに暇だけども。

「何か用ですか？」

「てめえを鍛えてやるよ。一応士官学校は卒業してんだろ？学生気分が抜けてねえ奴の根性鍛えなきゃな」

「学生気分って……」

「訓練と実践の違いを教えてやるよ。来い」

少し言い方にむかついたけど一理ある。国外逃亡を図っている最中

は剣の稽古なんてしている余裕も無かった。これから相手にしなければならぬのは騎士や軍の人間達だ。俺よりも遥かに強い。自分も稽古してそれなりのスキルを身につける必要がある。

相手は第2騎士団の団長だ。稽古をつけてくれるには絶好の相手だ。

「ライナ、お前は どうする？」

「あたしかい？ あたしはちよいと調べたい事があるから城下におりてくるよ。夕飯までには戻るさ。あんたは鍛えられてきな」

城下か……俺も行きたい。でもルーシエルもないし、置いていく訳にはいかないよな。稽古もしたいし。今度時間があつたら街を回ってみよう。ライナと別れて、ランドルフと2人で騎士団が使っている稽古場に向かう。

稽古場は騎士団の奴らが打ち合いしたり、兵法を話してたりで結構がやがやしてる。ランドルフは空いたスペースに入り、体を動かした始めた。

「おい、体はほぐしとけよ。稽古つつつても下手して靱帯損傷する馬鹿もいっからな」

「あ、はい」

ランドルフの隣で柔軟体操をして体をほぐす。本当に打ち合いをするつもりらしい。ランドルフが出てきた事と、見た事ない奴がいると言う事で周りはやじ馬で囲まれていく。

そしてある程度ウォームアップが終わったらしいランドルフが剣を手にとった。二刀流ってわけか……かなり身軽そうだから間合いに注意しないとな。

「行くぜ素人」

ランドルフがこっちに向かって走ってきた。敵うなんて事は思っていないけど、何とかして少しでも対抗できるだけの腕があるって信じていたい。

そして自分に向かってきた刃に剣を立てた。

「……まあ見込みはあるだろうな。思ってたよりも良く動いてたと思うぜ」

「そりゃどうもっ」

全く歯が立たなかった。状況判断や戦術、間合いの取り方にスイング……全て相手の方が上回ってた。これが騎士団団長の実力か。座り込んでしまった俺にランドルフが近づいてくる。

「てめえは確かに才能はある。だが今はそれだけだ。これからは時間が許す限り通う事だな。今のお前じゃ役者不足だぞ」

「そうですね……精進します」

才能があるって言われただけマシなのか……でもこれからはルーシエルを守るために俺だってバルディナの騎士団と戦わなきゃいけない日は必ず来る。

ここで少しでも自分自身のスキルアップに繋がるなら時間が許す限り通い詰めるべきだろう。俺たちに残されてる時間は少ない。まずは国王と王妃の処刑を食い止めなければ……やらなきゃいけない事はたくさんあるはずだ。

ランドルフが剣を構え距離を取る。どうやらもう1本やるみたいだな。よし、今度こそは！



「ダフネさん、ライナさん」

フライアンに身を置いて5日が経過した。相変わらず客人扱いで毎日稽古場に通う以外に何かをするって訳じゃないけど、ルーシエルはその間にもう1回、女王の所に連れて行かれた。

何をしてるのは教えてくれない。でもルーシエルが大丈夫だって言うから俺はそれを信じるしかない。

今日もルーシエルは女王の所に連れていかれている間、ライナと他愛ない話をしながらルーシエルを待っていた。その時、扉が開いてローレンツが顔を出した。

「ローレンツさん？何か御用ですか？」

「国の会議を見ていただきたい。貴方達は我らの国に疑問を持っている。その疑問が何か、少しは解決するでしょう」

「でもそんな重要な会議に俺達が参加してもいいんですか？」

「貴方達に関係があるから要請しているんです。準備は必要ありません、すぐに始まるので来ていただきたい」

ローレンツの後をライナと顔を見合わせて付いて行く。俺達に何かがあるって事はバルディナとアルトラントの件を引き合いに出すんだろうか。ローレンツは少なくとも話し合いの場を設けてくれたってとこなのかな？

フライアンはバルディナに脅威を感じてくれたらまずは順調だ。ローレンツに連れられて、広い部屋に通された。その中には丸い大きなテーブルに椅子が備え付けられ、既に多くの椅子には誰かが腰かけていた。空いている席に座らされて、その隣にローレンツが座る。そのまま数分経てば時間になったのか、デューク議員が立ち上がり、会議を始めと言った。

議題が出され、議員達が話をしている中、コソツとライナに話しか

けた。

「ジェレミー達がいらないな。軍の人間は出ないのか？」

「周りを見る限り、今回は貴族や評議会だけってところだろ。政治的な話に軍の人間は細かい所までは関われないからね」

まあ軍人が政治的な話を分かる訳ないし、当然っちゃ当然か。俺も分かんないけど。

話し合いはやっぱりバルディナとフライアンの話だった。バルディナがどう動くかによってフライアンはどうするか、と言う物だ。相手がフライアンに好戦的な態度をしてきたら宣戦布告するのか、話し合いで解決するのか、その為には他国との同盟は必要か。

意見は真っ二つに分かれている。戦争せずに少しの譲歩を許そうと言う奴と、軍事費を増やしてきたのはこの時の為だろう、何を臆する必要があるのだ。と言う奴。まあ戦争しなきゃいけないって言う場合は大体この2つに分かれるんだけどな。

話には参加せずに、俺とライナはただその光景を見ている。

それにしてもフライアンは1枚岩ではないらしいな。こんなに揉めるなんて……こりゃ戦争を決めるのもかなりの時間がかかりそうだ。

「しかしバルディナに対抗するとしても同盟国はどこにするのだ？東天は鎖国を貫いているし、パルチナは信用できん。エデンとヴァシュタンと言う事になるのか？」

「ヴァシュタンは我が国と親交があるがエデンは……オルヴァーの奴に行かせるのか？」

「独立国家との同盟は避けられん。気に食わん奴らだが、その技術の高さゆえ独立を貫けるんだからな」

「だが今の状態でバルディナには敵わん。奴らはアルトランドの兵も戦争に出してくるはずだ。フライアンが潰される前に条約を出

せばいいじゃないか」

「それは実質上負けになる。バルディナの奴隷政策を知ってるのか！？」

国会はかなり荒れている。ローレンツが納めようとしてるけど、激しさを増したこの場所ではローレンツの言葉は届かない。

その時、ある議員が口にした。見た目は30前半。今までの話し合いでも中心になって発言をしていた奴だ。

「こんな時こそ女王の出番じゃないのか？お飾りの女王なんだ、同盟の為にバルディナにくれてやっては……」

「リ्यूツ貴様っ！我らが国のシンボルをなんと心得る！この無礼者が！」

「リ्यूツ議員の言う通りだ。私は生まれてこのかた女王を見た事が無い。大体女王自体フライアンには存在しているのか？軍人達が実質フライアンは支配している様な物じゃないか」

「ダット！お前まで……」

女王を引き渡すなんて、よくもそんな事を……その言葉に国会は更に荒れている。

けど中にはその存在自体が分からないって言ってる奴もいる。国民だけじゃない、評議委員でさえ女王を見た事が無いんだ。なぜそこまでして女王を表に出さないんだ？確かにこれじゃ女王が架空の人物と思われても仕方がない。

ルーシエルは女王に何度も会っている。だから実際には女王がいるんだらうけど、確かにジェレミー達が国を支配しているように感じる。

どうなってるんだこの国は。肝心の最高権力者である女王が姿すら現さないなんて……

「落ちついてください、これだけは断言できます。この国にイヴ女王陛下は確かに存在しています。ですが女王陛下はクーデターの件から自ら姿を出す事が出来なくなっているのです」

ローレンツの言葉に国会は静まり返る。

でも納得のいかないリ्यूツやダットって議員の他にも数人がローレンツに食ってかかった。

「なぜ女王は我らの前に姿を出さないんだ？書類を渡すのもローレンツ殿、貴方が行っている。貴方の言葉に信憑性等無いのだよ」

「何を言われてもフライアンは今の状態を維持する。女王は国のシンボル、それだけは変わらない」

「我々評議委員にくらい女王を見せてくれないのではないか？」  
「言ったでしょう。今の状態では不可能です」

だからなぜ無理なんだ！リ्यूツがそう叫び、苛立ちからか机に拳をぶつける。それをローレンツは少し気まずそうに視線を逸らして無言を貫いた。

この状況から判断すると、ローレンツとデューク以外の議員は女王の姿を知らなさそうだ。デューク議員は分かる、最高評議委員だから。でもなぜローレンツが？こいつは議員の中では発言力が高いのだろうか？まだ若そうなんだけど……

苛立ちを隠せないリ्यूツ達を一部の議員が敵対視するような視線を向けている。同じ議員同士なのに、ここまで争うなんて……

「見苦しいぞリ्यूツ、女王は存在する。だが表には出られんのだ。過去のクーデターを繰り返したくないのならば今の状況に口を挟まぬ事だ」

「デューク議員、しかし！」

「何度言っても同じだ。死に急ぎたくないのならば、出過ぎた行動

は控える事だな」

デューク議員の言葉に、貴族や評議委員は押し黙った。

結果、話し合いは平行線。時間が来て解散と言う形になった。去りに際に議員達がローレンツに非難の目を向けて去っていく。そして最後に俺達とローレンツだけが残された。

疑問は一杯ある。なんで議員の一部はあそこまでしてバルディナに媚を売ろうとするのか、女王を人質として渡そうなんて、普通ならば考えないはずだ。そしてその原因となっているのは女王が国民に姿を現さない事。なぜ女王を表に出さないのか……ローレンツの言い方じゃ過去のクーデターと間違はなく何か関係している。

でもクーデターが起こった事は議員だけじゃなく国民なら誰もが知ってるはずだ。それなのに女王が表に出れない理由を議員は知らない。クーデターで一体何があったんだ……？

「あんた達の国は国として成り立ってないね。女王は国のシンボル、シンボルは希望。肝心の希望の姿を知らないんじゃ、シンボルなんて説得力がないよ」

「それも真実ですから仕方のない事です」

ライナの痛烈な批判にローレンツは困ったように笑った。

これだけライナに馬鹿にされてるのに、ローレンツに苛立った雰囲気は見られない。本当の事だから仕方が無い。そこまで言いきってるんだ。

「女王は絶対に表には出せない……私達が作った箱庭で一生を生きていくしかないのです。時期王位継承者が現れるまで」

「……変わった国だね」

「そうですね」

「だが、なぜ議員達はあそこまで戦争を回避させようとする。確か

に戦争はしないに越したことは無いが、バルディナが話の通じる相手じゃないのはアルトラントの情報で分かるだろう。女王を差し出してまで戦争を回避させたいかい？」

「ええ、反対派の議員の一部は恐らくバルディナに女王を引き渡し、然るべき地位を与えられる事を望んでいる」

なんだって！？そんなの反逆罪じゃないか！

そこまで分かってるのに、なんでローレンツは手を打たない。そんな奴を議員に据えていては危ないのは分かってるだろう？でもローレンツはそれをしない。それはどうして……

「彼らを追放すれば、その情報は国民に広がる。混乱は出来るだけ今の状況で起こしたくはない」

「なるほどね。だが食い止められるのかい？」

「食いとめて見せる。そこでダフネさん、ライナさん、頼みがあるんです」

「頼み？」

「……エデンに向かってくれませんか？」

魔術国家エデン、この世界で唯一魔術と言う化学で証明できない物を扱う国。

元はファライアンの属国だったが、ファライアンの差別の激しさからエデンは独立戦争を起こし、独立国家を形成した。

以来ファライアンとは仲が悪いって聞くけど……

「我らには戦力が必要です。最強の武器と言われているザイナスの銃と対等の力を持つのは彼らしかない。まずは大陸内を1枚岩にしなければバルディナにすぐ隙を突かれる。ですが私達は外に出られない。女王を守らなければならぬから。貴族や議員の中には密偵を雇って女王を探させている者達がいる。それをしらみつぶしに

潰してるのがジェレミーや私達だ」

「どうしてそこまで女王を出さないんだ？掟に縛られるのは辛いもんだよ」

ライナには分かってるんだ。オーシャン民族の掟にずっと反発してたから。掟に縛られる事が自由を望む人間にとってどれだけの障害か。

ローレンツは力なく笑った。

「そうですね、私達も女王を外の世界に出したいのです。ですがそれが出来ない、女王は呪われていますから……」

「呪い？」

「いずれ分かる時が来ます。私達がどうして女王を箱庭から外に出さないのか」

「ダフネ、ライナお姉ちゃん！お帰り！」

与えられた部屋に戻ると既に戻っていたらしいルーシエルが飛び込んできた。それを受け止めて一緒にベッドに腰掛ける。  
でもライナは難しそうな表情をしたままだった。

「考え過ぎんなよライナ。眉間にしわ寄ってんぜ」

「いや、少しな。ダフネ、あたしはこの間調べたい事があるから城下におりたよな」

「え、ああ」

「過去に言われただろう？余所者のあたし達なら、この国がどれだけ異常かがすぐに分かるって」

そう言えばそう言う事も言われたな。ルーシエルの世話に剣の稽古に忙しかったから忘れてた。でも思い返しても異常な所は見つからなかった。

貴族が女王を売ろうと考えてるって事くらいしか……それ以外にも何かあるんだろうか？

「城下におりたとき色んな奴に聞いて回ったんだ。女王を見た事があるか、女王をどう思っているかってね。姿を5年以上も見せてないんだ、国民は女王を国の象徴の存在と言う程度の認識しかないと思ってた。だが実際聞いてみると、どいつもこいつも女王を崇拜してる。姿も見せていない、生存しているかすらの情報も流されない、それなのに国民はイヴ女王陛下を褒め称えていた。言動に規制がかかって無いフライアンの国民が言うんだ、本心なんだろう。だが1人たりとも女王の存在や意味を疑う奴がいなかった。可笑しくないか？」

確かにそれは可笑しい。ライナが言うには50人近くの人間に聞き込みをしたんだそうだ。それなのに女王を悪く言う奴は1人もいなく、姿すら出していないのに素晴らしい方と皆が口を揃えて言ったんだそうだ。

姿を見た事があるか？と聞けば全ての人間が5年以上は見えていないと答えておきながら。

少しも疑問が湧かないのか、どうして女王が姿を出さないのか、議会の奴らが抱いた疑問はいたって普通だ。俺だって国王が5年以上姿を出さなかったら何かあったのかと疑う。でもここにはそれが無い。

「この国の女王崇拜は妄信的だ。一体何が国民をそうさせているのか分からない。だが国民は自分達が可笑しいと言う事すら気づいてない。あいつらが言ってた余所者だったら可笑しい事にすぐ気付く



って事はこれなのかもしれない。だが議会だけは女王に不信感を持つてる……そこだけは理解できない所だけどね」

難しい話にルーシエルはあくびを1つ。でもそれに反応できる余裕は無い。

やっぱりこの国は何かを隠してる。いや、女王を箱庭に閉じ込める時点で隠してるのは分かってるんだ。でもその何かが分からない。もしかしたらルーシエルなら分かるのかもしれない、女王に実際あつてるんだから。でもルーシエル自身が口に出さないんだ。今はまだ何も知らないんだろう。

——— 内も外も敵だらけ ———

## 26 閉鎖された魔術国家エデン

「エデンはファライアンの首都ファードイナンドから東南の方角に向かった所です。深い森の中に集落を構え、本当はそこを通るのに特殊な魔術がいるんですが、オルヴァーを連れていってください。彼はエデン出身です、彼ならその森の中にある集落を見つける事が出来るでしょう」

### 26 閉鎖された魔術国家エデン

「俺も行きたい！」

エデンに行くと言えれば、ルーシエルは絶対に自分も付いて行くと言かなかった。そりゃ俺だって連れて行きたいけど、エデンの人間に攻撃される心配だってある。ルーシエルを連れていくのは正直怖い。悩んでいる俺にライナがコソツと耳打ちをしてきた。

緑の国宝石には魔法使いに会って書いてたんだろう、と。つまりルーシエルは国宝石の謎を解こうとしているのか？確かにゲーティアを探す為ならしょうがない。少し危ないけど、城の中に1人残していくよりかはずっといい。

俺とライナ、ルーシエルとオルヴァーは馬小屋に向かった。

「ライナ、あんたは馬に乗れるのか？」

「ああ、心配いらないさ」

オルヴァーはライナに1頭、俺とルーシエルに1頭馬を渡し、自分も馬に乗った。ここからエデンには馬で3日かかるらしい。まあ途

中、色んな町に泊まるみたいだけどな。なんだかこうやって馬で移動とかシースクエアに向かう最中みたいだな。用件はだいぶ違うけど。

オルヴァーが腹を蹴って馬を飛ばし、俺とライナもその後に続いた。真っ青な緑が綺麗な平原を馬を使って走りぬける。見た事の無い光景にルーシエルは目を輝かせていた。

このまま飛ばし続けて、今日は隣の町のフアランに泊るらしい。少し長旅になるみたいだけど大丈夫かな。

馬を飛ばし続けて3日が経過した。

途中で3か所の町で一泊して、辿り着いた先には森が生い茂っていた。この中にエデンが存在してるのか？冗談だろ。アルトランドを出る時に貰ったコンパスがあるけど、こんな森の中じゃ狂いそうだ。オルヴァーは馬を森の入口に繋ぎ、逃げないように固定する。

「あんた達も早くやってくれ。ここから先に馬は進めないからな」

「いいけどよ……本当にこの中に存在するのか？」

「生まれも育ちもエデンの俺が故郷の帰り方を忘れる訳ねえだろ。この森の中だよ」

オルヴァーがライナが乗っていた馬も逃げないように固定して、それを真似して俺も固定する。

でも生まれも育ちもエデンだなんて、どうしてオルヴァーはフアライアの將軍をやってるんだ？フアライアンとエデンは仲が悪いんだろ。黙っていたライナだったけど、やっぱり気になっていたらしく、オルヴァーにその事を聞きだした。

「あんたはどうしてフアライアンに？生まれも育ちもここなら嫌悪感があるんじゃないのかい？」

「俺は言ってみれば駐屯大使みてえなもんだよ。エデンがフアライ

アンからの差別を受けた事をきっかけに独立してファイアンから正式な謝罪を貰ってからは駐屯大使を派遣する事に決まってな。それが俺な訳。最初は嫌だったけど、女王見たらそんなの吹っ飛んじまった。偉大な方だ」

「女王ねえ……あんたは姿を知ってるんだね」

「俺だけじゃなくてルーシエル王子も知ってるはずだけどな。行こう」

オルヴァーは適当に流し、森の中に進んでいく。

はぐれたら最後だと言われて、ルーシエルがはぐれないようにしっかりと手を繋いで森の中に足を踏み入れた。深く生い茂った木々が光を遮断し、少しだけ薄暗い。道もなにも全く分からない中をオルヴァーは平然と進んでいく。一体どうやって分かるんだよ。

「オルヴァー、本当にこの道であってんだよな」

「ああ、この森は通称迷いの森。冒険家や探検家が何度もこの森に足を踏み入れたが、エデンには辿り着けなかった。まあそれもそうだよな、この森には魔術がかかってる」

「魔術？」

「方向感覚を狂わせる魔術がな。エデンの人間には見えるんだよ、魔術がかかって無い部分だ。そこを辿ればエデンに辿り着く」

そう言う物なんだろう。魔術なんて非科学的すぎて今一良くわからない。ぶっ飛び過ぎだ。やっぱりこの世界は特殊な人間がいるってことだ。それゆえに迫害を受ける。多分エデンもオーシャンと同じように何かしらの迫害を受けたんだろう。

だからファイアンから直接的な関わりを切って、この場所に閉じこもってるんだ。そして唯一ファイアンとエデンを結ぶ事が出来る人間がオルヴァーって訳か。

森を歩き続けて数時間が経過した。くたくたになったルーシエルをおぶっている俺の体も結構ガタが来てるんですけど。

ライナも少し疲れてるみたいだけど、まだ平気そうだ。ドリンに何かを話しかけている。そしてオルヴァーが歩みをとめた。もしかしたら辿り着いたんだろうか。

「オルヴァー？」

「この先がエデンの入り口だ。いいな、何があっても俺の傍を離れるな。殺されても文句は言えなくなるぞ」

脅すんじゃないよ。

オルヴァーが一步踏み出し、森の中を抜ける。その先には森に囲まれてはいるけど開けた場所に辿り着いた。その先には家が立ち並んでいる。ここが、エデンなのか。

呆けている俺達にエデンの人間の視線が突き刺さる。なんでよそ者がいるんだ。明らかに目がそれを物語っていた。

オルヴァーはその視線を跳ねのけるように真っ直ぐ1つの家に向かって歩いて行く。どうやらあの家が長老の家の様だ。

エデンの人間が不快そうな表情をしながらも、俺達に関わるのは嫌なのか遠巻きに眺めている。正直言ってオーシャンよりも居心地悪いな。こっちは陰湿な感じが漂いすぎだ。

オルヴァーによって扉が開けられ、中に入るように促される。家の中には老人と、その娘だろう50前半のおばさんがいた。老人は手に水晶を持ち、来たか……と呟いた。

来た？もしかして俺達が来るのが分かっていたのか？どうやって分かったんだ。密偵でもいたのか？

「久しぶり。じいさん、母さん」

あーオルヴァーは長老の孫だったのか。だったら駐屯大使になってもおかしくない。それ相応の身分だろう。

じいさんは水晶をソファに置き、座るように促した。

「馬鹿な孫がフライアンの人間を連れてきたわい。わしらに何を望む」

「馬鹿言うなクソジジイ。この方はルーシエル第2王子。アルトランドの皇太子だよ」

「バルディナに潰されたアルトランドのねえ……」

老人とおぼさんの視線が俺達に向けられて気分が悪い。ルーシエルも居心地が悪そうだ。

その空気を感知したのか、オルヴァーは注目を自分に集める為に話を切り出した。

「今日はフライアンの大使としてのお使いだ。フライアンはエデンに協力を要請してる。バルディナの次の標的はフライアンだろう。まずは大陸内を1枚岩にしないといけない」

「ほお……ルネ、あいつらを呼んでこい」

「分かったわ」

おぼさんが老人に言われるがまま家を出ていく。あいつらって誰なんだ？

「悪いな。今から少し話し合いになる。エデンでは民衆を率いるのは歳が40までって決まりがある。じいさんはとくに引退してるから、じいさんがOKしても意味ねえんだよ」

「そうなのかい。あんたの父親でも年齢的に無理なんだろうね」

「俺の親父はフライアンのクーデターの際に死んだ。だから俺が向こうに派遣されてるんだ」

オルヴァーの父親はクーデターで命を落としている……それなのに  
フライアンにここまで尽くせるのか？そんなに女王は素晴らしい  
人なのか？

そしてエデンにそんな風習があるなんてな。40って若すぎやしない  
か？国を引っ張るのはもう少し上でも全然問題ないはずなのに。  
まあ他人の風習をとにかく言う趣味は無い。そいつらが到着するま  
で、聞きたい事を聞いてもいいんだろうか。

ルーシエルも同じ事を思っていたらしい、俺を見ている。それに頷  
いて、老人を見据えた。この人なら何か知ってるかもしれない。

「御伺いしたい事があります」

「なんじゃ、アルトラントの王子様達」

「国宝石の秘密を御存じないですか？緑の国宝石には魔法使いの国  
と記されていたようです。魔法を扱うのはここしかない」

「……なぜ記されていた文章を読めた」

「それを言うことはできませんが……ご存知ならばお話を御伺いし  
たい」

老人は俺達をじっと見据えている。どうやら何か知っているようだ。  
そしてオルヴァーを交互に見定め、溜め息をついた。

「オルヴァー、お前達フライアンはゲーティアを手に入れるつも  
りか？」

「ああそうだ。軍事国であるバルディナや最強の武器とも言われて  
いる銃を扱うザイナスの侵略を追い払うのにフライアンとエデン  
だけじゃ無理だ。他の国にも要請を頼むが、それはバルディナもす  
るだろう」

「愚か者が。ゲーティアの呪いも知らずに……お前も女王にたぶら  
かされたか」

「女王を愚弄するな。いくらあんたでも許さない」

オルヴァーの殺気が激しくなる。本物のそれに息を飲んだ。何だかヤバイ雰囲気になってしまった。一触即発の状態だ。ライナはその光景を黙って見ている。観察力が鋭いから何かを探ってるんだろうな。

老人は黙っていた重い口を開いた。

「確かに我がエデンが600年前の世界大戦の際、英雄ダレンにゲートティアを与えた。だが強大な魔術にはそれ相応の対価が必要になる」

「それ聞いた事があるよ。オーシャンが言ってたよ」

身を乗り出したルーシエルに老人は少しだけ困ったように笑う。それを知っているのに探そうとするのか。目がそう訴えかけていた。でも疑問だ。エデンがゲートティアを作ったって言うのなら、エデンがいればゲートティアの様な魔法を再び作り出せるんじゃないか？ そうしたら国宝石なんかなくてもバルディナを……

「あの、エデンがゲートティアを与えたって事はエデンが作ったって事ですよね？ 今もその技術が……」

「残念じゃが、あれは古代魔法じゃ。1000年以上前のエデンが数万人もの血を代償として作った魔法。その方法が記された物は全て無くなり、わしらが再び同じ魔法を作ることはできん」

そうか、まあ話が出来過ぎてるもんな。ゲートティアの魔法をエデンがいくらでも作れたのなら、エデンが最強の国って看板をしょってもいいもんな。

落ち込む俺の隣に腰かけていたオルヴァーが再びゲートティアのヒントを聞こうと口にした。



「じいさん、俺は女王を外に出したいんだ。あの忌々しい日から女王は箱庭から出られなくなった。女王の呪いを解く為にもゲーティアが手掛かりになる」

「ゲーティアの呪いは解けん。女王は一生あのままだ」

何の事なんだ？さっぱり分からない。しかしライナの言葉にオルヴァーが息を飲み、老人が目を見開いた。

「なあ、女王を箱庭に閉じ込めて世間に出していない割に国民の女王を支持する力は相当なものだ。これは異常だ、妄信的な何かを感じるね」

「……オルヴァー、お前言ってないのか」

「言う必要が無かった」

「馬鹿ものが。お嬢さん、王子様達、それこそが青の国宝石の呪いなんだよ」

「呪い？」

確かローレンツも女王は呪われているって言っていた。国宝石の呪い？じゃあルーシエルもそれにかかるかもしれないのか？オーシャンでマイアが国宝石の魔法を受け継げば、その代償があるつつつてたけど、それが呪いって意味なんだろうか？

オルヴァーは唇を噛み、何も言う気は無いらしい。

そんなオルヴァーの代わりに老人が言葉を放った。

「青の国宝石……民衆を魅了し、全てを包み込む優しさ。国宝石を継承した者はその加護を受け継ぎ、民衆は魅了される。しかしその代償に全ての者を平等に愛す事を強制し、1人の対象を愛す事、他人を憎む事を禁じる。その禁を破った場合、主にも相手にも恐ろしい災いが降りかかる」

「じゃあ女王が出て来ないのは……」

「鋭いなお嬢さん、そうだ。女王を外に出す訳にはいけない。接する人間が多ければ多いほど、誰かを憎む事も、誰かを愛する確率も高くなる。だから女王はあの場所に閉じ込められているのだ」

それがファイアンの女王の真実なのか……女王は誰も愛せない。全ての人間を同じように愛するしか方法が無い。だからジェレミー達はあの場所に閉じ込めて情報を流さないんだ。

女王に余計な感情を与えないように、刺激しないように。女王を守る為に……でも閉じ込める事によって回避できる物なのか、女王はそれでいいのか、外に出たがらないのか？

「他の国宝石にも呪いが？」

「無論。バルディナが持つ黒の国宝石は全てを屈服させる力、その代償にその力に魅入られて、破壊行動を繰り返すようになる。パルチナが持つ紫の国宝石は全てを欺く力。その代償に周りを欺き生き続ける為、最終的に己自身も欺き、分からなくなる。ルーシエル王子、あんた達アルトランドが持つ緑の国宝石は全てを癒す力。その代償にその傷を受け入れる事で寿命をすり減らす」

「なんだって!？」

ルーシエルも驚いてるけど、俺もそれと同じくらい驚いている。寿命をすり減らす? そんな馬鹿な話あるか! 捨てさせなければ! 慌ててる俺をオルヴァーが諫めようとしてくる。そんなの悠長にしている訳にはいかない!

「落ちつけダフネ、心配するな。王子様は国宝石の主になってはいない。大丈夫だ」

「ど、どうやってたらそんなの分かるんだよ」

「王子様自身が契約の手続きをしてないんだ」

それを聞いて少し安心した。ルーシエルもライナもだ。じゃあなんで女王は契約したんだ？契約さえしなければ、女王は箱庭に閉じ込められずに済んだのに……そして

「じいさん、赤の国宝石はどうなんだい？」

「東天が持つ赤の国宝石は大いなる民衆を導く希望の光。その代償に永遠に導き続けなければならない為、肉体が老いる事が無くなる」

「じゃあダレンは……」

「ああ、奴は生きている。あの日から時間が止まり、国宝石の呪いを強いられ、奴は今でも東天のリーダーだ。東天は今でも奴が表立って率いている。奴は見ているのだよ、英雄と言う名の神様の椅子を手に入れたその日から、今までの世界を」

600年前の世界大戦の英雄、ダレンが生きている。その事実が胸の中に浸透していく。

じゃあダレンさえいてくれれば、そんな英雄がいてくれたら士気が上がるのは間違いない。でもどうして鎖国なんてしたんだ。そんな事しなくてもダレンの言う事なら聞くんじゃないのか？

「どうして東天は鎖国を？」

「ダレンは愛想が尽きたんじゃないよ。小競り合いの終わらない世界にね。こんな世界にする為に仲間も家族も全て犠牲にした訳ではないのに、結局はどの国も独自の発展を遂げ、いがみ合う。それならば自分の国だけでも守ろうと情報統制をし、鎖国体制を敷いた」

そんな事が……じゃあ東天が鎖国したのはダレンが他の国に絶望したから。自分達が血を流して手に入れた平穏を崩していくのが気に食わなかったからなのか……

ルーシエルは俺の服の袖を掴み、ライナは何かを考え込んでしまっ

た。

暫く無言が続き、その空気に耐えられなかったのかオルヴァーが出ていってしまう。そしてそれを追いかける様にライナも出て行った。これからどうなるんだよ……

—ライナ side —

「聞きたい事があるんだけどいいかい？」

「なんだよライナ」

ある程度話が終わって、出て行ったオルヴァーを追いかけた。

オルヴァーは家から出て、少し離れた所で座りこんで、空を見上げていた。この深い森におおわれた中で唯一、この村の中だけが太陽の光を浴びる事が出来る。森の中に入れば、光が遮断され、昼間でも薄暗いから。

「姫さんの事……一体どういう事だい？ あんた達がそこまで外に出したいなら、どうして国宝石を継承させた。忌々しい日ってどういう意味だい？」

あそこまで躍起になるなら、どうして間違いを犯した。どうして箱庭に閉じ込める必要があった。女王が望んでした事なのか？ 自ら継承したって言うのか？

だがきつと、あたしが思っている以上に複雑な事情があるはずだ。だからオルヴァーはこんなに辛そうな顔をしている。

「……あんたも知ってるだろう。フライアンのクーデターの件は」

「ああ、犠牲者は数万人、死者は1万人以上だったクーデターか。確かパルチナの情報操作のせいだったね。騎士団の被害が最もでかく、フライアン壊滅のカウントダウンとまで言われてた。まさか……そのクーデターを鎮める為に？」

あたしの仮説が外れていたのか、オルヴァーは笑いだした。でもそれは馬鹿にしていると言うよりは自傷しているような笑い方だった。

「騎士団の被害がでかい、パルチナの情報操作、ね……あながち間違っってはねえけどな」

「何が言いたいんだ？」

「確かに事件が起こったのはパルチナの情報操作のせいだ。だが、そのお陰で助かったのは騎士団だ。俺達の被害は議員、市民を含めて一番少ない。騎士団の被害がなくて数千人以上死んだって聞いているだろ？ 実際は200人も死んでねえよ。パルチナのお陰で俺らはヒーローになった訳よ」

「なっ……」

訳が分からない。パルチナのせいでクーデターが起こったんだろう？ それなのになぜ騎士団が助かる。じゃあ騎士団が何か問題を起こしてパルチナが庇った？ だがパルチナのせいでクーデターが起こったのは事実。だとしたらなぜ……

詳しく聞きたかったが、オルヴァーは話を変えてきた。

「ビアナの当主イグレスアの片腕、レオンの事は？」

「ああ、あいつは少し気になっているんだ。あいつがどうしたんだい？」

「レオンは数年前パルチナのクーデターに紛れて青の国宝石を盗みに潜入した」

国宝石を盗みに来た！？

オルヴァーは軽々と言っただけに聞いているが、重罪だ。だがレオンは確かにビアナで生きていた、一体何がどうなっている。

「どう言う事だ」

「トレジャーハンターの世界ではゲーティアは最高ランクのお宝だそう。勿論国宝石も。クーデターで俺達騎士団が対応してる時、国宝石を飾ってある部屋にいた女王と侵入したレオンは対面した。レオンは女王に危害を加える気はなかったそうだが、気が動転した女王は何とかしてその場を助かる為に……まあ女王は自ら国宝石と契約してクーデターを鎮める気ではいたらしいんだが……」

少しだけ話が成り立ってきた。女王が国宝石を継承した経緯を。フアライアンのクーデターを救う為。だがそれではレオンが生きていた事を説明できない。

国宝石に関する犯罪は重罪、アルトランドだって使者を死刑にしたんだ。フアライアンだって当然その権利はあったはずだ。

「レオンに罰は与えなかったのか？」

「ああ、無罪釈放。レオンは俺達が捕まえて処刑しようとしたが、女王がレオンを逃がした。どうせ最初から継承するつもりだったから、と。女王は昔から詰めが甘い御方だったから……その時は国宝石の呪いなんて俺達も知らなかったし、気にもしなかったが……こんな事になるなんて思いもしなかった」

「そうかい……」

「レオンはあの時の事を今も気にしてる。あんた達を敢えて逃がしたのも女王の為を考えてだ。あの日以来、レオンは陰ながら女王を支える誓いを自ら立てている」

「だからあの時、あたしたちを敢えて逃がしたんだね」

「ああ、ルーシエル王子がフアライアンに渡れば、国宝石は2つになる。呪いを解く方法が見つかると思ったんだろう」

「謎が解けたよ。気になってたんだ」

全て繋がった。レオンがあたし達を逃がした理由も、国宝石を継承

した理由も、閉じ込めている理由も。悲しい運命だ。本当は継承なんかしたくなかっただろうに、外の世界を見たかっただろうに……だがこの国が何かを隠してるのは確かだ。オルヴァーはこれ以上言わなかったが、クーデターの真相は闇のままだからね。あたし達に伝わってる情報と真逆なんだ。

「俺達がゲーティアを欲する理由、バルディナに対抗する為でもあるが、女王の呪いを解く為でもある。過去の大戦でダレン以外の英雄は国宝石に力を託す事に成功してるんだ。ゲーティアにその方法が載っているはずだ。それを見つけて俺達は必ず女王を自由にして見せる」

——— 力を手に入れる代償は余りにも重く ———

## 27 迫りくる脅威

「良く集まってくれたな。アルシエラ、アレクセイ、ボリス」

暫くしてオルヴァーの家には3人の男女がやってきた。

冷静そうな女がアルシエラ、少し髪の長い長身の男がアレクセイ、そしていかにも血気盛んな男がボリスだそうだ。

話し合いに俺とルーシエルとライナは参加させてもらえず、俺達は2階で待機を余儀なくされた。

### 27 迫りくる脅威

「どうなるんだろうね。なんだかんでもない事になっちまってる気がするよ」

ルーシエルとドリンが遊んでいる光景を見ながらライナがぽつりと呟いた。

その通りだと思う。ヤバい事に巻き込まれてる気がする。国宝石自体にそんな恐ろしい代償があるなんて知らなかった。そのせいでフアライアンの女王は幽閉されてる。そして緑の国宝石は……考えたくない。まだ大丈夫だ、ルーシエルは国宝石の主になってないんだから。

でもゲーティアを見つけた時……それが現実になる日が来るんだろうか？そう思うと気が気じゃない。

ゲーティアなんて探したくなくなってくる。でも探さなきゃクラウドシエル達を助けられない。

力が無い俺にはゲーティアに頼るしか方法が無い。最悪だ……



項垂れている間にも下では話し合いが続いてるんだろうな。あいつらはどうするんだろう、フライアンに協力するのかな。

でもバルディナの次の侵略対象はフライアンかオーシャンだろう。エデンだって人ごとじゃない。

バルディナの強大な軍事力にザイナスの銃火器までがついて来る。エデンの魔法技術でしかザイナスの銃火器は対応できないだろう。多分その時にはアルトランドも強制的に徴兵制が行われて戦争に行かされるんだろうな。

ジェイクリーナスなんて年齢的にも対象内だから確実に戦争に行かされるはずだ。嫌だな……あいつはいい奴なのに。あの城の中で初めて仲良くなった年の近い奴なのに。

マリアとミリアだって女の子だけど門番で戦う力を持ってるから前線で戦わさせられるはずだ。殺されてしまったらどうしよう……皆は今どんな生活をしてるんだ？最低限の自由は許されているのか？わからない、何もかも情報が無いから。

「なあライナ、お前は今のアルトランドの情報、何か知らないか？」

「……情報屋仲間から仕入れた情報が少しあるだけだ。聞ukai？」

「ん」

「アルトランドは今最悪の状態だ。シースクエアでも貿易関係者や漁業関係者が暴動を起こして鎮圧されてるし、奴隷政策の一環で5歳から12歳までの子どもが強制的にバルディナとアルトランドの国境ブラス城に移住させられていつてるらしい」

「もしかして……」

「ああ、同化政策が正式に始まったんだよ」

そんな恐ろしい事が起こってるのか……その子たちは、そこで理不尽な目に遭うかもしれないのか。いや、間違いなく遭うんだろう。ちくしょうバルディナめ！幼い子供まで巻き込むなんてっ！

「城の中までの情報は無いが、王子と姫様は恐らく今は軟禁状態なんだろうな。こればかりはどうしようもない」

「くそっ！」

「フライアンもあの調子じゃ戦争に持っていくには時間がかかるだろうしね。まあ戦争なんてハナからフライアンはする気はないさ。向こうが既成事実を作って来るまではね。アルトランドの物資が減少した事で物価も上昇してる。ビアナから経済状態を回復させるよう通達はされてるらしいが、それを跳ねのけてるらしい。本当に世界に喧嘩売ってやがるよ」

バルディナはそこまで根性腐ってるのか！国民は何とも思わないのか？これはれっきとした侵略だ！疑いようのない。東天もパルチナもなぜ黙ってるんだ？危険な国だって分かってるはずじゃないか！声明を出すくらいしてくれたって……

親父とお袋は無事なのかな。理不尽な目にあってないかな。

不安だけが募って、やり場のない怒りが全身を包み込む。バルディナが憎い、全てを奪ったあいつらを殺してやりたい。

部屋の扉が開いて1人の少女が入ってくる。少女は軽く頭を下げて俺達にお茶を出して帰っていく。それを飲みながら話しこんでいると、オルヴァーが中に入ってきた。

「話し合いは終わったのかい？」

「ああ、結果を伝えるがエデンは表立った行動はとらない。一応協定はするみたいだが、まあ指揮権はフライアンに任せるって奴だよ。戦争が始まった時に限り、フライアンに全面協力する。上出来だ。俺達は先に戻るが、1ヶ月後には魔術師アルシェラが正式にフライアンに駐屯する予定だ」

確かに軍事同盟は出来たようなもんだ。今の所はこれでいいんだろ

う。

でもまだだ、まだフライアンはバルディナに完全に敵対した訳じゃない。同盟国を作り、牽制して相手の出方をうかがってる。

そんな事をしてたら国王と后が処刑されてしまう！それだけは避けないと行けない！なのに俺1人の発言力じゃどうしようもできない。どうしようもない……

オルヴァーはベッドに腰掛け、ライナに向き直った。

「ライナ、あんたオーシャン民族のダナシュ族の長の孫娘らしいな」

「おや？どうしてあんたが知ってんだい？」

「密偵を雇って調べさせた。悪いな。あんた達オーシャンはどうするんだ？中立を貫くのか？バルディナかフライアンにつくのか？」

「今の所は中立さ。だがオーシャンはバルディナには絶対につかない。あそこが信用できない国つてのは分かってるからね」

「それを聞いて安心した。バルディナにつく国は少ないに越したことはない。早速フライアンに戻ろう。この事を伝えなきゃいけないからな」

オルヴァーが踵を返して部屋を出ていく。休憩も無く本当にもう戻るみたいだ。

エデンから出る際にオルヴァーの祖父が俺とルーシエルを見て手招きをしている。まだ時間があるから行ってこい、とオルヴァーに言われて、俺はルーシエルを抱えて老人の元に足を運ばせた。

「ルーシエル王子、オルヴァーから話は聞いておる。国宝石の文を読解できるとな？何と書かれておった」

「……全部は言えないけどね、魔法使いの村って書かれてたんだ。

あと青の国宝石とあわせれば完璧になるって」

「そうかい。国宝石に書かれてなかったかい？暁の大地と」

「どうして知ってるの？」

確かに国宝石には「森の中、魔法使い、暁の大地、青の宝石とあわせたら完全になる」って書いてあったはずだ。

ルーシエルは他言してない。俺だってそうだしライナだって。

オルヴァーには国宝石の内容までは教えてないはずだ。どうしてこの老人は……

老人は口元に手をやり笑っている。

「なに、簡単じゃよ。国宝石を継承する為には緑の祭壇に向かうのじゃ。それは暁の大地にある。それだけじゃよ」

「それはどこにあるの？」

「残念じゃがアルトランドの領土内じゃ。ゲーティアを探すお主には知らせておかんと思うてのお」

そう言う事か……じゃあ後は青の国宝石とあわせるだけなのか。もう行っている。老人がそう言ったのでオルヴァーの所に戻る。オルヴァーは眉を少し顰めたが、すぐに仏頂面に戻って森の中に足を踏み入れた。

「オルヴァー様」

「クレア」

呼びとめられて振り返った先には俺達に茶を出した少女が立っていた。少女は深々と頭を下げてオルヴァーに別れを告げている。

「そう言うのいらないって言うてるだろ？お前は俺の従者ではないんだ。好きに生きたらいい」

「……私が望んでしているのです。私の好きでやっているんです。どうかお気をつけて」

溜め息をついてクレアって言う少女の頭を撫でてオルヴァーは森に入る。少女はずっとオルヴァーを見つめていたが、オルヴァーは振り返らなかった。

そこからはまたはぐれないようにルーシエルの手をしっかり握ってオルヴァーの後について行った。

自然と目の前は開けて行き、数時間歩いた先には繋いだ馬が見えた。馬を繋いでいた縄をほどきフライアンに向けて走り出す。また3日後程度には辿り着くだろう。

「なあオルヴァー、さっきの子誰だ？」

「クレア、元はフライアンの人間だ。俺が森の前で捨てられていたクレアを保護した」

「え？」

「それを恩義に感じてるらしくてな……好きに生きてほしいって言っても、あれの一点張りだ」

少しだけ悲しそうなオルヴァー。別に恩を売りたくて助けた訳じゃなさそうだ。まあそれもそうだよな……

しんみりした空気の中、馬を飛ばす。早くフライアンに着け。

しかし辿り着いた先のフライアンは予想もしない事態が待ち受けていた。

「軍事同盟？」

「ああ、バルディナとパルチナが正式に同盟国になったとの報告があった。バルディナを相手にする際は十中八九パルチナも出て来るはずだ」

戻ったフライアンは何やら慌ただしかった。

城に戻ってジェレミーやランドルフ、ローレンツに結果を報告したオルヴァーと俺達に待っていた報告はバルディナとパルチナの同盟だった。軍事国家であるバルディナとパルチナが同盟したとなればファライアンと戦争したとしても結果は完全に決まっている。ファライアンに勝てる訳がない。

それにバルディナにはザイナスも付いている。エデンだけしか協力を取り付けてない俺達に敵うはずが……

大体バルディナの軍事力は強大だ。ファライアンとエデンが連合してもバルディナに勝てるか分からない。更に唯一バルディナよりも軍備が整っているパルチナがバルディナと同盟を組んだとなれば目的は……

「ファライアン潰しか」

ランドルフが忌々しそうに吐き捨てて、状況がクリアになっていく。急いで他の国とも同盟関係を結ばなければならない。でもどうやって？ 東天は鎖国体制を貫いている。この状況に多少の焦りは感じてるかもしれないが、手をとってくれるか？ 確実にバルディナに手を貸すだろう。だって勝算があるんだから。

だとしたら独立国家。オーシャンと海賊たちが占める国ヴァシュタンに協力を要請するしかない。ヴァシュタンはパルチナと領土紛争を抱えてるから、ヴァシュタンは喜んで協力してくれるだろう。パルチナの領土内にあるマクラウドは、まず協力してくれないだろう。下手したら板挟みだからな。ビアナだってあくまで中立を貫くはずだ。

上手く行ったとしてファライアン、ヴァシュタン、オーシャン、東天……最悪の場合は東天を除いた3カ国になる。それに対して向こうは最悪の場合バルディナ、パルチナ、東天、ザイナス、マクラウド、そしてアルトランドからも兵を狩り出すだろう。勝てる訳がない。

震えが止まらない俺に、ジェレミーは更に現実を突きつけてきた。

「……ダフネ、君のご家族が反逆罪でバルディナに捕まった。処刑はまだ決まっていらないが、国王と后が処刑された後に何かしらの処罰が下されるだろう」

「な、なんだって!？」

「ご家族だけじゃない。君の故郷はバルディナの兵が制圧した。君に加担した村人全てを処罰することが決まっている」

「そ、んな……」

俺のせいで親父とお袋が……そんな馬鹿な話がある訳がない!ルーシエルも悲しそうな顔をしている。

俺に生き残って言うてくれた親父たちが殺されるかもしれない。

そんなことって……

項垂れている俺にジェレミーは1枚の書類を出した。

「ダフネ、戻ってきて早々悪いが、1カ月後にヴァシユタンに向かつてくれないか？」

「俺が？」

「案内はビアナのレオンに頼んでいる。レオンはあそこでも顔を知られているからね。俺達はどうしても動く事が出来ない。君が行ってくれ」

アルトラントを救うためだ。どんな事だってやって見せるさ。

頷いた俺を満足そうに眺めて、ライナもジェレミーに声をかけた。

「あたしにも船を貸してくれないかい? オーシャンに戻りたい。オーシャンもフライアンに協力させたいからね」

「そう言う話なら歓迎する。すぐに船を用意しよう」

「ライナ……」

「しばらくお別れだね。大丈夫さ、あんたならやれる」

ライナは俺の肩をポンポン叩いている。正直情けない話だけどライナがいなくなるのは心細い。今まで俺とルーシエルを引っ張ってくれたのはライナだから。

すぐに向かいたいと言ったライナにローレンツが早速船を用意するからついてきてくれと促し、ライナはそれについて行った。

「ライナお姉ちゃん！」

「王子様、強くなるんだよ！」

その言葉を残してライナは部屋から出て行った。残された俺に出来る事は1つでも多く他国からの協力を取り付ける事。アルトラントの俺が直接話を付けた方がバルディナの非動作が実感できるはずだ。でも今回付いて行く奴がレオンって言ってたけど、大丈夫なんだろうか。

フアライアンの人間がいた方が話は進むに決まってるだろうに。

「ジェレミーさん、レオンで大丈夫なのか？ビアナの人間を連れていってもヴァシュタンは……」

「ああ、心配しなくてもランドルフと一緒にしてくれる。ヴァシュタンなら十中八九、協力してくれるだろうからな」

まあパルチナが出てきたんだから恐らくそうだろうけどな。パルチナを徹底的に叩く口実になりゃ、ヴァシュタンだって喜んで手を結んでくれる。パルチナを潰したくてうずうずしてる国だからな。

急がなきゃ、時間はあまりない。

国を強化させて国宝石の謎を解明させてゲーティアを探し出す。それがどこにあるかは分からないけど、絶対に。





## 28 海賊島ヴァシユタン

「ルーシエル、お前は行けないのか？」

「うん。俺ね、女王様と国宝石についてのお話をしなきゃいけないんだ」

1カ月後、準備を整えた俺を見送りに来たルーシエルは国宝石を手にとって持っていた。

見送ったら早速女王の所に向かうらしい。心配じゃないと言えば嘘になるが、まあ海賊が占拠する国に連れていくよりはマシなのか……

## 28 海賊島ヴァシユタン

「今回案内役を務めさせていただきます。レオンと申します。以後お見知りおきを」

ファライアンの城下町の港でレオンは既に待機しており、社交辞令で頭を下げる。

ランドルフは顔が知られているらしく、港はランドルフ見たさにごった返した。まあ第2騎士団の団長が来てるんだ、騒ぎにもなるはずだけど。

レオンは俺に一瞬視線をよこしたが、すぐに無表情な物に戻した。やっぱり気づいてたんだな。俺がアルトラントの人間だって事……それをなんで逃がしてくれたのかは分からない。もしかしたらレオンは反バルディナの性格なんだろうか。

ランドルフが船に乗り込み、俺もその後を追った。船の中は中々広く快適だ。暫く乗っても平気そう。

船員が船を動かす準備を始め、次第に船が港から離れていく。出航だ。

「また船か。暫く乗りたくなかったんだけどな」

「どのくらい乗ったんだよ」

「シースクエアからオーシャンまで行って、オーシャンからビアナ、そんでビアナからフライアン、今度はフライアンからヴァシュタンだ」

「すげえ世界行脚だな……」

ランドルフは実はフライアンから出た事が無いらしい。母親がアルトランド人だが、フライアンに移り住んでいた為、生まれも育ちもフライアンなんだそうだ。

国外の情報収集は基本第4騎士団の仕事らしいから、ランドルフ達第2軍は基本国外には出れないらしい。

素直に海を見て感嘆の声を上げているランドルフは第2騎士団の団長だって事が分からなくなる。

「なあランドルフ、お前達ってさ……若いじゃん」

「ああ？」

「いや、アルトランドの軍団長は少なくとも30は超えてたし、お前みたいな俺と対して年も変わらなさそうな奴が団長っていいのか？まあ実力があるからそうなるんだろうけど。毎日稽古付けてもらってっけど、未だに敵わないし」

「……そんなの簡単だ。俺は女王の幼馴染だからな」

女王の幼馴染？と言う事だ？まさか賄賂的な何かがあるんだろうか。

「まあ俺の親父が元々第2騎士団の団長だ。俺はその後を継いだに

すぎない。心配いらないぜ、剣の腕はバッチリ仕込まれてっからよ。けどジェレミーもローレンツも女王の幼馴染だからそれなりの立場を要求される」

「それって国としていいのかよ……ってかお前の父親って……」

「俺の親父はクーデターで死んだ。それにこれが今の統治体制なんだ、女王を拝むのは俺達だけで問題無いだろ」

「お前……そんな勝手な理由で国を牛耳ってんのか？」

「なんだ、オルヴァーから聞いてないのか？女王の事を」

聞いているよ。女王様が出て来れないのは国宝石の呪いだからって事くらい。それについては可哀そうだし、俺も何とかしてあげたいって思う。

でもフライアンの統治体制には疑問しか分からない。女王の事を公言すれば貴族や議会だって理解を示すはずなのに。

「知ってるよ。でもお前達が閉じ込めてたら女王の見聞は狭まるばかりだろ」

「国宝石の呪いなんだ。仕方がないだろ……女王はな、国宝石を継承したお陰で、自らの兄弟を殺してる」

「は？」

「第1王子のフリック王子をな。あの御方は女王に恨まれて悲惨な死を迎えた」

「そんな……」

「女王の国宝石は危険なんだよ。だからあの場所に俺達は閉じ込めた。プレッシャーを与えない為に、俺達幼馴染以外を通すのを禁じた。こうするしかねえんだよ」

吐き捨てたランドルフの表情は悲しげで……どう言葉をかけていいか分からない。

でも分かるのは、女王の数奇な運命。

ランドルフは船の甲板に立っているレオンを忌々しそうに睨みつけた。

「あいつがどうかしたのか？」

「いや、何でもねえよ」

「そういやレオンって何もんなだろうな。俺さ、あいつに助けてもらってんだよ。中立の立場をとるビアナが今回の件で協力するってやばくねえか？」

「イグレシアは知らねえよ。あいつは言わばフライアンの内通者だからな」

そ、そんな事を堂々と……じゃあやっぱレオンはフライアン側の人間なんだ。だから俺達を見逃してくれたのか。

そこにどんな話があったかは知らないけど、レオンがフライアンの味方だって言うのを聞いて少し安心した。それなのになぜランドルフはあんなにレオンを睨みつけるんだろう。

分からないまま時間が過ぎ、1週間後、遂にフライアンとヴァシユタンの国境沿いの領海に入った。

先には数隻の船が待ち構えている。旗を見る限り、あれがヴァシユタンの船か……海賊が占める独立国家ヴァシユタンは海戦が武器だからな。船も立派だな。

ランドルフが甲板に出て行き、声を張り上げる。

「私はフライアンの第2騎士団団長ランドルフ！今回は話し合いの場を設けていただいて光栄だ！」

ランドルフの言葉に銀髪の髪をバンダナで束ねた少年が船から身を乗り出してきた。そいつの後ろにはおっかなさそうなおっさんや若者たちがニヤニヤ笑ってる。

ひえゝ怖い！少年は怪訝そうな表情でランドルフに視線をよこした

が、その隣にいるレオンの姿を発見した途端、表情を緩めた。

「あんたが正式なフライアンの使者ってのは間違いなさそうだな。気楽に構えな」

「それは助かる、早速だが案内を頼む」

「おう！付いてきな！」

動きだした船の後を俺達の船が追いかけていく。こええ、あんなおつかない連中と同盟組んで大丈夫なのかよ。

しばらくすると島が見えてきた。あれがヴァシユタンの国家なんだろうな。流石海賊と言ったところか、船が沢山船舶してやがるわ。止めてくれと言われたスペースに船を止めて1週間ぶりに陸に上がる。うん、やっぱり陸はいいな。

しみじみ感じている俺の肩をイースと呼ばれた銀髪の青年が肩を掴んできた。

「おめえかアルトラントの奴は。歓迎するぜ。バルディナとパルチナの奴らをぶっ飛ばしちまおうな！」

「え？今からそれを話すんじゃない……」

「パルチナが出てきた時点でヴァシユタンの世論は決まってんだよ。俺達はフライアンに付くぜ。奴らから領土を奪ういい機会だからよ」

これって話し合う必要があったのか？でもまあトップの顔を見るのもいいだろう。

イースが俺の肩を掴んだまま歩きだすもんだから、慌てて俺も足を動かした。ランドルフ達は後ろからついてくんだろ。

「ランドルフ、俺達も行こう」

「わあってるよ。だが言っとくがなレオン、俺達はてめえを許した

訳じゃねえ。慣れ合いをしてきたらぶっ殺す。いいな」

「分かってるよ……」

港付近はやっぱり栄えてる。海賊が占拠するって言っても国なんだから勿論一般人だっている。

国の中は海賊が荒らしまわる物とは違い、完全に1つののかな街と言う感じだった。

街の奴らがイースに声をかけて、イースも手を上げて答えている。こいつは多分国の重要人物なんじゃないのか？ じゃなきゃ俺達の迎えなんて任されるはずがない。

「あんた貴族かなんかじゃないのか？」

「貴族う？ あんなけったくそ悪い奴らと一緒にすんじゃないよ。ヴァシユタンに貴族なんていねえ。身分だって存在しねえんだからよ」

そうは言うけど、流石に身分は存在するだろ。まあ身分ってのが大きな壁にはならない国なんだろうけどな。

栄えている港もフライアンからの使者と聞けば賑わってくる。

野次馬をイースが掻き分けて、どんどん先に進んでいく。そしてその先には走ってくる少年の姿があった。

「おーいイース！ 早く来いって！ パルチナの漁船が領海付近で漁やってやがるから捕まえてよーアウグス達が処分に向かうから1時間しか会話とれねえんだと！」

「はあ？ またかよ……分かった。すぐ行くなって伝えてくれジェシカ」

「あいよー」

頭にバンダナを巻いたジェシカと言う少年は再び伝えに行くべく、

走って向かって行く。

イースが少し小走りになって走っていくのを慌てて追いかける。後ろからはランドルフ達が追いかけて来るけど、それにしてもここは正式な使者に対して態度悪くないか。

なんでこんな急に急がされなきゃいけないんだ。

でもここまで来て話が出来なかったら意味がない。文句言わずついて行かなきゃな。

「漁船ってなんなんだ？」

「俺達はパルチナとシュワン諸島の事で領土紛争を抱えてる。今までは実質俺達が実効支配してたんだけどよ、バルディナと手を組んだ途端、いい気になりやがって一般の漁船が領海侵犯を犯してきやがる。まったく一々潰す身にもなれってんだ」

そうか、バルディナと手を組んだら実質パルチナを止められる国はいなくなる。パルチナ国民も、これを機にシュワン諸島を取り戻そうとしてるんだ。

その行動が表立って行われ出して、領海侵犯の事実が多発してんだな。

シュワン諸島は100年前までパルチナに支配されてたんだけど、パルチナとヴァシユタンのサルタ海戦の結果ヴァシユタンが勝利し、ビアナが仲介を取り、領土を手に入れた。

だから実質ヴァシユタンの物なんだけど、それからヴァシユタンとパルチナの仲は冷え切っている。もう冷戦状態だ。

お互い直接貿易は絶対しないし、ヴァシユタンはパルチナの人間の受け入れを拒否してる。一般人でもヴァシユタンの領土内に足を踏み入れるのを許さないのだ。

まあ同じ事をパルチナもしてんだけどな。

小走りで走る事20分、他の家よりも大きな屋敷の門を先について



いた紫色の髪少年ジェシカが開けていた。

イースはジェシカに礼を言い、俺達に中に入るように促した。

今度はジェシカに案内されて、俺とランドルフは屋敷の中に足を踏み入れた。そしてイースと何かを話しながら、その後をレオンも付いてきた。

「あんたまだ密使やってんの？ いい加減イグレスシアも黙ってねえだろ。ばれたら公開処刑じゃねえのか？」

「ばれる様なことはない。俺には俺の考えがある」

「正直俺から言わせれば、お前は女王に毒された。そうとしか言いようがないね」

「……」

「はいはい、ここに座ってねえ、僕はアウグスとエルネスティを呼んでくるからねえ」

ジェシカはそう言って、扉から出て行った。それと入れ違いにイースとレオンが入ってくる。

なんだか屋敷の中は生活館ありありだ。金持ちの豪邸とは程遠い内装って感じ。こういうの見てると、確かにヴァシユタンの身分意識は薄そうだ。

ランドルフはソファに深く腰掛けて何も話さない。少しは緊張してんだろうな。それは俺も同じだけど。

そして待つ事15分、体格のいい男が2人、そして綺麗な女の人が入ってきた。

俺の向かい側のソファに髪の毛を立てたガタイのいい男が座り、その隣のソファにメガネをかけた男と髪の長い綺麗な女の人が腰かけた。

多分この髪の毛立てた奴がトップなんだろうな。  
ランドルフが背筋を伸ばし頭を下げたのを見て、俺も真似をする。  
レオンもだ。

「いって、そう言う堅苦しいの好きじゃねえし」

「一応礼儀は礼儀、やるべき事をやる前の話は嫌いでね」

「フアライアンの使いはいつもそんなばっかだな。堅苦しいぜ」

髪の毛を立てた男は豪快に笑い、ソファに身を預けた。

やっぱこいつがトップなのかな。メガネの男はナンバー2で所か？  
モンモン考えている俺を尻目にランドルフは下げた頭を上げて真っ  
直ぐ男を見据えた。

さて、本腰入れて話をしますか。

## 29 パルチナとヴァシュタン

ランドルフの空気を感じたのか、笑っていたアウグスの表情が少しだけ険しい物になった。

女の人とメガネの男エルネステイもこっちに視線をよこしてくるし、部屋の隅にはイースとジェシカが小声で何かを話しながらも俺達に注目していた。

### 29 パルチナとヴァシュタン

ランドルフはアウグスに単刀直入で話を切り出した。

その声は緊張からか少し震えていた。

「話は知ってるはずだアウグス、猶予はない。パルチナとバルディナが手を組んだ今、こっちも早急に対策を立てなければ侵略戦争食らう羽目になる」

「ああ、アルトラントの話聞いたときや、背筋が震えやがったぜ。元々信用ならねえ国だったが、まさかあそこまでやるとはな。聞く限り、ザイナスも正式に協力してたみたいじゃねえか」

「ああ、バルディナにパルチナにザイナス、それだけでも脅威に変わりねえだろ」

「俺達ヴァシュタンはおめえらが予想してる通りフライアンに協力する意思は固めてる。だがこっちも勝てねえ勝負をする気はねえ、おめえらがどれだけの奴らを率いる事が出来るかが問題だ」

「今の所はエデンだけだ。後はオーシャンに協力要請を出している」

「おいおい、エデンとオーシャンだけじゃバルディナとパルチナには敵わんぜ」

豪快に笑いながらも内容は正直笑える内容じゃない。

確かに軍事国家であるパルチナとバルディナ、更に銃の技術を持つザイナス相手にファライアンとエデン、オーシャンだけじゃ役不足だ。それほど特にバルディナとパルチナの軍事力はでかい。

アルトラントの十数倍の兵力を持ち、士官学校だって充実してる。ファライアンよりも軍事力だけで言えば大きいはずだ。

そんな国を2つも相手にするのだ。こっちもそれ相応の数がいる。でも仕方ない、少し無理な話でもこうするしかないんだ。

「俺達ヴァシユタンが引き受けられるのは海戦だけだ。パルチナの艦隊なら全て引き受けてやる。だが地上戦を行う機動部隊の相手は俺達はできねえ。それにバルディナの海軍も一気に来られると、こっちも流石に数で負けちまう」

「わかってる。ファライアンも海軍の派遣を考えている」

「馬鹿、おめえらはパルチナとバルディナを相手にしなきゃいけないだから海軍に手を割いてる余裕はねえだろ。ザイナスはエデンが何とかしてくれるだろうが、向こうはアルトラントの兵も差し向けてくんじゃねえのか？」

その言葉に肩が跳ねたのをエルネスティは見逃さなかった。女性に何かを話して、2人は俺に視線を送っている。

それを気づいてるのか、気づいてないのか、アウグスはランドルフとの話に集中してる。レオンに至っては、流石に深く関われないのか会話に入ろうとしない。

「おいランドルフ、まだ中立貫いてんのは東天とビアナと忍びの集落とマクラウドとオーシャンだけか。まあオーシャンは手え打ってんだろ？」

「ああ」

「じゃあ俺達がやるべきは1つ。何が何でも東天と忍びの集落とビアナを引き入れるしかねえ。マクラウドはさすがにパルチナ領土内だ。奴らも下手に動きやしねえだろうが、東天の力は絶対に必須だ。奴らがバルディナに正式に参加表明する前に何とか引き入れなきゃ勝ち目はねえだろう。ビアナだって商人の国つつつが、奴らは中々でさえ海軍を所持してやがる。ビアナと俺達ヴァシユタンが組めば100%パルチナの海軍は何かなる。更にバルディナの海軍にも手を伸ばせるだろう」

「ビアナ、ね」

ランドルフの視線の先にはレオンの姿。レオンは気まずそうに視線を逸らしたが、ハッキリと拒否の言葉を述べた。

「それはできない。俺たちビアナはあくまでも中立だ。どの国にも加勢しない傍観者だ」

「おめえは完全にファイアンに傾倒してっがな」

「……俺個人の意見で国を動かせる訳がないだろう。海軍の指揮権はイグレシアと軍団長モルガンが持っている。彼らが行動を起こさない限りビアナは絶対中立だ」

「ちっ……面倒くせえ国だ」

アウグスは舌打ちをしただけで突っ込む気はないらしい。まあレオンに言ってもな。

じゃあやっぱり東天の力は絶対に必須だ。それともう1つ、俺には聞きたい事があった。

完全にファイアンの協力してくれるとヴァシユタンは言った。後もう1つだ。

「アウグスさん、ゲーティアは御存じありませんか？」

「ゲーティア？あの魔術書の事か？残念だがここにはねえよ」

「違います。俺はゲーティアを探してます。アルトラントを取り戻す為に」

俺の言葉にアウグスは目をパチクリさせて首をかしげた。あまり良く理解できなかったようだ。

でも女の人は何かを感じたらしく、エルネスティに耳打ちをした。それを聞いたエルネスティが声に出して女の人の言った事を代弁した。

「あんたもしかしてアルトラントの脱走者か？ ファライアンに何人か逃げ込んだと聞いたが」

「はい、ダフネと言います。俺は祖国奪還の為にゲーティアを欲してる。少しでも情報があれば手伝っていただきたいんです」

「残念だがヴァシユタンにゲーティアに関する情報はない。元々国宝石自体この国にはないからな」

「そう、ですか……」

まあ俺が単体で探してもどうにかなるもんじゃないよな。ルーシエルが国宝石の文章を解読してくれない限りは。

本気でゲーティアを探す俺を見て、エルネスティは眉を顰めた。ゲーティアがどんなものか、ある程度は理解しているんだろう。それを探す俺を少し信じられないような目で見ている。

でもまずヴァシユタンの協力は得られた。後は何としても東天を引きいれるしか手段はない。でもどうやって？

東天は書簡を送っても基本返事を返してこないし、鎖国体制を貫いてるから貿易するにも一苦労。そんな国の中に入れてもらえるのか？ ましてや受け入れてくれるのか？

英雄ダレンが未だに統治している国。過去の戦争の悲惨さを知る者。そしてゲーティアを所持した人物。

恐らくダレンはゲーティアの隠し場所を知ってるはずだ。だって使用者はダレンだったんだから。

東天のリーダーがダレンだって事を知ってるのは多分エデンの村長だけだろう。だからバルディナもパルチナも東天に関心を示さない。何としても先に東天に行く手立てを見つけないと。

話し合いがひと段落ついたのか、アウグスが立ち上がりエルネスティと女の人に告げた。

「さて、と……俺はそろそろ処分に向かうか。ディズ達はもう行つてんだろ？エルネスティ、クラーリア、お前らはどうする？」

「正直処分はもう飽きたわ。ディズとシェリルがやってくれるのなら私達はここにいます。2人が出来る限りの情報を吐かせて処分するから、貴方だって出ていかなくてもいいのよ」

「そう言う訳にはいかねえよ。一応形式上な。家族にも会えなくなる哀れな人間だ。最後は慈悲に包まれながらの処刑も悪くねえだろう」

処刑って……確かに領海侵犯を犯したのは問題だけど、だからって殺すまでするのか？

流石にアウグスの言葉に懸念を抱いたのは俺だけじゃなく、ランドルフも身を乗り出した。

「おい、処刑はやり過ぎなんじゃねえのか？」

「火事場のねこばば国家には、この程度しなきゃ刺激になんねえかな。俺たちや70年前の内部紛争の騒ぎに紛れて一度シユワン諸島を奴らに実効支配されてんだよ。そんな目にならねえように見せしめは必要じゃねえか」

これが冷戦状態の国家間の対応なんだろうか。これじゃ火に油を注ぐようなものだ。

でもヴァシユタンとパルチナはお互い今までそうやってきたんだろう。それを今更どうこう言う気はないが、でも処刑まで行かなくても……

アウグスはコートを羽織って、イースとジェシカの頭を軽く叩いて部屋を出て行った。残された2人はお互いに顔を見合わせて手を振っている。

気まずい雰囲気の中、溜め息をついてクラーリアが立ち上がる。

「もう今日はここに泊るのでしょうか？ 私もアルトラントの貴方に聞きたい事がある。今日はゆっくりするといいわ」

それだけを言い残してクラーリアも部屋を出ていく。エルネステイもクラーリアに続いた。

残されたイースとジェシカはお互いに顔を見合わせて、この部屋を好きに使っていいと言って、2人も出て行った。

急に緊張感が抜けて、ソファに深く凭れかけた俺とランドルフ。でもやっぱりこの国も一筋縄じゃいかなそうだ。協力はしてくれる、頼りになると思う。でも少し考え方が暴力的だ。

これが海賊が祖先の国って奴なのか？ まあとにかくルーシエルを連れて来なくて良かった。絶対泣いてるだろうからな。

ルーシエルは大丈夫かな。やっぱり1人残していくのはどうにも気が散ってならない。自分自身がルーシエルを守るのを使命にしているから、離れているのが落ち着かない。

多分ジェレミー達が側にいるから大丈夫だとは思うけど、フアライアンの貴族と評議委員は気に食わない。

まともな志を持つ奴らは沢山いるのに、一部の議員達が全てを台無しにしている。そいつらがルーシエルに何かを嗅ぎつけて、何かをしでかしそうで怖い。そんな事が無いように祈るしかない。

それはそうと気になることがあるんだよな。これを機に聞いてみる



か。

「でもパルチナはどうしてバルディナと組んだんだろうな。パルチナには南下戦争の恨みだってあるはずなのに」

「パルチナは6年前から王子2人の王位継承権争いが勃発して、実質内乱にまで発展している。第1王子率いる王国騎士団と第2王子率いる王国神聖軍も対立していると聞く。バルディナに背後を突かれない為だろうな。それと外に敵を作ることとで国を団結させるのが狙いだろう」

そうか、そう言えばパルチナの王位継承権争いの話は聞いたことがある。王位継承権を持つ第1王子に第2王子が反発したことによって起こった内乱だ。

はじめは頻繁に話し合いを行っていたが、お互いに王位継承権を放棄しないことから兄弟なのに2人が争い始めたのだ。暗殺なども行われ、お互いの重臣も数名亡くなっているって聞いた。

パルチナも今は国内の治安が良くない状態で、バルディナを敵に回すと危ないから向こうに付く意思を固めたんだろう。もしかしたら協力の報酬で何かをもらえるのかもしれないな。

あーもう考えることがありすぎる！ライナがいたら相談できたのに……ライナは大丈夫なのかな。1人で行かせてしまったけど……世話になりっぱなしで何も返す事が出来なかった。豪快で頼りになったライナがいなくなったのは、何となく相談役がいなくなった様な寂しさを感じさせる。ライナが横にいただけで少し安心してたんだけどな。あいつの言葉はいつも心を捕えて、ぶれる事が無かったから。

ライナに勇気づけられる事が何回会ったか……

でもいなくなってしまったライナを頼る訳にも行かない。俺が自分

自身で考えてルーシエルを導かなきゃいけないんだ。

ゲーティアを探す事に疑問が無いと言えば嘘になる。ゲーティアの呪いの話を聞いて、継承するには恐ろしいと考えてしまう。自分がそんな器だとは思えないし、ルーシエルに継承させたくはない。

ファライアンの女王は呪いのせいで外に出られない。そして守っているジェレミー達を貴族や評議委員は怪しんでいる。ファライアンは内部崩壊一步手前の綱渡り状態なのだ。

ルーシエルが国宝石を継承したらアルトランドもそうになってしまうのだろうか。フレイのせいでアルトランドの評議委員を信用できなくなった。あんな奴が議長を務めてたんだ。アルトランドの議員全てがスパイの様に感じて来る。

疑ったら駄目なのに……疑うしかできない自分が憎たらしい。

早く戻りたい。親父とお袋を助けたい。ミッシェルやクラウシエル、セラ達も。クラウシエルはちゃんと無事なんだろうか。俺達を逃がす為に命を張ってくれた。剣を持った事の無いクラウシエルが、あんな大胆な行動をとった。

怖かったはずだ。死を覚悟するなんて13歳の少年が中々できる物じゃない。俺自身だってすぐに出来るか分からない。でもあいつは弟と国の為に命をかけた。そんなクラウシエルの思いに答えないなんてできる訳がない。救わなきゃいけない。

肩の荷は降らない。

### 30 崩壊は近づいて来る

今日も女王様のイヴさんとお話した。国宝石の謎を解き明かす為に。俺がイヴさんの国宝石を読みあげて一緒に考えなきゃ。

そんでその後、一緒にお菓子を食べるんだ。

ニコニコ笑ってるイヴさんとはとっても楽しそうで、俺も嬉しくなっちゃう。

### 30 崩壊は近づいて来る

「ルーシエル君、文字は読めた？」

「待ってね。今から紙に書くから」

イヴさんの持つてる国宝石は俺が持つてる緑の国宝石よりもいっぱい色んな事が書かれてた。だから訳すのにも時間がかかった。何とか読み終えて、皆に見てもらおうべく内容を書き上げていく俺の横にメリッサさんが紅茶を置いた。

今更だけどイヴさんとメリッサさんは姉妹の様に仲がいい。元々2人は幼馴染らしい。メリッサさんは貴族の娘みただけど、こんなお世話係みたいなことして平気なのかな？それを聞いたとき、メリッサさんは笑って頷いた。元々世話好きなんだって。

そんでメリッサさんには2人の弟がいる。双子の兄弟でヨルンとネルンって名前の。2人もここに足を運んで、俺少しだけ仲良くなっただ。この間、一緒に遊んだんだよ。

同じ位の年の友達っていなかったからすごく楽しかった！ダフネ早く帰ってこないかな。ダフネにお話ししたいこと一杯あるのに。字

を書く練習もう少しすればよかったなあ。イヴさんの字に比べたらすつごく汚いや。でも読めればいいよね。

出来上がった文章をイヴさんに見せて、出された紅茶とお菓子を食べた。イヴさんは俺が書いた文章を読み上げる。

「青と緑は2つで世界を癒し続けた。そして青と緑が揃いし時、赤への道が開かれる。グルネス諸島に捧げられし色は持ち主を選ぶ。これって……どう言う事なんだろう」

「でもグルネス諸島って、確かマクラウド領土内にある聖地でしょ？」

イヴさんが首をかしげて、メリツサさんも俺が書いた文章を覗き込んで首をひねった。じゃあグルネス諸島に何かがあるのは間違いないんだよね。そこに行かないといけないんだ。

残りの国宝石に書かれてある情報を紙に書き込んでイヴさん達に渡した。

「青は全てを愛し包み込む。青の祭壇は百合の丘に隠された。青が導かれし時、緑も導かれる。緑の祭壇は血で染め上がった暁の大地に死者と共に眠る」

「じゃあイヴが国宝石を受け継いだ時に緑の国宝石の在り処が導かれるって事？」

「多分、国宝石は連動してるんだと思う。1人が国宝石を継承しても誰かが止められるように、封印をかけても誰かが、それを破った際の……」

なんだか難しくてよく分からないけど、繋がってるって事だけは分かった。

イヴさんの国宝石の次は俺の緑の国宝石。俺、あの日以来ずっと考えてた。国宝石の呪い、寿命が縮まってしまう呪い。すごく怖かつ

たけど、でも俺は国宝石を継承したい。

パパとママ達を助けられる手立てはそれしかない。俺がもっと力があったら皆ついてきてくれる。ダフネだって守れる。

「進展はあったのか？」

ジェレミーさんが部屋を訪ねてきた。イヴさんはジェレミーさんに俺が書いた紙を手渡した。

ジェレミーさんはそれを読んで顔を顰める。

「グルネス諸島……そこに何かしらがあるのは分かったが、流石にマクラウドの領土内、近づけないな。それに青の国宝石の後に緑が導かれる。そして緑と青の後に赤が導かれる……どう言う事だ」

「多分、国宝石は連動してるの。誰か1人が力を持った時、止められるように」

「……心当たりはあるが矛盾もある。赤は既に継承されてる。なぜ青と緑の後に赤が導かれる」

「赤は継承されてる？ じゃあ東天では国宝石はもう継承されてるの？」

あ、そっか。イヴさんはエデンでの話を知らないんだった。俺も話してないし忘れてたや。

ジェレミーさんも伝えてない。首をかしげたイヴさんにジェレミーさんは1から説明をした。案の定イヴさんは驚いた表情を浮かべ、メリッサさんは座りこんでしまった。

「じゃ、じゃあ英雄ダレンが生きてるって、事……？」

「そう。彼は未だに実質東天を率いているリーダーらしい。東天は秘密主義だから俺も今まで知らなかったよ」

イヴさんは驚いて固まってる。そうだよ、俺だって良く分からなかったけど、すぐくびくりする事なんだって思った。

何百年も昔の英雄が今も生きてるんだ。その人がいてくれたら、きっと皆付いて行くと思うのに。

でもジェレミーさんも国民にすぐく信頼されてる。きっと大丈夫。いいなあ、俺もこんな風になれるのかな。クラウドシエルならなれるかな？あ、でも駄目だ。クラウドシエルは剣持てないもんね。頭はすぐくいいんだけど。

そんなクラウドシエルが俺を助けてくれる為に命をかけてくれた。いっつも俺を馬鹿にしてたけど、助けてくれた。クラウドシエルとミッシェルを今度は俺が助けなきゃ。

俺は国宝石を継がなきゃいけない。寿命が短くなるなんて考えてる場合じゃない。

守ってくれてるダフネや皆に恩返ししなきゃ。パパとママを助けなきゃ。

「ダレンさんに会えないかな。ダレンさんならゲーティアの場所、知ってるはずだよ」

「東天が今の体制を変えてくれない限りは国内に入る事も許されないだろうな。東天は観光も一切受け入れない」

完全な鎖国体制だ。どうしたらダレンさんに会えるのかな？俺はゲーティアを見つける為にダレンさんに会いたい。青と緑の国宝石を手に入れても黒と紫、赤の国宝石が無いとゲーティアは手に入れない。

でももしかしたら緑と青の国宝石に書かれてるグルネス諸島にゲーティアが隠されてるのかもしれない。でもどうやって探していいか分からない。

「ジェレミー、この国宝石はグルネス諸島って書かれてあるけど」  
「おそらくそこにゲーティアの手掛かりがあるんだろうな。もしかしたら青と緑の国宝石でゲーティアの隠し場所、黒と紫の国宝石にゲーティアの探し方を書いているのかもしれない。そして赤が全てを繋ぎ合わせる……」

「じゃあジェレミーの予想だと、やっぱりダレンさんに会わないとどうしようもないのね」

メリッサさんとジェレミーさんが話している間、俺とイヴさんは国宝石をただ眺めていた。

こんなガラス玉の様な物が宝の地図なんて……

「おいジェレミー！来い、やべえ事になってっぞ！」

「どうした」

「いいから来い！」

慌ててるのは第4軍団の団長グレインさんだ。慌てているグレインさんを見て、ジェレミーさんの表情が変わる。

ジェレミーさんはイヴさんと俺、メリッサさんに謝りを入れて、グレインさんの後について行ってしまった。

残された俺達によぎったものは不安。グレインさんがあんなに慌ててるのはなんで？

イヴさんも不安を隠しきれてない。メリッサさんに視線を向けている。

「メリッサ、今国はどうなってるの？教えて」

「ごめんねイヴ、あたしも詳しい事は知らない。本当よ」

「……そっか。ごめんなさい」

「イヴ……」

メリッサさんが震えているイヴさんを抱きしめてあやしているのを、俺は何もできずに見てるしかできない。

ダフネ早く帰ってきて。

やっぱりダフネがいないと怖い。何をしてても怖い。

ダフネとライナお姉ちゃんが側にいないと、途端に一人ぼっちに感じてしまう。

早く、早く……

—ジェレミー side ————

グレインはかなり慌てているようだった。イヴがいるからなのか、その場で理由を教えようとはしない。家を出て、人が通っていない場所をあえて選んで歩いている。本当に一体何があったんだ？

「どうしたんだグレイン、何を慌ててるんだ？」

「ローレンツが密使文書を発見した。議員の処刑で事なきを得るつもりだが、彼らはイヴをバルディナに売り渡す気だ。国宝石と一緒にね」

驚きは来ない。それよりもやっぱりそうか、という感覚だった。元々議会は怪しいと睨んでいたから。でもローレンツによってそれが表面に浮き彫りになった、それだけだ。

「やっぱりそうか……」

「それだけじゃないんだよ。彼らの中にエデンの人間が紛れ込んでいる。正確にはエデンを出て行ったはみ出し者だが、彼らは転移魔法のスペシャリストらしい」

「……」

「ローレンツは事をでかくしたくないらしいから、一部の議員にしか伝えないみたいだけど、このままじゃ不味い気がする。何とかして手を打たなければならない」



エデンの奴らまでも手懐けて、そこまでしてイヴをバルディナに売りたいのか……それならば確かに何か手を打たなければならぬが、問題は誰がこんな事をしたかだ。

ローレンツが事をでかくしたくないと言うからには、それなりに議会では地位の高い奴なんだろう。でもそれは予想外の人物だった。

「議員は誰だ」

「リ्यूッツ議員だ。若手の筆頭だよ」

「リ्यूッツ？マジで言ってるのかよ……」

「ああ、女王に対する不信任は若手の議員を中心に広まってる。仕方ないよな、女王が姿を出さなくなったのは8年前だ。若手の議員達にとっては女王の姿を見た事ない奴が多いからな」

そうか、クーデターからもう8年も経ったんだな……あれ以来イヴはあの場所に幽閉され一步も外に出ていない。

鉄の女王等という名まで付けられて、女王の姿を見た事の無い奴も大勢いるはずだ。リ्यूッツ議員もその1人なんだろう。彼は5年前に30歳で議員になった。女王を幽閉した後だからな。

でも若手の筆頭であるリ्यूッツ議員が裏切ったとなると、国内は荒れる。ローレンツも城内の人間だけで広まるのは押さえないんだろう。

「青の国宝石は民衆を魅了する力……その状態で不満が広まってるなら女王の精神が今は不安定だからだろうな。国宝石の力も弱まっているのかもしれない。女王自身が議員に対して不信任を募らせている。なんとかしなければ、イヴの精神が崩壊したらファライアンでまたクーデターが起こるぞ」

「こんな事言いたくはないが、不安は民衆にまで広がってる。俺達騎士団と議員が対立してるって。またパルチナの情報操作じゃない

かつて噂まで出てパルチナに対する嫌悪感も膨れ上がってる。このままじゃファイアアンは内部から崩壊する」

過去のクーデターの傷跡がまだ完全に取り除けていない今、国民の嫌悪感パルチナまで行っている様だ。元々ファイアアンはパルチナとクーデターの件以来、国民感情はいいとは言えない。

だが、今回の件でパルチナは関係ない。それでも色々情報が飛び交った結果、国民感情によってパルチナまで飛び火している様だ。だからと言って真実を知らせたら議会に対する不満がマックスに行くだろう。裏切っている議員は一部だ。彼らのせいで他を巻き込むのは気が引ける。

「ここで俺達が表立った処刑に出れば、賛同する市民と俺達を非難する市民にわかれるだろうな」

「そんな事言ってる場合か。奴のあれは反逆行為だ。証拠を見せれば市民も黙る」

「100%の人間を信じさせる事はできない。小さな綻びは大きな枷になって俺達に返ってくる」

「じゃあお前はどうしたいんだよ！？わからないよ！俺にはお前がリ्यूツを庇ってるように見える！」

大きな声に驚いて目が丸くなった。グレインは焦っているんだ、今の状況が過去のクーデターを思い出させて。また俺達騎士団が国民を弾圧してしまうかもしれない事を恐れてる。

でもグレインの目が殺気だっているのを感じて後ずさりした。もしかしてこいつは……最悪の事態を望んでる？ファイアアンの崩壊を早まらせる事態を……

「俺はそんなつもりじゃ……」

「何が違うんだ！言っとくがあいつの処刑は絶対に行う！議員達に

もそれ相応の対応はとってもらおう！あいつの仲間は全部皆殺しだ！」

「グレイン……」

「元から評議会の奴らは信用できなかったが、今回の件ではっきり分かった。俺達騎士団が国を動かすしかない！評議会の奴らは全て追放すべきなんだよ！」

なぜ今まで気付かなかった？

少しずつ騎士団は女王に魅了されていっていることに……女王に騎士団は愛された。そしてその影響が少しずつ出始めていることに。その目に宿っているのは狂気か、忠誠か。

女王の為、国の為と言いながら他を弾圧する。その姿はかつての騎士団を彷彿させた。

狂って行く。この国も、何もかも……

### 31 初めてのお友達

「ダフネ君、ちょっといいかしら」

「クラーリアさん、どうかしましたか？」

「少し話が……」

寝る前にクラーリアさんに呼び出されて部屋を出る。

ランドルフが一応警戒しておけよって言うもんだから短剣を持って部屋を出た。

### 31 初めてのお友達

外にいたのはクラーリアさんとエルネスティさんだった。この2人は俺に何の話があるんだろうか。

エルネスティさんが部屋を移ろうと言ってきて、その後を小走りで追いかけた。

そして少し広い部屋に通されてソファに座らされた。クラーリアさんがホットミルクを持って来てくれて、頭を下げてそれを飲んだ。

エルネスティさんは少し言いづらそうな顔をしていたが、意を決したのか口を動かす。

「ダフネ、君は知っているか？——を」

——ルーシエルside——

あの後、結局ジェレミーさん達は戻ってこなかった。俺はメリッサさんに途中まで送ってもらう間、なんだかお城の中が騒がしかったから眉を顰めた。

メリッサさんにお部屋の前まで送ってもらって別れたけど、ダフネがないからやる事が無い。仕方ないからお城の中を探検しよう。部屋には入らず、そのまま真っ直ぐ走り出した。

綺麗な花が咲き誇るお庭には沢山のお花が咲いている。いいなあ、綺麗だな。でもアルトラントのお花もすごく綺麗だったなあ。

庭師の人達が綺麗にしてるんだよね。俺はお話した事ないけど、ダフネは庭師の人と仲がいいって聞いた。ダフネと歳が近いんだって。庭の中はのんびり休憩する人や、ベンチに座って本を読む人、様々だ。

俺もどこかに座れないか首を動かしていると、1人の男の子が座っているベンチを発見した。まだ空きはある。それに仲良くなるチャンスかもしれない。

俺、お友達いないから、お友達欲しいなあ。

少し気恥しいけど、意を決して彼に話しかける事にした。

「あ、あの……隣に座ってもいいですか？」

少し上ずってしまった声に男の子はびっくりしてたけど、すぐに優しくそうに笑い返してくれた。

「いいよ」

「あ、ありがとう」

俺の為に少しずれてくれてスペースが空く。そのスペースにお尻をつけた。

男の子をチラチラ見てみると、男の子は何をする訳でもなく、ただお花を見ている。好きなのかなあ？

「お花、好きなの？」

「好きだよ。可愛いよね」

そう言うてにっこり笑い返してくれた。うわーうわー！今ちゃんとお話できてるよね？

いつの間にか顔が赤くなってたみたい、男の子が心配そうに大丈夫？って聞いて来てくれた。とっても優しい子だなあ。この子とお友達になりたい！

勇気を振り絞って名前を聞いてみる事にした。

「あの、俺ね、ルーって言うんだ！君のお名前は？」

「俺？俺はライ。君の事はルーって呼んでいいの？俺の事はライでいいよ」

「う、うん！嬉しいな、年が近いお友達ってあんまりいないんだ。よろしくね」

「こちらこそ。パパの仕事の都合で来たから、長い間はここにいないけど、よろしくね」

「お父さんと来てるの？」

「ううん、パパの仕事をしてる代理の人と一緒に来てるんだ。俺はする事ないから何もしてないんだけどね」

「じゃあ君はどこの人なの？フライアンの人？」

「そうだよ。俺はフライアンの南西の町、バーカー地方の村から来たんだ」

フライアンは首都のファーディナンドしか来た事ないけど、他の場所も行ってみたいな。

俺、アルトラントでもダフネに連れられるまで城から出た事無かったから、シースクエアもダフネのお家も知らなかった。

そう考えてパパとママの顔が浮かんで泣きそうになった。ダフネのパパとママも捕まったって言ってた。

俺を助けてくれたから捕まっちゃったんだ。

「どうしたの？俺何か悪い事言った？」

「え？ううん！全然だよ！君はいつもここにいるの？」

「そうだよ。ここ綺麗だからね。俺、こんな沢山のお花に囲まれる機会が無かったから嬉しくて」

「そうなんだ」

その後もちょこちょこ話をした。すっごく盛り上がる訳でもなかったけど、居心地が良くてのんびりできた。

ライは不思議な子だなあ。なんだかすごく落ち着くんだ。ライはお話し上手なのかな？

気づいたら外は真っ赤な夕日に照らされていた。もう帰らなくちゃいけないのかな？まだもう少しお話したかったのに。

ライも家に帰るって言ってたから俺も帰らなくちゃいけない。

「じゃあねルー、また会えるといいね」

「うん！俺、明日もここに来るね！」

「じゃあ俺もここにいます」

ライがそう言って走って行った先にはおじさんの姿があった。多分あの人がパパの代理の人なんだろう。

ライはその人と手を繋いで帰って行った。

早くダフネ帰ってきて！話したい事沢山あるよ！

次の日も昨日と同じ位の時間に向かったらライはちゃんとベンチに座っていた。手を振ると気づいて手を振り返してくれた。嬉しいなあ、ちゃんと覚えてもらえてる。

その日から、しばらく毎日この場所に通い、ライとお話をした。メリッサさんとイヴさんから何か言い事あった？って聞かれて友達が

出来たって言ったらいヴさんが少し羨ましそうにしてたから、後悔した。

俺はこうやって好きに外に出てるけど、イヴさんは出れないから言っちゃ駄目だった。でもイヴさんは笑って、今度連れて来てねって言うてくれた。イヴさんは優しい人だ。

「ライ！」

「遅いよルー」

いつもの場所に向かうと、暇そうに足をプラプラしてたライの顔が華やぐ。

1週間の間にライとすっごく仲良くなった。もっと仲良くなったらいヴをメリッサさんの双子の弟のネルンとヨルンに紹介するんだ。今日も食べたご飯の話とか、起きた時間とか一杯お話した。でも今日は違った。

「ねえルーってもしかして王子様？」

「え？」

「おじさんが言ってた。ルーはアルトランドの王子様にそっくりだって。本当なの？」

ばれちゃった。確かにここでこんな好き勝手に出たり入ったりしてたら、顔がばれてもおかしくないだろう。どうしよう、誤魔化した方がいいのかな。でもライなら大丈夫だよ。俺を受け入れてくれるよね……

意を決してライに自分が王子だと言う事を伝えた。ライはかなり驚いていた。

「ビックリした。本当なんだ」

「う、うん……」



「ルー、辛くない？ここで意地悪されてない？」

「されてないよ！俺、ちゃんとアルトラントに帰るつもりだから」

「帰る？でもバルディナにアルトラントは占領されてるでしょ？」

「そうだけど……でも頑張れば帰れるんだよ」

ライは少しだけ笑って、そうなるといいねって言うてくれた。信じ  
てはいないみたいだけど、絶対取り戻してやるんだからね。

ゲーティアさえあれば、それが叶うのに……

その時、広場がざわめきだした。何かが始まるのかな？皆お庭から  
いなくなっちゃったけど……

「どうしたんだろう」

「処刑じゃない？評議委員の1人が売国行為をしたっておじさん言  
ってたよ。公開処刑なのかもね」

「処刑！？」

背筋が凍る。なんで処刑しなきゃいけないの？売国行為って何？一  
体何があったの？

ライはちゃんと知ってるのに、俺は何も知らない。

「議員の1人が女王をバルディナに売ろうとしてたらしいよ。国宝  
石と一緒に。バルディナはゲーティアを探そうとしてるみたいだし、  
バルディナに渡ったら危険だよね」

「イヴさんを！？」

うっかり女王様の名前を口にしてしまって、慌てて口を閉じる。ラ  
イは少し驚いた顔をしてたけど、何食わぬ顔に戻して、気をつけな  
よねって言うてくれた。良かった。ライは俺の気持ちを汲んで突っ  
込む事はしなかった。ありがとう。

「ねえルー、ファライアンはゲーティアを探す気なの？そんな噂流れてるけど」

「え？噂？俺聞いた事ない」

「そりゃルーは知らないだろうね。議員の処刑も知らない位だもの」  
「そんな……」

「国宝石にゲーティアの在り処が示されてるって聞くからね、戦争になったら嫌だなあ」

ライはそう呟いて足元に視線を下げる。そのまま会話がなくなってしまった時、ローレンツさんが俺達を見つけて近寄ってきた。表情は硬い。

ローレンツさんは俺にギリギリ聞こえるような小さい声を発した。

「ルーシエル王子、丁度よかった。これから暫く女王の部屋に行ってもらえますか。女王の部屋から出ないでいただきたい」

「ローレンツさん？」

「……議員の1人をこれから処刑する。彼らのスパイが城内に紛れこんでいる可能性が高い。女王の所なら安心ですから」

「う、うん」

ローレンツさんはライをちらりと見て、手を引いた。

「あ、ライ！俺行かなきゃ」

「そっか。明日は会える？」

「王子、駄目です」

「……ごめんね、明日は無理みたい」

「俺明日帰るから残念だな。またなルー、また遊び行くよ」

「え、え？」

ライはそのまま走り去ってしまった。そんな……こんな別れ方って

ないよ。折角出来たお友達なのに。

ローレンツさんに文句をつけてやろうと思ったけど、余りにも硬いローレンツさんの表情に何も言う事が出来なかった。

「王子、何も信じないでください。女王の間から出ないで、女王と共にいてください。火の粉は恐らく貴方にも降りかかる」

「……」

「議員の1人が女王を売ろうとしている。そして貴方も狙われているでしょう。貴方の護衛に騎士団の団長をローテーションで24時間つけます。絶対に彼らから離れない事」

「ローレンツさん？」

「……フライアンは崩壊手前なのです。ここを凌がなければ、フライアンは内部から崩壊する」

フライアンが崩壊してしまったら俺達に行くあてはない。ライナお姉ちゃんが折角オーシャンに協力させるって戻っていった、フライアンの協力するってなった時、フライアンが無くなってたらどうしようもない。

バルディナに対抗できる国はなくなる。パパとママ達を助けられない。

どうしよう。どうしよう。

「ローレンツさん、ダフネは？」

「まだ連絡はありません。恐らく今帰りの船に乗っている所でしよう。後3日は戻ってこないと思ってください。その間はオルヴァーとグレイン、エデュサ、ハーヴェイをつけます。ダフネとランドルフが戻ったらランドルフも護衛につかせます。安心してください」

怖い、この国も安心できない。崩壊が目前に迫ってる。

お城の中では色んな声が聞こえて来る。評議委員が横暴だ、と叫び、

騎士団が評議委員を口汚く罵っている。完全に評議会と騎士団は対立してしまった。

こんなじゃ国は守れないよ。団結しないとバルディナに勝てないよ。

どうしよう、どうしよう……

## 32 騎士団対評議会

「なんだ、この状況は……」

やっと2週間の長旅の末にフライアンに戻ってきたと思ったのも束の間、フライアンは喧騒の渦だった。

その内容を聞いた俺とランドルフは正直、驚きを隠せなかった。

### 32 騎士団対評議会

「ランドルフ、処刑って……」

レオンと別れた俺とランドルフは走って城に向かう。けど途中でランドルフを見つけた市民達にもみくちゃにされてなかなか進まない。街に配備されている騎士達が先に進ませてくれて、何とか少しずつだけど前に進む。

市民から聞こえて来るのは議員を処刑したのは真実か、議員は本当に裏切っていたのか、中には処刑した事に対して良くやったという声も聞こえ、正反対の国を牛耳るなど言う声も聞こえて来る。

その喧騒を拾いながら見えているのに中々辿り着かない城に舌打ちをした。

ルーシエルは大丈夫なんだろうか。

「ランドルフ！」

「メリッサ！」

やっとこさ城の門をくぐりぬけた先には赤毛に女が待っていた。ど

うやら俺達が帰ってくるのをずっとここで待ってたらしい。  
駆け寄ったランドルフにメリッサは慌てて口を動かした。

「今回の件、もう聞いた？」

「ああ、評議会の奴が女王をつて……」

「それで処刑はしたんだけど、裏切ったのがリユーツ議員だったから、リユーツ議員を募っている議員達が皆ボイコットして、市民に訴え出したんだよ。騎士団が国を乗っ取ろうとしてるって。それに対抗して騎士団も市民にリユーツ議員が出した文書を公開するって言いだして……ジェレミー達が止めてるんだけど」

俺達がいけない間にとんでもない事になったな。メリッサと言う女は青ざめた表情をしている。

ランドルフがそれをあやして、何とか平静を装うとしているようだ。

「貴方ダフネさんよね、早く行きましょう。王子様は女王の部屋にいる。王子様も狙われてるから、王子様も箱庭から出られないの」

「マジかよ！」

「話はそこで詳しくするから、行きましょう」

メリッサの後をついて、俺は走り出す。ランドルフはジェレミーに報告するから、お前は先に行けって言ってくれたからお言葉に甘えよう。

ルーシエルは大丈夫なんだろうか。メリッサが言わないから怪我とかはしてないんだろうけど……こんな状態でゲーティアを探せるのか？ 探せる訳がない。

ファライアンはクーデター寸前だ。議員の情報操作で市民が怒りの声を上げるかもしれない。

どっちが正しいんだ？ 評議会と騎士団、どっちが……

城内は正直言って最悪と言っていいだろう。騎士団と評議委員がに

らみ合っている。評議委員たちは自分達が普段使用している東の塔から出て来ないし、騎士団も東の塔に一切近寄らない。城の内部にいる議員と騎士団はいがみ合っている。

「くそっ……女王の名を借りた反逆者達め。騎士団が女王を既に殺しているのではないのか？」

「評議委員は国を売る売国奴だ。全て一掃できればいいのに、なぜジェレミー様は許可しない」

それぞれ嫌味の応酬だ。こんなんじゃ国として機能する訳がない。バルディナとパルチナの脅威は目前に迫っている。それなのにどうしてこんなにいがみ合ってるって言うんだ。

こんなんで戦争が起こった時、勝てると思ってるのか？ただでさえ軍勢力でも不利なのに、統率がとれていないとなると致命的だ。メリッサもやっぱり言い合いが気になるのか、チラチラ色んな方に視線を回している。

そして俺達は人通りの少ない北の離宮に足を運ばせた。この先に女王がいるのか。北の離宮の先には騎士たちが待機している。

メリッサは顔パスなんだろう、その先に進んでいった。

「メリッサさん？」

「声を出さないで。どこに人がいるか分からないの」

メリッサは小さな声で返事をして首に賭けているペンダントを手にとった。

それを離宮の門に埋め込んだ途端、景色が歪んでいく。

「これ……」

「入って」

言われたままに入った先には色んな花が咲き乱れている。メリッサが入った後にはさっきの空間の歪みが無くなっていて、後ろには門しか見えない。

これは一体どういう事だ？

「これはオルヴァーが作った魔術障壁。まあカモフラージュよ」

「すごいな……エデンの技術か」

「こんなすごい力があるから羨む人達に迫害されてしまったんだけどね」

花が咲き乱れる場所に1軒の家がある。余り大きいとは言えない。まさかこんな場所に女王がいるのか？でも家の前に立っていたルーシエルを見て、そんな考えはどこかに吹き飛んでしまった。

「ルーシエル！」

「あ、ダフネ！」

俺に気づいたルーシエルが走り出す。こんな所に閉じ込められてたのか。

ルーシエルを力いっぱい抱きしめたら、ルーシエルは緊張の糸が溶けたのか、グスグス泣き出した。それをあやしながらメリッサに案内されるまま家の中に案内される。

室内はミッシェルが好きそうなぬいぐるみや可愛らしい小物で満たされている。廊下の先には1つの部屋。

その中に金髪の華奢な女性がソファに腰かけていた。その人が俺達に視線を向ける。

「ルーシエル君？メリッサ？」

「イヴさん、この人がね、俺の御世話係のダフネなんだよ！」



「イヴ？」

「ちょっとダフネさん、イヴは女王なんだから初対面で呼び捨ては  
どうなの？」

女王なのか！？いや、そんな事言われても俺知らなかったし！

ワタワタしている俺の声が聞こえたのか、オルヴァーが顔を出して  
くる。

オルヴァーに助けを求めれば、とりあえずソファに座る様に言われ  
たので、ルーシエルを膝に乗せて、俺は失礼しますとだけ呟いて腰  
かけた。

「ダフネ、まあお前ももう分かってるだろうけど、この御方がフア  
ライアンの女王イヴ様だ」

「じよ、女王陛下」

「止めて、そんな大層な事はしてないの。イヴでいいからね。貴方  
の事はダフネさん？ダフネ君？」

「あ、どちらでも……」

「じゃあダフネ君と呼ぶね」

今更だけど、女王は本当にいたんだな。可愛らしく笑っているイヴ  
さんが青の国宝石の継承者だなんて信じられない。

そしてこの箱庭の存在も。ジェレミーやオルヴァー達が必死でイヴ  
さん達を隠し続ける理由も。

とりあえず今俺が知りたいのは、なぜここまでフライアンの内部  
がごたごたになっているかだ。フライアンが最後の頼みの俺達に  
とって、今の状態は望ましくない。

「オルヴァー、聞きたい事が……」

「わかってる。それには答えるから俺の質問を先に聞いていいか？  
ヴァシユタンとはどうなった？」

オルヴァーはイヴさんに一瞬視線を向けて、俺の質問には答えなかった。言いたくないことでもあるのか？

とりあえずオルヴァーに質問された事を先に答える事にした。

「大丈夫だ、協力を取り付ける事に成功はした。パルチナの海軍はすべて引き受けてくれるって。でもバルディナの海軍まで出てきたら勝ち目がないから、ヴァシユタンはビアナにも協力要請するべきだって言ってたけど……」

「ビアナは無理だろ。あそこは中立だからこそ今までどこの支配下にもならなかったんだ。こんな泥沼の戦に参加する訳がない。バルディナの艦隊はフライアンから海軍を派遣するしかないな。痛手だがな……まあオーシャンが手を貸してくれたらオーシャンにも一部負担してもらおうだろうが」

「だよな……」

やっぱりフライアンから海軍を派遣するしかないのか。ただでさえ人数的にも不利なのに、海兵に駒割ってらんねえよ。フライアンに来てからもう3カ月程度が経過する。その間アルトランドでは着々と奴隷政策が進んでるんだろうな。

俺の返答に満足したらしい、オルヴァーの質問は終わった。次は俺の番だ。

「オルヴァー」

「ん？ ああ、そうだな。こっちに来い」

オルヴァーに言われたまま、俺はルーシエルを置いて部屋を出る。どうして出る必要があるんだ？

首をかしげた俺にオルヴァーは振り返った。

「女王の耳に入る情報は出来るだけ少なくしたい。御自身のストレスになるからな」

「それって……」

「評議会の中でも若手議員の筆頭格リユーツ議員、そのリユーツ議員が女王を国宝石と共にバルディナに売り渡して戦争回避させようとしていたのが分かった」

「どうやって……」

「リユーツ議員と友好関係にある若手議員に送った密書が発見されただ。リユーツ議員はお前が戻ってくる前に処刑された。勿論リユーツ議員に密書を送っていた奴もだ」

そんな事が……確かにこれは反逆行為だ。でもどうして急に。

まだバルディナと繋がっていた訳じゃない。反逆罪で処罰はあっていいだろうけど、処刑はやりすぎる。

これじゃ議員が反発しても仕方がない。

「ジェレミーは処刑は反対だったんだけどな、他の騎士団達の声に押されたのが大きい。騎士団と議会の確執はここまで大きくなってたんだよ。いや、いつまでも武力行使に出ない議会に俺達騎士団が嫌気をさしたのが正しい。バルディナの奴隸政策を知っているはずなのに、向こうに譲歩して歩み寄ろうとする姿勢にな、俺達騎士団はそれでは何のための存在だ？　そう言う事になる。そして今回の密書の発見、決定的だった。俺達騎士団の怒りはピークに達しているんだ」

気持ちは分かるんだ。処刑だって納得が行くかもしれない、国を売ろうとしてたんだから。

だけど処分をしたんだ、今みたいに議会と騎士団がこんなに争う必要なんてないのに。議会だって自分たちの間に反逆行為をする奴が出たんだ、あんなに怒る立場でもない。騎士団だって議会の全てが

悪い訳じゃないんだ、全てを駆逐するみたいな言い方は可笑しいと思う。

納得がいかない顔をしてたんだろう俺にオルヴァーが冷えた視線を送る。

「ダフネ、フライアンはバルディナから招待状が届いている。アルトラントの国王と後の公開処刑を特等席で見れるとな」

「なっ！」

「ここまで馬鹿にされたのは初めてだ。だが議会はなんて言ったと思う？ここで直接イマニユエル・ネイサンに交渉しようと言ったんだ。つまりお前の国の国王と後の処刑現場を見に行く気でいたんだよ」

なんで……フライアンは、俺達を助けてくれる気はなかったのか？戦争をしたくないのは分かってる。でも、こんなのただの犬じゃないか！

国王と後の処刑を見に行くなんて……どうしてそんな最低な事をつ！

「議員達は俺達騎士団の存在価値を奪おうとしている。何のための騎士団だ？俺達騎士団は議会の言いつけを守る為じゃない、国と女王に忠誠を誓っている。奴らの考えは俺達と違いすぎる」

「まさかオルヴァー、お前……」

嫌な予感に冷や汗が出た。

オルヴァーの目に狂気が移っているような感覚が前進に走る。処刑って事は人を殺しているんだ。それなのにオルヴァーは納得していない。もつと血を欲しているように感じた。

「ああそうだ、リユーツ議員を直接ギロチンで処刑したのは俺と第4騎士団団長グレインだ。俺はあいつが許せない。いや、議会自体

もうファライアンには必要ない。俺達騎士団だけでファライアンは守って見せる」

「駄目だオルヴァー、それじゃ独裁者になっちまう！民主主義に反するぞ！」

「奴らのどこに民意がある！？お前は分かるだろう？バルディナに占拠された場所がどうなったか！自分達さえ良ければ自国の民衆を奴隷に貶めても平気なのか！？」

何も言い返せない。今のアルトラントのことを考えたらファライアンの国民を奴隷にしたいなんて思う奴がいるわけない。でもリュース議員が戦争と引き換えに女王と国宝石を売ろうとした。

そしてそれが引き金となって最悪の方向に事態が進んでいく。

騎士団が少しずつ、少しずつ暴走をし始めたのだ。その原因を作ったのは議会だけど、騎士団の今の行動は暴挙とも取れるものだった。

「議会は信用できない。奴らは傭兵や密偵を雇って女王陛下の場所を嗅ぎまわってる。ルーシエル王子だって恐らくその対象だ。バルディナに引き渡すのに格好の餌だからな！」

「そんな……」

どうしてこんな事になったんだ……こんなじゃ戦争も何もできる状態じゃない。

負けてしまう、何もかもがなくなってしまう。全てを1つにまとめなければ、この状況を打破しなければ……

それと同時に浮かんできたのは1つの言葉。

“赤の国宝石は民衆を導く大いなる希望の光”

それだ、赤の国宝石……それを手に入れば。いや、ゲーティアを手に入ればいいんだ。英雄を作るんだ。やっぱりダレンに会わな

きやいけない。赤の国宝石を……過去の大战の英雄を。なんとかでも東天に行かなきゃいけないんだ。

「ちょっとオルヴァー、なんなのこの鳥」

その時、扉を開けて1人の女性が入ってきた。腰に剣を携えている事から騎士団の人間なんだろう。

その女が手に捕まえているのはカラフルな緑色の鳥。

「ドリン！」

「ダフネ、ダフネ！テヘンダ！」

ドリンは俺を見つけてバサバサと羽をばたつかせて暴れ出す。それに苛立った女が半ば捨てるように投げればドリンは俺の腕にとまった。

まさかライナに何かあったのか？じゃなきゃドリンがライナから離れるはずがない。

「どうしたドリン」

「テヘンダ、テヘンダ！バルディナ攻メテキタ！オーシャン、文書、キタ！」

「どう言う事だよ！」

「オーシャン、バルディナ、支配下ニナラナケレバ武力行使！文書来タ！」

「マジかよ……」

バルディナの手はオーシャンに伸びていたんだ。アルトラントを完全制圧して、ある程度アルトラント内の騒ぎを鎮圧したら次はオーシャンだと？

奴らは本当に世界を征服する気にいるんだ。オーシャンを狙う目的

は知らないが、まあフライアンと手を組まれる前にとって奴だろう。

「俺はジェレミーとローレンツ達に伝えて来る。ここで待ってろ！」

オルヴァーが走って行き、その場に俺と女だけが取り残される。

「オーシャンねえ……残念だけど無理でしょうね。今のフライアンは到底兵が出せる状況じゃない」

「そこをなんとかできないのか？」

「あんた誰か知らないけど、騒ぎは知ってるでしょ？ 議会が承諾するはずがない。騎士団が単独で行動したら手薄の城を奴らに制圧されるわ。オーシャンには悪いけど、潰れてもらうしかないわよね……」

「……」  
「そんな……」

駄目だ、諦めたら絶対に駄目だ。

俺はライナを助けなきゃいけない。ライナが俺を助けてくれたように、俺がライナを！

### 33 女王の呪い

「我々は断固として騎士団の横暴を許す訳にはいかない！リユーツ議員とダット議員の仇を討つ事を忘れない！」

議員の1人が大声で宣誓を掲げている。そしてその情報が国民の耳にも届く。

フライアンは実質上、もう崩壊していた。

### 33 女王の呪い

「オーシャンが!？」

ルーシエルの悲鳴じみた絶叫にイヴさんとメリッサも肩を震わせた。そしてその横ではエデュサと言う女性がため息をついた。

エデュサは女性ながら第5騎士団の団長を務めているらしく、かなりの剣技の腕前らしい。時間があればお手合わせ願いたい、今はそんな時間はない。メリッサは忙しく動揺しているイヴさんを静めている。俺はルーシエルを。

ルーシエルはドリンを抱きしめて顔を真っ青にしている。ドリンもオーシャンからまさかフライアンまで飛んできたんだ。ヘトヘトになっており、ルーシエルの腕の中でぐったりしている。

「どうしようダフネ……ライナお姉ちゃん殺されちゃう」

「滅多な事言うなよ! あんな凶太い奴が簡単に死ぬかよ」

「でもライナお姉ちゃんはお姫様でしょ!？ 人質にされちゃうよ!」  
「っ!」



痛い所を突かれた。そうだ、ライナは負けたら確実にバルディナの人質になってしまいうだろう。なんたってオーシャン民族の族長の孫娘だ。利用価値はかなり高いはずだ。

ライナまでそんな目に遭わす訳にはいかない。せめて少しでも軍を出せば……バルディナはまだアルトランドの制圧に軍を残す必要がある。大軍をオーシャンには向かわせないだろう。だとしたら牽制にでもなればいい、フライアンの海軍を少しでも……

こんな落ち付かない状況で1時間近く待っていたら、ローレンツがドアを開けて入ってきた。

「ダフネ、話はオルヴァーから聞きました。私たちがごたごたして非難声明も送れない状況での進軍……余りにも今回の件、相手の手際が良すぎる」

「もしかして情報が漏れてるって事もあるかもしれないわね」

「エデュサ様、それはっ！」

「現実を見なさいメリッサ、今フライアンは誰を信じていいか分からない状況よ。どこに裏切り者がいても可笑しくない」

冷静な観点で行けば、多分エデュサの言う通り情報は漏れてるだろう。信じたくはないけどな。

メリッサは口をぎゅっと縛ったが、意気消沈することはなかった。この子はたくましい子だ。そして俺にはやらなきゃいけない事がある。

「ローレンツ、海軍を出してくれ」

「ダフネ……」

「全部じゃなくていいんだ、一部でいいんだ！牽制の目的になればっ！オーシャンは同盟国になる相手だぞ！見捨てるなんてできない！」

「……エデュサ、貴方はどうします」

「私はパスよ。海軍出したいならハーヴェイに言ってちょうだい。  
第5騎士団は動かない」

もしかしたらエデュサは海軍なのかもしれない。この反応は確実に  
そうだ。

俺はエデュサの腕を掴んだ。

「頼む、出してくれよ!」

「出せないわ、確かにオーシャンを助けたのは私だってそうよ。  
でも時期が悪すぎる、今独断で動けば国民からしたら本当に私達騎  
士団が独裁政治を行っていると見られるかもしれない」

「オーシャンを助けるんだ! そんな事思う訳ないだろ!？」

「オーシャンに加担したことにより世界中からバルディナ対フアラ  
イアンの図が明確になるのよ。そんな一大事に議会の了承も取らず  
独断で行くのは不味すぎるわ」

確かにそうかもしれない。これを皮切りにバルディナはフアライア  
ンを完全に敵国と認識するだろう。フアライアンとバルディナの戦  
争が絶対に避けられなくなるかもしれない。でも助けがないなんてそ  
んなのあんまりだ、ライナは望みをかけて俺達にドリンを使わせた  
んだろう。それなのにフアライアンからの援軍がないままだなんて  
……

もしかしたらオーシャンがバルディナを跳ね返すかもしれない。で  
もそれだったらライナはドリンを託さないだろう。

ライナを助けなくちゃ! 俺だけでも!

「じゃあ俺1人でも行く! 船を貸してくれ! 小さくても手こぎでも  
いいんだ!」

「ダフネ……」

「貴方状況を見なさい。王子の御世話係がそんな事で命捨てる気？」「命を捨てる気なんかない！でもオーシャンがいなきゃバルディナには敵わないだろ！？味方を裏切るなんてできない！」

この状況を黙ってみていたローレンツが何かを決意したように顔を上げた。

「……分かりました。エデュサ、第5騎士団を100人連れて行きなさい。恐らくバルディナは本気でオーシャンを潰すつもりはないはずです。向こうが降伏する為に脅しをかけるだけだと思います」

「いいのローレンツ」

「仕方がありません、同盟国になる国を見捨てる行為をしたならば、エデンとヴァシユタンの不信感を煽ります。しかし議会と話をしている暇も無い……今議員に見つかっては元も子もない、船は一隻しか出せません。それも小型の……それでいいなら議員の私が許可します。行きましょう」

急がなきゃいけない。俺は領いてローレンツの後をついて行く。エデュサもその後に続いた。

話に入れなかったルーシエルが俺を見てぼかんとしたけど、声を上げた。

「ダフネ？俺も行く！」

「ルーシエル君、待って！」

「駄目！イヴは外に出たら！」

「なんだありや……」

ローレンツとエデュサと女王の家から出て城の中に入ったら、城壁に立って1人の男が大声で何かを叫んでいた。ローレンツが何かを感じ取り、走って近くまで行ってしまおう。慌てて俺達もその後を追いかけた。

城壁の付近には沢山の議員、城で働いている人間、騎士団の奴ら、そしてランドルフと第4騎士団団長のグレインが立っていた。騎士団からはヤジが飛び交い、近くににいる議員と一触即発だ。

ローレンツが走りよったら、気付いた2人がこっちに振り返った。その表情は平然そうに見せかけているが、目は全く笑ってない。怒りに燃えているようだった。

「ランドルフ、グレイン！何があったのです！？」

「おおローレンツ、何もクソもねえよ。あのクソ議員があそこに登って国民にアピッてんだよ。俺達騎士団が悪いつてよ。城門閉めてっから国民の声はわかんねえが、このままじゃマジいぜ」

「とりあえず議員を降ろす為に、兵を数人派遣したから何とかするとは思うけど……」

こんな時に何をいがみ合ってるんだ！

議員から出て来るのは騎士団に対する侮辱、そして自分達の正当性、殺されたリ्यूッツ議員とダット議員の事。

そして俺とルーシエルの事も……

「この国は騎士団のせいで崩壊寸前だ！バルディナと戦争するとぬかし、平和的交渉など一切考えぬ！果ては禍根の目になるであろうアルトラントの使者を匿っている！」

「あいっ……」

「これこそ完全な情報漏洩じゃないか」

忌々しげにランドルフが呟き、グレインがため息をつく。その間に

も議員はあること無いことをでっちあげていく。何とかして国民の世論を自分達の有利に持っていく為の。

でも気持ちには分かるんだ、騎士団がリ्यूツ議員を大して調べもせずに処刑までしたのは確かに横暴だと思う。でも証拠があったんだから議会が文句を言うことはできない。それなのに……  
そしてその時、ルーシエルが俺に飛びついた。

「お、おい！何で来たんだよ！」

「俺もライナお姉ちゃん助けに行くよ！」

「危ないからって……なんで2人が！」

俺の声にランドルフ達も振り返って目を丸くした。だってそこには女王がいたから。

女王はメリッサに手を引かれてるけど動かない。完全に視線は議員に向かっていて。

それに気づかない議員は女王の事を汚く罵っている。

「女王は本当にいるのか？私達は姿を見た事もない。彼女は既に騎士団に殺されているのかもしれない、いたとしても我らの前に姿も現さない女王を誰が認めるのか！即刻女王は姿を出して然るべき罰を取るべきだ！我らがここまでこじれた理由は全て女王のせいだ！」

何でもかんでも女王のせいだよ。

イヴさんは茫然としている。メリッサが必死で聞かせまいとしているけど、もう遅い。

そして議員は全てを壊す事を口にした。

「我らに救いの術はない、立ち上がるのだ民衆たちよ！騎士団を根絶し、新たな国を作ろうではないか！ファライアンに再びクーデターを、騎士団の根絶を！」

「こんな時に何馬鹿な事言っただ、あのクソデブ。俺達騎士団がいなきゃ誰がバルディナと戦うっただよ」

「こりゃ完全な情報操作だな。後でどんだけ言い訳しなきゃいけないんだよ……」

「イヴ、貴方は早く部屋に……イヴ？」

ローレンツの声に俺達もイヴさんに振り返る。イヴさんはスカートの裾を握りしめ、歯を食いしばっていた。

その目に浮かんでいる物は怒り。

ローレンツが顔を真っ青にさせてイヴさんの肩を掴むけど、イヴさんの目から怒りが消える事はない。

「ひ、どい……」

「イヴ、落ち着いて。彼は少しカッとなってるだけだ」

「許さない、彼を絶対に許さない。ジェレミー達によくもあんな酷い事をっ」

「イヴ、よせ！」

「いらない、彼はフライアンには要らないわ！」

ローレンツの静止を余所に、イヴさんの憎しみのこもった視線が議員に向けられた。

そしてその時、演説をしていた議員が急にメガホンを落とした。何があったんだ？

「あ、あ……女王、陛下」

議員は何かを呟き、女王に視線を送る。確実にあいつは俺達を見ている。

ローレンツが慌てて女王を連れて、その場から離れる。しかしこっちに視線向けられたお陰で城内はパニックだ。

女王陛下が姿を現した、と。  
しかしそのパニックは再び議員に向かった。

「ああ、女王陛下が命じている。私に死を選べと！女王陛下の為ならば喜んで、この身を投げ打とう！」

議員は城壁から身を投げ捨てた。

グシャツと潰れる音が聞こえ、悲鳴が大きく聞こえて来る。さつきまで女王を散々こきおろしていた議員が女王の為と言って自殺した。どう言う事なんだ……？

「あ、ああ……いやああああ！」

「イヴ、早くこっちに！大丈夫、貴方のせいじゃない」

メリッサとローレンツがイヴさんをなだめながら移動する。議員に目が行っている他の奴らはイヴさんに気づかない。ある意味不幸中の幸いなかもしれない。

こんな事言いたくはないけどな。余りの事態に硬直しているルーシエルを力いっぱい抱きしめる。こんな所を見せてしまった……こんな汚い場面をこんな幼い子供に……

その光景を見ていたランドルフが乾いた笑みを浮かべた。しかしその表情には恐怖が宿っていた。

「分かったらダフネ、青の国宝石の恐ろしさが」

「ランドルフ……」

「あの議員は女王に憎まれた。国宝石の呪いがあの男に振りかかったんだよ。あいつは女王の為に生きる事を喜びとし、女王の為に喜んで命を捧げた。恐ろしいだろ？民衆を魅了する力ってのは。ははっ……女王の兄君もああやって最後は死んだんだ」

あれが……国宝石の呪い。あの男は女王に呪われた、だから命を落とした。そして過去に同じ事件でイヴさんのお兄さんが亡くなっている。

その話を聞いて背筋が凍っていくのを感じた。そしてジェレミー達が女王をあゝの場所から出さなかったのが今更ながら領けた。あの女王を野放しにするのは危険すぎる、自分の感情を1つ吐き出しただけで相手を殺せるんだから。

悲鳴が大きくなり、議員達が城壁の下に駆け寄っていく。でももう遅い、議員は既に息絶えているだろう。そして聞こえてきたのは怒りの咆哮。

「女王が殺した……女王が彼を殺したんだ！」

議員が騒ぎ出し、そしてそれに反発した騎士団が議員に掴みかかる。その場は乱闘騒ぎになってしまった。それを止める者は誰もいない。目の前で仲間を失った議員たちの怒りは勿論収まることは無く、情報操作された挙句に議員が死んだのまで自分達や女王のせいにはされた騎士団の怒りも頂点に達していた。もう駄目だ、フアライアンは崩壊してしまっている。

茫然としている俺の腕をエデュサが引いた。

「今のうちに行くわよ。この騒動があったら大丈夫、恐らくばれない」

「でもっ……」

「国内が信じられないんだから、国外に頼るしかないわね。もうどうやってもフアライアンは駄目って事」

怯えて腰にしがみついているルーシエルを申し訳ない気持ちでいっぱいだったけどグレインに預けた。ルーシエルは離れるのを嫌がってジタバタ暴れたが、グレインが放さないのを悟ったのか諦めた。



ごめんなルーシエル。

肩にドリンが乗っかってくる。

後ろから聞こえて来るのは喧騒と怒声。その声を背中に受け止めながら思う。

もうファイアンは崩壊してしまったんだと。

それでも頼る国はファイアン以外にない。やっぱり何があってもゲーティアを見つけないといけないんだ。

### 34 オーシャンへの出航

「ジャネス、第1部隊を集めて第5ゲートに向かってちょうだい。オーシャンに出向するわよ」

「エデュサ様、それは！」

「バルディナがオーシャンに侵略を始めたという情報が入った。牽制のために第5騎士団が派遣されたのよ」

#### 34 オーシャンへの出航

騒がしい広場を抜けて、人がいない地下への階段を下りる。その間、エデュサの間に会話はなかった。

そして地下室の中にある扉を目の前にし、エデュサが鍵を開けて中に入った先には、いくつもの軍艦が並んでいた。大きい物と小さい物様々だ。これの小さい奴を使うんだろうけど、それでも中々のかさだ。

あの騒ぎはどうなったんだろう。あれはしばらく収まらないだろう。エデュサが船に乗り込み、俺も後について船に乗り込む。また暫く船内生活か。でもこれは軍艦だから普通の船よりもスピードは出るはずだ。そんなに時間はかからないだろう。

そして第5騎士団の連中も集まり、大量の物資やらなんやらを船に積んでいく。

そして全員が甲板に出たのを確認してエデュサが先頭に立った。

「聞け、第5騎士団の猛者達！バルディナがオーシャンに侵攻したとの連絡があった！オーシャンは我らの盟友になる相手かもしれん。我ら第5騎士団は直ちにオーシャンの援護に向かうぞ！」

「しかし団長、この人数じゃバルディナには……」

「今回はあくまで牽制、向こうも本気で今はオーシャンを潰す気はないでしょう」

「この状況で出るのは危険なのでは？ 今フライアンは内紛寸前ですよ！？」

「だが我らには同盟国が必要だ。パルチナがバルディナに付いた今、一刻も早く我らも対応を求められる。ローレンツが手引きしてくれている、心配はいらない。フィッシャー湾から出るぞ。舵をきれ！」

エデュサのかけ声に兵たちが慌ただしく走り出す。何もすることの無い俺はその光景を眺めているしかなかったけど。

ゲートが開き、外の光が薄暗い室内に流れ込んでくる。  
待ってろよライナツ！

オーシャンに向かって船が走り出す。出だしだけどかなりの速度が出ている。

この速度だったら、結構早くオーシャンの領海に入れそうだ。俺はドリンに命令した。

「ドリン、ライナに伝えてくれ。オーシャンの第5騎士団が援軍として派遣されたってな」

ドリンを空に放てば、オーシャンの方向にまっすぐ飛んで行った。  
大丈夫かな……

俺は部下にあれこれ指揮を出して、状況を観察しているエデュサに声をかけた。

「何日くらいで着くんだ？」

「出せるスピードを出してる。早くて3日、遅くて4日」

すげえな……オーシャンからビアナまで行くのに4日かかったのに、たった3日でフライアンからオーシャンに向かえるのか。

アルトラントのスクエアからオーシャンまで船で確か3、4日かかるはずだ。軍艦となるともう少し早いから、まさか2日で着くとかはないよな。それだけは考えたくない。

だとしたら手遅れになってしまうから。

エデュサに部屋で休んどけと言われて、特にやる事の無い俺は言われるがまま部屋に向かって横になった。

次の日からは俺も色々下働きだけど船の動かし方を手伝うようになった。

第5騎士団の中にも友達っつーか話をするような奴も出来たし、急いでなきゃ結構楽しい空間なんだけどな。

3日後、オーシャンの代表的な島オルハ島を双眼鏡で確認した兵がエデュサに告げる。

まだバルディナの艦隊は見つかっていないようだ。準備に少し時間がかかったのかもしれないな。

そしてオルハ島には十数隻の小型船と3隻の大型船が見える。あれは多分オーシャンの船だろう。向こうはバリバリ戦う気みたいだ。流石戦闘民族なだけはある。

俺達の船を向こうも見つけたのかラボッサを吹いて威嚇してきたが、その音もすぐに止んだ。

「どうやら味方だと判断してくれたようね」

「向こうには知り合いがいるんだ。そいつは俺がフライアンにいる事を知ってるから」

「ああ、あの変な鳥の飼い主ってわけね」

領海内に入り船に近づいて行く俺達にライナが甲板に出てきた。

その姿を確認した俺は慌てて甲板の先頭に駆け寄った。良かった、

怪我とか何もしてないな。

「ライナ、助けに来たぞ！無事か！？」

「おーダフネ助かるよ！まだ戦は始まってないよ！」

ライナは手を振った後に1人の青年を甲板に連れてきた。面倒そうに煙草をふかしながらも、その青年は真っ直ぐ俺を見据えた。

誰だこいつ……髪の色からオーシャン人だろうけど……

近づいた船に移動用の板が賭けられる。代表として俺とエデュサがオーシャンの船に移動した。

待っていたのはライナと青年とカーシーだった。

前に出たエデュサに対応したのはライナが連れていた青年だ。もしかしてこいつがリーダーなのかもしれないな。

「蒼き慈悲の国フアライアン、此度は我が国の窮地に賭けつけていただき感謝の意を示す」

「バルディナの暴虐をこれ以上許す訳にはいかない。我らも少ない人数で申し訳ない」

エデュサが頭を下げれば、青年は煙草を潰し頭を下げた。

「ライナ、あいつ誰だ？」

「あいつはリイン、オーシャン民族なら誰もが知ってる英雄の直属の子孫だよ。オーシャンの総大将を務める。本人も戦争の知識、世界を見る目、全てに長けている。まあ幼馴染のあたしからしたら、そんな出来た奴じゃないけどね」

「悪口言うなよお前……」

なるほど、じゃあやっぱあいつがリーダーって訳だ。オーシャン人特有の赤紫色の髪に細身だが筋肉がしっかり付いている肉体。確か

に身体は鍛えてそうだなあ……  
でもそれと同時に1つの疑問。

「あいつ、俺達がオーシャンに行った時の部族会議には姿を出さなかったけど……戦争の大將を務めるぐらいなんだから参加するのが普通じゃないか？」

「仕方ないさ、あいつはオーシャンを捨てて国を出て行った。戻ってきたのは1カ月前だ」

国を捨てた奴を大將にするなんて……議論が起らなかったのか？普通だったら英雄の子孫なんて、皆が希望を抱く役割じゃないか。それなのにその責任を全て捨てて世界に飛び出した奴が今更戻ってきて、皆信用しないんじゃないか？

「それでいいのか？反対する奴いなかったのか？」

「勿論大問題さ。でもさ、世界に出てたあいつの先見の目はオーシヤン一だったし、国を守りたい気持ち一つでオーシヤンに戻ってきた。拒む理由も無かったし、バルディナとの戦争を指揮できるのはあいつしか居ないって結論になったんだよ」

「そっか、ならいいんだけど」

ライナのリンを見る目は優しくて穏やかだ。あれ、もしかしてこいつリンって奴のこと……

「ライナはあいつの事が好きなのか？」

「ただの幼馴染だよ。まあ確かにあいつが国を出て行く際、一緒に行こうって誘われたけどね。それにあたしがあいつに取られたら、あんたが悲しむじゃないか」

「な、なんでそうなるんだよ!？」

断じて違うぞ！

それなのにライナがそんな事言うから顔が真っ赤になってしまつて説得力が無い。まるで本当に俺がライナの事好きみたいじゃないか！絶対違う、違う違う違うぞ！

ライナはこの反応にゲラゲラ大笑いした後に言葉を零した。

「まああんたは本当の所、セラって子が好きなんだろう？」

「セラはただの仕事仲間だ！確かにいい奴だけど！」

「はいはい」

俺たちが馬鹿みたいに騒いでいる間にエデュサとリインは淡々と話を進めていく。

俺たちもいつの間にか、その話を盗み聞きするように聞き入る。

「リイン殿、早速で悪いが状況を説明していただけないか？私達は詳しい事情を知らないんだ」

「ああそうだな、数週間前にバルディナから書簡が届いた。バルディナと協力し世界調停を目指そう、と。礼としてアルトランドの一部を植民地として明け渡すってな」

「なんだって！？」

うっかり話に割り込んだ俺をライナが首根っこ捕えて隅に引きずっていく。

なんだかこの無言の突っ込みも懐かしい様な。こいつ女の癖にガチで力強いよな……俺の茶々のせいで少しだけ空気が凍ったが、リインは気にせずにつき話を話した。

「俺達是否と回答した。すると向こうから今度は脅しの書簡が来た。協力を惜しまなければ武力で解決する、と。そして今の状態だ」

「信じられないな……どう言うつもりだ」

「パルチナと同盟組んだバルディナに対抗できる国はないからな。向こうも勢いを失いたくないんだろう。真っ向から対立できるのはあんた達フライアンくらいのもんさ」

エデュサが顔をひきつらせた。そりゃそうだろう。今フライアンは戦える状況じゃないんだ。クーデター一步手前の危うい状況なんだ。

エデュサの反応を見逃さなかった目ざといライナが俺に耳打ちしてくる。

「フライアンは何かあったのかい？　そう言えば女王はどうなったんだい？」

「……最悪だよ。フライアンは今崩壊寸前だ。騎士団と議会が対立して議員に数名の死者が出てる」

「なっ……それは騎士団がやったのかい？」

「そうだな、処刑したのは騎士団だ。詳しい事は後で話すよ」

「そうだね、あたしも詳しく聞きたいからね」

今はこっちに集中しなきゃいけないよな。話をしているリインとエデュサを俺とライナは見つめる。

2人は何か難しい顔をして話をしている。そう言えば正式にオーシヤンはフライアンについてくれたのかな。

「ライナ、オーシヤンはそう言えばどうなったんだ」

「まあ今回のフライアンの対応は合格だ」

「はあ？」

「前にも言ったね。オーシヤンは捨て駒にされたって。皆その恐怖が根付いちまってね……今回バルディナ侵略の際にフライアンが援軍で来てくれなかったら同盟はしないって話になったんだ。まあ来てくれなくてもオーシヤンだけで戦うつもりだったけどねえ」



なんじゃそりゃ、俺達はテストされてたって訳か。でも良かった。俺達がここに来たからオーシャンは裏切られないって思って同盟を結んでくれるはずだ。その時ラボッサが大きな音を出し、全員が海の先に視線を向ける。

そこには数隻の軍艦が向かっていった。大きさからしてフライアンの軍艦の2倍近くありそうだ。

それが5隻も向かって来てるのだ。遂にバルディナが来やがったな。これで多分海軍の1部って言うんだからタチが悪い。どんだけ軍備を増強してやがんだよ、あの国は……

軍艦の甲板から髪を結った少女が出た。

バルディナの赤い軍服に身を包み、腰には剣が添えられている。

「さあ私達の初舞台よ！パパに怒られないようにしなくちゃ！」

「はしやぎすぎるなよ。仮にも戦争だ」

「イズナ兄さんはお固いわね。私早く大砲って奴を試してみたいの！10年かけてやっとザイナスの技術提供の元に作られた試作品1号よ。弓のどれだけの破壊力があるか、見物じゃない」

「ふう、この1隻の軍艦の試作をする為だけにオーシャンに戦争だなんて……皇帝は何を考えておられるのやら……」

ため息をついたのは同じくバルディナの軍服を身に纏った青年。

「でも私達が上手くしなきゃパパの立場が危うくなるわ」

「分かってる、父上に恥をかかすつもりもない」

「……あれってフライアンの軍艦？随分小さいけど……どういうつもり？フライアンは私達と戦争するつもりなの？」

「フライアンは俺達バルディナからの挑戦を受けるつもりなんだ

ろう。まあ対抗勢力はフアライアンしかない、当然と言えば当然か」  
「遂に始まるわ。世界大戦が……」

### 35 オーシャン死守戦争

バルディナの艦隊は俺達の船の数百メートル手前で停止した。ざわつく中、甲板に出てきたのは青年と少女の姿だった。

「あれは誰だ？」

「……良く見えないね。奴らが話すのを待とう」

### 35 オーシャン死守戦争

「ダフネ、私達も船に戻るわよ。急いで」

エデュサが持ち場に戻るように促してくる。仕方ない、今の俺はフライアンに従属してる身だ。ライナと頷き合って、自分の船に戻る。

騎士達が弓の準備をしている。俺は弓とか使えないから専らサポーターだな。

その時、船が更にこっちに接近してきて、船の甲板に立っていた男が声を出した。

「我が名はイツナ・チェンバレン！此度のオーシャンの対応にバルディナは異を唱える！なお且つフライアン等に頼るなど笑止！もはや貴方達と話しあいの場を設ける機会はない！」

「こっちは元々お前達と話す気はないさ、話し合いが通じる相手でもねえからな！」

リインのかけ声にオーシャン人達の間でもイツナに向かってヤジが

飛ぶ。

それにしてもイズナって誰なんだ？

「エデュサ、イズナって知ってるか？」

しかしただ単に俺が無知なだけだったようだ。

エデュサは顔を少し青くしている。どう言う事だ？ そんなにあの青年は武勇に長けている、とでも言うんだろうか。

海戦は中々接近が出来ない分、頭がいる戦だ。

もしかしたらイズナって奴は物凄くクレバーな奴なのかもしれない。

「ダフネ、貴方聞いた事ないのチェンバレンと言う名を……」

「チェンバレン？ さっきの奴の名字だよな。苗字があるのは貴族の証拠ってくらいしか……」

「チェンバレンは王の家来と言う意味のバルディナでも有数の騎士の名家。いいえ、バルディナ皇帝の腹心中の腹心である最強の騎士に与えられる姓、それがチェンバレンの称号」

「な、なんだって……」

「あの男はバルディナ第1騎士団団長であるレナード・チェンバレンの息子よ」

レナード。その名前を聞いて背筋が凍った。苗字まで覚えなかったけど、バルディナ第1騎士団のレナードだったら百戦錬磨の英雄だ。皇帝の腹心であり、発言力も強く、英断力も高い、バルディナ人でなくても、軍人ならば誰もが耳にした事がある騎士だ。そのレナードの息子……じゃあ横にいるのは……

「恐らく彼女もレナード・チェンバレンの娘のナズナ・チェンバレンね。まさかチェンバレン家の人間と戦えるなんて、軍人として最高の死に場ね」

「お、おい！死んだら不味いだろ！」

「死にはしないわよ。ただそう言われるほどチェンバレンと言う名はすごいって事よ。チェンバレンの人間に負けるのは恥ではない。むしろ戦える事自体を誇りに思え。分かる？そう言われてるのよ」

そんな凄い奴が早速登場だなんて可笑しいだろう。

イヅナは言いたい事だけを言って奥に引っ込んでしまった。始まるんだな、オーシャンを死守する戦争が。

エデュサとリインが視線を合わせて頷き合う。

そしてお互い手を上げて振り下ろした。

「全軍、進め！」

「おめえら散り際も派手に行こうじゃねえか！奴らにオーシャンの大地を踏ませんなよ！」

オーシャンの弓と矢の強度は世界最強と言われてる。オーシャンにしか存在しない木が材料になってて、すぐく打ちやすいうえに威力も高いんだそうだ。海戦はある程度近づけばオーシャンの弓に敵う物はない。

エデュサとリインのかけ声に兵たちの声が聞こえ船が動き出す。

弓兵は既に自分達の持ち場についている。そして船の中で一番高い場所にいる兵は銃を手にとった。

「エデュサ、あれ！」

「そうよ、ザイナスの技術を真似て作ったの。でもどうしてもザイナスの物の様に耐性がないし威力も弱い。30発撃ったら壊れてしまう。それなのに莫大なお金かけて1丁できあがるの。今回は試作よ」

銃を持つてる奴らは10人程度だけど、それでもザイナスの技術に

似た物があるのは心強い。

それにしても向こうは偉く距離を取りたがる。それに向こうの船は横側に何か筒の様な物がついている。あれは一体何に使うんだ？

「攻めてきたな。ナヅナ、オーシヤンの攻撃パターンは分かっているな？」

「勿論、オーシヤンの弓はさすが世界最強の弓って言われてるだけあって射程が長く威力も高い。ギリギリ届かない距離を保つわ。フアライアンもあの人数だし問題ないんじゃない？」

「大砲の準備ができるまで銃火器で応戦する。ザイナスの兵たち、目標を定めろ！」

なんだ？なんであいつら距離を取るんだ？

あんなに距離を取ったら弓が届かない。お互い攻撃ができないじゃないか。

でも望遠鏡でバルディナの艦隊を監視している兵から声が上がった。

「団長、銃が来ます！プロテクトで応戦してください！」

「お前達、こっちも奴らにかましてやりな！」

またザイナスを連れて来てるのか……この距離から撃てるとなると、銃の射程範囲は相当な広さになる。さすが最強の武器と言われるだけある。弓よりも射程も長いし、威力も高いんだよな。

パンパンと弾かれる音が聞こえて、鉛玉が俺達に向かってきた。

この軍艦には鉄のプレートがいたるところに用意されている。その後ろに隠れる事で鉛玉は防げるけど、それを装備してないオーシヤンの兵たちは次々と打ち抜かれて海に落ちていく。

こっちも銃で応戦して、何人か海に落としてるみたいだけど、銃の絶対量が足りない。あっちの方が有利に決まってる。その時、オーシヤンの船2隻が突き抜けて真っ直ぐ船に向かって行く。

「な、何やってるんだ!？」

あんなに突出してたら格好の的になってしまう。

俺は慌てて甲板に身を乗り出し、隣の船のライナに大声を出した。

「ライナ、止めさせろ!あのままじゃ沈むぞ！」

「黙って見てなダフネ!あの距離を取られたんじゃ、どちらにせよ弓も使えない。ファイアンは引き続き銃で援護してくれ！」

「ライナ！」

「大丈夫だ!あたし達を信じてくれ！」

勿論信じたいさ!だけど銃火器を扱うザイナスに近づくのは危険だ。向こうに取っちゃんのがでかくなって当てやすくなるだけなんだ。いくら弓が届く距離まで行きたいとしても、これじゃジリ貧だ!

「エデュサ？」

「ダフネ、オーシャンには確かに考えがある。私達は援護射撃する。この程度の銃でどれだけ援護できるか分からないけどね。ザイナスが出て来るなら、ある程度魔術が使えるオルヴァーも連れてくれば良かったわ」

2隻の船は銃弾などモノともせず海に進んでいく。そしてその1隻の船の先頭に立っていたのはカーシーだった。

カーシーは舵を真っ直ぐ切り、バルディナの船に向かって突進していく。

バルディナの船は密集してる。確かに割り込めたら、かなり有利になるだろうけど。

「あはは!なあにあの船、格好の的じゃない。兄さんいい？」

「ああ、そろそろいいだろう。敵の戦意を喪失してやろう。お前達、基準を合わせろ！」

なんだ？バルディナの戦艦が横にずれていく？

射程距離に入ったのか、オーシャンも弓で応戦する。玉と矢が飛び交い、悲鳴も聞こえて来る。

これが戦争……これが戦争なんだ！途端に恐ろしさが増す。士官学校の訓練なんかと全然違う緊迫感。本当に死と隣り合わせの世界。その時、バルディナの戦艦に取り付けられている筒がオーシャンの船に向いた。

「撃て！！」

その声が聞こえた瞬間、ドンっと言う今まで聞いた事も無いような大きな音が響き渡り、筒から黒くて大きな鉛玉が放出された。その鉛玉はオーシャンの船に直撃し、大きな穴をあける。

「な、なんだあれ……」

その筒からは何発も鉛玉が飛び、オーシャンの2隻の船は一瞬でロボロになってしまった。

こんな……こんな犠牲を出したのに、なんでライナ達は止めなかったんだ！カーシー達はどうなるんだ！

その時、リインが声を荒げた。

「俺達も行くぞ！全軍突撃だ！」

オーシャンの船全てがバルディナの戦艦に向かって進み出す。どう言う事だ！？

そしてそれに合わせてエデュサも声を出した。



「私らも行くよ！チャンスだ！」

「チャンスって！」

「見てなさいダフネ、オーシャン達の策に彼らはまんまと嵌ったのよ。流石情報屋が率いてる船は相手の行動も何もかもお見通しね」

まさかライナは相手の鉛玉を知ってたのか？何が何だか分からない。でも2隻のボロボロになった船から、一斉に小型船が数十隻放たれた。その船はバルディナの軍艦の近くまで行き、真下から船に弓を放って行く。まさかあの2隻は囧だったのか！？

再び鉛玉を打とうと船は動こうとしたが、2隻の船が邪魔でリイン達の船に鉛玉を放てない。その間にもリイン達は船に接近していく。筒がついた船を守る様に、2隻の軍艦が行く手を阻む。そしてリインは声を出した。

「行くぞおめえら！奴らの首を食いちぎるぞ！全員皆殺しにしてやれ！」

オーシャン人達がリインの声に掛け声を上げて、弓を捨て、腰の剣を取り出す。船は止まらず進み続け、バルディナの艦隊とぶつかり合う。そしてその接触した部分からオーシャンの兵たちが一気に軍艦になだれ込んだ。

完全な白兵戦だ。オーシャン達に対抗するかのようにザイナスを後ろに下げ、代わりにバルディナの兵たちが剣を持ち、オーシャン達との殺し合いに発展する。

「さあ私達は援護射撃を続けるよ！あの鉛玉の動きを封じる為に、あの船を徹底的に狙うんだ！」

オーシャンの弓と銃も再び打ち合いを再開する。

そして軍艦に乗り込んだオーシャンが船からロープをたらし、小型船に乗っていた奴らが一斉にロープに群がり軍艦に登っていく。勿論向こうも銃で応戦してるけど、乗り込まれてあんなに揉みくちゃになったら味方に当たるかもしれない事から躊躇してる。

でもこっちからしたら筒の付いた軍艦を狙うんだ。そんなの関係ない。

これがオーシャンの策だったんだな。艦隊2つをオーシャンは攻め落とそうとしてる。バルディナの艦隊はかなり頑丈そうだな。乗っ取れば、かなりの武器になるだろう。

「兄さんどうする？ 蛮族のくせに中々やるわね」

「……あくまでもこの戦は砲台の試作品の威力を試すだけだ。だが船が丸ごと彼らの手に堕ちるのは忍びないな……砲台を準備しろ。オーシャン人もろとも船を沈める」

「は、はい！」

「いいの？」

「犠牲は最小限だ。サインを出せ、逃げるサインを出した10分後に大砲を打ちこむ」

「できるだけ大勢が逃げてくれればいいけど……」

なんだ？ 艦隊が動きだしたぞ……

今まで全く動かなかった筒の付いた艦隊が動きだした。そしてその先には白兵戦を繰り広げているバルディナの艦隊。

まさか……沈める気なのか！？

「ライナ逃げろお！！」

俺の声と共に鉛玉がバルディナの艦隊に発射された。それは見事に命中し、船はどんどんボロボロになっていく。

悲鳴が聞こえ、艦隊が沈んでいく。

オーシャン達が慌てて自分の船に戻っているが、砲撃を喰らい海に落ちた姿も確認できた。俺達があっけに取られている間に、残りのバルディナの戦艦は軌道修正を行い、逃げていく。追いかけてやりたいところだが、オーシャン達を助けるのが先だ。

「エデュサ！」

「ああ、小型船を出せ！救助に向かうぞ！」

あれがバルディナの戦い方なのか？無差別に殺すのが……これに騎士の誇りなんて感じない。ただの非道な残虐行為だ！殺してしまつた兵の事を考えないのか？その人に大切な人がいるって事も！ふざけてる！！

海に出された小型船に乗り込んでオールを漕ぐ。オーシャンの船も小型船で救助に向かつており、それに合流する。

現場に近づけば近づくほど、浮いている死体を見つけ吐き気がした。

### 36 痛み分け

漂ってくるのはザイナス特有の火薬の臭いと海水独特の臭いの中に微かに鉄の臭いがした。一体何人の犠牲が出たんだ、援護射撃に徹していたフライアンだって鉛玉が当たって十数人が怪我をした。まあ死んでないだけマシなのかもしれないが……

動かないバルディナの兵とオーシャン人が海に浮かんでる。味方さえも切り捨ててるなんて……あいつらは一体何がしたいんだよ!?

「くそっ!」

### 36 痛み分け

「派手にやっちゃったなあ……こんだけ海を汚されたら暫く観光も何もできねえよ」

この惨状にアデレイド族の1人がぼつりと呟く。不謹慎な発言だったけど、それを咎める奴は誰もいなかった。だってそいつは項垂れて力なく笑っていたから。何とか生き残っている奴らをバルディナもオーシャンも関係なくボートに乗せる。

ライナは大丈夫だったのか? カーシーなんて最前線で戦ってたじゃないか。

辺りを見渡せばボートに横になっているカーシーと所々に傷を負っているライナとリインがいた。ライナとリインの怪我は軽い切り傷と擦り傷みただけで、やっぱり前線で戦ってたカーシーの怪我は酷い様だ。

「ライナ！カーシーは無事なのか！？」

「心配いらないよ。骨折しただけさ」

それを聞いて安心した、命には別条なさそうだ。

数時間に登る救助と死人を引き揚げる作業が終わり、オーシャンの兵たちがボートに死人を乗せていく。

オーシャンでは死んだ人間はボートに乗せて火をつけ海に流すんだそう。真っ赤に燃えたボートが海の中に沈んでいく。その光景をオーシャンの兵たちは泣き崩れながら眺めていた。

「痛み分け、か……こっちのが痛い思いしたけどな」

リインがぼつりと呟き、ライナもそれに頷いた。

確かに向こうは艦隊の一部を率いていたにすぎないが、こっちでは結構の人数が狩りだされたはずだ。それでこれだけの被害をこうむったんだ、そう言いたくもなるだろう。リインの采配が完璧だっただけに。

俺はエデュサと一緒にリインとライナに近づいた。

2人はこっちに顔を上げる。リインは項垂れていたのを瞬時に切り替え、笑みを張りつけた。リーダーって大変だよな……戦争の後だつてのに弱みを見せるのを許されないんだから。

「今回は協力感謝するよ。あんた達がいなかったら俺達もどうなってたか分らない」

「いや、私も第5騎士団全てを派遣させる事が出来れば、もっとサポートに回れたんだが申し訳ない。まさかあれほどの数の軍艦を派遣してくるとは思わなくてな……」

「あれで勢力の一部っつーから困っちゃうよなあ。流石バルディナは徴兵制をしてるだけあって一般人でもそこらの兵並みの力は持ってるよなあ」

リインはわざと軽く言っただけのけるが、落胆は隠せない。確かにオーシャンから相手を退かせたのはいいけど、もう一度攻めて来られたらまったもんじゃないだろう。フライアンからの援軍が少ないのも原因の一つなのかな？でも今のフライアンは予断を許さない状況だ。援軍を送れただけでも奇跡としか言いようが無い。ローレンツは大丈夫なのかな……

そしてエデュサは申し訳なさそうに頭を下げた。

「では我々はすぐに国に戻る。こちらでも少し状況が良くなってな」  
「何かあったのか？」

「機密事項だ。他国には言えないが、まあ良い事ではないよ。行くダフネ」

もう行くのか？折角ライナと会えたんだ。少し話したい事もあるんだけどな。

「え、でも俺ライナと……」

「……では30分だけだ。船の準備はその程度で終わるからな」

「ああ、有難う」

エデュサは船に戻って行き、ライナに視線を向けた。リインも他の奴らの所に向かって再び後処理を始め出した。

それを見送った後に俺とライナは余り人のいない場所に足を運ばせた。

「まったく……まさか戦争吹っかけて来ると思わなかったよ。それにしても、あの鉛玉を飛ばす奴は危険だね。バルディナの奴らは大砲と言っていたけど……多分ザイナスの技術だろうが、奴らは本当に恐ろしい物を作り出すねえ」

「ああ、それよりライナ、ファライアンのことだけだ」

「そうだった、教えてくれ。どう言う状況なんだい？正直援軍には感謝したけど、あんな少ないとは思わなかったよ」

やっぱライナもそう思ってたんだよな。援軍に100人なんて頭あわせ程度の人数だ。あれだけの軍隊が来るとは思ってたさ。いえ、もう少しこっちだって援軍を出したかったさ。

オーシャンからしたら援軍に来てくれたのはありがたいけど、思った以上にしょぼいって感じだったんだろう。

「来ただけ良しとしてくれよ。今ファライアンはそんな状況じゃないんだよ。議員の1人が女王と国宝石をバルディナに売り渡す密約を交わしてたらしい」

「なんだって？そりゃ売国じゃないか」

「ああ、それを見つけた騎士団が議員を処刑したんだ。だけど処刑された議員が若手議員達の筆頭格の奴で、そのお陰で正確な情報を知らない他の議員が騎士団の態度に反発しだしたんだ。騎士団も議員達を皆追放したいとまで言ってる奴もいる。議員は密偵を使って女王の場所調べさせたり情報操作して市民の耳に入れたり、やりた放題だよ」

ライナも今の話を聞いて顔をしかめた。ここまでファライアンが酷い事になってるとは思わなかったんだろう。ライナがいた時は、いがみ合ってたはいたものの、それなりに上手くはいていたから。それがこんな事になったんだ。驚くのも無理は無い。ファライアンは確実に崩壊に向かっていつているんだ。

「でも俺が怖く感じたのは青の国宝石だ。あれは危険だ……議員の1人があれのせいで命を落とした」

「どう言う事だい？」

「議員が女王と騎士団を口汚く罵ったんだ。それを聞いた女王があんな議員フアライアンに入らないって言ったんだ。その言葉を放った瞬間、議員が女王の為なら命を捧げるって言いだして投身自殺した。青の国宝石は民衆を魅了する力。その力を受けた議員は女王の言葉だけを真に受けて……」

「確かにそんな女王を野放しにするのは危険だね……やれやれ、好き嫌いもできないのかい」

確かに女王は悪くない、俺だってあんな事言われたら切れたくもなる。でも女王は受け入れなきゃいけないんだ。

受け入れて自分にあんな事言う奴ですら愛さなければいけない。青を受け継いだせいで表にも出られず、好き勝手言われて可哀想だと思う。

レオンが罪悪感を持つ理由が分かったよ。あんな呪いを自分のせいで継がせてしまったては後味が悪すぎる。どうしてこんな事になってしまったのか……

第5騎士団で仲良くなった奴が、こっちに手を振って戻って来いと言っている。そろそろ時間だな、行かなくちゃいけない。

「じゃあ俺行くわ。お前はどうするんだ？」

「まだしばらく復興作業だね。ケガ人の治療もしなくちゃいけないし、じいちゃんは歳とって、とても戦争に参加できる状況じゃない。あたしとカーシーが実質ダナシユ族は引きいなきゃいけないからね」

「そうか、生き残れよ」

「そのまま返すよ」

最後に軽く手を振って、俺は船に戻る為にライナに背中を向けた。俺の背中をライナがどんな表情で眺めていたかを、まだ俺が気付くはずもない。



船の準備はあらかた終わっており、リインがエデュサに頭を下げている所だった。

俺に気づいたエデュサが、さっさと乗り込めとジェスチャーするから、言われたまま乗り込んだ。船の中は戦争に関する話で持ち切りだ。そしてもう1つ……

「これってばれたら俺達罰せられるのかな？勝手に戦争参加してさ……」

「団長はローレンツ様が誤魔化してくれるって言ってたけど、ローレンツ様だって議員だろ。信用出来ねえよな」

「ああ、議員は平気で情報操作してきやがる。さっさと処刑するか追放すればいいのによ」

「女王と国宝石を売ろうとするなんて、とんでもねえよ。何でジェレミー様達は議員を追放しないんだ？」

「弱腰になってるだけなんじゃねえの？」

やっぱり兵たちの間でも処罰されるかは結構大きな問題って訳だ。そりゃそうだろうな。処罰なんてされたくないのは当然だ。何となく、あまり話を聞きたくなくて、自分に与えられた部屋に入り、ベッドに横になった。

今フアライアンはどうなってんのかな。あの騒動の中で出て行っちゃったけど。ルーシエルは大丈夫だったかな？まあジェレミーやランドルフ達がローテで護衛するつつってたから大丈夫だろうけど。

そういや、そろそろエデンから駐屯大使の魔術師が来るって言ってたな。確かアルシエラって言うけだるそうにしてた女だったっけ。エデンの人間が来たら、少しは戦争に対する実感もわいて議員と騎士団も落ち着くかもしれない。

エデンの奴が来た後にはヴァシユタンの駐屯大使も来るよな。一体誰が来るんだかな。

早く戻らなきゃ。早く戻ってファイアンの問題を何とかしなきゃいけない。じゃなきゃアルトラントは救えない。  
そして……

「東天……」

一刻も早く、あの国に向かわなくちゃ。あの国に行けば全てが分かる。どんな国かもわからないけど、英雄ダレンが今でも納めている国。赤の国宝石の呪いに縛られた英雄。永遠の生を生き続けるってどんな感じなんだろうな。数百年もの時を生きて、当時の仲間も家族も友達も恋人も全て死んで、1人だけ世界に取り残されて……考えるだけ恐ろしくなってきた。

でもダレンに会えばゲーティアを手に入れる近道になる。早くバルディナが国宝石を読解する前にダレンに会わなくちゃいけない。

船が動きだし、今からまた暫く船上生活だ。

「はあ、蛮族に撤退なんてパパになんて言おうかしら」

オーシャンにまさかの痛み分けを喫したバルディナ騎士団たちの士気は下がっていた。大砲という新しい武器を使用したにもかかわらず、この様だ。本国に戻ったらなんと言われるか分からない。

ベッドで転がりながらも帰ってきたら待っている恐ろしい父親の説教を思い浮かべてナズナは顔を真っ青にした。それを見ていたイズナは表情を変えずに返事をした。

「向こうの策にやられたんだよ。肉を切らせて骨を絶つ。追い詰められた奴らの決死の突撃だ、仕方の無い事だった」

「だけど兄さぁん」

「それより気になる事があった。アルトランドのお尋ね者に似たやつがフライアンの船にいたと聞いた」

「お尋ね者？まさか」

「ああ、ルーシエル王子と逃亡したダフネだ。やっと奴の尻尾を掴んだよ」

皇帝や王子たちが必死になって探しているアルトランドの第2王子ルーシエル、そしてそのお世話係の青年ダフネ。ルーシエルを実質保護しているのは彼だろう。フライアンに逃げ込まれたのはバルディナとしても予想の範囲内であったが、騎士団と共にいたのは予想の範囲外だった。

「どうやらフライアンはルーシエル王子を手に入れたようだ。奴らが先に国宝石を解読するのも近いかな」

「どうするのよーダフネがいたとしたら、私達ますますパパに怒られちゃうよ。何で逃がしたんだって！」

「大丈夫だ。策は使っている」

「兄さん……？」

「敵は外部だけじゃない。バルディナの息がかかった人間がフライアンの城内にいる、奴が事を起こすのを待ただけだ」

その時にフライアンは崩壊する。

### 37 大使到着

「おつエデユサ間にあつたな。片づけは部下にやらせて早く来い！」  
フライアンに戻った俺達を待ってたのは黒髪の青年の姿だった。  
船をゲートに入れて、まだ荷物すら降ろしてないのに、無責任な事を言ってくる青年をアルシエラは軽く睨みつけた。

#### 37 大使到着

「なんなのハーヴェイ騒々しいわね。あんたこの状況見ても分からないの？」

「んな事知るかよ。それよりエデンとヴァシユタンから使者がきた。議員も参加するし、俺達騎士団の団長は全員参加だ。1人でも抜けてると不味い」

「何時から？」

「夕方からだ。一応軍服新しいの着とけよ、血がついてたら洒落になんねえぞ」

「分かってるわよ」

そうか、ヴァシユタンとエデンから使者が来たのか。

正式な使者が来たってことはフライアンとエデンとヴァシユタンが協力するって事を世界にアピールすることになるのと同じだ。

その情報は勿論バルディナやパルチナ、東天にも届くだろう。

俺も参加していいと言われて、フライアンの軍服に着替えてくるよう言われた。なんだかフライアンに服従した気分だが、まあ形上はそうなるんだろうな。

軍服に袖を通し、キチツと襟元を直した後、俺は女王の間に向かって足を運ばせた。

「何よ……肝心の女王がいないじゃない……最低ね、どうしようもないわ」

「フアライアンの最高権力者はどうした。この歓迎は余りにも無礼な気がするが？」

女王の間には既に通された2人の男女が顔をしかめていた。

片方はエルネステイだ。どうやらヴァシユタンの駐屯大使はエルネステイに決まったようだ。隣のいかにもダルそうなオーラを醸し出してる女がアルシェラって奴かな？エデンの駐屯大使だよな。

2人とも女王の間に通されたのに、肝心の女王がいないことに眉をしかめている。確かにこの歓迎は異例だ。でも事情が事情だ。女王が出せるわけがない。

俺は騎士団団長達が立っている場所に移動し、エデュサの横に足を運んだ。

「やっぱり納得いかなさそうだな」

「まあ歓迎されてると言えないからね……気持ちには分かるけど、あの状態の女王を出すわけには行かない。それに……」

エデュサがちらりと視線をよこした先には数人の代表議員の姿があった。

確かに議員の前に女王は出せないよな。議員全てって訳じゃないはずだろうけど、議員の中には女王を売ろうって考えてる奴もいるんだ。大事は取っておくべきだろう。

ルーシエルは大丈夫だろうか？結局まだ会えずじまいだけど……議員の眼が光る中、代表議員とジェレミーが協定書を渡し、アルシ

エラとエルネステイがそれにサインをする。

あっさりと終わったけど、これで協定は結ばれたんだ。ひとまず安心と言うべきなのか？

でもアルシェラが周囲に視線を送った後、代表議員とジェレミーを険しい表情で見据えた。

「女王は結局姿を現さないの？ 国と国との協定よ。使者が相手国まで来てるんだから姿を現すのが礼儀のはずだけどね。オルヴァー、フライアンの礼節はこんな物なの？」

「今は女王を出せる状況じゃない。口が過ぎるぞアルシェラ」

オルヴァーが睨みつければ、アルシェラは不愉快そうに鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

その姿を議員達は歯がゆそうにし、ジェレミー達に憎しみの籠った視線を向けている。

居心地が悪いのか、エルネステイは肩をすくめて、早速部屋を要求してきた。そして俺に案内しろとまで言ってくる。

ローレンツに部屋の場所を教えられて、エルネステイと一緒に部屋を出て行く。

やっと開放された気まずい空気からエスネステイは一息ついた。

「おっかねえ国だなフライアンは……」

「今は色々やばいことが重なってるんだよ」

「例えば？」

「どこで誰が聞いているか分からない。今は明言は避けとくよ」

「そうか……しかしとんでもない所に来ちゃったな。こんな事ならイースとジェシカにやらせれば良かったよ」

まあエルネステイの気持ちも分かる。戦争の危機が迫ってる状況で同盟国がギスギスしてたんじゃない……どうやってフライアンをま

とめていけばいいんだよ……

「ダフネ、この間の話、調べたか？」

「え？あ、いや……色々忙しくて」

そうだ、思い出した。ヴァシユタンにランドルフとレオンと向かった日、エルネステイとクラリアに呼び止められて話を聞いたんだ。エルネステイ達から調べて欲しいって言われてた事を、まだ全然調べてなかった。

忙しくてそれ所じゃなかったからな。

俺の返事に項垂れたエルネステイはガシガシと頭を掻いた。見た目が恐いオーラを放ってるこいつが不機嫌そうな顔をしただけで、結構恐い。

「そうか、まあいいさ。自分の足でここまで来たんだ。自分自身で調べるか」

「マクラウドの話だよな」

「ああ、マクラウドの王子がファイアンに紛れ込んでるって話を聞いてな。少し気になってたんだよ」

マクラウドから侵入者か。でも今のファイアンだったら侵入者なんかゴロゴロいるように感じる。

議員や騎士団が手引きすれば、国に侵入するのなんて容易いんだから。

はあ……祖国奪還とゲートィアを探す手立てを見つけれないまま、ややこしい事にばっか巻き込まれてるよなあ。

でもマクラウドの人間が紛れてるってなったらスパイなのか？マクラウドはパルチナ領土内の国。下手な行動してパルチナの目に付くことだけは避けたいはずだ。

「お前さ、まだゲーティア探そうとしてんのか？」

エルネスティの急な問いかけに肩が跳ねた。いきなり聞いてくるものなんだからさあ。

とりあえず部屋まで案内して中に通して鍵をかける。やっと安心して話せる気がするな。

「探すよ。アルトラントを救うためにはそれしかない」

「ゲーティア探さなくともフライアンが味方についてくれたんだ。いい線行くんじゃないのか？」

「俺もそう思ってたけど……今のフライアンは内紛寸前だ。とても戦争できる状況じゃない。それにバルディナ自体が国宝石を解読してゲーティアを手に入れようとしている。それを阻止しなきゃ」

「はあ……あるかどうかも分かんねえ宝に読解できない文字が書かれた宝石……そんなものの為に膨大な金かけんだよなあ。金の使い道間違ってるぜ」

エルネスティの言葉にハツとした。確かにゲーティアの存在だけを信じてたけど、本当に存在するのか？数百年前の書物なんてとつくに風化して読めなくなってるんじゃないのか？

そもそも国宝石自体本当にゲーティアの隠し場所を指してるのか？ルーシエルは本当に読み手なのか？

考え出したら嫌なほうにしか思考が行かない。考えないようにしないと頭がやられそうだ。

とりあえずエルネスティに部屋を使ってくれ、とだけ伝えて部屋を出ようとドアに手をかけた。

「信用すんなよ他人なんかを。勿論俺も含めてだ」  
「え？」

「ヴァシユタンは平気で裏切るぜ。生き残る為ならな。仲良く共倒



れなんて考え、俺達には存在しねえんだからよ」

エルネスティの言葉に何も返せなかった。国を潰さない為にはヴァシュタンは平気でフアライアンも裏切る。そう忠告したんだろう。正直言っておりがた迷惑だ。今の状態で更に考えさせるような事言わないでくれ。そうでなくとも、今の状態が良くなって考えることが山積みだつてのに。

部屋を出て、何となく議員達と騎士団がにらみ合う部屋に戻りたくなかったから、これを機にルーシエルに会いに行こうと思い、女王の部屋に足を運ばせた。

誰も見られてないことを自分なりに確認して箱庭の中に入る。扉をノックしたら人のいい笑みでメリッサが出てきて中に入れてくれた。でも今回の件で懲りたんだろう。メリッサの表情は暗い。

「イヴさんはどうなんだ？」

「落ち込んでる。なんであんな事言ったんだろうって……押さえが聞かないって誰でもあるはずなのにね」

そう言って目を伏せるメリッサは手につけているミサングをいじる。あれ？そんな物つけてたっけか？しかもこれと似たのを見たことがある気がする。結構最近。

「メリッサ、そんなのつけてたか？」

「え？ああ、これはランドルフのだよ。この間くれたんだよ」

そう言って笑うメリッサは少しだけ嬉しそうだ。この2人は知らなかったけど、もしかしてそうなんだろうか。

メリッサは結構おてんばだけど一応貴族の娘らしい。地方貴族みただけけど……幼い頃からランドルフとは交流があってもおかしくな

いからな。

メリッサに案内されてルーシエルとイヴさんがいる部屋に向かう。でも部屋の中にいるのはルーシエルだけだった。

「あ、ダフネだあ！ライナお姉ちゃんは大丈夫だった？ダフネは怪我しなかった！？」

俺を視界に捕らえるや否や、飛び込んできたルーシエルを抱き上げて無事をアピールする。

俺の反応に安心したルーシエルはへにやりと笑って、俺に擦り寄ってきた。フワフワの髪の毛が首に当たってくすぐったい。

「ダフネ、あのね国宝石ね、ちゃんと訳せたんだよ」

「国宝石を？」

「うん、なんかよく俺には分からなかったんだけどーイヴさんやメリッサお姉ちゃんが分かるから2人に聞いて」

「イヴさんはいないのか？」

「寝込んでしまった。話しかけても返事あんましてくれないんだ……」

俯いてしまったルーシエルをメリッサが慰めた。

やっぱりあの件はイヴさんの心を大きく傷つけてしまったようだ。

それも仕方ないだろうな……イヴさんの問題は俺には解決できない。

俺なんかよりもメリッサやジェレミー達の方が適任だろう。

ソファに腰掛けて国宝石に事をメリッサに聞くと、お茶を入れて話をすると奥に引っ込んでしまった。

隣に座ったルーシエルの頭を撫でて、俺はすぐに待っているであろう国宝石の内容を聞くことに集中した。

### 38 メリッサの不安

メリッサが出してくれたお茶を飲みながら話を聞く体制をとる。イヴさんはまだ体を休めているらしく、メリッサがソファに腰かけた。こいつは全部知ってるみたいだな。ルーシエルの代わりに話してくれるんだろう。

#### 38 メリッサの不安

「まずは国宝石の文章を話すわね。青と緑は2つで世界を癒し続けた。そして青と緑が揃いし時、赤への道が開かれる。グルネス諸島に捧げられし色は持ち主を選ぶ。こう書いてあったの。それでグルネス諸島って言えば……」

「ああ、マクラウド領土内にある聖地の事だよな。確か前の大戦の最終決戦の場所だったはずだ」

「流石士官学校を卒業してると、ちゃんと勉強してるわね」

褒められてるんだか良くわかんねえけど、グルネス諸島の事は俺だけじゃなくても誰だって知ってるはずだ。前の大戦を調べたらすぐに出て来る。グルネス諸島が最後の大戦で使われた場所だって。

そしてその慰霊碑となる祈りの塔がグルネス諸島のシンボルだと言われている。マクラウドの人間も他国の人間も5年に1回しか立ち入りできなくて、その年に1回の巡礼日に世界中で黙祷が捧げられるのだ。

でも分かったのはそれだけじゃないようだ。メリッサの話には続きがあった。

「それでもう1つの情報は、青は全てを愛し包み込む。青の祭壇は百合の丘に隠された。青が導かれし時、緑も導かれる。緑の祭壇は血で染め上がった暁の大地に死者と共に眠る」

「暁の大地……エデンの長が言っていた。暁の大地で緑の国宝石を継承できるって」

「百合の丘もそうなの。その丘にイヴが継承した青の国宝石の神殿がある」

なるほど、少しだけ話が読めてきたぞ。でも最後の赤が導かれるってどういう事だ？この2つがあれば東天への道が示されるんだろうか。

でも残念ながらメリッサ達もそこまでは分からなかったようだ。でも分かったのはグルネス諸島に恐らくゲーティアの最大のヒントが眠っている。まさかあんな場所にあるとはね。

でもあそこは5年に1度しか入れない。去年巡礼が行われたから最低でも4年は待つ。そんなに待ってはいられない。

でもどうすればいいんだろうか。考え込んでいる俺の横でメリッサは不安そうな表情をしている。いつも気丈で明るいメリッサが浮かない顔をしているのは珍しい。まあ今のフアライアンの状況を考えて、こんな表情にもなるわな。

「議会との様子はどうか？」

質問を聞いたメリッサは弾かれたように顔を上げた。その表情はどこか切羽詰まっている。

何か地雷を踏んでしまったんだろうか。

メリッサはせわしなく視線を動かし、ルーシエルを部屋から出して欲しいと訴えた。意味が分からなかったが、いい話ではないんだろう。嫌がるルーシエルに謝りながらも部屋から出して2人だけの状況を作った。

「ダフネ、お願いがあるの。多分あなたは影響を受けてないはず」  
「え？」

「……怖い、今のままだとクーデターが間違いなく起こる。ファライアンは内部から壊滅する」

「お、おい……何言ってるんだよ」

泣きそうなメリッサがスカートの裾を握りしめる。そこに水滴が落ち、赤いスカートが赤黒く変色して行く。

確かに今の状況は好ましくないが、俺に頼むよりもジェレミー達の方が的確だろう。俺は居候の身分に過ぎない。何を言っても大きな影響力は与えられないだろう。

それに影響を受けてないって一体何なんだ？

「メリッサ、落ち着いて話してくれ。どうして俺にそんな事言うんだ？」

「似てるの。あの時と……」

「あの時？過去のクーデターの時か？」

「そう……あの時ね、イヴのお母さんが青の国宝石を継承してた」

もしかしたらファライアンは国宝石を代々継承してたのかもしれない。でも一体それが何の影響があるって言うんだ？それに青の国宝石の呪いは1人の対象を愛したらいけないんだろ？

第1騎士団団長だった前女王の夫との関係はどうなってたんだろう？まあ多分結婚してイヴさんが産まれた後に継承したってのが濃厚だけどな。でも前女王は聡明な方だと言う話は有名だった。現に経済政策を打ち出し、ファライアンの景気を常に上手い事保っていたから。

話を詳しく聞かないと分からない。相槌だけを打ってメリッサに話を促した。

「前女王は聡明で慈悲深く、皆に愛されていた……でもあの日、パルチナの情報操作によって景気が悪化して、国民の議会と騎士団への不満が募った民衆が暴動を起こして城を襲撃した。私達は隠し部屋に避難されて……ダフネも知ってるでしょ？すごい数の死者を出したの」

「ああ、でも死者のほとんどは騎士団や議会の人間だって……」

「全部嘘よ、確かに騎士団と議会の重臣達はほとんど命を落とした。でもその数は200人にも満たない。1万人以上は全員市民よ」

「な、なんだって……？」

「じゃああのクーデターの死者数は情報操作されて発信されてたのか？じゃあ真実は一体何なんだ？何が真実なんだ？」

「国民が1万人以上犠牲になったとなったら、これはもう虐殺の域に達している。でも国民にはそんな悲惨な過去があるのに、女王に対する信頼は揺ぎ無い。これほどまでに青の力は強いのか……」

「騎士団による市民の弾圧……それがクーデターの真相。そしてその陰には女王の国宝石があった。女王の夫……つまりイヴのお父さんは第1騎士団の団長だった。そして女王は禁忌を犯した、国民よりも夫のいる騎士団に心の重心を置いてしまった」

「だからって……」

「パルチナによる情報操作で景気が悪くなり、皆が女王を責め立てた。国民の怒りを静めるために前女王は青を継承したのに、精神のバランスを壊して青を使いこなす事はできなかった。もう分かるでしょ……？女王に愛された騎士団は女王に陶醉する。騎士団は女王の許可なく女王を侮辱した市民の虐殺に乗り出した」

それがクーデターの真相……パルチナの情報操作って事は間違いないけど、でも市民が先に暴動を起こしたんじゃない。騎士団が市民

を虐殺した事が暴動に繋がったんだ。

「でも国宝石の呪いは知ってるでしょ？女王自身にも騎士団にも災いが降りかかった。それが市民の暴動……それによってイヴはお父さんを亡くした。そのショックで我を失った前女王は暴動を起こした市民全て、つまりファイアンの城下町の市民全員を虐殺する許可を出した。その結果、市民の死者は1万人以上に膨れ上がって行った……」

「そんな、事が……」

「議会は非常事態の為に鎖国をして他国から貿易船1つ入れなかった。だから上手い事偽の情報をパルチナの耳に吹き込む事ができた。そしてその情報をパルチナが発信したから、騎士団は市民の暴動を食い止めた英雄扱い」

どうして偽の情報を流したんだろう。騎士団の被害がでかいと言う情報を流して何か意味でもあったのか？クーデターの存在自体を抹殺するのなら話は分かるけど、被害対象を変える意味が分からない。

「議会はどうしても市民を悪にしたかった。そして騎士団の被害の大きさを他国に吹き込む事で、唯一クーデターに直接関わっていない自分達議会がファイアンを実質統治していると言う情報を流したかったのよ。でも前女王はある日突然首を吊って自殺した……第1発見者はイヴの兄であるフリック王子。そして女王が亡くなった事により、継承者がいなくなった国宝石は再び百合の丘にある神殿に預けられた。でも女王も軍団長もおらず、衰えた城を市民が襲った。打倒ファイアンを掲げて。そしてイヴが国宝石を継承する事件が起こったの」

そしてイヴさんが国宝石を継承する事件に繋がるんだ。呪われた女王の再誕だったんだ……

そのせいでこの箱庭から一步も外に出ることが出来なくなってしまった。

「その時に市民を迎え撃ったのがフリック王子、王子は新たに女王になったイヴと対立した。話し合いを設けようとするイヴと、家族を殺された事に対する怒りで紛争を受けて立った王子。2人の意見は真っ向から対立した。そしてイヴは恨んだの……たった1人の兄弟を強く憎んだ。その結果が発狂した王子の死亡。イヴはあの日からこの場所にジェレミーのお父さん、デューク議員達によって幽閉された。暫くはショックで言葉も話せなかったのよ。でも国宝石の力のお陰で、市民はイヴに魅了されて今までの事が全くなかったかのように暴動は自然と収まった。分かる？この国は国宝石に支配されてるのよ。あんな石ころがフライアン全てを動かしてる」

フライアンにそんな血ぬられた歴史があるなんて知らなかった。市民のほとんどが知らない事実だろう。だって魅了されているんだから。

国宝石に縋って国を救うはずだったのに、国宝石のせいで暴動に発展するなんて可笑しい話だ。

そう言えばメリッサは何を俺に任せようとしてたんだっけ。昔話を聞いてたせいで、全部忘れてしまった。

「メリッサ、結局お前何が言いたいんだ？」

「分からない？今の状況……似通ってるでしょ？」

その言葉に冷や汗が出た。確かに言われてみれば似通っている。いや、同じような物なのかもしれない。

でもそうだとしたら……

「女王は騎士団に心の重心を置いている。そして議会を憎んでいる。



その結果が、この間起こった議員の投身自殺……そして騎士団達のリューツ議員の処刑……騎士団はあの日と同じ事を繰り返そうとしてる。女王に傾倒し、女王に逆らう者全てを排除しようとしてる。オルヴァーやグレインさん、ランドルフは既に国宝石に支配されている。エデュサさんとハーヴェイさんも少なからず議員にいい感情は持っていない。処刑に対しても止めたりしなかったもの」

そんな、事って……ファライアンは今度こそ崩壊するかもしれない。もしかた暴動が起こってイヴさんが命を落とす事になったら、怒り狂った騎士団と議会、市民を巻き込んだ内紛に発展する。

ヴァシュタンも俺達を見限り、エデンもオーシャンもファライアンとの同盟を破棄するだろう。そうなたら全てお終いだ。

「唯一ジェレミーだけなの。ジェレミーだけが冷静でいてくれる。でも駄目……」

「メリッサ？」

「本当に良く言ったものね。歴史は繰り返されるって……」

「まさか……」

「イヴはジェレミーに間違いなく好意を寄せている。本人がまだ気づいてないからいいけど、イヴがそれに気付いた時、禁忌を犯す。ジェレミーには特に強い呪いが降りかかるはず……だからダフネ、お願い。貴方しか頼れないっ！議会でも騎士団でもなく、イヴを知っている貴方しか！イヴを……ううん、ファライアンを守って！」

涙を流しながらメリッサは俺に縋りついてきた。国宝石の力はジェレミー達騎士団に向かっている。ジェレミーの様子から今はまだ国宝石の力に操られている気配はないけど、確かにメリッサの言う通り、ランドルフにオルヴァー、グレインは既に支配されてるように感じる。

特にグレインとオルヴァーはリユーツ議員を処刑した張本人、ランドルフも議員達に同情、騎士団の行動に疑問を抱いていなかった。エデュサはまだ影響が薄いのもかもしれないけど、それでも議会と和解しようなどは全く考えてない素振りだった。騎士団は間違いなく議員達を排除しようとしてる。

でも俺ごときが何の力になれる。俺が国を動かすのか？そんなことできる訳がない。議員を説得なんかもできないだろう。

議員達は俺を騎士団の人間だって認識してるし、近寄ろうとしてもできない。その可能性があるなら俺よりもローレンツの方が……

「メリッサ、ローレンツには？」

「言った、でもローレンツは騎士団と議会に板挟みになってて上手く動けない。だから……」

涙を流したメリッサに励ましの言葉をかけられない。ごめんメリッサ、ごめん。

俺は何も考えてなかった。国を救う事だけを躍起になって考えて、ファライアンの崩壊だって国が救えなくなるから嫌だったただけ。でも違う、俺は助けなきゃいけない。俺を匿ってくれたファライアの皆を。利用されてるだけかもしれない、それでもバルディナとの戦争を決意してくれたから。

オーシャンに兵を出してくれた。

その時は全く気付かなかった。

俺達の部屋の外にルーシエルが会話を聞いていた事になど……

「やっぱり皆を守る為には俺がこれを継承しなくちゃ……暁の大地に行かなくちゃ……」



### 39 アルトラントの現状

「くそっ！父上と母上はどうなってるんだ！」

「ねえクラウシエル、私達……これからどうなっちゃうの？」

ドアをガンガン叩く僕の後ろでは、いつまでも泣き止む気配を見せないミツシエルがいる。

何をどうしても扉は開かない。外から鍵をかけられてるし改造されたのだろう、中からは鍵を開けられない特殊な仕組みになっている。移動させられた新たな部屋からは街の見栄えは悪く、城下町がどんな状況かも分かりやしない。

情報が遮断されている。一体どうなってるって言うんだ、今のアルトラントは……

### 39 アルトラントの現状

「泣くなミツシエル、僕達が諦めたらアルトラントは本当にバルデイナの支配下になってしまうんだ。僕達はルーシエルとダフネが戻ってくれる事を祈ろう」

「だってルーシエルじゃんか！あんな泣き虫がどうこう出来る訳……」

「僕達の弟だ。出来るに決まっている」

力強くミツシエルにそう告げる。今の状況をミツシエルはどうする事も出来ず、毎日泣きくれていた。少しでも情報が手に入りさえすれば色々考える事も出来るのに、今の状況じゃ暇な時間の方が多すぎて、やる事がない。適当な棒を剣だと思い訓練するか筋トレする

しか。

その時、ドアを開けてきたのは僕達の監視役でもあるフレイだった。その後ろにセラを連れている。思わず笑いたくなった、こいつはまんまと僕の術中に嵌ったな。これでセラから色々情報を聞きだせるだろう。

セラは所々に傷を負い、また少しだけやつれていた。そんなセラにミッシェルは泣きながら飛び付いた。

「セラッ！セラァ！」

「ミッシェル様、御無事で」

それを優しく抱きとめたセラ、フレイはそれを確認して事務的に用件だけを告げた。

「クラウドシエル王子、ジュダス様からの譲歩だ。これ以上の我侭は聞くことはできないってさ」

「何を偉そうに。反逆者が直国王の僕に上から指図をするな」

「バルディナに逆らわなければ生きていける。今までも、これからも……」

いつもの余裕ぶった笑みではなく、その言葉はまるで自分自身に言い聞かせているかのように聞こえた。

フレイは意味深な言葉を発し、形上きちんと頭を下げて部屋を出て行った。でもこれでいい、さて腹が減ったな……これで飯をちゃんと食える。僕もミッシェルも。

「セラ、お腹減ったよぉー！クラウドシエルがご飯少ししか食べちゃ駄目って言ったのよ！？餓死しちゃうわ！しかも私はベッドから一歩も出ちゃいけない、ですって！」

「王子、どうしてその様な事を……」

「簡単だ、外から情報を手に入れる為に城の者と接する必要がある。だが今の状況じゃそれが出来ない。だからフレイに言ったんだ。ミッシエルが精神的に病んでいいる。お前じゃなく、僕達の世話係をよこさなければ弱る一方だってね」

「なぜ食事まで……」

「演技はどこまでも必要だろう。ミッシエルは心を病み、お前達を恐れている。だからお前達が作ったもの等恐ろしくて口にできない、そう言っただけだ。それでアルトラントのコックに食事を作らせて、元の御世話係のお前に持ってこさせると命令した。これで情報が手に入る」

僕が精神を病ませる役でも良かったが、ミッシエルに演技は無理だろう。とりあえず僕もお腹がすいた。今日のご飯からは少しだが食べる事にしよう。流石にいきなり出された量全てを平らげると向こうに怪しまれるから、怪しまれない程度にな。

ふんっ！僕の迫真の演技に奴ら全く疑い等持っていないかったぞ。僕はもしかしたら役者の才能もあるのかもしれないな。役者を目指す事が出来ないのが少し残念だよ。

この空間に敵は居ない。それを確認して、こっそり隠し持っていた昨日出されたお菓子をミッシエルに与えた。僕も腹が減ってるけど、ここは付き合わせたミッシエルを優先させるべきだろう。

姫と言うには程遠い行儀の悪さでお菓子をバクバク食べながらミッシエルが振り返る。

「でもあんたって無駄な所で頭回んのね。ばれたらどうなんのよ、怖くない訳？」

「心配はいらない。ただ少しだけ、少しだけが怖くてトイレが近くなった事だけだ」

「セラ、急いでトイレに連れて行きなさい！こいつ漏らすわよ！」

「止めるミッシエル！貴様箱の中につめるぞ！！」

誰がこの歳になって漏らすか馬鹿者！どれだけ僕の膀胱が弱いと思ってるんだこいつは！

だがセラが側にいてくれる事でミッシェルはかなり安心して居るだろう。食欲に衰えは無いが、やはり今の過酷な状況にミッシェルは耐えきれぬ不安だったから。さて、僕は僕で情報収集をしようか。しなければならぬ事は沢山ある。

「セラ、城の外の状況はどうなっているんだ？」

「子ども達は奴隷政策の一環、同化政策によりバルディナの国境の城、ブラス城に連れていかれました。また国王と后は牢に入れられています」

「幼い子供をバルディナ人として教育するか……父上と母上は処刑されるのか？」

「はい……処刑は8カ月後に行われる、と」

何と言う事だ……ミッシェルが泣き崩れて父上と母上の名を叫ぶ。それを大声を出すなどいさめれば睨みつけられた。お前は悔しくないのか、と。

悔しくない訳がないだろう。だが今僕達が失敗する訳にはいかない、僕達はまだ生き残らなきゃいけないから……せめてそれまでにルーシエルとダフネが……

「またバルディナとザイナス、パルチナが軍事同盟を結び、それに対抗しフライアン、エデン、オーシャン、ヴァシユタンが軍事同盟を結んだとの話を聞きました。クラウシエル様、ミッシェル様、お聞きになってください。オーシャンにバルディナが数週間前に進撃した際、フライアンの艦隊にダフネの姿があったと言う話をバルディナの兵が話してるのを使用人が耳にしました」

「ダフネが？」

「はい、フアライアンがオーシャンに加担した事に対してバルディナは不快感を強めています。バルディナとフアライアンの全面戦争の火蓋が切られるかもしれません」

そうかダフネ……お前は少しずつだが国を取り戻す構えを見せてくれているのだな。ミツシエルの表情にも少しだが希望の色が見える。だがバルディナとパルチナ、ザイナスが同盟を組んだとなれば、フアライアン、エデン、オーシャン、ヴァシュタンだけでは難しいだろう。軍事力増大が著しい2カ国を相手に銃を持つザイナスまでがいるのだから。

奴らはアルトラントからも数少ない兵を徴収して戦に狩りだすはずだ。僕も駆り出される可能性は見えている。

「城の者はどうなっている？ セラ、お前のその怪我……」

「私の怪我は大したことはありません。ですが……クラウシエル様、覚えていらっしゃいますか？ 我が城の庭師の孫、宮廷音楽家、料理長、画家、そして門番の娘2人を」

「ああ、ジェイクリーナスにミカエリス、コラッド、イワコフ、マリアとミリアだな」

「流石です。ジェイクリーナスは右足を負傷し、ミカエリスは左目を失いました。そしてコラッドは利き腕を切り落とされ、マリアとミリアはお互い……まだ目を覚ましていません。幸いイワコフと私だけ怪我は軽いのですが……」

そうか、僕達を守るために城の者まで悲惨な目に遭ったのだな。全身に包帯や絆創膏を張っている僕をセラは不安そうな目で見ている。

「心配ない、僕の怪我は大した事はない。こんな怪我よりもお前達の方が遥かに傷を負っているはずだ。僕がくよくよしていい場合じゃない。ミツシエルは無傷だ、今はそれでいい」



「クラウドシエル様……」

「それよりもバルディナは本格的に国宝石の研究を始めている。僕とミッシェルも数回国宝石の解読を強制されたが、あんな文字は見た事がない。ルーシエルはなぜあの文字を読めるんだ？」

バルディナが血眼になって追いかけている僕達の末の弟、泣き虫のルーシエル。ダフネと一緒にいるから、恐らくダフネに守ってもらえているんだろうが、なぜあいつが文字を解読できるんだ？

あいつがそんな特殊な文字を解読できるような機会はなかったはずだ。四六時中、僕達3人は一緒だった。一体誰がルーシエルに国宝石の文字を教え込んだんだ？

考え込んでいる僕の横でミッシェルはグスグス泣き続けている。さて、こうしてはいられない。

「セラ、生き残った騎士や兵たちはどのくらいいる？ノーヴァは無事なのか？」

「……ノーヴァ様は戦死なされました。あの御方は国王と后を守る為に不利な状況でも最後まで諦めることなく戦い続けておりました」  
「そうか……彼ほど優秀な騎士はアルトラントに未来永劫現れないだろう」

「残っている兵は全体で1万もいません。現在怪我で動けない者がほとんどですので、すぐに動ける者は4千人程度です」

「彼らには常に鍛錬を行うな、そう伝えてくれ。それと城下町の間とコンタクトをとれる者がいたら伝えてくれ。義勇兵を募る、と」

セラは僕の言葉に黙って頷いて、ミッシェルに一言何かを告げて部屋を出て行った。とりあえず腹がすいたなあ。

——セラside——

「皆さま、大丈夫ですか？」

クラウシエル様とミッシェル様の部屋から出て向かった先は使用人達の憩いの場。ここだけは唯一バルディナの騎士達が入ってこない場所。

なので最近はこちらに入り浸る者が多い。そしてそこには各々怪我をした者たちがいました。

「やあセラ君じゃないか。王子たちは元気だったのかね？」

「ええ、クラウシエル様はとても賢い御方でした。私達よりも遙かに……」

左目に眼帯をして笑っているミカエリス、彼は片目を潰された。片目だけの視界はまだ慣れなく、方向感覚や距離感も掴めないようです。それでも喉さえあれば歌は歌える。そう言って笑う彼に、どれだけの人間が励まされたでしょう。

辛い状況でも、彼は持ち前の明るさで皆を励ましている存在でした。そしてその横には利き腕を失くしているコラッドと付き添っているサヤカお弟子のダンの姿。コラッドはずっと元気がなかったのですが、私の姿を見て目を輝かせました。

「セ、セラ！」

「お話しは伺いましたか？」

「ああ、王子と姫の飯を俺が作っていいんだよな！？これ以上の幸せはねえ！」

そう言って片方の手に握りこぶしを作って喜ぶコラッド。サヤカとダンが助手をする事で、彼もまた料理人の道を捨てる事は無くなる。その横では大きな画材を使い、1人で結構なスペースを取るイワコフの姿。気になったのですが、絵を描いているイワコフに話しかけても返事はもらえないので、代わりにミカエリスに聞いてみる事に

しました。

「イワコフは何を描いているのです？」

「彼は今のアルトランドを描いているのだよ。バルディナに敗れ、敗戦国になったアルトランドをね」

「なぜそんな物を……」

「彼は希望を捨てていないからだよ。彼はルーシエル様達が国を救ってくださると信じている。そしてあの絵はアルトランドが解放された際に対として飾っておくんだ。支配された時のアルトランドと、解放された時のアルトランド、彼はその2つを描こうとしている」

そうですか……そうですね。数百年後の国民達が歴史を振り返る際、この絵を見て、こんな事があったのか、そう笑って話せる時が来るといいですね。

バルディナの属国ではなく、5大国家アルトランドとして。  
そして……

「ジェイクリーナス……」

私は椅子に座っているジェイクリーナスに声をかけました。彼はヤコブリーナスに励まされていますが表情は暗い。

彼にとっては今、己の非力さと罪悪感にさいなまれているのでしょう。

「マリアとミリアは？」

「まだ目覚めていません。特にミリアの傷は深いようです」

「俺の、せいだ……！」

そう、ミリアはジェイクリーナスを庇い意識不明になった。ザイナスの兵に足を撃ち抜かれて動けないジェイクリーナスをバルディナ

の兵が刺し殺そうとして、それを庇う為にミリアが間に割って入ったのが原因でした。

マリアもミリアがいない事で背中を預ける相手がなくなり、背後からバルディナの兵に攻撃され意識を失っています。

涙を流すジェイクリーナスを慰めるヤコブリーナス、その表情はとても辛そう……

「違いますジェイクリーナス、貴方のせいではない。ミリアは国民を守るのが仕事、守られて当然だったの」

「けどっ俺だけこんな怪我1つで……あいつは……」

「仕方がないじゃろう！お前さんが剣を持った事がないからこうなったのじゃ！仕方がないんじゃない……」

ヤコブリーナスに怒られて項垂れるジェイクリーナス、でも悲しんでいる暇などありません。

私は部屋の中央に立ち、辺りを見渡しました。良かった、今はバルディナの兵は1人もこの中にいない。皆に話すなら今しかない。

「皆聞いてください！」

私の声にざわついていた部屋の中は静まり返り、視線が全てこちらに向く。

今こそ話さなくては。皆の心を1つにする。国王と后の為に、クラウシエル様とミッシェル様とルーシエル様、そしてダフネの為に。

「ダフネがフライアンにいる事が確認されました」

私の言葉で室内はざわつく。驚いたジェイクリーナスがヤコブリーナスに支えられて立ち上がった。

「セラ、どう言う事だよ！」

「ダフネはルーシエル様を連れて国外逃亡を目指していました。そしてバルディナがオーシャンに侵攻した際、オーシャンと共にフライアンが迎え撃ったとの話です。その時、フライアンの艦隊にダフネの姿を発見したと言う話がバルディナの兵の間で流れています」

「ダフネが……」

「これを皮切りにバルディナ対フライアンの図が明確になりつつあります。私達がやるべき事は1つ、クラウシエル様は祖国奪還のクーデターを御考えです。時期が来て、クラウシエル様の声が響いた時、クラウシエル様と私達城内の者が市民を先導しなければなりません。私達はバルディナからアルトラントを返してもらわなければならぬ」

室内から湧き上がってきたのは光が見えたことへの喜び。この暗闇から救ってくれる可能性を持つ者が現れたことへの希望。

この話を聞いて、城の者が諦めずに心を強く持ってくれたらいい。そして来るべき時、全てを捨てて私達はバルディナの騎士団に挑戦しなければならぬ。剣も足りず、戦の経験のない素人がバルディナの騎士達に挑む。何とも滑稽な話だけれど、そんな夢物語みたいな事を私達は願っている。

私達は誰の物にもならない。アルトラントはずっと自由の国のままだ。

「そうか、そうか……ダフネが。あいつはわし等を救う為に今も動いてくれているのか」

「マリア君とミリア君にいい報告ができそうだよ。ダフネ君とルーシエル王子が生きている、それだけでも希望の光になる」

「次こそ俺は真っ向からバルディナに挑む。ミリアの仇は俺が打つ」  
「いやジェイクリーナス君、ミリア君はまだ死んでないからね。あとマリア君を忘れないでくれたまえ」

「な、分かってるよ！なんだよ感傷に浸ってんだよ！入ってくんないよな！」

「コラッド……」

「ああ、王子様達は無事でいてくれる。俺達も俺達のやるべき事をしようじゃねえかサヤカ、ダン！」

「そうだよな、そうなんだよな師匠！」

そう、私達は絶対に諦めない。

ルーシエル王子とダフネがいてくれる限り。

## 40 懐かしい再会

「ねえルーシエル、この文字はママとルーシエルだけの秘密の文字よ」

「どうして？ミッシェルとクラウシエルには教えないの？」

「ええ、教えては駄目、貴方しか駄目なの。クラウシエルは自己犠牲が強すぎる。ミッシェルだと女の立場を利用される事が多くなる。貴方なら……クラウシエルとミッシェルから守ってもらえる」

「ママ？」

「ルーシエル、貴方には辛い運命を背負わせてしまうわ。でも貴方はダレンへの唯一の道しるべ。貴方を守る為なら、彼は再び英雄として世界を誘導するでしょう」

「難しいよお……」

「ふふ……そうね、ルーシエルには少し難しいかもしれないわね。でも貴方だけなの、神様の椅子から動けないダレンを救いだせるのは」

## 40 懐かしい再会

「ルーシエル？」

涙を流しながら眠っていたルーシエルが目を覚ました。ルーシエルは俺が側にいた事に安心して笑ってしがみついてくる。怖い夢でも見たのかな？だったら起こしてやればよかったな。

「あのね、懐かしい夢を見たの。とっても懐かしい夢」  
「うん」

「俺がママにね、国宝石の文字を教えてもらう夢。今でもよく覚えてる」

「……そっか」

悲しそうに寂しそうに語るルーシエル。ルーシエルが母親にこの文字を教えられたから、今こんな事になっている。バルディナに狙われる原因を作った人物、とでも言うべきなのかな。

あれから更に数カ月の月日が流れた。騎士団と議会のいざこざは絶えず、国民の不安も徐々に広がっていく。城下町に降りれば、議会と騎士団の事を噂し合う住民達で一杯だ。

ジェレミー達が騎士団を説得し、ローレンツが議会を説得してるけど、ランドルフやオルヴァー達は真っ向から反対し、リユーツ議員を慕っていた若手議員達もローレンツの話に耳を傾けないらしい。

その情報が行きわたったのか、エデンの駐屯大使アルシエラとヴァシュタンの駐屯大使エルネスティは眉を顰めるだけだった。

まさかフライアンがこんな状況だとは思ってなかったんだろうな。その時、扉がノックされて第6騎士団団長のハーヴェイが入ってきた。議員が投身自殺した日以来、ルーシエルは女王の家に缶詰め状態。必然的に御世話係の俺も缶詰め状態だ。

数時間置きのローテーションで騎士団団長自らが護衛についている。今の時間帯はハーヴェイの様だ。

「ダフネ、少しいいか？」

「俺か？」

「ああ、お前だ」

ハーヴェイに手招きされてルーシエルを再びベッドに寝かせて部屋を出る。ドアを閉めたのを確認したハーヴェイが小さな声で用件を話した。



「今日の午後、空いてるよな。女王の間に行ってほしい。オーシャンから大使が来る」

「え？ オーシャンと同盟結べたのか！？」

「ああ、バルディナとの抗争に助け船を出してくれた事に対するお礼だってさ。オーシャン民族は1度信用したら尽くしてくれるからな。国内もある程度安定したらしいから午後に使者が来る。お前が良く知ってるライナって女が駐屯大使で来るみたいだ」

「ライナが！」

あいつ元気にしてんのかな。ある程度国内は安定したみたいで良かった。あんな残状見てしまつて、どうなつてしまうんだろうって思つてたから。

カーシーの事も聞かなきゃいけないし、今オーシャンがどんな状況なのかも聞かなきゃいけない。そしてファイアンの事を教えなければ。

ライナと一緒になら、いい案が出て来そうな気がする。何とかしてファイアンを1枚岩にしなきゃな。

領いたのを確認して、ハーヴェイは軽く手を振って踵を返した。昼からか……まだ時間はあるから大丈夫だな。とりあえずエデュサに軍服借りなきゃなあ……

「……何で議員達はいないんだよ」

午後になり、軍服に袖を通し、女王の間に辿り着いたの中には騎士団しかいなかった。一応国からの大使が来るんだから議員も立ち会うのが道理だ。それなのに議員達は1人もいない。

流石に今の時間に来ないのはマナー違反じゃないのか？ エルネスティやアルシェラだって一応来てるって言うのに。

キヨロキヨロと議員を探す俺にハーヴェイはやれやれと首を振った。

「議員は多分ボイコットだな。まああいつらはフライアンとオーシャンの同盟を良く思っちゃいねえからな」

「どうして……」

「大所帯になればなるほど、バルディナとの戦争の色が濃くなってくる。議会はそれが氣にくわねえんだよ。だが孤立してたら、いつ攻められるかわかんねえからなあ」

そう言って困ったように笑うハーヴェイは冷静そうだ。やっぱハーヴェイは国宝石の影響をまだ余り受けてないんだろうか。

第5騎士団と第6騎士団は歩兵として戦う事も出来るが、メインは海軍だ。だから団長のエデュサとハーヴェイは長期の海上パトロールに出てる事もあり、ジェレミーやランドルフ達と比較すれば、女王と接する機会は少ない。

だからこそまだ影響が濃く現れていないのかもしれない。それでも議員嫌いなのは変わらないけどな。

「いいさ、奴らがいない方が話しがスムーズに行くってもんだろ」

「お前なあランドルフ……」

バツサリ切り捨てたランドルフをハーヴェイは呆れたような口調で諷めた。やっぱりこうやって見ると、ランドルフ、オルヴァー、グレインの3人は特に影響が出てるみたいだな。

エデュサは警戒はしてるけど動く気配は今の所なさそうだ。ハーヴェイも同じ。後は……沈黙を守るジェレミーだけ。

ジェレミーは肩をすくめただけで何も言っては来ない。でも表情からして困った顔をしてるから、まだ議会を完全に憎んではなさそうだ。良かった……メリッサの話を聞いてから不安で仕方なかったから。

その時、扉が開き、騎士に案内されて懐かしい奴が入ってきた。褐色の肌に紫の束ねられた髪、勝ち気そうな表情に肩にとまっている

オウム……ライナだ。

ライナは俺達の前で止まり、社交辞令で頭を下げる。

「オーシャンの駐屯大使として馳せ参じたライナと申します。此度は同盟と言う形をとっていただいたことを感謝する」

「勇猛な者たちが集う国オーシャン、君達のその猛き心を我らに預けてくださる事を誇りに思います」

ジェレミーもそう返せば、ライナは形だけの社交辞令を終わらせたのか、ニカツといつもみたく笑った。なんだ、やっぱりいつものライナだ。

「ちょっとどう言う事だい？あたしは一応国の代表だよ？騎士団だけれしか歓迎してないじゃないか」

「すまないな。今は少しゴタゴタしててな……議会にはあまり近づかない方がいいかもね」

相変わらず痛い所をばっさばっさ切ってくるライナにジェレミーも困り顔だ。でもここで下手な事を言うのはまずい。ここにはアルシエラやエルネスティだっているんだから。

ライナはアルシエラ達に視線を送り頭を下げる。

「あんた達がエデンとヴァシュタンの代表って所かい？」

「オーシャン人は初っ端から馴れ馴れしいわね……まあそう言う事になるわ。よろしくしてちょうだい」

「ヴァシュタンの駐屯大使エルネスティだ。以後よろしく頼む。気が合いそうな奴が来て助かったよ」

いきなりのライナの態度に呆れたアルシエラと違い、エルネスティは気に入ったのか返事をした後、握手を求めた。まあライナの性格

はヴァシユタンでは受け入れられそうだな。

でもこれで同盟国は3つになった。後は東天を引きいれればバルディナとパルチナ、ザイナスに対抗できる力が出て来るかもしれない。バルディナもビアナ、マクラウド、東天、忍びの集落を引きいれる為に関心してくるかもしれない。何が何でも先に協力を取り付けなければ。

そしてダレンに会わなきゃいけない。道を示してほしい、過去の大戦の英雄に。

「た、大変です！」

和やかなムードのなったのも束の間、1人の騎士が慌てて扉を開けて入ってきた。その手には書が握られている。

正式な大使が来てるって言うのに、これは礼儀知らずだ。どうやら騎士は第1騎士団の奴らしい、ジェレミーが溜め息をついて、そいつの元に足を運ばせた。

「今は大使がお目見えになっている。話は後で聞こう」

「す、すみません！ですがこれをつ……今しがた届いたものです！」

「今見なければならぬのか？」

「はい！特にアルトラントの客人には絶対に見ていただかなければ！」

それって俺の事か？一体何が書かれてるんだ？

ジェレミーが書を受け取ったのを確認して、騎士は深々と頭を下げて部屋を出て行った。ジェレミーはライナに謝ったが、そこはライナだ。そんなの気にしないでいい、と言って笑って返しただけだった。

それよりも書の中身が気になる。ここで開けてほしい。

「ジェレミー、ここで開けてくれよ」

「しかし……」

「あたしの事なら気にしなくていいよ。それにあの騎士もダフネに見てほしいって言ってたじゃないか」

ライナが助っ人に回ればジェレミーは仕方ない、と言ってエルネスティとアルシエラに許可を取った。2人とも書が気になるらしく2つ返事で許可をする。

書が開かれて、ジェレミーが軽く目を通して固まった。なんだ？そんなに可笑しいことが書かれてるのか？

「ダフネ、来月のこの日……アルトラントの国王と後の公開処刑が行われるらしい」

「は？」

全身の血が一瞬で巡らなくなったような感覚がした。身体が一瞬で冷え上がる。待てよ、バルディナは国王と后をあの日から10カ月後に処刑って聞いた。

まだ7カ月しかたってない。まだ処刑は早すぎる！

慌ててジェレミーから書を奪い中身を読み上げる。それと共に広がったのは絶望。

“親愛なるファライアン、我がバルディナは反逆国であるアルトラントの国王と后を正義の名のもとに処刑する事を決定した。ついては来月の今日、午後から取り行う処刑を是非貴方方にも拝見していただきたい。欲望に染まった国王と後の姿を見ていただきたいからだ。そしてもう1つ、第2王子をそのかし国外逃亡に走らせたダフネと言う青年の両親を厳罰に処する事に決めた。しかし我らはこの事態を決して望んでいる訳ではない。ダフネ自らルーシエル様を連れて戻ってくるのなら、両親と后だけは処刑を取り止めよう。彼

が貴国に身を隠しているのであれば、探し出して対応を取っていた  
だく事を望む”

そんな……国王と后だけじゃない、親父とお袋までも処刑するって  
言うのか？

手の力が抜けて書が地面に落ちる。それをライナが拾い上げて、中  
の文を読み上げて俺の顔を見た。

「ダフネ……」

「ど、どうすればいいんだ。今こそ声明を！声明を出してくれジェ  
レミー！バルディナを非難する声明をつ！」

「……今はまだ動けない。議会の了承がなければ書は作れないから  
な」

こんな時まで何言ってやがるんだ！？そんな事言ったら国王と后  
が処刑されてしまう！そんな事になったらアルトランドの国民は絶  
望する。

抵抗する気力すら湧かなくなるだろう。そして俺のせいで親父とお  
袋までもっ！

「ジェレミーあんたまだ議会を気にしてるのか！？頭可笑いんじ  
やないか？あんな売国奴をなんで庇う！声明を出せ、奴らがやって  
る事は民主主義に反すると！」

グレインの力強い言葉にジェレミーは力なく首を振る。その状況に  
苛立ったランドルフとオルヴァーがさらに追い打ちをかけた。

その状況を見かねたエデュサとハーヴェイが落ち着かせようとラン  
ドルフ達を止めようとしたが、ランドルフはそれを払いのけてジェ  
レミーの胸倉を掴んだ。

「てめえまさか議会に傾倒してるとか言わねえよなあ？てめえが裏切り者なのか？」

「そ、そんな訳ないだろう！」

「じゃあなぜあいつらを庇う！奴らのせいでファライアンが可笑しい事になってんのが分かんねえのか！？」

「今のままだと俺達はあの頃に戻ってしまうぞ！今の騎士団は過去のクーデターと同じ道を走ってる！」

やっぱりジェレミーは異変に気づいてたんだ……だから自らを戒めてたんだ。どんな状況でも決して民主主義を無くさない、と。

でもオルヴァーやランドルフ達にとって、ジェレミーの言葉は苛立ちしか湧かなかったようだ。

「俺達が原因とでも言いてえのか！？やっぱてめえは議会に通じてんじゃねえのか！？」

「違う、そんな事は絶対にない！」

「信用出来ねえんだよお前をよ！オルヴァー、グレイン！ジェレミーを捕えるぞ！てめえは暫く牢で頭でも冷やしとけ！」

「ランドルフ……」

捕えるだって！？オルヴァーとグレインはジェレミーを捕えようと腕を伸ばす。でもそれをハーヴェイとエデュサが盾になる様に庇った。

ランドルフ、グレイン、オルヴァーとエデュサ、ハーヴェイが睨み合う。

「騎士団まで疑いだしたらキリがないだろう。俺達が1枚岩じゃなくてどうする」

「邪魔すんなハーヴェイ、そいつは議会に傾倒してやがる。内通者かもしれねえ！」

「女王にあれだけ仕えてきたジェレミーに対して酷い言い分ね。落ちつきなさい、頭に血が上ってるだけよ」

「俺達は正当な事を言ってるだけだ。可笑しいのはあんた達だろ」

睨み合う騎士団達を前にアルシエラとエルネスティは溜め息をついた。

「まさかここまでとはね……5大国家が聞いて飽きれるわ」

「今のフライアンにバルディナとパルチナ、ザイナスは止められない。これは少し俺達も考える必要があるかもしれないな」

このままじゃエデンとヴァシユタンは離れて行ってしまう。そんな事になったら本当にお終いだ。バルディナを止められる国はどこにもなくなる。

ライナは今の状況を茫然として見ている。まさかここまで酷いとは思ってなかったんだろう。騎士団同士までいがみ合う、そんな所まで来てしまったんだ……

「助けて、くれよ……なあ！アルトラントが、国王たちが殺されるのに……なんでこんな事で争ってんだよ！」

悔しくて悲しくて叫んだ声と共に零れ落ちたのは涙。次第に声も出せなくなり、泣き崩れる俺をランドルフやジェレミー達が呆然として眺めていた。

そんな俺をあやすようにライナが背中をさする。

「ダフネ、ヴァシユタンは声明を送ってやる。恐らくヴァシユタンにも書は届いてるだろう。嚴重な抗議をしてやる」

「エルネスティ……」

「そうね、ヴァシユタンにも来てるのならエデンにも来てるかもし



れないわね。まあ私達は公開処刑に参列はしないわ。書もそのまま  
送り返すつもりよ」

「アルシェラ……」

この2人の方が、今は遥かに頼りになるじゃないか。どうしてフア  
ライアンがリーダーシップを発揮してくれない。どうして、どうし  
て……

全て国宝石のせいだ、国宝石が全てを狂わせている。あの女王のせ  
いで……そう思った自分を恥じた。

女王だって好きで継承した訳じゃない。なのに俺は女王を今一瞬で  
も憎んだ。そんな自分が更に惨めだった。

ランドルフは俺を見て舌打ちをし、ジェレミーから離れて部屋を出  
て行ってしまった。オルヴァーとグレインもその後を続いて部屋を  
出て行く。

残された俺達の間には包まれたのは沈黙。

「ダフネ、すまない……けど俺達は過去の過ちを繰り返す訳にはい  
かないんだ」

「……」

「再びクーデターが起これば、今度こそフアライアンは滅亡する。  
それだけは避けなければいけない」

分かってるよ、分かってるけど……割り切れない。親父とお袋を助  
けたい、国王と後の処刑を取り止めてもらいたい。

もし処刑なんてなったら直接それを見なければならぬクラウシェ  
ルとミッシェルにどれほどの心の傷が残るんだ。一生消えない、深  
い悲しい物になるに違いない。それはルーシェ尔だって同じだ。

お願いだ、この状況を誰か助けてくれ。誰でもいいんだ、誰か……  
誰か！

泣いた所で助けてくれる者も現れない。

都合良く奇跡なんて起こりはしない。

## 41 誰も助けてくれない

「パパとママの処刑……？」

ルーシエルの絶望した声と、目を丸くしているイヴさんが視界に入る。真っ直ぐ俺を見つめて来るルーシエルを見つめ返す事が出来なかった。

でも顔を背けたことがルーシエルにとって決定打となってしまったようだ。

41 誰も助けてくれない

「そんな……」

泣き出したルーシエルをイヴさんが慰めている。優しく母親の様に抱きしめて……その光景をメリッサとジェレミーは複雑そうな表情で眺めていた。

あの後ライナと別れ、俺は女王の家に向かった。ライナも連れて行きたかったけど、流石に今はまだ無理だと言うジェレミーの言葉に頷くしかなかった。ジェレミーには何か考えがあるはずだ。

ジェレミーはイヴとルーシエルにある程度を説明した後、ソファから立ち上がった。どうやら出て行くみたいだ。

「ジェレミー？」

「……今から議員と会議を開くよ。そこでファイアインの方向性が定まるはずだ」

信用出来るもんか議会なんて。でもそれと同じ位、騎士団も信用できない。国宝石で女王に魅了されている者が多く占める騎士団に冷静な判断ができる奴は少ない。

議会も騎士団の思い通りに行かすのは癪だろう。騎士団の意見を受け入れてくれる可能性は極めて低い。

十中八九、バルディナを止める声明を出してくれる可能性はないだろう。俺はジェレミーの結果を聞くしかない。泣き続けるルーシェルを慰める事も出来なかった。

—ジェレミーside———

ローレンツと騎士団団長を引き連れて会議室に入る。ローレンツに伝えてくれるように頼んだお陰で議員達は皆集まっていた。用意された席に腰かけて進行役のローレンツが話しだすのを待つ。

ローレンツは咳をし、早急に作った資料を広げて皆に視線を送った。

「今回の議題は既に皆さん知っていると思いますが、バルディナがアルトラントの国王と後の処刑を1ヶ月後に取り行おうと言う書を送ってきました。そして私達にも見物人として来て欲しい、と。これはバルディナの挑発行為ともとれる物です。ファイアンの方針を今一度固めたい。バルディナに抗議声明を送って非難するのか、言われたまま代表が視察するのか」

簡潔にまとめたローレンツに議員達はざわめきだした。その時、1人の議員が恐る恐る手を上げる。確か彼は今年議員に当選した若手議員ジーンだ。歳もまだ20代前半だったはず。

ローレンツが彼を指名し、彼は緊張した面持ちで立ちあがった。

「あの、俺は声明を送るべきだと思います。バルディナの行為は間違はなく侵略行為です！俺達は来るべき対応を取らなければ、向こうから腰抜けだと思われます！今こそ立ち上がる時だと思います」

「バルディナの軍事力を知ってるのか？我らは未だにクーデターの傷跡全てを修復できていない。下手な事をして戦争になどなったらファライアンは滅亡だ。今は軍備を整え、国内を安定化させなければ戦争をしても結果が見えている。処刑に賛同はできないが、今は耐えるべきだろう」

ジーンの意見をやんわりと他の議員が諫める。その光景を見て確信した。やっぱりバルディナと内通してる議員は僅か1部だ。他の議員は純粹にファライアンの事を想っている。問題があるとしたら……

「腰抜けだな、だから舐められるんだよ。こんな書状を貰ったって言うのに、まだ反論しねえのかよ」

グレインの発言にランドルフ、オルヴァーが同意する。ハーヴェイとエデュサが諫めたけど発言した後だ。議員達は顔をしかめている。騎士団は何が何でもバルディナの非人道的な行為を止めさせたいんだろう。冷静な判断ができなくなっても、それをすると思うのは簡単だ。イヴが望んでいるから。

青の国宝石の影響を特に強く受けているランドルフ、オルヴァー、グレインは女王の望み全てを叶えたいと願っている。女王に傾倒しているから。

俺だって人間的な判断で言えばバルディナの行動は許されない。抗議もしたいし声明だって出したい。でも俺達は一般人じゃない、国を動かす騎士団なんだ。

ファライアンを侵略から守れるのは俺達騎士団しかできない。己の感情1つで国を巻き込む訳にはいかない。

そうなるとダフネには悪いけど、議員の言う通りかもしれない。今こんな状態でバルディナに表だった喧嘩を売ることではできない。

バルディナは明らかに俺達を試している。オーシャン侵攻の際、手助けをした俺達をバルディナは完全な仮想敵国と認識してるだろう。今回の件で表立った反論を出せば、バルディナはこれを口実にフアライアンを敵国と認定し、戦争に持っていく気のはずだ。

そうなたらお終いだ。今のフアライアンでは国は守れない。議員とバルディナに挟まれて俺達が潰されてしまう。ここは冷静になるしかない。

「俺は議員の言う通りだと思う。今は耐えるべきなんじゃないか」

俺の発言にランドルフ達が目を丸くしてこっちを向いた。それは議員も同じだ、まさか俺が議員の味方をするなんて相手も思ってたかっ  
たみたいだ。

仕方ない、俺は騎士団の一員だ。国に忠誠を捧げている。イヴやダフネ達の為だけに動く訳にはいかない。

ランドルフが握り拳を作ったのが分かった。でも全て言う事を聞く訳ではない。

「俺が使者としてバルディナに向かおう。恐らく処刑にはバルディナ帝王イマニユエル・ネイサンも参列するはずだ。そこで直接な抗議を行うつもりだ」

「てめえなんかにできんのかよ」

ランドルフが鋭く俺を睨みつける。その目は憎しみに燃えている、この目を知っている。父さんと同じ目だ。

第1騎士団の副団長をしていた父さんは最後はこんな目をしていた。女王にあだなす全てを排除しようとしたあの目……その目で幼い頃からの親友が俺を睨んでいる。

その事実が胸が裂けそうなくらい苦しかった。

「所詮あんたは議会のまわし者だったって訳だ。もう好きにすればいい。フアライアンが最後どうなるか、自分の判断を呪えばいいさ」  
「どこに行くのだオルヴァー」

「まだ何か話があるのかバイエル議員？俺はないから失礼する」

議会でも中心人物の1人、古参のバイエル議員。彼の問いかけにもオルヴァーは吐き捨てるように返事をして席を立ち上がり出て行った。グレインも舌打ちをして会議室を出て行く。ランドルフは乱暴に立ちあがり、俺を睨みつけた。

「ランドルフ……」

「てめえには心底愛想が尽きたぜ。女王騎士を名乗る資格もねえ。  
バルディナの犬め」

一瞬目の前が暗くなった感覚がした。まさかこんな事を言われるとは思ってなかったから。

俺は何か間違えてたのか？俺がいけなかったのか？分からない、もう何も分からない。親友と思っていた奴からの言葉は酷く胸に突き刺さった。

ランドルフの言葉に他の議員達が抗議したけど、それに耳を貸さずランドルフは出て行ってしまった。残されたハーヴェイとエデュサは気まずそうにしてたけど、まだ出て行く気はないみたいだ。

まだこの2人に影響が濃く出てなくて良かった。この2人まで3人の様に強い影響が出てたら、俺は恐らく騎士団を追放されていただろう。この2人だけが頼りだ。

「ジェレミー、俺は第1騎士団の判断に従うけど……少しバルディナに譲歩しすぎじゃないか？行く必要ないだろう。書を送り返してやればいい」

「バルディナはフアライアンを恐らく仮想敵国として見てる。下手

な行動はできない」

舐められている、それは分かる。でも現に今の様な状態でバルディナと戦争なんてできない。議会との溝を失くして1枚岩にしなければ戦争なんて……

下を向いていたから気付かなかった。俺を見て笑みを浮かべている議員が数人いたと言う事に。

その後、俺が使者としてバルディナに出向いて直接抗議すると言う意見でまとまった。その事をダフネに伝えなければならなかったが、正直気が重かった。

イヴの家に向かうと、ダフネとルーシエル王子がすぐに俺に駆け寄ってどうなったかを聞いてきた。でも望んだ返事はあげられそうにもない。

「俺が使者としてバルディナに向かう。そこで直接抗議は試みてるけど……」

「そんな……じゃあ声明を出してくれないのか？ ファライアンから抗議してくれないのか!？」

「ああ、あくまで抗議は使者の俺が個人の意見と言う形になる」

すなわち実質は国王と後の処刑を見物する、そう言う結末だ。

へたり込んでしまったダフネ、それを支えようとしたメリッサ、茫然としているイヴ、そして俺を真っ直ぐ見つめているルーシエル王子。

ルーシエル王子は目から涙を零し、俺に対し泣き叫んだ。

「もういい、もういいよ! 結局誰も俺達を助けてくれないんだ! パパもママもミッシェルもクラウシエルも誰も助けてくれないんだ!」

「ルーシエル王子……」



「もういい、あんたなんかの力なんか借りない！俺がパパとママを助ける、あんたなんかもういらない！」

ルーシエル王子がそう言って走り去っていく。そうだな、彼が望んだ物を俺は与えてやれなかった。中途半端に希望を与えただけだったのかもしれない。

エデンとヴァシユタン、オーシャンと協力を取り付けて守ろうとしたのはフライアンだけで、ルーシエル王子を俺達はゲーティアの手に入れる駒としか扱ってなかったのかもしれない。

追いかけてようにもショックのあまり立ち上がれないダフネに手を伸ばしたけど、払いのけられた。行き先を無くした手はむなしく宙を舞う。

どうしてこんな事になったんだろう。俺が無責任に匿ったからか？結局助けられないのなら匿うべきじゃなかったのかもしれない。全て余計な希望を与えた自分のせいだ。

——ルーシエル side——

泣きながらイヴさんの家を出て城の中を走る。もうこんな所においても意味なんかない、自分の力で何とかしなきゃいけない。でもどうやって？分からない、分からない。

でもここにおいてもパパとママは助けられない。俺にもっと力があれば……もつとクラウシエルみたいに頭が良かったら、もつとダフネみたいに剣を使えたら、こんな状況にはならなかったのかなあ……泣きながら無意識に走った先は綺麗な花が生い茂る中庭だった。ここ……俺がライと遊んだ場所だ。無意識に来ちゃったんだ……

再び項垂れた俺の肩を誰かが叩いた。どうしよう、俺は一応女王様の家から出たらいけないんだった。

恐る恐る振り返った先には懐かしい姿があった。

「ライ……？」

「久しぶりルー、またおじさんの仕事で付いてきたんだ。ここにいれば会えると思って待ってただけ、やっぱり会えた」

ライは嬉しそうに笑う。でも俺が泣いてるのを見て、すぐに笑うのを止めて顔を覗き込んできた。隠しても意味がないほどに真っ赤になった目とほっぺをライは手で包み込んだ。

「どうした？」

「ライ、ライ……」

縋りついて泣いた俺をライは何も言わずに背中を叩いて慰めてくれた。ライになら話してもいいよね、だってライは友達なもの。

ベンチに座った俺はライに一部始終を話した。パパとママが殺される事もフアライアンが助けてくれない事も、自分が何をすればいいのか分からない事も、全て。

「そっか、辛かったな……」

「俺、どうしたらいいのかな。俺にはなんの力もない」

「……でも国宝石って怖いんだな。そんな力持ってたなら誰も逆らえないよ」

ライの何げない一言に何かひらめいた。国宝石は今俺が大事に持ってるカバンの中に入ってる。今その鞆を持ってる。

これさえあれば……

立ちあがった俺をライは見つめる。ダフネには言えない、きっと反対されるから。でもパパとママを助けるには俺が力を手に入れなきゃいけないんだ。

「ねえライ、付き合ってほしいんだ」

「どこに？」

「うん……あのね、俺とエデンに一緒に行ってほしいんだ。1人じや心細くて……」

俺の言葉にライは首をかしげた。いきなり言われても分かんないよね。やっぱり無茶言ったかな……でも頼れる相手はライしかない。

「……おじさんに馬を借りるよ。それに乗っていこう」

「あ、有難う！」

「いいよ、友達だろ」

行き方も馬の乗り方もライは分かるみたいだ。やっぱり俺は何も知らないんだ。

急にいなくなって心配かけたらいけないから近くにいた騎士団の人に1週間程度出かける、とだけ告げて騎士団の人の制止も聞かずにライと一緒に走った。

エデンに行けば教えてくれる。緑の国宝石の継承場所である暁の大地がどこにあるか。そこに行けば、国宝石を継承すれば、きっと何かが変わる。

俺に出来るのはそれくらいしかないけど、きっと、きっと何かが変わるはずだから……

## 42 ルーシエルの決意

「ルー、おじさんに馬は借りられたよ。流石に何に使うんだ、とは言えなかったけどね」

「有難う！」

ライが馬に跨り、俺のその後ろに跨る。腹を蹴って走り出した馬が城下町から駈け出して行く。城下町から離れてどんどん小さくなっていくお城を見て小さく呟いた。

「待っててねダフネ……」

## 42 ルーシエルの決意

前に行った事があるから景色はなんとなく覚えてる。この川を通り抜けた先に村があるんだよね。そこを通過って、次の村で一泊したはずだ。

ダフネがいない状況での遠出なんて初めてだから少し怖いけど、ライは何でも知ってる。馬の乗り方もエデンへの行き方も、何でも分かる。

「ねえライ、ライは1人でこうやって遠出した事あるの？」

「あるよ。パパと喧嘩なんかしたら2週間くらい家出とかするし」

簡単にライは言ってる。すごいや、俺なんか半日も無理だ。前にパパに怒られた時、困らせてやろうと思って倉庫に隠れてたんだけど1時間くらいしたら寂しくなって出ちゃったもん。2週間なん

て絶対に無理だ。

ライの背中にしがみついたまま、ただライの肩越しに景色を見つめた。平原がどこまでも広がっている緑色の世界。所々に動物の姿も見える。

ダフネはもう俺がいない事に気付いたかな。俺がイヴさんの家から出て行って3時間は経ったはずだから気付くよね。あの騎士さんはちゃんと伝えてくれたよね、大丈夫だよね……

心に少しでも暗い影が落ちたけど、でもこれは皆を助ける為なんだ。俺は何も悪い事はしてない。そう自分に言い聞かせて平常心を保った。

夕方まで馬を走らせて着いた村で一泊する事になったけど、俺良く考えたらお金持ってない。

それを伝えたらライがお金を貸してくれた。ライはお小遣いをちゃんと持って来てたみたいだ。偉いなあ、俺と大違いだ。今度ちゃんと返さなきゃ。

その日をその村で過ごし、再び次の日の朝の早朝に馬に乗ってエデンに向かう。それをもう1日繰り返したら次の日のお昼すぎにエデンへの入り口の森に辿り着いた。

森の中は暗くて光が差し込んでいない。この中に入らないといけないんだよね。

「そう言えばルー、エデンは不思議な結界みたいなのを張ってて簡単には入れないって聞いたけど大丈夫なのか？」

ライの言葉に顔が真っ青になった。そう言えばそんな事を聞いた気がする、いや聞いた。オルヴァーさんが言ってたもん。

エデンの人間じゃないと行き方が分からないって。どうしよう……当てずっぽうで入っちゃったら道に迷ってのたれ死んだりしちゃうのかなあ。本当にどうしよう。

行き方が分からなくて固まっている俺達の目の前に、森からフードを被った男の人が出てきた。もしかしてエデンの人なのかな。そうだよな？

「あ、あの！」

「ん？」

思い切って声をかけたら男の人は俺に視線を向ける。何だか少し怖いけど、でも俺がすっかりしなきゃどうしようもないんだ。ライに頼る訳にもいかない。

「俺、エデンに行きたいんです！連れて行って下さい！」

「おめえどこのガキだ。エデンには入れない、とっとと家に帰れ」

「か、帰れません！エデンに行くまでは帰れません！」

怖くて泣きそうになったけど、男の人は俺の顔をマジマジと観察しだした。

ライが俺の腕を引いて逃げようって言ってるけど、怖くて足が動かない。俺、もしかして怒られちゃうの？

「おめえどっかで見た事あるな。名前は？」

「ルーシエル、です」

「……………ああ、アルトラントの第2王子か。確か前にエデンに来た事あるよなあ。どうした、オルヴァーとは一緒にやねえのか」

「ひ、一人で来たんです。俺、教えてほしい事があって……」

「一人い！？一国の王子が護衛も付けずに1人でここまで来たってのか！？」

男の人は目を丸くして大きな声を上げる。それに驚いて方を震わせたら、その人は罰の悪そうに頭を掻いた。

「……仕方ねえな。案内してやる、このまま帰す訳にもいかねえしなあ」

男の人はそう言って森の中に入っていく。俺とライは慌ててその後を追いかけた。

男の人の名前はボリスさんって言うらしい。エデンの中でも代表4人の1人なんだとか。良く分からないけど多分偉い人だ。

村に着いた俺達を迎えたのは1人の女の子だった。この子クレアさんって人だ。この間ダフネと一緒にエデンに行った時、オルヴァーさんに話しかけてた……

「ボリス様……」

「客人だ。クレア、村長の元に案内してくれ」

「はい」

クレアさんは頭を下げて俺達に付いて来るように促した。無機質な表情からは何も読み取れない。

怖くなってライとお互い手を握って後を付いて行く。

でもここまで行けば分かるんだ。暁の大地がどこにあるか……そこに行けば国宝石を受け継げる。俺にも対抗する力を手に入れられる。クレアさんに連れて行かれた場所は、前に案内された家だった。その中にはオルヴァーさんのお爺ちゃんと、もう1人黒髪の男の人がいた。

「村長、アレクセイ様、お客様です」

「なんだクレア……あんたルーシエル王子か」

「こんにちは」

緊張して頭を下げた俺の真似をしてライも頭を下げる。

クレアさんに座る事を促されて腰かける。オルヴァーさんのお爺ちゃんソファに腰かけたまま少し困った顔で俺を見つめてきた。

「2人だけで来たのかい？」

「うん、そうです」

「無茶をする……ちゃんと御世話係には許可を取ったのかい？」

「黙ってきたの。反対されるから」

俺の言葉に皆が目を丸くした。心臓がバクバク言ってるけど、でもここまできたら言うしかない。

怖くて顔を見れなかったから、深く頭を下げて顔を見ないようにした。

そしてそのまま大きな声でお願いを言う。

「お願いします！ 暁の大地の場所を教えてください！ 俺、国宝石を継承したいんです！」

「ルーシエル王子……」

「君、意味を分かってるのか？ アルトラントの緑の力を……」

アレクセイさんが少し呆れた声を出す。でも頷くしかできなかった。覚悟はできてるんだ、皆を守るんなら何だっていい。パパとママ、ミッシェルとクラウシエルもお城の皆も国の皆も守りたい！

震えている俺の手をライが握ってくれた。温かい手に少しだけ安心する。

「王子、隣の少年は」

「お友達なの」

「……国宝石の話了他者に広める事は許されない」

「でも……俺はルーを守らなきゃいけないんだよ。ここでルーを1人になんかできない」



凜とした声が室内に響く。顔を上げると、ライは真っ直ぐ3人を眺めていた。いや、少し睨みつけてるって感じかな？

何となく嫌な空気が漂って、更に怖くなって、もう1度お願いしますって言って頭を下げた。

暫くして俺の頭上から少しだけ困ったような声が聞こえた。

「言うまで解放してくれなさそうだ。村長、教えてやればいい」

「しかしなあアレクセイ……相手は王子ぞ」

「男の子ってのは無謀な事もしてみたいもんなんだよ。遅かれ早かれ継承はされる、その時期が来ただけさ」

無謀なんかじゃない。俺はこの力さえあれば……皆を助けられるって思ってる。

顔を上げた俺に村長さんがクレアさんに地図を持ってくるように促していた。暫くしてクレアさんが地図を持って来て机の上に広げた。

「王子、これはアルトランドの地図じゃ。ここが王都アレキサンドリア、そしてその南西の方角にある深い森の中に1部分だけ緑が生い茂らぬ小さな乾燥地帯がある……そこが暁の大地じゃ」

アルトランドは他の国に比べて緑が多い国だ。それなのに砂漠地帯があるって少し意外だ。

「ここは数百年前の戦争の舞台になった場所じゃ。暁の大地と言われる所以は戦争によって辺り一帯が血で染め上げられたからじゃ。ここは緑の国宝石の力によって皆の傷を癒し、その代わり木々の命を吸い取った。じゃからここら一部は緑が生い茂らんのじゃ。分かるか王子、どんなものにも代償がある。その覚悟があるのか？」

「あるよ」

ハッキリと答えれば村長さんは俺に小さい地図を渡して暁の大地の場所をメモして渡してくれた。これで行き方が分かる。

「国宝石を暁の大地にある祭壇に捧げなさい。そして誓え、我が命を捧げて継承せん。」と

「覚悟しておいてください。国宝石の代償は想像を絶するものと思われます。心を強く持ち、決して折れてはなりません……」

クレアさんの言葉に少しだけ息が詰まった感じがした。この人は一体どこまで知ってるんだろう。

アレクセイさんがやれやれと言って肩をすくめて、そのまま立ちあがって村長さんに頭を下げて家を出て行く。そして村長さんがクレアさんに顔を向ける。

「クレア、王子様達を首都ファーディナントの前まで送ってあげなさい。お前の転移魔法なら出来るだろう」

「はい、分かりました。王子様こちらです」

クレアさんが立ちあがって家の扉を開ける。送ってくれるみたいだけど俺達馬もあるし……大丈夫なのかなあ。

立ちあがって村長さんに頭を下げて先に家を出る。でもこれで分かった。急がなきゃ。

「王子様の友と申したな。そなたの名前を聞いておこう」  
「……エイン」

「なぜ偽名を？さきほど王子は貴方の事をライと呼んでいましたが」  
「盗み聞きなんて悪趣味だね。まあそう言う事」

「……あの少年……クレア、気をつけときなさい」  
「はい」

「ライ、どうしよう。お馬さん森の外に……」

「そうだね。一度森まで出て、馬も一緒に転移魔法で飛ばしてもらおう」

「転移魔法って何？」

「一瞬で物や人を別の場所に送る魔術だよ。精度が高い人がやればやるほど、飛ばせる距離も広くなる」

ライは本当に物知りだなあ。

ライの後にクレアさんが杖を持って出てきた。本当に魔法使いみたい！魔法使いなんて見た事ないからドキドキだあ！

「クレアさん、あの……俺達、森の外に馬が」

「そうですか。では一度森から出ましょう。私の傍から離れないでくださいね」

クレアさんに言われた通り近くで待機してたら、クレアさんが杖に色々話しかけている。ライいわく呪文って言う奴らしい。すると杖が光り出した。すごい、これが魔法って奴なんだ！

地面が光り出して俺達を光が覆う。何だか少し怖くなってクレアさんにしがみついたら足が浮いた。次第に景色が薄くなっていて眩しい光が包み込んで目を瞑った。

一瞬の事で分からなかったけど、目を開けたら目の前に馬がいた。

「森の外だ！すごい！」

馬に飛びついた俺の横で、ライは冷静に馬と気を繋いでいた紐をほどこいて行く。

自由になった馬をクレアさんの近くに連れて行けば、再び転移魔法

って奴を使ってくれた。

次に目を開けた先はファイアンの首都ファーディナントの前の門だった。すごい……俺達が2日かけて行った道のりを……  
クレアさんは一歩下がって俺達に頭を下げた。

「では私はここまでです。王子、くれぐれもご無理は無さいませんよう……」

「有難うクレアさん！」

「クレアで結構です。私ごときに頭を垂れる必要などありません。では王子殿下、来るべき時……また」

そう言ってクレアさんは姿を消した。魔法使いって本当にすごいんだなあ。

首都の中は賑やかだったけど、やっぱり騎士団と議会の事を噂し合う人でいっぱいだ。

「ルー、俺は馬を返しに行かなきゃいけないんだけど……先に帰るか？ 待っててくれたら城まで送ってあげるけど」

「子どもじゃないよ」

「そうだけど、王子様な訳だし。いざって時は俺が盾にならなきゃだろ？」

「平気だよ！ 俺行くね。ライ本当にありがとう！ また会いたいな！」

「いつもの場所に俺はいるから。また会えるといいな」

「うん！」

ライと手を振って別れる。ライがいてくれて本当に良かった。ライがいてくれなきゃここまでこれなかったんだもん。

皆俺がルーシエルだって事を知らない。お城まで走っていけば大丈夫。

ダフネにばれない様に地図をカバンの中にしっかりと入れて、城に

向かって思いっきり走った。

## 43 仲違い

「王子殿下！どこ行ってたんですか！？」

お城に入ったら真っ先に俺の所にハーヴェイさんが走ってきた。あれ？おかしいなあ……俺ちゃんと伝えてって伝言は残したんだけどなあ。

ハーヴェイさんは俺を軽々と抱っこして走りだす。どうしよう、この反応じゃ俺ダフネに怒られちゃうかも。

## 43 仲違い

「ルーシエルツ！んの……アホが！」

女王様の家に連れて行かれた俺に待ってたのはダフネのげんこつだった。生まれて初めての痛さに涙が出そうになる。

恐る恐る見上げたらダフネは泣きそうな顔をしてた。それでどれだけ心配かけたのかを理解できた。ごめんね……でもこれで俺、ダフネや皆を守るから。

俺の体に怪我がない事を確認したダフネが安心したように息を吐く。

「で、どこ行ってたんだ。無断外泊して」

「聞いてないの？」

「聞いたさ。でも行き先まではな」

「友達と一緒にいたの」

俺の答えにダフネは首をかしげた。あ、ダフネにはまだ言っていなかったっけ？

でもイヴさんとメリッサさんは分かったみたいで、すぐにダフネに説明してくれた。するとダフネが床に座りこむ。

「一言言えよ、もう……」

「ごめんなさい」

「まあ無事ならいいや」

そう言って俺を抱きしめてくれるダフネの腕は暖かい。この腕を今度は俺が守ってあげなきゃ。

―ダフネ side ―――

ルーシエルが帰ってきて、すっげえ安心した。マジで生きた心地がなかったから。

ルーシエルは反省してたけど、何してたのか等は一切教えてくれなかった。まあ多分そんな危ない事もしてなさそうだし、あんまり質問攻撃するのも良くないから聞かないでおこう。

ファライアンは今かなり忙しそうだ。それもそうか……あと3週間後に国王と后、俺の両親の処刑が待ってるんだ。

何とかしてほしい、なんとか……

ルーシエルがイヴさんと庭で遊んでいる間、護衛に来ていたグレインとメリッサと色んな話をする。

でもやっぱり良い案が浮かばない。

「俺が1人で自首すれば親父とお袋だけでも助けられるかな……」

「ダフネ……」

ポツリと呟いた言葉にグレインとメリッサは悲しそうに表情を歪め

た。でもそれ以外にバルディナの処刑を止められる方法が分からない。

俯いた俺の手をメリッサが握った。

「そんな事をしてでもバルディナはきつと聞き入れないわ」

「でもっ……」

「ダフネ、心配するな。今日書状が届いた。君のご両親は牢獄に入れたらしいが処刑は免れたそうだ。君の村も今の所、処分は先延ばしになっている」

「え？グレインそれって……」

「一般市民への被害に関してはクラウシエル王子の激しい反発があったそうだ」

クラウシエルが……自分の家族が処刑されるってのに、ここまで来て俺の家族を助けんのかよ。本当に馬鹿だよあいつは……でも根本的な解決には繋がらない。国王と后が殺されたらアルトランドは事実上壊滅だ。今の状況がいい訳がない。でも親父とお袋はクラウシエルのお陰で助かった、それだけは事実だ。問題はどうか現状を打破するか……

「ダフネ」

その時、遊び飽きたのかルーシエルが俺達の所に走ってきた。俺の隣に腰かけて真剣な顔で俺を見ている。一体何なんだ？

「ルーシエル？」

「あのねダフネ、俺も一緒にアルトランドに行くってジェレミーさんに伝えてくれないかな」

「お前まさか……」

「違うよ、自首するんじゃない！でも俺、行きたい所があるんだ。」



急いでるんだ」

一体何を急いでるんだ？でもルーシエルに聞いても頑なに口を閉ざしただけだった。でもルーシエルを連れて行く訳にはいかない。父親と母親の処刑を見させる訳にはいかないし、ましてや捕まったら最後だ。

「ルーシエル、それは駄目だ」

「どうして？俺行きたいんだ！あそこでしなきゃいけない事があるんだ！絶対ついて行くもん！」

「あ、おい！」

ルーシエルが走って部屋を出て行き、嫌な沈黙に包まれる。

行ったとしても辛い経験にしかない。国王と后は実質助けられない。いくらヴァシユタンが声明を送っても、エデンが書をつつかえしても、そのくらいで止めるようならアルトラントに侵略自体していない。

パルチナとザイナスは参列するはずだ。そんな中向かった所で……行き場の無い怒りを拳を握る事で発散させるしかなかった。

「ダフネ、王子からアルトラントに連れて行ってほしいと言われたんだが……どう言う事だ？」

次の日、ジェレミーから告げられて頭が真っ白になった。本気で言ってるのか？本気で言ってたのか！？

目を白黒させている俺の横でジェレミーは溜め息をついた。

「アルトラントでしなければいけない事があると言って、ついでもいいから送ってくれ、と。そう言われたんだが……」

「なっ！そんな駄目に決まってるだろ！？」

「俺も断ったんだが諦めてないみたいだ。顔を合わせる度に口にして来る。君がどうにかしてくれ」

叱りつけなければいけない。ファイアンだって安全な訳じゃないのに、敵地の中心部に行こうとしているものだ。

確かにミッシェルやクラウシエルには会いたいだろう。国王や后を助けたいならアルトラントに帰りたいだろう。でもさせる訳にはいかない。

ルーシエルが捕まったら俺を逃がしてくれた皆の苦労が水の泡だ。代わりに俺が行く事は出来ないのか？

でもルーシエルはなぜアルトラントに行きたがっているのかは分からない、教えてくれないから。

その時、ジェレミーの部屋の扉がノックされて、部屋にオルヴァーと少女が入ってきた。この女、見た事があるぞ……確かエデンにいたクレアって子だ。

クレアは礼儀正しく頭を深く下げ、オルヴァーの一步後ろに下がった。

「どうしたオルヴァー」

「王子殿下を呼んでほしい。クレアをあの場合に連れて行く訳にはいかない」

「どう言う事だ？」

「王子から頼まれたんだよ、クレアの力を貸してくれてな。クレアからも了承を得た」

「王子様のお役にたてるのなら……」

そう呟いたけど、見る限り乗り気な訳じゃない。

ジェレミーも首をかしげたけど、とりあえずルーシエルを連れて来ると言って部屋を出て行ってしまった。

でもいつの間にルーシエルはこの子と仲良くなったんだ？エデンには1回しか行った事がないはずだ。その時は俺とずっと一緒にいた。この子と会話する時間なんかなかったはずだ。混乱している俺にオルヴァーは気まずそうに告げた。

「ダフネ、この間王子が一般騎士に出かけるって告げて行方不明になったろ？エデンに行ってたみたいだ」

「1人でか！？」

「いや、ライって少年と一緒に来たらしい」

ライって……確かルーシエルが友達になったって言ってた子どもだ。余りにも嬉しそうに語るから記憶に残ってた。

まさか2人だけでエデンに？ルーシエルがいなくなった期間は2日間だ。馬で行ったとしか考えられないが、馬でも日にちが合わない。往復で最低でも4日以上はかかる。

「ほ、本当なのか？だって2日間でエデンを往復できる訳……」

「申し訳ありません。帰りは私の転移魔法でフライアンまで送らせていただきました」

「転移魔法っつーのは人や物を一瞬で他の場所に移す魔術の事だ」

オルヴァーの説明を聞いて納得がいった。でもなんでルーシエルはそんな危険な事を……それならどうして俺に相談してくれなかったんだ！？

勝手に出て行って皆に心配をかけて……おふざけが過ぎる！

ジェレミーがルーシエルを連れて部屋に入ってくる。ルーシエルはクレアを見て嬉しそうに、俺を見て気まずそうにした。なんだよ、その違いは。

「王子殿下、私のサポートが必要だとオルヴァーに伺いました」

「うん、お手伝いしてくれる？」

「貴方様が望むのなら影になりましょう」

待て待て待て、勝手に話を進めるな。

とりあえず怒ってる場合じゃない。俺はルーシエルの肩を掴んで自分の方に身体を向けさせた。

「どう言う事だルーシエル」

「クレアさんは転移魔法が上手いんだよ。クレアさんと一緒に行けばアルトランドでやりたい事が出来るんだ」

「なんでそこまで行きたがるんだよ……あそこに戻っても辛いことしか待ってない」

「やらなきゃいけないんだ」

「俺が代わりにやってやる」

「ダフネじゃ駄目。俺がやらなきゃいけないんだ」

なんでここまで意気地になってるんだ！？俺には何も教えてくれないし、でもクレアは多分知ってる。それがなぜか歯がゆい。

手に力がこもってしまい、ルーシエルが顔を歪めて慌てて緩めた。気まずさは変わらない。

「何しに行くんだよ……」

「ごめんね、言えない。でも悪い事じゃないよ」

「言えないって……俺を信用してないのか？ふざけてるのか!？」

「違うよ！でもダフネは多分許してくれないから……」

「それって悪い事じゃねえか！」

「違うっ！悪い事なんかじゃない！ダフネを助けられるんだ！」

「だったら教えろよ！」

「嫌！許してくれないもん！」

頑なに言うのを拒むルーシエル。なんだよ許してくれないって……俺に言えない事？危険な事でもしに行くつもりなんじゃないか！ルーシエルがアルトラントの最後の希望なのに、なんで勝手にそんな事するんだよ！なんで何も相談してくれない！？なんで、なんで！

「意味わかんねえ……ふざけんのもいい加減にしろよ！大体なんなんだよ、勝手にいなくなっただけでエデンにまで行って、今度は勝手にアルトラントに行きたい？馬鹿なこと言うな！お前、自分が狙われているの分かってんのか？クラウシエルが命張って逃がしてくれたのに、ふざけた事ばかりするな！」

思わず大声で怒鳴りつけられ、ルーシエルの大きな目が次第に潤みだし、沢山の水滴が目から溢れだした。

これくらい言い聞かせなきゃ、きつと分からない。

でもそんな俺をいさめたのは、今まで黙って様子を見ていたクレアだった。

「落ち付いてください。王子は貴方を救いただけなのです」

「なんだよ、あんたは知ってるんだろ？言えよ」

「王子が言わない事を私は言えません。ですがもう少し彼を信用して下さい。過保護は王子の自我を潰します」

「過保護って……ルーシエルはまだ子どもだぞ！勝手な行動が許される訳がないだろう！？」

「少なくとも王子は貴方が思っているよりも遥かに今の現状に不安を感じ、ご自身の無力を嘆いています」

「え……？」

「貴方と家族を救う為なら、そう言ってエデンにやってきました。私達は王子の意図を汲み、王子の望む現実を与える助力をしましう」

クレアは頭を下げてルーシエルの手を引いて出て行った。多分与えられた部屋に一旦連れて行くんだろうな。

静かになった部屋は居心地が悪い。  
ジェレミーも目を丸くしており、オルヴァーは少し顔を青ざめさせていた。

「王子……緑を継承する気か？」

その言葉に背筋が寒くなるのを感じた。まさかルーシエルは国宝石を継承したいって言うのか？でもそれなら話が結びつく。

力が欲しい、アルトラントに行きたい、エデンに行っていた……暁の大地はアルトラントにあるって聞いたし、エデンで継承方法を聞きに行ったのかもしれない。

そして転移魔法を使えるクレアを連れて来て欲しいってオルヴァーに頼んで……そんな馬鹿な。

「止めさせなきゃ……」

「無駄だろ。ありや絶対やるぜ」

「人ごとだと思って……ふざけんじゃねえよ！」

オルヴァーの胸倉を掴んだ俺をジェレミーが止めたけど、気が済まない。こいつは何で簡単に言ってるのける！？

国宝石の恐ろしさを女王を見て分かってる癖に、ルーシエルが継承しようとしてるのを止めないのかよ！

「ダフネ、お前さ……他力本願もいい加減にしとけよ」

「何を……」

「俺達フアライアンにバルディナと戦争してほしい。そう言って国にやってきたろ？こっちゃんとはメリットねえんだよ。お前1人の戦力なんか別に役にも立たねえ。少しぐらいは役に立てよ」

「オルヴァーてめえ……」

「女王を元に戻す為に俺は協力してやってるんだ。緑は絶対に必要だろ」

こいつは……そう思ってるのか？

力が抜けた俺の横をオルヴァーが通り過ぎて行く。ジェレミーに一瞬だけ視線を寄こして。

オルヴァーもいなくなった空間でジェレミーがなぜか頭を下げてきた。

「ダフネ済まない。オルヴァーは本当はあんな事を言う奴じゃない。慈悲深い奴なんだ」

ああ、そうなんだろうな。フライアンに向かう船の中で初めて出会った時は国宝石なんて危ない物継承したらいけないって言ったもんな。

でも今はこの通りだ。オルヴァーは完全に狂ってしまった。全ては女王の為に。

女王以外は全て捨て駒としか考えてない。狂ってしまったんだ。

「ジェレミー、あんたはどう思う？」

「……五分五分だ。緑は欲しい、だが彼が受け継ぐのには反対だ」

「じゃあ俺が受け継げばっ！」

「無理だろうな。国宝石は持ち主を選ぶ。クレアが王子の味方に付いた以上、王子は国宝石を受け継げる器だったんだろう」

「そんな……」

止めなきゃいけない。でも俺達の立場は悪くなって。どうすればいいんだよ……





## 44 アルトラントへの旅立ち

「王子様がそんな事を？」

目を丸くしたライナに力なく頷くしかできない。ルーシエルに大声で怒鳴ってしまったから、ルーシエルは与えられたクレアの部屋から出てきてくれない。

でも泣いていたって聞いて罪悪感と焦燥感が同時に襲いかかってきた。

### 44 アルトラントへの旅立ち

「王子様も幼いなりに罪悪感と責任感に駆られてたのかもね」

「でもよ、国宝石の恐ろしさは分かっているはずだ。寿命が削られるんだぞ？そんなのを継承するなんて……」

“馬鹿げてる”——そう言いかけて口をつぐんだ。さすがにそれは言いすぎだと思ったから。

確かに緑の国宝石があったら怪我をした奴を治す事が出来る。それだけで兵たちの士気はすぐ上がると思う。でもその見返りが……でもあそこまで俺に言い返すぐらいだ。ルーシエルの決意は本物なんだろうけど……

クラウシエルや国王に申し訳が立たない。守ってくれて託されたのに、国宝石を継承させて戦争に駆り出させる結末になったとしたら。

部屋がノックされてライナが扉を開ければ、奥にはジェレミーが立っていた。

「ダフネはいるか？」

「ああ、いるけど」

ライナに通されたジェレミーはハッキリと明確に告げた。

「ダフネ、俺はルーシエル王子をアルトラントに連れて行くことを決めた。アルトラントに着いた後は別行動で王子はクレアに任せる事にする。護衛に君も付いて行ってくれたら嬉しい」

「俺に？」

勝手に決めたのかよ……

そう言いたかったけど、ルーシエルが望んだ事だ。ジェレミーも苦肉の選択だったのかもしれないが、今の状態でルーシエルと顔を合わせるのは気まずい。

そんな俺を見かねてライナが立ち上がる。

「あたしも護衛に連れて行ってくれないか？」

「それは構わないが、いいのか？君はオーシャンの大使でもある。怪我をする様な事があったら」

「大丈夫さ、生傷は慣れてる。ルーシエルがどの道を選ぶか興味があるんだよ」

「そうか……分かった、許可しよう」

俺に一瞬視線を寄こしたけど、ジェレミーは考えておいてくれ。それだけ告げて部屋を出て行った。

ライナはそれでいいのかよ。あっさり承諾しちゃってさ。

「ライナ」

「歴史って言うのはさ、残酷なもんだよ。600年前の大戦だって

英雄たちはゲーティアなんか使いたくなかったかもしれない。でも選択を迫られた。ルーシエルだってそうさ、選択を迫られたんだ。祖国を救うために。ルーシエルはこの未来を選び、国宝石はルーシエルを選んだ。もう誰にも変えられない」

そんなおとぎ話の様な話、信じたくない。

なんで宝石が主を選ぶんだ、そんなの可笑しいじゃないか。そう思っても、今の現実を否定できる訳ではない。

ルーシエルは国宝石を受け継ぐ事を決意した。家族を救う為に。でも緑を受け継いだところで、今更国王と後の処刑を止める事は出来ない。あくまでサポート能力の魔法である緑にバルディナが持っている黒の国宝石に対抗できる訳がない。

「緑を受け継いだとして、国王と后を助けられると思うか？」

「……無理だろうね。王子様はもう国王と后は諦めてるのかもしれない。王子様が今最も助きたい相手は兄弟であるクラウシエル王子とミッシェル王女だろうね」

クラウシエルとミッシェルか。確かにもう助けられる可能性があるのは2人しかない。でもだからって……どうして国宝石をつ！未だに頭の整理が出来てない中、再び扉がノックされた。

ライナが扉を開けると、そこにはルーシエルとクレアが立っていた。

「王子様……」

「ダフネいる？」

「ああ」

ルーシエルは俺の前まで歩いてきた。その目は少し腫れている。あの時、泣かせてしまったもんな。

申し訳なさに顔を上げる事が出来ず、俯いた俺の前にルーシエルは

立ち止まった。

「ダフネ、お話聞いてくれる？」

「……」

「俺ね、緑の国宝石を継承しようと思うんだ。ダフネが俺を心配してくれるのはすごく嬉しい。でももう俺決めたんだ」

「寿命、縮まるんだぞ」

「うん、でも今のままだとバルディナにいつか俺殺されちゃう気がする。そんな事になるくらいなら、抵抗したい」

どうやら自分が考えている以上に、ルーシエルは今の現状を理解している様だ。

ルーシエルはこの間10歳の誕生日を迎えた。エデンに勝手に行ってたから祝うどころじゃなかったけど。

まだ幼いから難しい事は何も分からないと思ってた。でも子どもは大人以上に難しい単語が分からない分、空気に敏感だ。

今の状況が良くないって事くらい身にしみて感じているのかもしれない。

「ルーシエル……」

「俺、取り戻したい。この間までの日常を」

その目には光が宿っていて、今更ながらルーシエルの決意が本物だと知る。それを俺は頭ごなしに否定してしまったんだ。

もう俺が止める道理はない、俺はルーシエルを守って生きて行くって誓いを立てた。最後までお前の傍にいたら……

「ルーシエル、緑の国宝石を継承する時、俺も護衛で付いて行くよ」  
「ダフネ？」

「もう御世話係なんかじゃないな。お前は英雄になるんだ、俺はた

だの護衛になる」

国宝石を受け継げばルーシエルは実質英雄の仲間入りだ。かつて世界大戦を勝利に導いた5人の英雄の1人になる。俺がいつまでも側に入れる訳じゃない。

「ううんダフネ、俺はルーシエルだよ。俺、1人じゃ何もできないから、ダフネと一緒にいてくれなきゃ何もできないよ」

泣きそうなルーシエルが飛びついてくる。

この小さな体はこれから更に過酷な運命を耐えなきゃいけないんだろうな。でもその苦しみの一部でも俺が負担してあげたら……潰れる前に支えてあげられたら……そう思った。

---

「荷物の準備は整ったな」

女王の家でルーシエルの身支度をすませるって言っても、フアライアンに逃げる時に持ってた小さなカバンだけなんだけど。

緊張した面持ちでいるルーシエルの頭を撫でて、下に降りたらイヴさんとメリッサが待っていた。

「気をつけてね。無理だけはしないでね」

「うん」

2人に見送られて家を出る。そして向かった先は海軍が使う船着き場。そこには既にジェレミーと第1騎士団の副団長。そしてライナとクレアが待っていた。

エデュサとハーヴェイが船の最終確認を済ませて俺達の所に歩いて来る。

「準備はできたわ。乗り込めるわよ」

「ああ、行ってくる」

拳闘士を突き出して挨拶する。これはフライアンの騎士団特有の挨拶なのか？

ジェレミーが乗船したのを確認して俺とルーシエル、ライナとクレアが乗船する。そして船と陸を繋ぐ板が外された。

船長が出港の汽笛を鳴らし、船が動き出す。

陸からハーヴェイとエデュサ、数人の騎士団達が出港を見守っていた。少し離れた所にランドルフ、グレイン、オルヴァーの3人も俺達を見送っていた。

遂に向かうんだ。

全ての原因となった国に。俺達の故郷に。

アルトランドに……

## 45 緑の継承

アルトラントへ向かう船の中は活気がない。それは自分も同じだった。

船で移動中の間は正直生きた心地がしなかった。何かをやっていたければ緊張でどうにかなってしまいそうだったから。

俺は、国王と後の処刑をこの目で見る事になるのかもしれない、

### 45 緑の継承

船での移動は1週間近くかかり、俺達がアルトラントのシースクエアに着いた先にはバルディナの騎士団が待機していた。アルトラントが陥落した際、ルーシエルとここから国外のオーシャンに逃亡した。その場所にこんな形で戻ってくるなんて……次に戻るときは国を開放するときだって誓ってたのに。

シースクエアは完全にバルディナ騎士団に下り、その騎士団達が俺達を御出迎えになったって言う訳だ。

その真ん中には剣を腰に携えた女性が立っている。この女を知ってる……バルディナ皇帝イマニユエル・ネイサンの第一皇女のマライア・ネイサンだ。

こんな大物がわざわざシースクエアまで直々にお出迎えってことは、バルディナの中でもフライアンは特別な相手ってことだろう。

それも仕方ない。今やバルディナ対フライアンが600年前同様の世界大戦を起こすだろうっていう話を知らない人間は、この世界にはいないだろう。

甲板からこそつと見て、奥の部屋に引っ込む。このまま出て行けば俺とルーシエルは間違いなく捕まる。

「ダフネ、俺はここで降りる。処刑の日程は君に話した通り、今から1週間後だ。処刑から1週間後に船はフアライアンに戻る。ここから先はクレアの転移魔法でシースクエアから脱出してくれ」

ジェレミーはそう告げて団服をきっちりと着こなし、剣を腰に携え、数人の護衛の騎士たちと共に船を下りて行った。

残された俺達はクレアの近くに向かい、転移魔法で送ってくれるのを待つ。

クレアは杖を持って、俺達に告げた。

「私の魔法は未熟ゆえ5名を超える人数を一度に遠くに送ることはできません。また連続使用もできません。その辺をご了承ください」

「どのくらいまで使える？」

「距離にもよりますが平均3回程度です。それ以上は数時間の回復が必要となります」

クレアはそう言って呪文を唱え出した。

ルーシエルが俺の手を握り、ライナも神妙そうな顔つきで事態を静観している。周りが光に包まれてフワリと浮き上がる間隔を感じた。それに驚いた時、何かが眩しく光り、目を瞑った。

次に目を開けた時はシースクエアが遠くにあり、周りのはのかな平原だった。すごいな、これがエデンの転移魔法って奴なのか。これがあったら奇襲とかメチャクチャ便利だろうな。

クレアは頭を下げ杖を持ち直す。

「シースクエアから北西ってどこか。暁の大地ってのはどこにあるか分かるのかい？」

「はい、アルトラントの首都から南東。この道を真っ直ぐ行けば木々が生い茂る森に辿り着き、その中に草木の生えない乾燥地帯に辿



り着きます」

そこが暁の大地。そこでルーシエルは継承できるんだな……

ライナが腰からダガーを抜き、俺も背中に抱えていた剣に手をかける。この道は人の手入れがなっていない草原だ。動物たちに遭遇する可能性が高い。大人しい奴ならいいけど、人を襲う動物もいるからな。

俺とライナで何とかしなきゃいけない。それにしても見渡す限り平原だけど、本当に辿り着くんだろうか？

文句を言っても仕方ないので、俺達はひたすら歩くしかなかった。

転移魔法はある程度、移動先の場所をイメージしなければならならしく、アルトラントの地理を知らないクレアは暁の大地がどんな場所か分からずイメージができないんだそうだ。

だからここから先は完全な徒歩。馬でもあればいいんだけどな。人のいない草原を4人だけで歩く。俺とライナはともかく、ルーシエルとクレアは体力がなさそうだけど大丈夫なのか？

「そうだドリン、森を探してきてくれ。北西の方角だよ」

ライナがドリンを空に放ち、情報を歩きながら待つ。

ルーシエルは時々俺に話しかけてくるけど、やっぱり緊張しているからなのか、黙っている時間の方が多い。それもそうだな……  
それから4時間近く、俺達は真っ直ぐ平原を歩き続けた。

「一丁上がり！」

「よっと！」

ライナが獣にナイフを投げ、俺がとどめを決める。

全く地味に凶暴な動物が多いよな。これだから手入れされていない場所を歩くのは骨が折れるんだよな。

クタクタになったルーシエルのお陰で歩くスピードは格段に遅くなっている。でも今の状態じゃ休憩する場所も見つからないしなあ……その時、ドリンが戻ってきてライナの肩にとまる。何か見つけたんだろうか？

「ライナ、コノ先、森アル！」

「そうか！でかしたぞドリン！」

ライナに褒められてドリンは少し得意気だ。でも森があるって事は今歩いてる方角は間違っていないんだろうな。まだ視界では確認できないから、今日中には辿り着かないだろう。とりあえず適当な場所で野宿するしかない。

日が傾くまで歩き続け、巨大な岩がいくつも転がっている場所を発見し、そこで夜を明かす事になった。ルーシエルはクレアに任せ、俺とライナは食料を調達しに平原に向かう。とは言っても獣を狩るだけだけどな。

狩ってきた獣の肉をさばいて火を起こす。火があれば動物は怖がって近寄ってこない。

見張りは俺とライナでこなす事になり、ルーシエルとクレアが寝てしまった後、火の番をしながら周囲を警戒する。

「さて、あたしも寝るかね。3時間後に起こしてくれ。ドリン、お前も寝な」

ライナが頭を撫でればドリンは目を細め横にポスンと座りこんで目を瞑った。本当に人間の言葉が分かるんだな、賢い鳥だ。

皆が寝静まった中では火のパチパチと言う音以外は何も聞こえない。辺りは真っ暗で、自分たち以外の動く物体は見えない。

番をしながらぼんやりと考えた。シースクエア……船の間から一瞬だけ見えたけど、街の人間の気持はなかった。疲れた様な顔がこけた奴も大勢いたし、子供たちを1人として見つけることができなかった。奴隷政策のせいで子どもを取られた奴らだっただけにはいるはずだ。貿易の規制だっただけで、十分に飯は食えてるのだろうか。

シースクエアはまだ貿易の最大都市だけマシだ。ビアナからの圧力のおかげで、こんな状況でもまだ他の村よりかは規制は緩い。ここ以外の村はもっと酷いんだ。俺を助けてくれたせいで、故郷サラデイスは一番奴隷政策が酷くなりそう。そう思うと泣きそうになった。

頼らなければ良かった、そう感じた。

皆を助け出せるのはいつになるんだろう。城の情報は全く手に入らない。セラ達が生きているのかすら俺は知らない、何も知らない。幼いルーシエルに緑を継承させて、クラウシエルとミッシェルは捕えられて、俺は一体何をしてるんだろう、何の役に立ってるんだろう。せめて俺が緑を継承出来たら……

そうしたらルーシエルを安全な場所に避難させとけられるのに。緑を継承してしまったらルーシエルは戦争に駆り出される。あんなに幼いのに人殺しの世界に強制的に行かされるんだ。

「不安ですか？」

不意に声が聞こえ、顔を上げたらクレアが起き上がってこっちを見ていた。

寝てなかったのか？それとも今起きたのか？

クレアは音を立てずに立ち上がり、俺の隣に腰を下ろした。その表情は無表情で読みづらい。なんだかクレアはセラに似ている。

「不安、だな。国宝石なんて継承していい事なんて1つも無い。なんであんた達はルーシエルを主として認めた」

「私が認めたものではありません。国宝石が認めたのです。彼の意志を国宝石が見定めた」

「寿命が縮まるってどのくらいなんだ？」

「使い様によってです。緑に依存し、力を使いすぎた場合は最終的に20も行かずに命を落とすでしょう。600年前の戦争の英雄で緑を継承したリジアは21で継承し、28で他界しています」

「そんな……」

「だから貴方が王子を守ってください。王子に緑を多用させない様に。王子を狙う全てを貴方が断ち切るのです」

クレアは強い口調で告げた。俺がルーシエルに緑を使いすぎない様にしなきゃいけないんだ。

それは理解できた。

でもどうしてクレアはここまでルーシエルに協力するんだろうか。

エデンはファイアンには戦争の際しか協力しないはずだ。

ルーシエルの我侭みたいな事に協力するなんて……

「あんたはルーシエルの事をどう思ってる？」

「……次の英雄、だと思っています。ダレンを世界に再び連れ出せるのは彼しかいません」

「ダレンをルーシエルが？」

「アルトランドの英雄リジアはダレンの恋人。アルトランド陥落にダレンは心を痛めているでしょう。しかし世界に絶望したダレンの心は今は凍りついている。彼の心を再び人間の物にする為に王子が必要です」

「ルーシエルはリジアの子孫なのか？」

「直属ではないでしょうが、そうなのでしょうね。ダレンは未だに目をそむけている。神様の椅子を手に入れた彼は、その椅子に縋る

訳でもなく、ただそこから世界を見つめているだけ」

ずっと思ってたけど、神様の椅子って何なんだ？エデンの村長もダレンは神様の椅子から世界を見ていと言っていた。クレアも同じ事を言っている。

「なあ、神様の椅子って何なんだ？」

「……ダレンは英雄、言ってみれば神の様な存在だった。私利私欲なく皆の平和の為だけに戦い続け、その結果手に入れた物が神様の椅子だった。彼の言う事を全ての者が聞く……ですが英雄は次第に時が過ぎ、神のように名だけを残して忘れ去られる」

神様の椅子って言うのは、英雄の立場の事を皮肉めかして言っているだけにすぎなかったようだ。神様の椅子に座ったダレンは神のように崇められた。いるようでいない存在のように……そう言いたかったんだな……

「それとダフネ様、ルーシエル王子の友人にはお気を付け下さい」

急なクレアの言葉に目を見開く。ルーシエルの友人ってライって奴の事か？

ルーシエルが自慢げに話してた。何でも知ってる頭のいい友達だつて。早くメリッサの双子の弟のヨルンとネルンに紹介したいって意気込んでたから。

確かファライアンのバーカー地方出身の子だって言ってたよな。

「ライって奴の事か？バーカー地方出身の子って聞いたけど」

「……あの少年の出身はバーカー地方ではないでしょうね。偽りを言っている可能性が高いです」

「なんで……」

「彼の行動や言動から推測しているだけなので、確実な情報とは言えませんが」

マジかよ……でも城の中に来てたんだ。それなりに身分の高い奴だろう。

だとしても嘘をつくなんて……

「それに彼からは少し不思議な感じがしました」

「不思議？」

「私達に敢えて偽名を名乗ったり、幼いながら馬の扱いも心得ている……ファライアンの首都からエデンまでたった2人で来たと言うのにも驚きましたが、私の転移魔法についての知識も持っていました。ライと言う名は偽名の可能性があります」

「偽名……何で使う必要があるんだ」

「分かりません。ですが本人は恐らくいくつかの状況に合わせて偽名を使っている節があります。本名を晒せない立場の人間なのかもしれません」

本名を晒せないって言われたら重罪人か王族、貴族ぐらいしかいない。

でも身分を隠すにしてもルーシエルと同年の幼い子供がする事なのか？クレアが嘘を言っている感じは無い。だとしたらライって奴は何者なんだ？

もしかしてファライアンの人間じゃない可能性だってあるつつたら、バルディナか？パルチナなのか？スパイ活動でもやってるのか？

クレアはそれだけ告げて、頭を下げて再び自分が寝るスペースに戻って行った。考える事が出来てしまったお陰で眠気が覚めてしまった。

いいんだか悪いんだかだな……

ライナと見張りを交代しながら、その日の夜を明かし、日が登り始めた時間にルーシエルとクレアを起こして4人で再び歩き始める。眠くて歩こうとしないルーシエルを抱き上げて黙々と歩く。一向に景色は変わらなかったが、そんな事を3日近く繰り返していると、目の前に森が見えてきた。あれがそうなのかもしれない。森の前に辿り着いたけど、どうやって暁の大地に向かえばいいんだ？その時、ルーシエルが手に持っていた国宝石が輝きだした。国宝石の光はまっすぐ森の中を指している。

「光に添えて事なのかい？怪しいが行ってみるしかないね」  
「そう、だな」

ルーシエルが息を飲んだのを感じる。俺達は頷き合って森の中に足を踏み入れた。

深い森の中は小動物や草食動物たちの隠れ家になっている。鳥や小さな動物たちが突然の侵入者に慌てて逃げて行く。

それに興奮するルーシエルに苦笑いをして真っ直ぐ進んで行く事5時間。目の前が少しずつ開けてきた。

その先には木が全く生い茂らない乾燥地帯があった。

「ここが……暁の大地」

地面は少し赤みがかった茶色をしており、乾燥している為かパラパラしている。

その中央に神殿の様な物が建っている。

入ろうとした俺達にクレアが立ちふさがった。

「どうしたんだ？」

「警告しておきます。この先には緑の祭壇があります。しかし簡単には継承出来ないはずです、中がどうなっているか分かりません。ご注意ください」

国宝石を守る獣でもいるってのか？まあありそうな話だけだな。

それに合意して神殿の中に入る。中は広い空洞の部屋で、奥に祭壇が置かれていた。祭壇には読めない文字が刻まれているが、ルーシエルがいるからそこは問題ない。

「国宝石を捧げ誓え、我が命を捧げて継承者とならん」

ルーシエルが俺達に振り返る。この祭壇に国宝石を埋め込んで誓いの言葉を言えば継承出来るんだ。

頷いたのを見て、ルーシエルが宝石を祭壇の中央のくぼみにはめる。国宝石が緑色に輝き、神殿がゴゴゴと音を立てる。

慌てて後ろを振り返ったけど扉は閉められていない。万が一の時は逃げられそうだ。

ルーシエルが俺達の所に下がって、息を飲む。そして声を出した。

「我が命を捧げて継承者とならん」

その瞬間、祭壇から光が溢れかえった。その光は俺達を飲みこみ、眩しさに目も開けられない。

とりあえずルーシエルを手元に引き寄せ、光が止むのを待つ。

“なあ、本当に継承するつもりなのか？”

声が聞こえて光が小さくなっていく。恐る恐る目を開けて前を見た。透明な姿になったルーシエルがいた。

驚いて手元を見たら、ちゃんと俺の腕の中にルーシエルはいる。ル



ーシエル自身も自分そっくりの物体に驚いているようだった。

「クレア、これはどう言う事だい？」

「国宝石を守る意思、とでも言っておきましょうか。どうやら彼に認められなければ無理の様ですね」

“何百年ぶりかな。俺の所に来たって事はゲーティアを探そうとする奴がいるってことだ”

見た目はルーシエルだけど話し方は少しだけガサツで俺に近い感じがする。ルーシエルの姿を借りた何かなんだろうな。

でもこんな魔法みたいな事……これもエデンの仕業なんだろうか。ルーシエルは国宝石を握りしめて頷く。その姿を見てもう1人のルーシエルは目を細めた。

“お前みたいなガキが俺を継承しようなんておこがましいんだよ。ダレンは許可をしたのか？”

「俺が自分で決めたんだ。大切な人を守る為に俺は戦いたい」

“そう言う綺麗事をどいつも最初は言うんだよ。その意志が黒く染まってくから戦争は無くならない。お前はちゃんとした使い道を知ってんだろうな”

「できるよ。家族と大切な人達を救えたら……」

“……自分の大切な人を救う為に、他の奴らの死を望むって訳か”

ルーシエルが固まる。なんて事言うんだよこいつは！

国宝石の意志？みたいな奴はケタケタ笑ってるけど、こっちは笑いごとなんかじゃないんだ！ふざけるな！

「でもバルディナはアルトラントを侵略したんだ！俺、アルトラントの皆を救わなきゃ！」

“お前が余計な正義感出して戦争起こす方が死人が出る。大人しく

しときゃ、奴隷になったとしても死人は出やしねえわな”

「それは……」

黙ってしまったルーシエル。確かに言われた通りかもしれない。

でも俺達はお前みたいは何百年も生きている訳じゃない。そんな理屈で納得なんかできない。

「でも俺……それでも行かなきゃ」

“なぜだ？大人しくしておくのが最良の道だろう”

「約束したんだ。クラウドシエルと……絶対に助けるって。クラウドシエルは命を賭けて俺を守ってくれた。今度は俺がクラウドシエルとミッシェルを守らなきゃ！」

“……ふん、綺麗事だな。まあいい、好きにしな。遂に俺で最後か……”

最後？他にもこんな奴がいるって事なのか？

でもクレアに聞いても、祭壇に他の奴がいる気配はないって言うてる。最後って何なんだ？

“他の国宝石の祭壇にも俺の様な宝石の意志が存在する。俺達は継承者が現れる間は消滅して、再び魔法が祭壇に捧げられた際に復活する。残りの祭壇の意志は消えた。最後が俺だったって事だ”

「じゃあ他の国宝石はもう継承されてるの？」

“ああ、赤は600年前、黒は30年前、青は8年前、紫は5年前にな。遂にゲーティアが復活する準備が整った”

ゲーティアが現れる。ばるでいあが血眼になって探している禁断の魔術書。

600年前の世界大戦を勝利に導いた魔術書が……

「どう言う事だ？」

“継承者達が現れた事でゲーティアは封印を解かれた。そしてそれを手に入れた時にお前達継承者にかけられた魔法の一部を吸収し手に入れた者に渡す。そいつが次の英雄だ”

「ば、場所は！？どうやって探せる！？」

“そんなの言うかよばーか。じゃあな”

国宝石の意志は透けていなくなり、一筋の光がルーシエルの心臓を貫く様に中に入って行った。

怪我は無い様だけど……でもこれでルーシエルは緑の継承者になった。俺が支えなければルーシエルは寿命をすり減らす。

俺がルーシエルの盾にならなければ。

「さて、今から歩いたら余裕でシースクエアに帰れるね。どうする？」

「どうするって帰るに決まってるんだろ」

「俺、アレキサンドリアに行きたい」

ルーシエルの言葉に全員が固まった。意味を分かってるのか？

「王子様、それは危険だよ。言ってみりゃ敵の巢窟だ。バルディナ皇帝イマニユエル・ネイサンやジュダス・ネイサン、マライア・ネイサンもアレキサンドリアに駐屯する。見つかったら笑い話にならない」

「それでも行きたいんだ」

ルーシエルは強く言うけど賛成はできない。でもテコでもここから動かなさそうだ。

その時、黙っていたクレアが口を開いた。

「私はお供しましょう」

「クレア」

「私の転移魔法があれば、いざという時に役に立ちます。私の力をお使いください」

確かにクレアがいたら逃げ切れるかもしれないけど……転移魔法の連続使用は駄目って言ってたし距離の問題もあるって……無理をさせる事になるかもしれない。

でももしかしたら、僅かな可能性だけどミッシェルとクラウドシエルを助けられるかもしれない。クレアさえいれば……

セラ達の様子も確認したい。生きてるのかどうかを。

もう意見を言う奴はいない。

あと3日後には国王と後の処刑のはずだ。それまでに間に合うかは分からないけど行くしかない。

アレキサンドリア付近には行った事があるらしく、近くの村なら転移魔法を使えるとクレアは言った。連続使用は控えてほしいけど、仕方がない。

ミッシェルとクラウドシエルはライナの話しでは軟禁状態。こんな言い方悪いけど、国王と後の処刑の時は外に出してもらえるはずだ。その時に……駄目もとだとは分かってる。少しの隙があれば……

次に向かう場所はアルトランド王都アレキサンドリア。

何が待っているようにも、逃げる事なんてできない。

## 46 全てを乗り越える時

「クラウシエル王子、ミッシェル王女、お時間です」

部屋を訪ねてきたセラの表所は暗い。泣きはらしたのか目は充血したままだ。

ミッシェルはショックのあまりベッドから今日は起き上がろうとしない。でも布団を剥げば、泣きくれているミッシェルがいた。

今から2時間後、僕達の父上は火あぶりで、母上はギロチンで処刑される。

## 46 全てを乗り越える時

「ミッシェル行くぞ。他国の人間も視察に来る、僕たちが行かないのは不味い」

「あんた一体どっちの味方よ！？パパとママが殺されるのに、あんたが助けたのはダフネの家族と村だけ！パパとママがどうなってもいいの！？」

「父上と母上は僕が何を言っても助けられない。だがダフネの家族は一般人だ、虐殺と言う単語を用いれば処刑の回避は可能だった。それならば助けるのが王族の仕事だ」

「分かる訳ないわよ！あんたはパパとママがどうなってもいいんでしょ！？」

そんな事ある訳がない。悔しいのは僕だって同じだ、泣きたいのは僕だって同じだ。じゃあお前は僕が泣けばいいと思ってるのか？僕が泣いて、もうどうしようもない。そう悲観して毎日を生きて行け

ば満足なのか？

そんな事をしていても意味なんかない、先に進まなければいけないんだ。ミッシェルは立ち止まってもいい、だが僕は立ち止まってはいけないんだ。父上と母上が処刑された後は実質アルトランドの最高権力者は僕になる。ミッシェルの前を歩き続けなければ、お前は道しるべがないだろう。

着替えを済ませて部屋を出ようとした僕をセラが不安そうな表情で見つめている。

「心配はいらない。ミッシェルを頼む、僕は先に行っている」

「大広場に出れば、エリザとエルザが待機しています。案内役は彼らに……」

「分かった」

今なら逃げれるのかもしれない。いや、そんな事を考えた所でどうしようもない。この国に逃げ道なんてないのだから。

心臓がうるさいぐらいに跳ね上がり、恐怖で足がすくむ。だが処刑は公開処刑、国民も見に来る。そんな中泣き崩れる場面を見せる訳にはいかない、僕が折れたら国民の心が折れてしまうから。

広場は嚴重にバルディナの騎士たちがガードし、少し離れた場所には国民が殺到していた。全ての者が怒りに狂い、泣き叫び、膝を付く。なぜこんな事になってしまった……

「クラウシエル王子殿下、お迎えにあがりましたわ」

僕の前に2人の男女が歩いてきた。女の方が僕に跪き、形式上の挨拶をした後ろで男は深々と頭を下げた。こいつ達はバルディナ第3騎士団の副団長を務める双子の騎士だ。第3騎士団の団長は皇帝イマニユエル・ネイサンの第1皇女、マライア・ネイサン。

2回ほど御目にかかったが、高飛車で自信家な女だった。ん？僕の

身近にも同じような奴がいるな。

そんな事はいいだろう。2人に案内されて僕は自分の席に連れていかされる。場所は特等席、そうとしか言いようがない。真ん中の中央席だ。こんなときだけVIP待遇か。何も言わずに腰かけた僕にエリザが口にした。

「随分冷静でいらっしゃるのね。実の御両親の処刑だと言うのに。御立派ですわクラウシエル様」

「誰に口を聞いている。僕に軽々しく話しかけるな」

「それは申し訳ございませんでした。御気を悪くされたのならば謝りますわ」

全く反省はしてなさそうだがな。エリザは気を悪くした顔を1つもせずに相変わらず優雅な口調で頭を下げた。そしてエルザの方がミッシェルを見つけて迎えに行く。横目でミッシェルを見れば、ミッシェルは嫌がり泣き叫んでいた。

「ミッシェル様を慰めなくてよろしいんですの？兄君の責務ですよ」

「貴様の指図は受けない。貴様こそ、その無駄口をエルザに諫めてもらえ。揃いも揃って使えない木偶の棒どもが」

「これは手厳しい。失礼いたしました」

クスクス笑ったエリザが席をはずし、代わりにミッシェルを席に案内したエルザがやってきた。

ミッシェルは椅子に座ると膝を丸め顔をうずめてしまった。

「クラウシエル王子、ミッシェル王女、何か足りない物があれば申してください」

「足りないわよ、何もかも足りない。パパとママの処刑を取り止め

てよ！」

「申し訳ありませんが、それは出来ぬ相談です。ですが処刑を見たくないと言ふのなら、皇帝に私から進言してミッシェル様には退席出来るよう努めさせていただきます」

エリザは信用できないが、エルザの方はまだ話が分かる。

ミッシェルにこの場を見せるのは確かに酷だ。そうした方がいいのかもしれない。

「ミッシェル、エルザの言う通りだ。お前は席を外せ」

「外さないわよ！外したら最後の対話にパパとママに会えないじゃない！」

最後の対話。父上と母上が処刑される前に5分間だけ僕たちが対話を出来る時間が設けられている。ミッシェルは最後に父上と母上に会いたいのだ。

「最後の対話が終わった後に席を外すことも可能ですが……」

「うるさいっ！うるさいうるさい！あっち行け、この人だなし！！！」

「……出過ぎた真似をいたしました。では私はこれで退席いたします。クラウシエル王子」

「なんだ」

「私達に弱みは見せない方がいい。ウィリアム様やジュダス様、マライア様は年齢を理由に手加減などしません。心を強く持ち、どんな事であろうと折れないください。たとえ茨の道であろうとも……」

本心なのか僕の信用を得て何かを企んでいるのか分からない。だがバルディナの間を僕は信用しない。少なくとも今日この城にいる



奴らは。

徐々に人が用意されていた席に着き始める。そして城の使用人たちも決められた場所にやってきた。その中に勿論セラもいる。セラは心配そうに僕達に視線を寄こしたが、膝に顔を埋めているミッシェルは気付かない。僕は心配ないとだけ手で合図をして前を向いた。

時間は刻一刻と迫り、処刑を見る為に大広場の入り口は国民達と騎士が押しつ押されずの攻防を繰り返している。

そして他国の人間が処刑会場にやってきた。

ザイナスの統領グレービス・アーベントロートと息子であり右腕ライオネル。フライアン第1騎士団団長のジェレミー・ハウエルと副団長のネイハム。パルチナからは皇帝のアダム・ワイアットと王妃アナスタシヤ。ビアナからは当主イグレスシアと軍団長モルガン。エデン、ヴァシユタン、オーシヤン、マクラウド、東天、忍びの集落の者たちは来ない。

東天と忍びの集落にはまず書簡が行っている事の方が不明だ。エデンは書をつ返してきた。オーシヤンは数ヶ月前に侵略行為をしているんだ、来るはずもない。ヴァシユタンからは嚴重な抗議と非難声明が届いた。ならず者国家だと、これ以上好き勝手するとヴァシユタンも黙ってはいないと警告文まで付いてきた。

他の国もヴァシユタンほど素直に言えはいんだがな。さすがルーツが海賊なだけある。血の気の多い者が統治しているな。

グレービスとライオネルが僕達の前に来て膝を付く。

「クラウドシエル王子、ミッシェル王女、この度はお心痛みいる」

「ああ、わざわざ他人の処刑現場に来てくれて感謝するよグレービス」

「バルディナは我が盟友。だがバルディナの傘下にアルトラントが入ればアルトラントはもう安全です。王子、何も心配する事は御座いません。今日さえ耐えれば輝かしい未来が待っています」

こいつは何を言っている？アルトラントが奴隸政策を受けているのを知っているだろう。

今日を耐えれば……馬鹿な事を言うな！

握り拳を作って言い返そうとした時、ライオネルがグレービスを論じた。

「長、その発言はあまりにも場の空気にあっていない。王子殿下、長が失礼な事をした。本来ならば私達が処刑は止めに入らなければならなかったのですが……」

それだけ告げてライオネルとグレービスは去っていく。

グレービスは一体どうしたんだ？彼は確かバルディナに妻と娘を奪われているはず。バルディナを憎んでいたはずなのに、あの変わりようは何なんだ？ライオネルはかなり戸惑っているようだった。バルディナへの軍事協力もほぼグレービスの独断で決まった様な物だ。グレービス、何かあったのか？

「やあ小さな次期国王クラウシエル王子。お会いできて嬉しいよ」

バルディナが暴走するきっかけになったパルチナ国王。こいつがバルディナについたから、大きな後ろ盾を手にしたバルディナはオーシャンに侵略した。だが目の前の男に感じたのは違和感。

可笑しい……パルチナは王子2人の王位継承権争いが起こって数年経った今も決着がっていない。この外交の場に出てくると言う事は、こちらが王位継承権を得たと言う事になるが……まだ現国王のワイアットは死亡していないはずだ。なのにこいつは自らをワイアットと名乗っている。

彼はもう50を超えるはずなのに……

王子2人は不仲がささやかれた10年前から公に姿を出していない。

つまり彼が第1王子なのか第2王子なのかすら分からない。

「……パルチナに名を受け継ぐ風習はあったのか？ 貴方は第1、第2……どちらの王子だ？ 争いはどうなった」

「幼いのに賢いな王子殿下。だが他国の内政に口出しは不要、外交の場で私がワイアットと名乗っているんだ。私が国王で間違いは無いよ」

ワイアットの後ろにいる王妃アナスタシア、パルチナの王子の妻は基本公に出てこず、名前も空かされていないから、あの女がどちらの妻か分からない。だが妻が公に現れたんだ、こいつが国王という解釈は間違っていないんだろう。

睨みつけてしまっていた僕をワイアットは鼻で笑い、アナスタシアの肩を抱いて、自分達の席に戻って行った。

次に来たのはビアナの当主イグレスシアとモルガン。2人は事務的な事だけ述べて立ち去って行った。だが立ち去る際、イグレスシアから「決して心折れるな」そう助言された。

そして次に来たのは……

「クラウシエル王子、ミッシェル王女、お初にお目にかかります。フライアン第1騎士団団長ジェレミーと申します。こちらは副団長のネイハムです。以後お見知りおきを」

ダフネがいると言う話のフライアン……女王騎士ジェレミー。適当な返事しか返さない僕とミッシェルにジェレミーも事務事項だけをまず述べた。しかしその後、周囲に人がいないかを確認して跪いた。恐らく今から話す事を聞かれたくないのだろう。

「王子殿下、王女、我が国に第2王子ルーシエル様と世話係のダフネが来ています。そして今ルーシエル王子はアルトラントに来てい

ます」

「なんだと？」

ミッシェルも顔を上げてジェレミーを凝視している。

だがジェレミーはばれるような行動をするな。そう僕達に釘を刺したから、ミッシェルは慌てて再び俯いた。

「なぜルーシエルがアルトラントに？ここはもう敵国だぞ」

「ルーシエル王子は緑の国宝石を継承するおつもりです。その為アルトラントに参りました。お付きにはダフネ、それとエデン、オーシャンから1人ずつ付けています」

「訳が分からない」

「それも無理は御座いけません。ですが王子は貴方方を助けるために奔走しておいでです。まだ時間はかかります。ですが希望だけは捨てる事なきよう」

それだけを告げてジェレミーは立ち上がり僕達の元を離れて行った。そして次に向かったのは皇帝イマニユエル・ネイサンの元。その表情は僕達に向けていた物よりも遥かに険しい物だった。

再び泣き出したミッシェルの手を握りしめる。そして20分後、父上と母上が死刑台に現れた。国民の悲鳴や叫び声が押し寄せ、異様な空気に包まれる。

そしてマライア・ネイサンが僕達の元にやってきた。いまから5分間が最後の対話だ。

一段一段ミッシェルの手を引いて階段を下りて行く。この先には父上と母上が待っていて、再びこの階段を上った後、父上と母上は殺される。そう考えたら足が動かなくなりそうだった。

死刑台に辿り着いた矢先にミッシェルが僕の腕を振り解いて父上と母上に泣きながら飛び付いた。父上と母上は泣かない。最後まで僕達に笑顔で接しようとしてくれた。

「クラウドシエル、貴方もこっちへ」

後ろの騎士が最後の対話が始まった合図を鳴らす。1秒も無駄に出来ない、父上と母上に会えるのはこれで最後。考えれば家族全員が揃ったのはもう1年近く前になる。だが今日この時ルーシエルがない今、最後だと言うのに家族全員は揃わなかった。

僕達はまだ幸せなのか……最後にこの腕に抱きしめてもらえて。ルーシエルはこの暖かさを与えられないまま永遠に父上と母上に会えなくなるんだ。処刑に対しての現実味が湧き、泣きたくないのに涙が零れた。

そんな僕を父上が優しくあやした。

「お前達に辛い運命しか残せなかった私を許せとは言わん」

「すみません父上、貴方と母上は僕が救いたかったのに……」

「子どもにそう言ってもらえるだけで親としては嬉しい物なのだ。

最後のこの時、私は王としてではなく、親としてお前達に接したい」

力いっぱい抱きしめられて声を押し殺して泣いた。無情にも後ろからは後3分と言う声が聞こえる。

「いつか、いつか自由になる時まで忘れてはいけないわよ。花の美しさ、空の青さ、温かい街並み、今は全てが灰色に感じるかもしれないけれど、きっと大丈夫」

「ママ、ママ！」

「忘れません。その世界の中心に父上と母上がいた事も」

「だがクラウドシエル、私は心配だよ。お前はミッシェルとルーシエルを守る為ならば平気で自らを犠牲にする。私はそれが心配だ」

父上は何でもお見通しだ。でも僕には命を捨てても価値のある物

がある。それは父上と母上と同じ家族。特に僕よりも弱く立場の低いミッシェルとルーシエルを守る為なら、この命が無くなっても悔いる事はない。

僕は国王の立場が約束されている。でも僕がいる限り王位継承権を持たないミッシェルとルーシエルは貴族や他国の要人などの政略結婚として格好のターゲットなんだ。

「決めたんです。ミッシェルとルーシエルが産まれて……僕達を生んでくれた母上が亡くなった時に。母上を守れなかった分、僕がミッシェルとルーシエルを守ろうって。何があっても3人はずっと一緒だって」

「そうか……お前達はルーシエルも含めて私達の誇りだ。こんない子ども達は世界中どこを探してもいない」

「父上と母上も僕達の誇りでした。貴方達の子どもに生まれた事、後悔等していません」

時間が過ぎた。

僕達はマライアと他の騎士たちによって引き離されて元の場所に連れて行かれる。父上と母上に泣きながら手を伸ばすミッシェル。離れたくないと泣き叫んだ姿を見て国民達はバルディナの騎士たちに罵声を浴びせた。

元の席につかされて、バルディナの死刑を執り行うと言う合図が出される。そして父上と母上が犯した罪をでっちあげている。

薄汚い奴らめ……僕に力があればこんな奴ら殺せるのにつ！

ダフネに強くなれと稽古を受け出してから、今日も勿論1人でがむしゃらに特訓した。剣など無いからイメージトレーニングで素振りをして、毎日々を鍛える為に腕立てや腹筋、スクワット、室内だが走り込みもした。

だがそれでも奴らに僕は恐らく全く歯が立たない。まだもっともっと頑張らなければ皆は救えない。もっともっと頑張らなくては……

そして処刑開始の笛が鳴らされた。

## 47 さよなら私の家族

「間に合った、って奴なんだろうね。だが入り口前までしか広場には入れない。これじゃどうしようもないね」

久々に戻ってきた王都アレキサンドリアは自分が知っている姿ではなくなっていた。街は活気を失い、城の前にある広場には泣き叫ぶ市民が殺到している。

辿り着いた時には既に処刑が始まっていて、国王と后はそれぞれ処刑場所にくくりつけられていた。

よくこんなむごい事をつ！

人混みをかき分けて見える位置まで4人で移動する。そして前方の席にクラウシエルとミッシェル、端の席にセラ達の姿を見つけた。

## 47 さよなら私の家族

ルーシエルは何も言わずジッとその光景を眺めている。これは余りにも酷だ。あの体勢から考えるに、国王は火あぶり、后はギロチンなんだろう。

一瞬で首が飛び、痛みを感じないギロチンを后に持って行ったのはバルディナの最大の譲歩なのかもしれないが、火あぶりは残酷すぎる。

「ルー、やっぱりもう行こう。ここは辛い物しかない」

「行かないよ。だってパパとママを今見なきゃ、もう一生見れないから」



その言葉に気づいた。ルーシエルは処刑を止めたかったんじゃない、この残酷な光景でも父親と母親を一目でも見たかったのだ。

助けられないと分かった日から、最後に父親と母親を見たいと言う純粋な子ども心だったのだ。例えば数分後に愛している父親と母親が死体になろうとも。

「多分俺は処刑された後のパパとママを間近で見る事も無い。アルトラントを解放出来てもお墓を見るだけになる。だから俺はこれを見る、どんな形でもパパとママだから」

「ルー……」

その目に浮かんでいるのは涙。その涙をルーシエルは必死に拭った。ボロボロと目から溢れ出て視界が歪む、最後の父親と母親の姿をもっと鮮明に見たい。

目が腫れるんじゃないかってぐらい目をこするルーシエルに何もかける言葉を見つけれなかった。

ライナとクレアも息を飲んで展開を見守っている。

国王と后は俺達国民がいる広場の入り口の方をジッと見ている。最後まであの方たちは俺達の国王と后なんだ……こんな事になっても威厳を失わない。

そしてその国王と后を真っ直ぐ見ているのがクラウシエル。ミッシェルの手をしっかりと握って泣くのを堪えていた。

城の奴らは皆かなり大怪我をしてるみたいだ。所々に包帯を巻いているセラは両手で顔を覆って泣き、足にギプスをはめているジェイクリーナスはヤコブリーナスに縋りついて泣いていた。片腕がないコラッドも自分にしがみつくサヤカと自分の弟子のダンを抱きしめて泣いている。片目に包帯を巻いているミカエリスも、セラと同じく所々に包帯を巻いているイワコフも皆泣いている。その中にマリアとミリアはいない。2人はどうしたんだろうか？まさか死んで、とかはないよな……

「ねえダフネ、ライナお姉ちゃん、クレア、お願いがあるんだ」

「ルー？」

「あのね、処刑が始まった瞬間に一緒に逃げてほしいんだ。でね、転移魔法使ってくれると嬉しい」

たったそれだけだったけど、ルーシエルの望みを俺達は皆分かってしまった。

それを止める者は1人もいない。ジェレミー達はヒヤヒヤするかもしれないが、ここまで来たんだ。そうして帰るのも悪くない。

「私の転移魔法ではシースクエアまでの直接転送は不可能です。暁の大地の前の森まで飛び、そこからシースクエア前まで歩いて向かう事になります」

「大丈夫さね。なあダフネ」

「おう、体力だけはあるぜ」

「……ありがとう」

「思い残すこと無いようにするんだよルー。後で後悔したら一生ついて回る」

父親を殺されているライナは俺よりもルーシエルの気持ち痛いほど分かるだろう。そうだ、後悔したらいけない。もう派手にやっちゃまえよ。

親父やお袋、村の奴らが見えないから、本当にクラウシエルが親父とお袋は助けてくれたみたいだ。感謝してもしきれない。俺は一生あいつに頭が上がらないだろうな。

そして声高々にジュダスが処刑を宣言して騎士たちが持ち場に着かされる。それぞれがギロチンの刃を落とす紐の前に剣を構え、燃え盛る松明を手に持った。ジュダスが真っ直ぐ剣を振り下ろそうとした瞬間、ルーシエルが走り出し、小さな体を駆使し、壁になっていた

る騎士の間をくぐりぬけ広場に入った。

「パパ——！！ママ——！！」

ジュダスの剣が振り下ろされ、それに反応した騎士が紐を切る。

その瞬間に響いたルーシエルの声にジュダスだけじゃない、他の騎士たちも国王も后もクラウシエルもミツシエルもセラ達もジェレミー達も皆がルーシエルの方を向いた。

そして国王と后は目に涙をためてルーシエルにほほ笑みかけた。その瞬間後の首は飛び、国王は火に包まれた。

でもいきなり目の前に現れたルーシエルに皆茫然としてる。そんな中ジュダスが真っ先に声を荒げた。

「捕えよ、第2王子ルーシエルだ！」

押し寄せる国民の壁代わりになっていた騎士が剣を抜こうとしたのをライナと後ろから体当たりして倒れさせた。

俺が姿を出した事にクラウシエル達やセラ達が立ち上がった。ジェレミーも青い顔をしている。

「ルーシエル……ダフネッ！」

「逃げるぞルーシエル！今日俺達はこの痛みを忘れない、絶対になんか！」

「クラウシエルとミツシエルは俺が助ける。お前なんか捕まるもんか！」

「さあ退路を開きな！あたしは捕まるのはごめんだよ！」

ルーシエルを抱えて逃げた俺達を騎士が捕えようとしたが、ライナがそれをなぎ倒し、パニックになった国民のお陰で騎士たちも思うように動けない。

揉みくちやにされながら密集する広場を抜け、先に待っていたクレアの元に向かった。

「行きましょう！」

クレアが急いで呪文を唱え、俺達は一瞬でアルトラントから姿を消した。

城下町は未だにパニック状態で、その後の収集は大変なんだろうな……でもルーシエルがした事を責める気はない。最後に国王と后は笑った。最後の最後に愛する子ども達3人に会えた事が何より嬉しかった、そう思いたい。

「ク、クラウドシエル……何だったの？」

「分からない。でもあれは間違いなくルーシエルとダフネだった……父上と母上はきっと幸せだったはずだ。最後の最後にルーシエルの姿を見れたんだ」

「パパ……ママ……うああああああん！！！」

「捕まるんじゃないぞルーシエル、お前だけは……」

「い、今のはダフネ？なぜここに……ヤコブリーナス、これは一体……？」

「分からん。じゃが国王と后は幸せだったはずじゃ……最後に子どもたち全員に会えたんだからのお」

「う、ひつく……本当に国王と后死んじやったんだよな」

「ええ、でもヤコブリーナスの言う通り、幸せだったと思います。だって笑っていましたから、笑っていました、から……っ」

「ジェレミー様」

「平静を装え。クレアがいる。大丈夫だ」

「は、はい」

暁の大地の森の前に一瞬で移動したお陰で、さっきまでの喧騒が嘘の様に無くなっていった。

本当に転移魔法って言うのは便利だ。こんな事を楽々とやってのけてしまうんだから。でも流石に距離が遠すぎたのか、クレアが膝をついて倒れそうになったのを慌ててライナが支えた。

「ごめんなクレア、あんたには無理させたね」

「心配いりません。私自身、あの行動を非難する気はありません。あれで良いと思ったから手を貸したのです」

でもクレアは今立ってるのもやっとだ。ここからシースクエアまでは片道4日かかった。休まずに行動してて疲れが溜まってるから5日か6日は帰るのにかかるはずだ。

1週間後にシースクエアからファイアン行きの船が出る。それまでに戻ればいい。まだ時間はある。

とりあえずクレアを休ませる事にして、見つからない為に森の入り口付近に足を運んで休憩する事にした。

ルーシエルはずっと泣いている。俺にしがみついて声を押し殺して泣いている。

「ルーシエル……」

「最後にね、パパとママ笑ったの。でね、何かを言ってたんだけど……俺それが分からなかった」

そう言えば後はルーシエルに何かを言っていたな。でもあの喧騒の中じゃ声なんか聞こえないだろう。でもルーシエルは悔しいんだ。最後の言葉が分からなかった事が。

「有難う、愛してるわ。后はそう言ったんだよ」

「ライナ？」

「読唇術。情報屋なら誰もができる芸当だ」

お前芸達者すぎんだろ。まあ確かに情報を探る情報屋だ。人の口の動きから情報を探るのも出来たら情報集めがしやすくなるんだろうが。

ライナの言葉にルーシエルは嬉しそうに笑って再び泣いた。最後まで国王と后は俺達にとっては国王と后だった。でもルーシエル達にとっては優しい父親と母親だったんだ。

最後までその姿を国王と后は崩さなかった。最高の国王と后だった。

「俺、後悔してないよ。最後まで一瞬目があったから」

「うん」

「あのままパパとママが俺を見てくれないまま殺されてたら一生後悔した。だから……有難う、俺の我尽に付きあってくれて」

「あんなの我尽の内にもはいんねえよ」

再び俺にしがみついて泣くルーシエルにクレアは切なそうな、でもどこか安心した様な顔をした。

それに気づいたライナが心配そうにクレアの顔を覗き込んだ。

「どっか気分が悪いかい？」

「いいえ、少し……羨ましかったです。私は幼い頃に父親に捨てられました。いえ、私がそう思っているだけです」

「クレア？」

「私はファライアンの首都から北東に位置するルーン地方の地方貴族の出身でした。父親はファライアン第2騎士団の副団長を務めていました」

って事は過去の話しだし、ランドルフの親父の部下だったって事だよな。

「ですがクーデターの際、父親は姿を消しました。死体も見つからず、一部では逃げ出したと言われ名は没落し、私は家を失いました。その時に私を助けてくれたのがオルヴァー様でした」

殺されたのか、逃げ出したのか分からない。でもクレアの父親はクレアの前からいなくなった。そしてクレアは全てを失ってしまったんだ。

「戦争に行く際、何度も何度も行ってほしくないと泣いて迷惑をかけていました。母親は病で先が長くないと言われていましたからお父さんがいなければ、お母さんは誰が守ってくれるの？そう泣き喚いていました」

「クレア……」

「だから少しでも羨ましかった。不謹慎ですがルーシエル王子は誰よりも愛してくれる存在がいる事に。私は、捨てられた身ですから」

今でもやっぱり悲しい過去なんだろう。クレアは俺達に背を向けて泣きだした。

静かに、でも零れ落ちるように。線が細いクレアは今にも消えてしまいそうにか細く見えた。

それをライナが慰め、ルーシエルも再び泣き出して俺達は大忙しだ。自分は、まだまだ幸せなんだ。そう思った。家族は俺をちゃんと愛してくれて、クラウシエルが家族を助けてくれて……幸運に恵まれてるんだろうな。

数時間休憩して、何とかルーシエルも泣き止み、クレアも大丈夫と言ってくれたから再び歩き出す事にした。

「なあクレア、全部が終わったら父親捜しをしてみないかい？もしかしらどこかで生きてるかもしれない」

「ライナさん……ですが私なんかを連れては足手まといですし、父も生きていたとしても私には会いたくないと思います」

「きつと生きていたとしたら何かの事情があるのさ。クレア、あんたを足手まといだと思った事は無いよ。凄腕の魔術師じゃないか。それに仲間と一緒に旅って楽しいもんだよ」

「仲間、ですか？」

「仲間じゃないか。今4人で旅してるのは違うのかい？」

クレアは一瞬だけポカンとしたけど、すぐに嬉しそうな表情に変わった。

表情変化に乏しいクレアの初めての笑顔にルーシエルは指を指して「笑った！」と声を出した。でもその瞬間、恥ずかしかったのかクレアは顔を隠してしまった。

「なんで隠すんだい！？」

「だ、だって……変な顔をしていなかったか不安でっ！」

「どれだけ自分の顔に自信ないんだよ……」

「す、すみませんっ……」

俺の突っ込みにクレアはブンブンと高速で首を振って俯いてしまった。

でも耳が真っ赤になってるって事は本当に恥ずかしかったんだろうな。オルヴァーが言ってた。クレアは自分の事をすごく身分が低いと思ってるって。

だからライナの言葉が嬉しくて仕方がなかったんだと思う。なんだ、クレアも年頃の女の子じゃないか。ライナみたいな姉の様な存在が嬉しかったのかもしれない。



少しだけ皆笑えた。

悲しい事があった後だけど、でもルーシエルはちゃんと自分で考えて行動した。その結果、国王と后はルーシエルに気付き、一瞬だけだったけど親子の再会を果たした。

最悪の結末だけど、その中で最良の未来をルーシエルは掴んだ。

あの時、勇気を出して声を出さなかったら、目が合うことなく2人は死んでいた。そんな未来よりはずっとずっと良い未来だった。

これからまた大変な毎日が待ち構えてる。

ファライアンの崩壊は確実に始まりだしている。その時、俺達はどんな未来を選ぶのか……

そしてバルディナの手は遂にミッシェルにまで伸びた。

――クラウシエル side ―――

「やあクラウシエル王子、今回の事態ですぐに呼び出して失礼したね」

「本当だ、僕はいささか疲れた。貴方の話を聞いている余裕はないのだが」

処刑が終わってミッシェルを部屋に休ませたら、すぐに僕をセラが呼びに来た。一体何を言うと言うんだ。

案内された先にいたのはバルディナ第1皇子であり次期皇帝であるウィリアム・ネイサン。こいつが出て来ると言う事は僕と何かを交渉しようとしているのか？

席につかされて茶が出される。セラも話を聞いていいと言われて席に腰かけさせられた。どうやら長い話をしたい様だな。ウィリアムは机に肘をつき、前に体勢を倒した。

「今回の件、心中お察しする。我がバルディナとアルトランドの信

頼関係は地の底まで落ちたと言ってもいい」

「侵略した時点で何を言う」

「ははは、確かにそうだな。だがこちらにも戦利品と言う名の名目があるのですね。同盟を組んだとはいえ、パルチナはいつでも私達の背後を狙っている。適度なパフォーマンスは必要なのだよ」

「……貴方達のパフォーマンスで僕達の両親は殺されたのですね。いい客寄せになったと言う事だ」

「言い方を悪くすればそうだ。君は幼いのに非常に聡明で理解が早い、助かるよ」

固く握った拳に爪が食い込む。こいつ達にとってはパフォーマンスかもしれない、しかし僕達には……アルトラントにとってはかけがえない存在だったのだ。思っても口には出してほしくなかった。

「しかし私達もアルトラントとは良き盟友でいたいと思っているのだ。そこで提案だクラウシエル王子」

ウィリアムが次に放つ言葉。

それは僕が守ろうとしていた最後の光まで奪う物だった。

「ミッシェル様を我が弟、第3皇子クリスティアンの后にしたい」

ウィリアムの発言に空気が固まり、手が震えた。ミッシェルを后に？ ただの人質がバルディナは欲しいだけじゃないか。

そして最もこちらに影響力のある人質、それがミッシェルだった。第1王女がバルディナに連れて行かれれば、ミッシェルを盾に僕の動きを封じる事が出来る。

「ふざけるな！ 貴様父上と母上をその手にかけて尚ミッシェルまで

奪う気か!？」

「何を言うクラウシエル様、ミッシェル様とクリスティアンが両国の友好の懸け橋になる。悪い話ではない」

「そんな事を認める訳がないだろう! 貴様は人質が欲しいだけだろうが! それならば僕になる、ミッシェルに手を出す事は許さない!」  
「人質など聞こえが悪い言い方はよしてくれ。あくまで“友好の懸け橋”として、“后”としてミッシェル様を欲しているのだよ」

ていのいい事を! 聞こえは違うが、意味は同じだ。

ミッシェルを掌握したいだけじゃないか。ミッシェルの命を奴らに明け渡す様な物だ!

だが僕の反対は当然、予想の範疇だったウィリアムはとんでもない提案をしてきた。それはとても選択肢など無い物だった。

「ミッシェル様がクリスティアンの后になれば、バルディナとアルトランドは兄弟の様な関係になる。奴隷政策も少しはマシになるだろう」

「なん、だと……?」

「ミッシェル様が嫁いだ時は友好の証としてアルトランドの奴隷政策を緩和するよう父上に私から進言しよう。賃金の最低水準の引き上げ、物資の正常化、食糧の保存、そしてダフネと言う青年の両親、彼に手を貸した村に対しても処罰を取り消しにする」

試されている。王子として国を守る道を取るか、兄として妹を守る道を取るか。ミッシェルがバルディナに連れて行かれれば、国民が少なくとも今よりきつい奴隷政策を受ける事は無い。

ある程度の金銭が確保された仕事に就き、不自由だが最低限の生活ができる権利が与えられる。それは今の国民が最も望む状況だ。

でもその為にミッシェルの未来を奪う訳にはいかない。だけど……ダフネの村の人間を見捨てる訳にもいかない。元は父上がダフネに

ルーシエルを託した。ダフネは何も悪い事はしていない。それなのにダフネの両親が処罰を受けるのも可笑しいし、村には実際にダフネには関わって無い者もいるはずだ。彼らが処罰を受けるのも可笑しい。

僕の決定権で全てが決まる。僕は皆を守らなきゃいけないっ！

「……………その条件を飲もう」

「クラウシエル王子！」

セラの悲鳴の様な批判が聞こえ、ウィリアムが笑みを浮かべるのが見えた。

だが僕が王子として国を守らなければいけないんだ。ミツシエルだって一国の姫ならば政略結婚の道具にされる可能性だって元から捨てきれなかった。それを父上と母上が守っていただけなのだ。

ミツシエルは先月誕生日を迎え13歳になった。13歳で結婚させられる人間なんて世界に沢山いる。ミツシエルだけが不幸な訳じゃない。

「ではその方向で話を進めましょう。ミツシエル様への御報告は任せましたよ」

「だが先に規制緩和を実施していただきたい。その後にミツシエルの件は実行しましょう」

「了解した」

ウィリアムが出て行った部屋で残されたのは僕とセラだけ。

「どうしてです？ どうしてミツシエル様を敵に売のですか！？ ミツシエル様が向こうでどんな目に遭うか、王子は理解なさってるんですか！？ 結婚と言うのはただの飾りで、実際は人質ですよ！？」

「分かっている！ だがいま国民が最も望んでいるのは奴隸政策の規

制緩和だ！食糧すら国民は満足に与えられていない。最低水準の生活を営むのは今のままでは不可能だ」

「ですが国民はその様な事を望んではいません！ミッシェル様を奴らに渡すぐらいならっ……」

「このままジリ貧で死を選ぶのか？そんな事をして何になる？未来に何を残せるんだ！ミッシェルだって姫だ。13にもなったら、この事態を想像できるはずだ」

「クラウシエル様！」

「僕は第1王子だ、家族よりも国民を優先させなければならんだ！ミッシェルだけに全てを捧げる訳にはいかないんだよ、なんで分かってくれない！？」

泣きそうな声で叫べば、セラは黙って俯いて泣き出した。泣きたいのは僕の方だ。最愛の妹まで奴らに奪われる。

ミッシェルは1人ぼっちでバルディナに向かわされる。誰かお付きを連れて行かせたいが、ウィリアムは許さないだろう。あの地でミッシェルはこれから生きて行く。

僕達は最愛の両親を殺した奴達と家族になる。

「許してくれミッシェル……」

僕が一平民だったなら全てを捨ててでも反発出来た。だが国民とミッシェルを比較されたら国民を取るしかない、それが僕の務めだ。ミッシェルに伝えなければならぬ。その真実だけが重く心にのしかかった。

「バルディナに逆らわなければ生きていける。王子の判断は正しいよ」

不意に声が聞こえ振り返れば、そこには裏切り者のフレイが立って

いた。元はと言えばこいつが……スパイとしてアルトラントで評議委員をしていたから……こいつのせいで！

フレイはいつもみたいな癪に障る笑みは浮かべず、神妙そうな顔をしていた。その表情は僕を馬鹿にしに来たのではないと言う事が分かる。

「忠告しに来た訳か。ご丁寧だな」

「……私も幼い頃にバルディナから襲撃を受けてね。当時9歳だった私は奴隷政策の一環である同化政策でバルディナに連れて行かれた」

「お前……バルディナ人じゃなかったのか？」

フレイの言葉に目が丸くなった。嘘をついている様子は無い、真実だとしたら疑問しか湧かなかった。なぜ奴隷政策を受けたフレイがバルディナの味方をしているんだ？憎くないのか？自分を奴隷として扱った国なんだぞ！？

フレイの現在の年齢、そして同化政策の際の年齢、その時期のバルディナの紛争から察するに、おそらく25年前に起こったサックウィル独立戦争だ。バルディナから独立したいと訴えたサックウィル地方をバルディナがこてんぱんに叩きつぶした戦争だ。

サックウィルはとんでもない額の賠償金と100年の奴隷政策が課され、今も奴隷政策が終わっていない。

「同化政策でバルディナに連れて行かれた時に分かったよ、バルディナの強大さが。なぜ私の故郷はあの国に挑戦したのかが今では理解できない、勝てるはずが無いのに。だが愛想笑いでいいんだ、道化を演じて媚を売れば、奴らは惨めで可哀想だと同情し、私を可愛がってくれた。綺麗な服を仕立て、豪華な食事を用意してくれる。愛想良く、自分が下の身分だと宣伝するだけでだ」

「フレイ……」

「反発していた時の私は手酷い歓迎を受けた。満足に食事も与えられず、引き取り先の貴族の子供におもちゃにされて腕の骨を折られた事もあった」

自分が経験した事のない過去を淡々と語るフレイを見て、背筋に寒気が走った。こいつがバルディナに忠誠を誓う理由……それは幼い頃に受けた同化政策の傷跡……大人になっても消える事のない、こいつの心の闇だった。

「反発し続けた子供達も最後は皆死んでいったよ。私の友も正義感が強く、誇り高い奴は全員死んだ。プライドを全て捨てて、犬と同じ扱いでも尻尾を振る奴しか生き残れやしないのさ。だがバルディナに従っていれば希望はある。美しい妻もできたし、可愛い子供もできた。全てあの時、バルディナに従ったから」

「フレイ、それは違う……違うよ」

「何も違わない。所詮弱い奴らは何をされても仕方が無いのさ。少なくとも私はそうだった。だから王子、貴方の今回の判断は素晴らしかった」

そう告げてフレイは出て行った。

これが、同化政策……これがバルディナの奴隷政策なんだっ！

アルトランドの子供達もほとんどがバルディナに連れて行かれた。皆はそこでどんな目に遭っているのだろう、だが確実にフレイの様に恐怖やトラウマからバルディナに擦り寄っていく子供はいるはずだ。

アルトランドがバルディナから解放される日は来るのか？未来を担う子供たちがフレイの様になってしまったら、アルトランドはサックウィル同様……永遠の植民地だ。

自分が相手にしなければならぬ国の強大さと残虐さが形になって

表れて恐怖が包み込んだ。

僕はこの相手に勝って、全てを奪い返す事が出来るんだろうか。

———  
欲しければ挑めばいい。勝てるものならば  
———



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4894p/>

---

神様の椅子

2012年1月10日01時51分発行